

聖書 基本 知識

Duncan Heaster 著

盧 賢 基 訳

キリスト教の基本教理書

韓国 聖書 研究院 発行

聖書 基本 知識

Duncan Heaster 著

盧 賢 基 訳

聖書の真理を合理的
体系的に解釈した
学習 教科書

Published by Carelinks, PO Box 152, Menai NSW 2234
AUSTRALIA

www.carelinks.net

info@carelinks.net

序 文

“ヤウエの神がいますこと”とそして聖書は彼が人類に与えた彼の目的を啓示した言葉であることを受け入れたすべての人はその基本メッセージが何であるかを知らなければならないのです。今日クリスチャンと言われる多くの人が日曜日彼らの礼拝堂に行って新約聖書のいく句節を読み、説教を聞くだけで、聖書は家のどこかに投捨ててしまい、開いて読まないのが普通です。だから聖書の奥義は少しも知らず、ただ幾つかのストーリーをおぼろげに覚えているとても貧弱な知識を持っている状態です。神の言葉にに対してそのような怠りのために、彼らは何の確信もなく紛らわしい信仰生活をしています。

さらに、いわゆる教会では聖書を学んで信者になろうとする人たちに聖書は教えず、聖書とは全く違う情欲に駆られる偽りの教えや価値のない哲学などを説教しているのです。

本書「聖書基本知識」の目的は、私たちが事業を計画し営むのと同じく、聖書のメッセージを分析し、体系化して組織的に学ぶようにすることです。本書を一綴りの本として読むことも出来るし、あるいは各々の主題を分離して通信講座の教材としても使用出来るようにデザインしています。各学習の終りには学習問題の解答欄を設けているので、その解答を別紙に記入して送れば、その答案紙は私たちの聖書講師たちに渡されて、彼らの丁寧なアドバイスで読者たちの学習を促進するようにしています。読者が明らかに分からないことや自分の考えと違うことは遠慮なく質問して下さい。私たちは読者のそのような質問を待っています。そして誠心誠意お答えすることを約束します。

この「聖書基本知識」は聖書の基本メッセージを透明的に打ち明かした決定的解釈版であると著者は確信しています。しかし皮相的に現れる一般的なキリスト教会の教義と一致しない句節や論題があるでしょう。僅か一部の読者だけがそれらに関心を持つと思いますが、それらは福音の他の局面と一致させた「間違った解釈」の欄で論議しています。勿論、その「間違った解釈」を読まなくても聖書の基本メッセージは理解出来ますが、私たちは読者がその欄を全部読むことを期待しています。この学習教本は主に英語聖書の日本語口語訳本を使用していますが、しかし解釈があいまいなことには他の訳本も引用しています。

著者は本書出版に協力して下さい下さった多くの方々に感謝しています。印象的写真を載せるようにして下さい下さったCliver

River様、そして原稿を修正して下さい下さった方々に深く感謝をあげます。しかし私が最も恵を受けた重要な人は数百人のアフリカ人、西インド諸島人、フィリッピン人、そしてヨーロッパ人たちであって、彼らの聖書真理探求に対する熱望は私に本書の執筆と発行をくり返し促進させました。彼らに再三感謝しています。彼らの美しい心得と真理探求の情熱は私にいろいろな角度から聖書真理を照らして見るようにしました。満員のタクシーの中で、貨物のトラックや列車の中で、あるいは蒸暑いホテルのバルコニーの会議室や星の輝

く森の村で、各界各層の聖書研究家によってこれらの主題は論議され、熱狂的に討議されたのです。この事業を果たすように私に任せて下さった‘キリストアデルフィアン’兄弟たちは私に絶えない力と助けの源泉でした。特に本書に論議されているその‘間違った解釈’の内容はホテルのルームで読者たちや受講者たちの激烈な論争と、私たちの繰り返した検討の結果得た結論です。この聖書真理の基本教理によってお互い結ばれた親交と友情は人間のいかなる経験にも優るものでしょう。ここで著者は本書が世界のすべての人に福音を述べ伝える使役者たちに助けとなるように望みながら、私と一緒に“神の国のために働いている”すべての方々に敬意を払います。

聖書の福音真理を把握した者は彼の生活のすべての分野にその教えが効果を発揮して、神が受けるべき栄光を永遠に捧げるでしょう。その真理を探し出した者は皆‘畑に隠している宝を見つけた者であって’予言者エレミヤが感じたことを体験するでしょう“私はみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は私の喜びとなり、心の楽しみとなりました”（エレ.15:16）。これを成就しようと本書を掴んで取り組んでいるすべての学習者に神の真理が理解出来るように祈りをあげます。“今私は、神とその恵みの言葉とに、あなた方を委ねます。この言葉はあなたを造りあげ、聖なる者とされたすべての人々と共に、み国を継がせることが出来るのです”（使20:32）。

著者Duncan Heaster dh@heaster.org

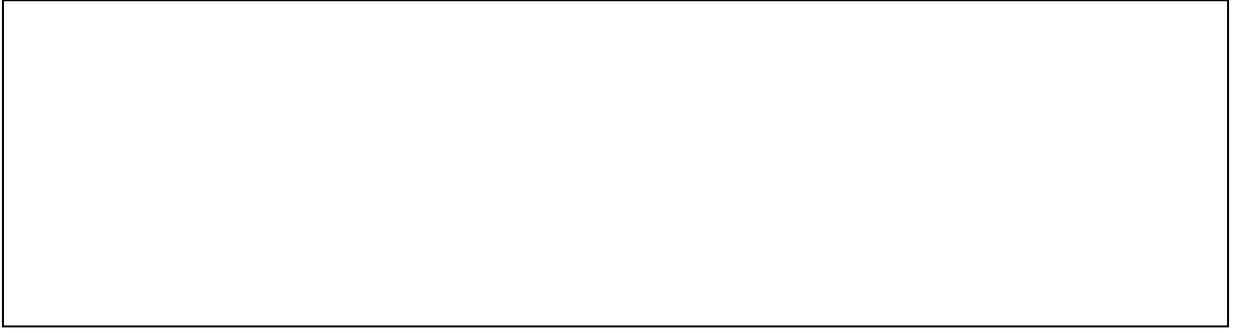
聖書 書名 略語表

創. 創世記	イザ. イザヤ書	ロマ. ローマ人への書
出. 出エジプト記	エレ. エレミヤ書	コリ前.コリント人前書
レビ. レビ記	哀. 哀歌	コリ后.コリント人后書
民. 民数記	エゼ. エゼキエル書	ガラ. ガラテア人への書
申. 申命記	ダニ. ダニエル書	エペ. エペソ人への書
ヨシュ.ヨシュア記	ホセ. ホセア書	ピリ. ピリピ人への書
士. 士師記	ヨエ. ヨエル書	コロ. コロサイ人への書
ルツ. ルツ記	アモ. アモス書	テサ前.テサロニケ人前書
サム上.サムエル記上	オバ. オバデヤ書	テサ后.テサロニケ人后書
サム下.サムエル記下	ヨナ. ヨナ書	テモ前.テモテへの前書
王上. 列王記上	ミカ. ミカ書	テモ后.モテテへの后書
王下. 列王記下	ナホ. ナホム書	テト. テトスへの書
代上. 歴代誌上	ハバ. ハバクク書	ピレ. ピレモンへの書
代下. 歴代誌下	ゼバ. ゼバニヤ書	ヘブ. ヘブル人への書
エズ. エズラ記	ハガ. ハガイ書	ヤコ. ヤコブの書
ネヘ. ネヘミヤ記	ゼガ. ゼガリヤ書	ペテ前.ペテロの前書
エス. エステル記	マラ. マラキ書	ペテ后.ペテロの後書
ヨブ. ヨブ記	マタ. マタイ福音書	ヨハ1.ヨハネの一書
詩. 詩篇	マコ. マルコ福音書	ヨハ2.ヨハネの二書
箴. 箴言	ルカ. ルカ福音書	ヨハ3.ヨハネの三書
伝. 伝道の書	ヨハ. ヨハネ福音書	ユダ. ユダの書
雅. 雅歌	使. 使徒行伝	啓. ヨハネ啓示録

各学習の終りに学習問題に対する解答欄を設けています。解答は四肢選択方法と、主観式の二つの方式にしています。別紙を準備して四肢選択法は其中で正しいと思うものを選び、主観式の問題はその学習で学んだことから短文を作成して下記の住所に送って下さい。

* 読者の住所を明らかに記入して、下記の住所に送って下さい。

Carelinks, P.O. Box 152, Menai NSW 2234 AUSTRALIA info@carelinks.net



聖書 基本 知識

1 部

“神の国に関すること”

(使徒行伝8:12)

学習 1: 神 (God)

- 1.1 神の存在 1
- 1.2 神の人格
- 1.3 神の名と性格
- 1.4 天使たち

間違った解釈1: “神は霊である”

間違った解釈2: 神の名の使用

間違った解釈3: 神の現れ

学習 2: 神の霊

- 2.1 神の霊: 定義 26
- 2.2 神の靈感
- 2.3 聖霊の賜物
- 2.4 その賜物の撤回
- 2.5 聖書の権威

間違った解釈4: 聖霊は果たして人格的存在であるか?

間違った解釈5: 擬人法の原則

間違った解釈6: カルビン主義

間違った解釈7: “聖霊の賜物を受けよ”

間違った解釈8: “信じる者には、このような徴が伴う”

学習 3: 神の約束

3.1 神の約束: 序論..... 77

3.2 エデンの園での約束

3.3 ノアとの約束

3.4 アブラハムとの約束

3.5 ダビテとの約束

間違った解釈9: 天と地の滅亡

間違った解釈10: 英国人たちがイスラエル部族と言う主張

学習 4: 人間と死

4.1 人間の本性.....111

4.2 霊魂

4.3 人間の霊

4.4 死の状態

4.5 復活

4.6 審判

4.7 補償の所、天か地か？

4.8 神に対する責任

4.9 地獄

間違った解釈11: 煉獄

間違った解釈12: 幽霊と霊魂来臨説

間違った解釈13: 復活される体質

間違った解釈14: 空中で主に出会う ‘携擧’

学習 5: 神の国

5.1 神の国: その定義.....146

5.2 神の国今設立されていない

5.3 過去の神の国

5.4 将来の神の国

5.5 千年王国

間違った解釈15: 神の国は地に設立される

間違った解釈16: イスラエルの歴史要約

学習 6: 神と罪悪

6.1 神と罪悪.....172

6.2 悪魔とサタン

6.3 悪霊

間違った解釈17: 魔法使

間違った解釈18: エデンで起ったこと

間違った解釈19: 魔王ルシフェル

間違った解釈20: イエスが受けた試練

間違った解釈21: “天での戦い”

2 部

“イエス・キリストの名に

関すること”

(使徒行伝8:12)

学習 7: イエスの起源

7.1 イエスに関する旧約の予言220

7.2 イエスの出生

7.3 神の計画にあるキリスト

7.4 “初めに言葉があった”

間違った解釈22: 歴史的イエス

間違った解釈23: “天から来た者”

間違った解釈24: イエスが地を創造した

間違った解釈25: アブラハムの前にいた者

間違った解釈26: メルギセデック

学習 8: イエスの本性

8.1 イエスの本性:序論248

8.2 神とイエスの差違点

8.3 イエスの本性

8.4 イエスの肉性

8.5 イエスと神の関係

間違った解釈27: “イエスは神の形で現れた”

学習 9: イエスの使役

9.1 イエスの勝利264

9.2 イエスの宝血

9.3 イエス自身と人類のための祭物

9.4 人間の代表者イエス

9.5 イエスとモーセの律法

9.6 安息日

間違った解釈28: 十字架の刑

間違った解釈29: 12月25日は主の誕生日であるか

学習 10: キリストに預るバプテスマ

10.1 バプテスマの重要性.....	288
10.2 バプテスマの形式	
10.3 バプテスマの意義	
10.4 バプテスマと救い	

間違った解釈30: 再バプテスマ

間違った解釈31: バプテスマが要求する必須的知識

間違った解釈32: 十字架に付けられたその犯罪者

間違った解釈33: 模範的バプテスマ儀式

学習 11: キリストに合う生活

11.1 序論.....	322
11.2 聖潔	
11.2.1 暴力使用	
11.2.2 政治	
11.2.3 世俗的歓楽	
11.3 信者の実践的生活	
11.3.1 聖書学習	
11.3.2 祈り	
11.3.3 伝道	
11.3.4 エケレーシャ生活	
11.3.5 記念のパンと杯	
11.4 結婚	
11.5 交わり	

付録1: 聖書の基本教理要約.....346

付録2: 聖書学習態度..... 349

付録3: キリストの再臨切迫.....351

付録4:神の公義.....356

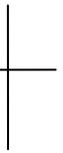
聖句インデックス.....359

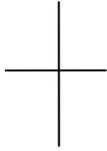
写真 1



学習 1

神 (GOD)





神 (GOD)

1.1 神の存在

“神に来る者は、神がいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである” (へブ.11:6)。この学習の目的は“神がいますことと”信じて、神に近づこうとする人たちを助けることです。従って、神の存在を信ずべき証拠を与えようとはしていません。不可思議に造られた驚嘆すべき人間の身体構造(詩.139:14)、野原に美しく咲いている草花の花びらの明白なデザイン、晴れた夜空の広大な広がり、これらと他の数知れない生命の反映を凝視して見ればどうも無神論者にはなれないのです。神の存在を信ずるより彼の不在を信ずるほうがもっと難しいことです。もし神が存在しないとすれば、この宇宙は何の存在目的もなく、無秩序になり、従って無神論者の世になるでしょう。これを心に留めていても、驚くべきことには、物質が一般に神となっている唯物論的な社会でさえ、大部分の人がある程度神の存在を認めていることです。

しかし神を誰かとても強い偉大なる方であると考えている漠然な観念と、彼は実際存在し、彼に忠実に仕える者に報いる方であると信ずることとはおびただしい差があるのです。聖書はその点を話しています。私たちは、

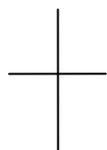
“神がいますことと、

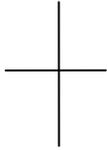
そして

ご自分を求める者に報いて下さることとを信じるはずだからである”。

聖書の大部分は神の民であるイスラエル部族の歴史記録です。彼らは神の存在を受け入れることと、彼の約束を信じていることが一致していないと度々指摘されました。彼らの偉大なる指導者モーセは彼らにこのように告げました。“あなたは、今日知って、心にとめなければならない。上は天、下は地において、ヤウエこそ神にいまし、ほかに神はいないことを。あなたは、今日、私が命ずるヤウエの定めと命令とを守らなければならない” (申.4:39-40)。

私たちにもそのように命じています。神が存在していると漠然な意識が自動的に彼に受け入れられるのではありません。もし私たちが宇宙創造の神を認知しているとすれば、“必ず彼の命令に服従しなければならないのです”。この一連の学習は





神 (GOD)

彼の命令とそれを守る方法を説明しています。聖書を学習することによって神の存在を信ずる信仰が強くなるのです。

“従って、信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである” (ロマ.10:17)。さらに、イザ.43:9-12は将来に対する神の間違った予言は、“彼の存在” (イザ.43:13)を強く立証しているのです。すなわち神の名である“ヤウェ”は彼の存在が全く真実であることを示しているのです。使徒パウロは現在北ギリシャにあるベレアと呼ばれる都市を訪れ、そこで、彼は相変わらず、神の福音を伝えました。しかしその人たちはパウロの言葉を神の言葉と受け入れるばかりでなく、“心から教えを受け入れ、果たしてそのとうりかどうか知ろうと、日々聖書を調べました。そういうわけで、彼らのうちの多くの者が信者になった” (使.17:11,12)とされています。彼らの信仰は素直な心構え、定期的に、また組織的に聖書を調べたので起こったのでした。従って、正しい信仰を得ることは神の言葉とは関係がなく、神がなんか心霊にショックを与えて心境の変化をもたらすことではありません。今日リバイバル集会とか伝道会などに行き出し抜けて信者となった者は問題があるのです。彼らは毎日規則的に聖書を勉強していません。このように聖書を基礎として学んだことのない改宗者は、恐らく実のない信仰であることが後ほど発見されるでしょう。結局、それが多くの人を福音伝道運動から背を向かせる原因となっているのです。

この学習の目的はあなた自身が聖書を組織的に調べて、正しい信仰を持つように骨組みを与えるためであります。正しい福音を聞くことと、そして正しい信仰を持つこととの関係が聖書にくり返し強調されています。

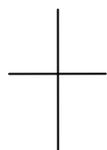
“また多くのコリント人も、パウロの話を聞いて信じ、そしてバプテスマを受けた” (使.18:8)。

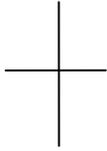
“ご承知のとうり、異邦人が私の口から福音の言葉を聞いて信じるようになったのである” (使.15:7)。

“私にせよ彼らにせよ、そのように、私たちは宣べ伝えており、そのように、あなた方は信じたのである” (コリ前.15:11)。

種蒔きの譬話にある(ルカ.8:11;

17:6)、その“種は神の言葉であり”、その“芥子の実は信仰である”ことを示しています。





神 (GOD)

信仰は“信仰の言葉”(ロマ.10:8)を受け入れる者に生じ、“信仰の言葉とよい教えの言葉”(テモ前.4:6)は神と彼の言葉を信じようとする心構えをしている者に入ります(ガラ.2:2; ヘブ.4:2)。

使徒ヨハネは主の生涯を記録した福音書で“彼の証しは真実である”(ヨハ.19:35)と話しています。それで神の言葉を私たちが信ぜる“真理”と称えるのです(ヨハ.17:17)。

1.2 神の人格

神が実際形体を持って、触知出来る人として現れたことが威厳と栄光のある聖書の主題であります。またそれはイエスが神のみ子であると言うキリスト教の基本教義でもあります。もし神が形体を持つ存在でないとすれば、“彼の本質の姿”であったみ子は持つことが出来なかったでしょう。多くの人たちの観念になっているように、もし神がただ宇宙の空間のどこかにある一すじの鬼火のような存在であるとすれば、人間が神と人格的關係を持つことは出来ません。宗教の大部分が神に関してそのように触知出来ない非実在的存在であると言う観念が人類に悲劇をもたらしているのです。

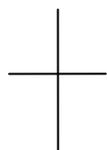
神は私たちより限りなく偉大であるので、彼を明らかに見られると言われた彼の約束を人たちが信じられないのを充分理解出来るのです。イスラエルの神は実際形体を持っている方であると明らかに教えているにもかかわらず、多くの人が彼の“姿”を見られると言う信仰を欠いていました(ヨハ.5:37)。本当に神を分かり、彼を信ずる信仰は彼の言葉から来るのです。

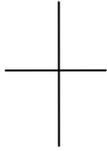
“心の清い人たちは幸いである。彼らは神を見るであろう”(マタ.5:8)

。

“神の僕たちは神を礼拝し、み顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名が(神の名、啓.3:12)記されている”(啓.22:3、4)。

もし私たちが本当に神を信じるなら、このような素晴らしい望みが私たちの生活に大きな影響を与えるでしょう。





神 (GOD)

“すべての人と相和し、また、聖なる生活を求めなさい。聖なる生活を抜きにして、誰も主を見ることは出来ない” (ヘブ.12:14)。

“天にかけて誓う者は、神の御座とそれに座っておられる方にかけて誓うのだ” (マタ.22:23)と言われたので、神にかけて誓うのはいけません。もしも神が形体的に存在する方でなければ、この話はナンセンスに過ぎないのです。

“彼が現れる時、私たちは、...その真の御姿を見るからである。彼についてこの望みを抱いている者は皆、彼が清くあられるように、自ら清くする” (ヨハ1.3:2,3)。

この世に生きている私たちは天の父に関する認識が不完全であります、しかしこの世のもつれた暗闇を通り抜けて、彼に会われることが待望出来るのです。私たちが仰ぎ見られる彼は私たちが考えているより最も偉大な方でしょう。この世の深い苦しみの沼でも、ヨブは末の時神と経験される人格的關係によって喜びました。

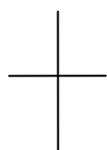
“この皮膚が損なわれようとも、この身を持って私は神を仰ぎ見るであろう。この私が仰ぎ見る、ほかならぬこの目で見る” (ヨブ.19:26, 27)。

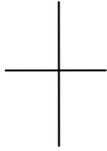
使徒パウロもまた苦しみと騒ぎの世から声高く叫びました。“私たちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて見るであろう” (コリ前.13:12)。

旧約聖書の証拠

新約聖書の約束はみな形体的、人格的神を立証する旧約聖書の重要な背景の上に立てられたのです。もしキリスト教が聖書全般に基づいていることを私たちが本当に理解しているとすれば、神の本性を認識するのがその基本であると強調しないはずがないのです。旧約聖書は首尾一貫神の人格に関して話しています。旧約聖書と新約聖書両者が話している神との人格的關係が真のキリスト教信者のユニークな望みです。次の句節は神が形体的、人格的であることを強く支持している論拠です。

“神はまた言われた。私たちの形に、私たちにかたどって人を造ろう” (創.1:26)。このように人間は天使たちを通して、神の形に、形どつて造られたのです。ヤコブ





神 (GODS)

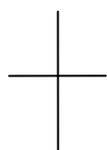
は“神に形どって造られた人間をのろっている”(ヤコ.3:9)と話しています。これらの言葉は人間の心に対して使用しているのではないのです。なぜなら私たちの心は生まれつき全く神から遠く離れており、多くの点において彼の義とは根本的に対立しているからです。“私の思いはあなたたちの思いと異なり、私の道はあなたたちの道と異なると、主は言われた。天が地を高く越えているように、私の道はあなたたちの道を、私の思いはあなたたちの思いを高く越えている”(イザ.55:8,9)。従って私たちが神から受けたその形とかたどりは一つの形体的ものに違いないのです。天使たちが地に現れる時はみな人間の形をしているのを描写しています。アブラハムは天使たちの訪問を気付かないで普通の人たちと思って彼らをもてなしました。人が神の形とおりに創造されたことは、私たちの形がその実際の対象である神をそれとなく示しているのを意味しているのです。このように私たちに反映している神は私たちが心に抱かれないあいまいなある者ではないのです。

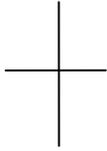
天使たちは神の映像です。神はモーセに対してこのように話しました。“彼とは、私は口ずから語り、明らかに言って、謎を使わない。彼はまたヤウエの姿を仰ぎ見るであろう”(民.12:8)。これは、モーセがその律法を受ける時、ヤウエの名を持つ天使が話したのです(出.23:20、21)。もし天使がヤウエに類似していたとすればヤウエは天使と同じ姿、すなわち肉と血によってなっている人間よりは限りなく高い方ですが、神はやはり人間の姿を持っているのです。“人がその友と語るように、ヤウエはモーセと顔を合せて語られた”(出.33:11;申.34:10)。ヤウエは彼の天使に現われました。その天使の顔と口はヤウエのものを現わしたのでした。

“ヤウエは私たちの造られたさまを知る”(詩.103:14)。彼は私たちが関係出来る人格的存在の父であることを分かるように欲しています。これは神の腕、手、目等、彼の実体の肢体を引用して説明しています。人々が一般的に神の人格的存在を否定しているように、もし神が天のどこかにある鬼火のようなエッセンスであるとすれば、このすべての引用句が教える目的は誤解をまねくようになります。

神の居所に関する描写は明らかに“神”が私的な居所があるのを指示しています。“神は天にいます”(伝.5:2)。“ヤウエはその聖なる高き所から見おろし、天から地を見られた”(詩.102:20)。“あなたは、あなたのすみかである天で聞いて赦し”(王上.8:30)。これよりなおさら神が天の“御座”に座しておられると書いているのです(代下.9:8; 詩.11:4; イザ.6:1;

66:1)。このような言葉は天の領域のどこかに存在している不確定的な実体に対して使用することが出来ないでしょう。神は彼が地に現れる時天から“降りる”と話し





神 (GOD)

ています。これは神の天の居所を示唆しているのです。神の人格的、体形的本性の認識がなければ、“彼の現れ”は到底理解出来ないのです。

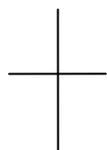
イザヤ書45章には神が彼の民のことに人格的に介入しているのが多く話されています。“私はヤウエである。私のほかに神はない、一人もない。...私は光を造り、また暗き創造し、繁栄を造り、また災いを創造する。私はヤウエである、すべてこれらの事をなす者である。...おのれを造った者と争う者は災いだ。...私は手を持って天を広げた。...地の果てのすべての人々よ、私を仰いで、救いを得よ”。

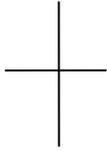
神は私たちに赦して下さる神として現われ、人間に言葉で話しています。さらに赦しと言葉は人格者でなければ起こらないことであり、それらは精神的行為です。またダビデは神の心に適う者であると(サム上.13:14)言われたので、神は心があるのを示し、人間は生まれつき神の心に適わない者であるけれども、ある程度彼の心を模写することが出来る存在であります。“神は地上に人を造ったのを悔いて、心を痛めた”(創.6:6)と言われたように、神は大氣に渡り歩く幽霊のような者でなく、感情を現わし、意識することが出来る存在です。これはこの世の親たちが彼らの子がなしたことによって、喜び、また不快になるように、神も実際私たちによって喜び、また不快になる認識を持つ方です。

もし神が人格的存在でなければ

神が実際人格的存在でなく、幽霊的な者であると考えているのは神を正しく認識していないのです。神は全く正義であります。もし彼が形体的存在でないとすれば、人間たちに現れた彼の正義は認識することが出来ないのです。背教的キリスト教界とユダヤ人たちは神が私たちが彼の精神的形象に造って、彼が受け入れられる者とするために彼の正義が一つのあいまいな聖霊を通して私たちの生命体に入ると言う観念を持っています。それとは反対に、私たちが神と言われる人格的存在を一度認識すれば、彼の助けと彼の言葉の影響によって、私たちが神の特徴を私たちの人格に反映する作業をするのです。

神の目的は彼自身が誉めただえられる多数の者に現れることです。記念すべき彼の名前、ヤウエ.エロヒム(Yahweh Elohim)は“**He who shall be mighty ones**”を意味しています。もし神が形体的存在でなければ、忠実な者に与える補



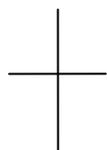


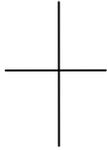
神 (GOD)

償はその神のように形体のない存在となるのでしょうか。しかし神の国がこの地に設立されてその忠実な者たちに与える補償に対しては、もはや人間性の弱さに支配される体ではないですが、やはり私たちが触知出来る形体的存在であることを示しています。ヨブは彼の体が復活される時の“後の日”を切望していました(ヨブ.19:25-27)。アブラハムは“地の塵の中に眠っている者のうちから、多くの者が目を覚まして、永遠の生命にいたる”者の内の一人(ダニ.12:2)であるに違いないから、彼はこの地で住むと約束されたカナンの土地を永遠に受け継ぐことが出来るのです(創.17:8)。“その聖徒たちは声高らかに喜び呼ばれるであろう。...その床の上で喜び歌わせよ。...もろもろの国を審判するであろう”(詩.132:16; 149:5, 7)。ユダヤ人ちと異邦人たちが皆このような実際の重要な句節と、アブラハムに約束した身体的重要性を認識そこない、人間の真の形象が“不滅の靈魂”と言う間違った観念に導かれました。そのような観念は聖書の立証を全く欠いているのです。神だけが不死の栄えある存在であり、将来この地に設立される彼の国で、身体的形象で現れる、彼の本性を共有して住むように人たちを呼び出す彼の目的を完成しているのです。

忠実な者たちには神の本性を受け継ぐことが約束されています(ペテ后.1:4)。もし神が人格的で方でないならば、その忠実な者たちは非物質的幽霊となって生きるのを意味しているのです。これは聖書の教えでないのです。神の国で私たちに与えられる体ではイエスのような(ピリ.3:21)ものであって、彼は手や目や耳を持つ実際の体を持っています(ゼカ.13:6; イザ.11:3)。従って神が人格的存在である言う教理はその国の福音に関係づけられているのです。

私たちは不完全な形象であるから、彼の精神的形象に発展して神の王国で完全に彼の体形的形象にならなければならないですけれども、私たちが神の実体的形象であること、神が人格的存在であることが認識されるまで、彼に対する自覚した礼拝、また宗教、或は人格的關係は出来ないのが明らかです。神は愛情ある父として、また彼は肉の父親のように私たちに訓練している(申.8:5)と話されている句節からもっと彼に関する知識と慰安を得ることが出来るのです。私たちはキリストの受難に関する文脈で“彼が悩みの内にヤウエに叫ばわり、彼の叫びがその耳に達したけれども”(詩.18:6)、ヤウエは“彼が打ち砕かれるのを望まれた”(イザ.53:10)と書いているのを讀みます。ダビデの子孫の一人が神の子になるとダビデにしたその約束が実行





神 (GOD)

されるには彼の奇蹟的出生が必要でした。もし神が人格的存在でなければ、彼はそのような子を得られなかったでしょう。

神に関する正しい認識は聖書の多くの教理が理解出来るキーであります。しかし一つの偽りがもう一つの偽りに導くように、神に関する間違った概念は聖書が提議する真理の体系をあいまいなものにしました。もしあなたがこのセクションを少しでも理解するなら、多くの疑問が起こるでしょう。‘あなたは本当にヤウエの神を分かっていますか?’ 彼に対して話している聖書の教えをさらに深く調査して見ましょう。

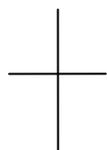
1.3 神の名と性格

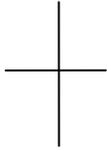
もし神がいますとすれば、彼が彼自身に対して私たちに話したことには何か計画したことがあると考えるのは当然です。聖書は神が人間に現わした彼の啓示であると私たちは信じ、その中には神の性格を現わしていると知っています。神の言葉は私たちの心に反応して、私の中に神の性格を持つ一人の新しく造られるから(ヤコ. 1:18; コリ后.5:17)、それを彼の“種”として描写しています(ペテ前.1:23)。従って私たちが神の言葉を学び、それを私たちの教訓とすればするほど私たちは、性格において“完全に神の形である”(コロ.1:15)“彼の御子の姿に似た者に”なるのです(ロマ.8:29)。聖書の歴史部分の学習は価値あることであって、その歴史はいつも同一の基本的特徴を示していますが、それは神が人たちや国家を取り扱う方法を全部学ぶことが出来るのです。

ヘブライ語では人の名前が度々彼らの性格や人なりを反映しています。実例をあげれば、

‘イエス’ = ‘救い主’ — “彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである” (マタ.1:21)。

‘アブラハム’ = ‘多くの群れの父’ — “私はあなたを多くの国民の父とする” (創.17:5)。





神 (GOD)

‘エバ’ = ‘生命のある’ — “彼女がすべて生きた者の母だからである” (創.3:20)。

‘シメオン’ = ‘聞いてくれた’ — “ヤウエは私が疎んじられていることを耳にされ、またこの子をも授けてくださった” (創.29:33)。

モアブの民を知っている者はモアブの名前を知っていると対比しています(エレ. 48:17)。詩篇には度々神自身を彼の名と、彼の言葉や行動に対比しています(詩.103:1; 105:1; 106:1, 2, 12, 13)。

それゆえに神の名と名称は彼自身に関する知識を私たちに与えていると予想出来るのです。神の性格と目的には多くの局面があるので、彼は実際一つ以上の名を持っています。神の名に関するより詳細な学習はバプテスマの後することがよいでしょう。神の名に表現している彼の性格に関する認識は私たちの生涯を通して学ぶべきことです。従って次に述べる事はその序論に過ぎないのです。

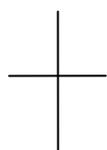
モーセは彼の生涯精神的創傷を受ける時期に彼の信仰を強くするために神に関する深い知識を願った時、一人の天使が、“ヤウエ、ヤウエ、憐れみあり、恵あり、怒ることおそく、慈しみと誠のゆたかなる神、慈しみを千代までも施し、悪と、とがと、罪を赦す者、しかし罰すべき者を決して赦さず、父の罪を子に報い、子の子に報いて、三、四代に及ぼす者” (出.34:5-7)とヤウエの名を彼に宣言しました。

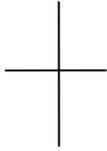
神の名には彼の性格が理解出来る明白な証拠があります。神がそれらを所有することは彼が人格的存在であることを立証するのであって、人間が生涯発展しても到達出来ないものであるばかりでなく、一吹き为例がこの特性を持っていると言うのは愚かにもつかない考えです。

神は彼の民が知り記憶すべき一つの特別な称号を選びました。これは人間に対する彼の目的を要約した、その概要です。

エジプトで奴隷であったイスラエルは、彼らに対する神の目的を覚えていなければならなかったでした。モーセに神の名を彼らに告げよと話されました。それはイスラエルがエジプトを離れその約束の地に向かって出発する動機になりました(コリ前.10:1)。私たちがやはりバプテスマを受け神の国に向かって出発する前に神の名に関する基本原理を理解すべき必要があるのです。

神はイスラエルに彼の名がヤウエ(YAHWEH) — ‘I will be who I will be’ (出.3:13-15)であるのを告げました。その時この名に少しふえんして話しました。“神は続け





神 (GOD)O

てモーセに命じられた。イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であるヤウエが私をあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえに私の名、これこそ、世々に私の呼び名である” (出.3:15)。

従って神の完全な名は“ヤウエ.エロヒム” (Yahweh Elohim)です。旧約聖書は大部分がヘブル語で書かれているので、私たちの日本語ではヘブル語の神に関する翻訳が多くその本当の意味から当てそこなっています。普通神と翻訳されたのは、ヘブル語の‘Elohim’であって、それは‘Mighty Ones’ — “力強い者たち” という意味です。従って彼が私たちが覚えていなければならないと告げた彼の名は、次の意味があります。

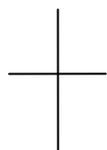
YAHWEH ELOHIM

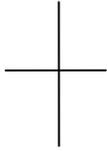
HE WHO WILL BE REVEALED IN A GROUP OF MIGHTY ONES.

それゆえにそれは神が一つのグループの人たちの中に彼の性格と彼の目的を現すと言うことです。彼の言葉に従うによって今私たちはある程度神の性格に発展するので、この世で神は信者たちから極めて制限的に彼自身を現わしています。しかし神の名は性格と本性に於いて(ペテ后.1:4)、彼と同じ人たちがこの地に溢れる時に関する一つの予言です。もし私たちが神の目的と一致して、もう死のない、永遠に生きている完全な道德者である神のようになることを願うなら、私たちは自身を彼の名と一致させなければならないのです。これをなす方法は彼の名、—ヤウエ.エロヒムの名にてバプテスマを受けることです(マタ.28:19)。これはまた私たちがこの地を永遠に継ぐと約束した(創.17:8; ロマ.4:13)、アブラハムの子孫になさせるのです(ガラ.3:27-29)。すなわち、神の名に関する予言が果され、その‘力強い者たち’になるのです。これは学習3.4でもっと詳しく説明しています。

1.4 天使たち

この学習では天使たちに関するすべてのことを考察してみるようにします。天使たちは、





神 (GOD) 1

身体的人格的存在であって、
神の名を持っており、
神の霊が作用するチャンネルであり、
神の性格と目的に一致し、
それらによって神を現わしている。

一般的に‘神’と翻訳されたヘブル語はエロヒム(Elohim)であると学習1.3で言及していますが、それは実際に‘力強い者たち’と言う意味です。神の名を持っているその‘力強い者たち’は現在ヤウエと密接に連合されているので‘神’と呼ばれているのです。これらの存在が天使たちです。

創世記1章の天地創造の記録には、神が創造の命令を発し、“それらが造られた”と話しています。その命令を成し遂げた者は天使たちです。

“御使いたちよ、ヤウエを誉めたたえよ。ヤウエの語られる声を聞き御言葉を成し遂げる者よ、力ある勇士たちよ” (詩.103:20)。

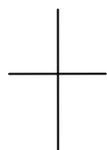
それゆえに私たちが世界創造の事を読む時その作業は実際天使たちによって成し遂げたのが推測出来るのです。ヨブ.38:4-7はそれに対する暗示があります。では創世記1章の創造の事件を要約して見ましよう。

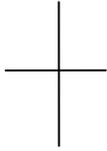
第1日 “神は「光あれ」と言われた。すると光があった” (3節)。

第2日 “神はまた言われた。「水の間におお空があって、水と水を分けよ」。そのようになった。神はおお空を造って、おお空の下の水と大空の上の水とを分けられた。神はそのおお空を天と名づけられた” (6、7節)。

第3日 “神はまた言われた。「天の下の水は一つの所に集り、かわいた地が現れよ」。そのようになった。神がその地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた” (9節)。

第4日 “神はまた言われた。「天のおお空に光あって昼と夜とを分け、しるしのために季節野ため、日のため、年のためになり、天のおお空にあって地を照らす光となれ」。...そのようになった” (14、15節)。





神 (GOD) 2

第5日 “神は言われた。「水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上、天のおお空を飛べ」。神は...すべて動く生き物とを、種類に従ってそぞうした。そのようになった” (20、21節)。

第6日 “神は言われた。家畜、地のすべての獣と、地のすべての這う物とを治めさせよう。そのようになった” (24節)。

人間はその6日めに創造されました。“神は言われた。「私たちの形に、私たちにかたどって人を造ろう」”(創.1:26)。この句節に関してはすでに学習1.2で説明しています。“私たちの形に人を造ろう”と言われた‘神’は彼自身一人以上の者がいたのを示しています。‘神’と翻訳されたヘブル語Elohimは‘力強い者たち’を意味し、それは天使たちを言及しているのです。天使たちが彼らの形に人間を創造した事実は彼らが私たちのように身体的形を持っていることを意味するのです。従って彼らは神の本性を預けている実際私たちが触知出来る形体的な存在であります。

ここで本性(Nature)と言うその言葉は天使たちの身体的構造が神の形体と同じことを示しているのです。聖書には相互絶対に受け入れられない二つの‘本性’がありますが、それは神の本性と人間の本性です。次のその対照を深く考えて見なさい。

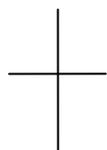
神の本性

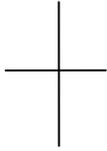
神は絶対に罪を犯すことが出来ない、完全な方(ロマ.9:14; 6:23と比較.
詩.90:2; マタ.5:48; ヤコ.1:13)

神は死なれない、不死の方(テモ前.6:16)

神は限りない力とエネルギー持っている方(イザ.40:28)

これは神と天使たちの本性であり、イエスが復活した後神がそれを彼に与えました(使.13:34; 啓.1:18; ヘブ.1:3)。またこれは私たちに約束された本性であって将来信者が補償として受けるのです(ルカ.20:35,36; ペテ后.1:4; イザ.40:28,比較31節)。





神 (GOD) 3

人間の本性

墮落した心(エレ.17:9; マコ.7:21-23)によって

罪に誘惑される(ヤコ.1:13-15)

死なければならない運命(ロマ.5:12, 17; コリ前.15:22)

肉体的に精神的に制限的力を持つ(エレ.10:23)

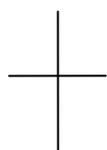
これは今すべての人が持っている人間の本性であります。その本性を持って生まれた人間の終末は死であるのです(ロマ.6:23)。それはまたイエスが復活する前に持っていた彼の本性でした(ヘブ.2:14-18; ロマ.8:3; ヨハ.2:25; マコ.10:18)。

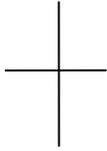
天使の形

神の本性の存在である天使たちは罪がないばかりでなく、死をもたらした罪が(ロマ.6:23) ないから死ぬことが出来ないのです。彼らは実際、身体を持つ存在です。それゆえに天使たちがこの地に現れる時彼らが普通の人のように見られたのは当然なことです。

天使たちがアブラハムを訪れずれて彼に神の言葉を伝えました。その天使たちが現れた時、アブラハムは彼らを初めからずっと人間として待遇しました。聖書は“目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた”と描写しています。“水を少々持って来ますから、足を洗って、木陰でどうぞ一休みなさってください”(創.18:4)。

その二人の天使たちがソドムの都市のロトを訪問しました。また彼らはロトとソドムの人たちにただ人間と認識されています。“二人の使いが夕方ソドムに着いた時”、ロトは彼らが自分の所で泊まるように招待しました。しかしソドムの人たちは彼の所に来て、“今夜、お前の所へ来た人々はどこにいる。ここへ連れて来い”と、脅かしながら言いました。それでロトは“どうか、乱暴なことはしないでください”と説きつけました。神の靈感による記録もまた彼らを“人たち”と呼んでいます。“その時、二人は手を延ばして”ロトを救い出しました。“二人はロトに言った。...ヤウエは、この町を滅ぼすために私たちを遣わしたのです”(創.19:1、5、8、10、12、13)。





神 (GOD) 4

この事件に関する新約書の解説は天使たちが人の形をしていることを確認しています。“旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることによって、ある人たちは、気付かずに天使たちをもてなしました” (ヘブ.13:2)と旅人を良くもてなすように勧告しています。

ヤコブは夜通し一人の不思議な人と組み討ちしたが (創.32:24)、彼は天使であったと話しています(ホセ.12:4)。

イエスの復活(ルカ.24:4)と昇天(使.1:10)において輝く衣を着た二人の人が現れています。彼らは明らかに天使たちでした。

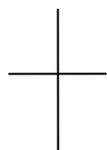
“これは人間の物差しによって測ったもので、天使が用いたものもこれである” (啓.21:17)と言われた示唆を熟考して見なさい。

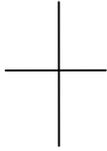
天使たちは罪を犯さない

神の本性の存在である天使たちは死ぬことが出来ないのです。また死は罪から来るものであるから、彼らは罪を犯すことが出来ないのです。天使と翻訳されたギリシャ語とヘブル語はメッセンジャー、“使い者”と言う意味です。だから天使たちは神のメッセンジャーあるいは僕であり、神に従う者であるから、神に罪を犯すことが出来る者と考えることが出来ません。英語に‘Angels’と翻訳されたギリシャ語‘**αγγελοσ**’, “使い者”は人間の使いにも使用されています。例えば、バプテスマのヨハネ(マタ.11:10)、彼の使いたち(ルカ.7:24)、イエスの使いたち(ルカ.9:52)とエリコを探偵するに遣わした人たちです(ヤコ.2:25)。勿論、人間の使いたちは罪を犯すことが出来るのです。

次の句節はすべての天使が生来神に従い、罪を犯すことが出来ないのを明らかに示しています。

“ヤウエは天にみ座を堅く据え、主権を持ってすべてを統治される。天使たちよ、ヤウエをたたえよ、ヤウエの語られる声を聞きみ言葉を成し遂げる者よ、力ある勇士よ、ヤウエの万軍よ、ヤウエをたたえよ” (詩.103:19-20)。





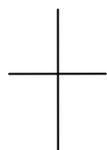
神 (GOD) 5

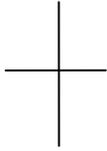
“その天使よ、皆ヤウエを誉めたたえよ。その万軍よ、ヤウエを誉めたたえよ” (詩.148:2)。

“天使たちはすべて仕える霊であって、救いを受け継ぐべき人々に奉仕するため、遣わされた者ではないか” (ヘブ.1:14)。

その“すべて”と言う言葉が反復されているのは天使たちが良い者と罪のある者との二つのグループに分かれていないのを示しているのです。天使たちの本性を明らかに認識せねばならない重要なことは忠実な者たちに与える補償が彼らの本性に預ることであるからです。“かの世に入って死人から復活に預るにふさわしい者たちは、めとったり、嫁ついたりすることはない。彼らは‘天使に等しい者であり’、...もう死ぬことはあり得ないからである” (ルカ.20:35、36)。これは信者が把握していなければならない重要な要点です。天使たちは死ぬことが出来ないのです。“死が天使たちはつかんでいない” (ヘブ.2:16 Diaglot訳本の註釈)と話しています。もし天使たちが罪を犯すことが出来るとすれば、キリストのお帰りにおいてその補償を受けた者たちもまた罪を犯すことが出来るでしょう。罪が死をもたらしたことを考えているなら(ロマ.6:23)、彼らは永遠の生命を得ているとは言えないのです。もし私たちが罪を犯すことが出来るとすれば、それは死ぬ可能性があるのです。天使たちが罪を犯すことが出来ると話したら、私たちの補償は天使たちの本性であるから、神の約束のその永遠な生命は全然意義がなくなるのです。それゆえに“その天使たち”に関する話は(ルカ.20:35、36)、天使たちの部類は善悪の二つの部類でなく、ただ一つの部類の天使があることを示しています。

もし天使たちが罪を犯すことが出来るとすれば、神は彼の作業を天使たちを通して成し遂げると宣言しているから(詩.103:19-21)、人間の生活やこの世の出来事に公義的に行動することが出来ないのです。天使たちは、神が彼らを通して行動し、すべての事を成し遂げる彼の霊／力であるので、彼らは神の“霊とされて” いるのです(詩.104:4)。それゆえに彼らが神に従順でないことは出来ないのです。クリスチャンは神のみ心が天に行われるとおりに、日ごとに神の国がこの地に来ますように祈らなければならないのです(マタ.6:10)。もし神の天使たちが天にて罪ある天使たちと争うているとすれば、神の心が天に全く行われていないのです。それゆえに将来の神の国でもそれと同じことが起こるでしょう。だから罪と従順が継続的に戦っている戦場であるこの地で永遠に住むのを勧めることが出来ないでしょう。勿論それは事実ではないのです。





天使たちと信者たち

各々の信者には天使があつて彼らの生活において彼らを助けていると信ずることが当然です。

“ヤウエの使いはその周りに陣を敷きヤウエを恐れる人を守り助けられる” (詩.34:7)。

“これらの小さい者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつも私の天の父の御顔を仰いでいるのである” (マタ.18:6、10比較、ゼカ.13:7；マタ.26:31)。

初期のクリスチャンはペテロには一人の守護天使があると明らかに信じていました(使.12:14、15)。

イスラエルの人たちは天使の導きによって紅海を渡たり、荒野を通してその約束の地に行きました。紅海を渡たることはバプテスマを受けることを現わすのであるから(コリ前.10:1)、私たちがバプテスマを受け、その後天使の導きと助けを受け、約束の地である神の国に向かって人生の荒野を通して旅しなければならないのです。

もしその天使たちが罪がある悪の存在であるとすれば、私たちの生活にそのような天使の支配と影響の約束は祝福でなく呪いになるでしょう。

私たちが学習した天使たちの存在は、

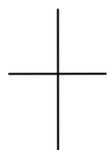
神の永遠な本性と身体的形を持っている存在であり、

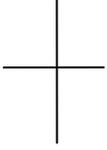
彼らは罪を犯すことが出来なく、

彼らはいつも神の命令を成し遂げる者たちであり、

また神の霊-力が話す言葉を成し遂げるチャンネルであります(詩.104:4)。

しかし、





神 (GOD) 7

多くの“クリスチャン”教会が天使たちが罪を犯し、そしてこの地で罪の問題に介入していると考えているのです。この間違った考えに対しては学習6でもっと深く論議することにし、今は次の点を論究して見ましょう。

聖書には私たちの創造以前の創造、すなわち創世記1章に記録された創造以前の創造があることが推定出来るのです。それはまた現在の天使たちが私たちが経験しているように“善と悪”(創.3:5)とを意識していたと考えられます。その時代に生きたある存在が犯した罪が統制されていないことを示しています。しかしそれはどこまでも気ままに考える人たちの推定に過ぎなく、聖書は私たちに必要な現在のことだけを話しています。それは罪を犯す天使たちはなく、すべての天使が神に絶対従っていると言うことです。

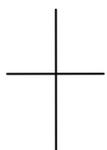
“神の目は悪を見るにはあまりに清い”(ハバ.1:13)から、天に罪がある存在たちはあり得ないのです。同じ調子の他の言葉がそれを説明しています。“悪人は御もとに宿ることを許されず、誇り高い者は御目に向かって立つことが出来ない”(詩.5:6、7)のです。天に罪深い神に逆らう天使たちがいると言う考えは全くこれらの句節と矛盾するのです。

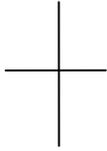
ギリシャ語“**αγγελος**”は“メッセンジャー”と言う意味で、それは人間にも使用されています。勿論その人間の使いは罪を犯します。

すべての方面から否定的考えで生きている罪深い悪人たちは死後その靈魂が呪われると言うのが最も一般に広がっている異教の信仰の一つです。クリスマスに関する異教の考えが入っているのと同じく、多くの異教観念が‘キリスト教に’入っています。

罪深い天使たちがいま存在すると言う間違った考えを支持するただ一握りの聖書の句節があります。それは著者から入手できる著書“サタンの探索”で学習するように勧めます。聖書の教えに逆らうそのような矛盾する句節は聖書に絶対受け入れられないのです。

間違った解釈1：“神は霊である”(ヨハ.4:24)





神 (GOD) 8

神の霊に関しては学習2でもっと詳細に定義しています。神の霊は彼の力あるいは呼吸と話してその論題を要約出来るし、そして彼の本質の自身、彼の存在と性格がその霊の成し遂げる行動を通して人間に現れています。彼の霊は彼の人格を反映しているから、“神は霊である”と言われた句節は正確に翻訳すべきであります。

神は多くのものに描写されています。例えば、

“私たちの神は、焼き尽くす火です” (ヘブ.12:29)。

“神は光です” (ヨハ 1.1:5)。

“神は愛です” (ヨハ 1.4:8)。

“言葉は(Logosの意味は計画、目的)神であった” (ヨハ.1:1)。

このように神には彼の特徴を現わしています。聖書で“神は愛である”と読むので、‘神の本性’を抽象的に‘愛である’と定義するのは明らかに間違っているのです。私たちが誰は親切であると言いますが、しかしそれは彼が身体的存在がないと意味するものではありません。それは親切を現わしている彼の存在のマナーを話しているのです。

神の力である彼の霊は、聖書では、神が遣わし、あるいは指示して彼の意志と性格に一致することを成し遂げるものと認識せねばなりません。神はその霊も創造したと話しています(アモ.4:13注釈を見よ)。神が霊であると言うのは神の同義語の反復であって、神の身体的存在を否定しているのではないのです。

神が彼の霊を指示している実例はたくさんあって、神と彼の霊が分かれているのを示しています

“彼(神)の聖霊を彼のうちにおかれた方は” (イザ.63:11)。

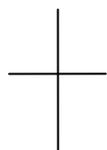
“この僕に私の霊を授ける” (マタ.12:18)。

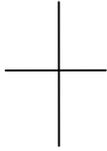
“天の父は求める者に聖霊を与えてくださる” (ルカ.11:13)。

“霊が鳩のように天から降って” (ヨハ.1:32)。

“私の霊をすべての人に注ぐ” (使.2:17)。

聖書には度々神が“彼の霊”と話してその霊は人格的神でないことをが充分立証しているのです。この神と彼の霊の差違点は父なる神をイエスと聖霊と同等視する‘三位一体説’を信じている人たちにはもう一つの難しい問題です。もしこれが





神 (GOD) 9

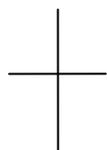
事実であり、神が人格的でないものと仮定するならば、イエスは実際存在でなかった者であり、また今もいない者となるのです。

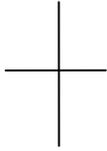
神が人格的存在でないならば、私たちが祈りをあげる時も、祈りがただ私たちの心に存在する意識と神に関する考えとの対話であると言う意味になるので、重大な問題が起ります。私たち継続的に天に身体的に居られる神に祈っている事を気付かせるべきです(伝.5:2; マタ.6:9; 5:16; 王上.8:30)。そしてイエスはいま神の右におられ、私たちの祈りを神にあげています(ペテ前.3:21; ヘブ.9:24)。もし神が人格的でないならば、このような句節はなんの意味もないのです。しかし一度神が実際私たちを愛している父であると認識することができれば、私たちが信頼している他の人に話すと、彼は私たちの意志に反応し応答するように、私たちの祈りは私たちが触知できる実際の神にあげるのです。

間違った解釈2: 神の名の使用

神の名とイエスの名はとても深い意味があるのを分かりました。私たちが神について話す時愛と真理である彼の素晴らしい目的のすべての方面に触れているのです。神の名は無意味にあるいは怒らせる表現で使用したら、それは私たちの創造主を侮辱するのです。それゆえに神を喜ばし彼を誉めたたえる者は神の名を軽く使用してはいけません。この世に広がっている多くの社会ではこのような神聖冒涇の表現が現代語の一部分になっています。この悪い習慣を打破しなければならないのです。これに対する深い反省の祈りがいつも必要です。私たちの子供のように私たちの影響のもとにある者たちに神聖冒涇の考えを覚醒させなければならないのです。“あなたの神、王の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者をヤウエは罰せずにはおられない”(申.5:11)。

また一方では私たちが神に対して話す時、継続的にヤウエの言葉を使用しなければ、背教していると主張する者たちがあります。特別に‘Watch Tower’紙の発行社の信者たちは、クリスチャンが‘エホバの証人’と言わなければ、彼は神と関係がないと考えています。





神 (GOD)20

このように称えている人たちは、神の聖なる素晴らしい名を呼ぶだけで一種の霊的精鋭主義者になると思って、ただその用語の使用するので他の信者を蔑視しています。これは神の名を使用するのが間違っていると言うのでないのです。一度み名によって適切にバプテスマを受けた信者は彼の個人的祈りにその名を使用出来るのであります。新約書これが必要なでありあるいは神が欲するものであると何の指示も与えていないのです。新約書は神の靈感によってギリシャ語で記録されましたが、神を‘Theos’と言う言葉、‘偉大なるかた’を使用しているだけであって、‘神’と‘ヤウエ’とになんの区別がなく、また信者が呼ばねばならないなんの特別な命令もないのです。ペテロは信者をヤウエの人とか、それと類似する名前と呼んだのではなく、ただクリスチャンと呼びました(ペテ前.4:16)。「ヤウエ」の名の使用をあまり強調するによって主イエスの使役と彼の位置を降り下げ、またそれと同様に多くの‘エバンゼリカルなクリスチャン’があまりにもイエスの名と役割を強調するによって力強い神の位置をおろそかにする傾向があります。

初期キリスト教信者たちの共同体の他の名前には‘ヤウエ’の名が含まれていないのです。

“イスラエルの国” (エペ.2:12)

“長子たちの集会” (ヘブ.12:23)

“神の教会” (使.20:28)

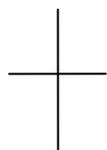
“真理の柱であり土台である生ける教会” (テモ前.3:15)

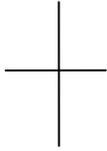
“神の家” (テモ前.3:15)

信者たち自身が彼らをクリスチャンと呼んだのではなく、これは彼らの敵たちがつけた‘キリストの家族’と言う意味です。

間違った解釈3: 神の現れ

次のことは一度読んでたやすくその意味が把握されない難しい主題です。しかしこの主題をもっと深く研究するによってその主題の重要性が明らかに立証される





神 (GOD) 1

です。これを言いつけているのはこの学習を終える時には神自身に対する聖書の基本啓示を十分に納得することが出来るためであります。

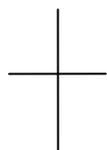
神の名は神が彼を‘現わそう’と選んだ者は誰でも使用することが出来るのです。それゆえにイエスと同じく、人も天使もみな神の名を持つことが出来ます。これは聖書が人間に教えているとても重要な原則です。特に子は彼の父の名を持つことが出来るのです。彼は或程度父に似ており、また父の姓を持つことが出来ますが、父と同じ人ではありません。それと同じく、或会社の代表はその会社を代表して会社の名を使うことが出来ます。彼は電話で誰かに話す時、‘こちらは何処です’とその会社の名を話します。彼はその会社のために働いているから会社の名を使っているのです。イエスもそのように神の名を使いました。

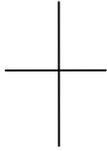
天使たちは神の名を持つ

私たちは出.23:20、21で神がイスラエルの人たちに一人の天使を彼らの前に行かせると話したことを読みます。“彼は私のなを帯びている”と彼らに言われました。神の名は‘ヤウエ’です。ゆえにその天使はヤウエの名を持っており、彼は‘ヤウエ’あるいは‘主’と呼ばれました。私たちは出.33:20で誰もヤウエの顔を見て生きることが出来ないと言われたのを読みます。しかし出.33:11では“ヤウエは人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた”と読みます。すなわち友達のように緊張をゆるめて話したとのです。ヤウエを見て生きることが出来ないと言われたから、彼自身がモーセと顔を合わせて話すことは不可能です。それは神の名を持っていた天使がそのようにしたのでした。しかし私たちはヤウエがモーセと顔を合わせて話したと読むのです(使.7:30-33)。

これ以外に‘神’とか‘主’と書かれたのがヤウエでなく天使たちを示している多くの事例があります。その中の一つの明らかな事例は創.1:26の“神(天使たち)は言われた。私たちの形に人を造ろう”と言われたのです。

人たちも神の名を持つ



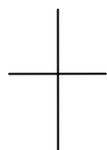


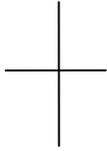
神 (GOD)2

これを論証する最も適切な句節の一つはヨハ.10:34-36にあります。そこには今日多くの‘クリスチャン’のようにユダヤ人たちが神の名を使用するに対して間違った考えを持っていました。彼らはイエスが彼自身神であると話していると考えていました。イエスは彼らにその点を訂正することを話しました。“イエスは彼らに答えられた。「あなたがたの律法に、‘私は言う。あなたがたは神々である’と書いてあるではないか。神の言葉を託された人々が、神々と言われておる徒すれば、(そして聖書の言葉は廢ることはありえない)。父が聖別して、世に遣わされた者が、「私は神の子である」と言ったからとて、どうして「あなたは神を汚す者だ」と言うのか。もし私が父のわざを行わないとすれば、私を信じなくてもよい”。イエスが話したのは実際旧約聖書で神と呼ばれた者たちが神の名を使用したことに対することでした。そのように私が神の子であると使用したのに何故あなたたちは怒っているのですか？イエスは実際イスラエルの裁判官たちが神と呼ばれた詩.82篇を引用して話したのでした。

すでに学んだように、ヘブル語で神の完全な名は‘ヤウエ.エロヒム’ (yahweh Elohim)であって、その意味は‘私は一つの強い者たちのグループに現れるであろう’と言うことです。信者たちは神の国でその多くの強い者たちになるのです。これはイザ.64:4とコリ前.2:9に美しく書かれています。“いにしえからこの方、あなたのほか神を待ち望む者に、このような事を行われた神を聞いたことはなく、耳に入れたこともなく、目に見たこともない”。パウロはこれを引用して、コリ前.2:9、10で話しました。“聖書に書いてある通り、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかった事を、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」のである。そして、それを神は、御霊によって私たちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである”と。イザヤ書64章にあるその句節は、神以外には誰も彼が信者たちのために備われた事を理解出来なかったと話しています。しかしコリ前.2:10では、その事が私たちに啓示されたと話しています。それで私たちはある意味では‘神’であるのです。それは人格的神を言うのでなく、神の名でバプテスマを受けその真理を知っている結果、神の現れとなっているからです。

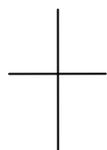
イエスと神の名

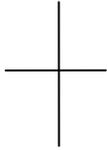




神 (GOD) 23

神の子と神の最高の現れである、イエスがまた神の名を持っていたことはあまりにもあたりまえです。彼は“私は父の名によって来た” (ヨハ.5:43)と話すことが出来ました。イエスは服従によって、天に上げられ、“神がすべての名にまさる名、神自身の御名、ヤウェの名を彼に賜いました” (ピリ.2:9)。それゆえに私たちはイエスがこのように話したわけを分かるのです。“そして、彼(信者)の上に、私の神の御名と、...私の新しい名とを、書きつけよう” (啓.3:12)。その審判でイエスは私たちに神の御名を与えるのです。それで私たちは神の名を完全に持つ事が出来るのです。彼はこの名を“私の新しい名”と呼びました。イエスは天にあげられた数年後、啓示録とピリ.2:9に説明している通り、彼が受けた神の名を与えると言われたのを記憶しなさい。ゆえに彼は神の名を“私の新しい名”と呼ぶ事が出来るのです。彼が持っていたその名はその時に与えられたのでした。私たちは今イエスに関した“彼の名が、‘靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君’ と称えられる”と言われたイザ.9:6を理解出来るのです。これはイエスが神のすべての名であることに関する予言であって、彼が人たちに現す完全な神の現れ、あるいは神の啓示であることを示すのであります。彼は人格的に神でなかったけれども、彼を‘神が私たちと居る’ という意味のイマヌエルと呼ばれたのはこういう意味です。





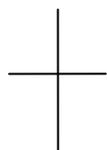
学習1: 問題と解答

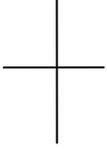
1. 私たちの信仰を発展させるには、何が最も適当ですか？
 - a) 教会に行くこと
 - b) 祈りをあげながら聖書を学習する
 - c) ほかのクリスチャンと話し合う
 - d) 自然を眺めて見る

2. 次の何が神に関する最も正しい定義ですか？
 - a) 私たちの心にある一つの考え
 - b) 大気圏にある一つの幽霊
 - c) 神は存在しない
 - d) 実際に物質的で、また形体的な者

3. 神は何人ですか？
 - a) 唯一の方
 - b) 三位一体の方
 - c) 多くの神様
 - d) 定義する事が出来ない方

4. 神の名である ‘ヤウエ.エロヒム’ (Yahweh Elohim)の意味は何ですか？
 - a) 自ら存在する





神 (GOD)25

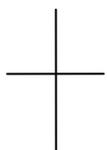
- b) 一つの強い者たちのグループに現れる
- c) 偉大なる方
- d) 力

5. 天使 (Angelos) の意味はなんですか？

- a) 人のような者
- b) 翼を持つ者
- c) メッセンジャー
- d) 補助者

6. 天使たちが罪を犯す事が出来ますか？

7. 神の存在に関してあなたはどんな概念を持っていますか？



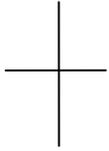
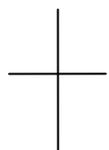
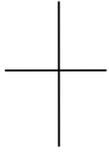


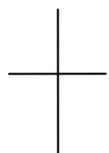
写真 2





学習 2

神の靈



2.1 神の霊:定義

神は考えとか感情を持っている実際人格的存在の方であるので、彼は彼の子である私たちが彼の望みと感情にあずかり、また私たちの生活で彼の性格と一致する行ないをすることを期待しています。神はこの事すべてを彼の霊によってなされるのです。もし神を認識し彼と実際的な関係を持ちたいと思うなら、この“神の霊”があることと、それが如何に作用しているかを知らなければならないのです。

この“**霊(Spirit)**”と言う言葉の意味を定義することはとても難しいです。例えば、あなたがある結婚式場に行って、“その雰囲気が入った”とあなたが説明するのを英語では“**There was a really good spirit there**”と言うのです。ここで使用した“**気にいる雰囲気、a good spirit**”とはその結婚式場にきた祝いのお客様たち、真心を込めてもてなす立派なご馳走、すべての人が花婿と花嫁を祝っている穏やかな雰囲気を意味するのです。これと同じく神の霊も神に対するすべての事を要約したのです。旧約聖書に“**霊**”と翻訳されたヘブルの単語は“呼吸”あるいは“力”を意味しています。このように神の霊は彼の“呼吸”であり、神の要素であり、彼の心を反映するものであります。その“**霊**”と言う単語が人の心とか性質に使用された実例を学習4.3で学ぶようにしましょう。その“**霊**”はただ神の力、それ自体だけを話しているのではないことが、“**神の霊の力**”(ロマ.15:19)と言われたことから分かることができます。

人は心の考え通りに行動を現す(箴.23:7; マタ.12:34)というのが聖書の共通的教えです。私たちは何か考えた事を実行します。私たちの霊、あるいは心は私たちが飢えて何か食べたい事実を反映します。台所に置いたバナナを記憶しています。それでその霊の欲求は行動に移され、その置かれているバナナを取り、皮をむいて食べるのです。これは簡単な例であるが、ヘブルの言葉の‘**霊**’が呼吸と心、そしてまた力の意味を示していることがよく分かるのです。それゆえに私たちの要素であるその霊は私たちの考えであり、行動はその考えとか性質が現れたのです。とても栄光的スケールではあるが、神の霊も同じです。それは神が彼の要素、彼の性質、彼の目的を発揮する力です。ゆえに神は考える事を行うのです。“**万軍のヤウエは誓って言われる。私が思うように必ず成り、私が定めたように必ず立つ**”(イザ.14:24)。

神の力

聖書の多くの句節が神の霊は彼の力であると明らかに見分けています。この宇宙を創造するために、“神の霊が水の面を覆っていた。神は「光あれ」と言われた。すると光があった” (創.1:2,3)とされています。

神の霊は、光を造ったように、すべての事をなす彼の力でした。“彼の霊をもって彼は天をめぐい、御手は曲がっている蛇を造った” (ヨブ.26:13)。“もろもろの天はヤウエの言葉によって造られ、天の万軍はヤウエの口の霊によって造られた” (詩.33:6)。従って神の霊は、

彼の呼吸と、

彼の言葉と、

彼の手のように彼の体に属するものと描写されています。

それゆえにそれは彼がすべてのことを成し遂げる彼の力です。信者が神の意志によって新しく生まれるにも(ヨハ.1:13)、彼の霊によるのです(ヨハ.3:3-5)。彼の意志がその霊によって作用するのです。自然の創造に対して話したのは、“あなたはご自分の霊を送ってそれらを創造し、地の面を新たにされる” (詩104:30)と記録されています。この霊、力はまたその創造と共に、すべての被造物を維持しているのです。この悲劇的世は神の霊が作用していないからぶらついているのです。この世の生活に疲れていた人、ヨブはこれを思い出した予言者でした。“神がもしその霊をご自分に取りもどし、その息をご自分に取り集められるならば、すべての肉は共に滅び、人は塵に帰るであろう” (ヨブ.4:14,15)。ダビデが意気消沈していた時、彼はこの霊で維持されること、すなわち彼の生命が保存されるように神に祈りました(詩.51:12)。

私たちに与えられた霊とすべての被造物を維持している霊に対しては学習4.3で学ぶようにしましょう。私たちは生まれる時に受けた(詩.104:30;創.2:7) “生命の霊の呼吸” (創.7:22)があります。これが彼を “すべて肉なる者の命の神” (民.27:16;ヘブ.12:9と比較)と呼ばれるようにしたのです。神はすべての被造物を維持している生命力であるために、彼の霊は今何処にもあるのです。ダビデは神がその霊を通して彼が何処に居ても彼と一緒にられる事と、またその霊を通してダビデのすべての

考えをわきまえられる事を認識しました。神が人格的には天に居られますが、このように彼の霊によって彼が何処にもおられる事が出来る手段であります。

“あなたは私が座るのも、立つのも知り、遠くから私の思いをわきまえられます。...

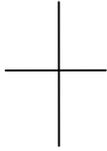
私は何処へ行って、あなたの御霊を離れましょうか。私は何処へ行って、あなたの前を逃れましょうか。...私があげぼのの翼をかけて海の果てに住んで居ても、...

あなたの右の手は私を支えられます” (詩.139:2、7、9、10)。

この主題を正しく認識すれば神が一つの強い行動的存在者として私たちに現れるのです。多くの人が神に対して漠然たる信仰を持って成長するので、実際は‘神’がただ彼らの心の一つ概念であり、彼らの脳の一部であるブラック・ボックスに過ぎないのです。彼の霊によって私たちの周囲におられる本当の神と彼の実際存在を認識すれば私たちの生活に関する概念が全くとり変えられる事が出来るのです。私たちは継続的に行動で立証している、その霊に囲まれており、それは神を私たちに現わしています。ダビデはこのように絶対的に気分を高揚させる激励を発見しました。“このような知識はあまりに不思議で、私には思いも及びません。これは高くて達することは出来ません” (詩.39:6)。なお彼はそのような知識に対する責任が大きいのを悟りました。私たちの考えや行動がみな神の視界に開かれているのを知っていなければならないのです。彼の前で私たちの位置を調べて見ること、特にバプテスマを考える時、私たちはこれをいつも心に留める必要があります。エレミヤに話した神の威厳ある言葉を私たちも傾注すべきです。“人は、密かな所に身を隠して、私に見られないようにすることが出来ようか。ヤウエは言われる、私は天と地に満ちているではないか” (エレ.23:24)。

聖霊

神の霊は私たちが把握せねばならない広範囲の概念である事が分かるようになりました。それは彼の心と性質であり、そしてまた彼の考えを作用させる力です。“人は彼の考えが示す通りの人間である” (箴.23:7)。このように神は彼の考えの通りの方です。この意味で彼は霊です(ヨハ.4:24)。しかしこれは彼が人格的存在でな



神の霊 31

いと言うものではありません(間違った解釈1を見よ)。この広大な神の霊の意味を把握するためには、私たちが度々彼の“聖霊”に関することを読まねばなりません。

“聖霊”と言う言葉は新約聖書に度々現れます。この‘聖霊’は旧約聖書の“神の霊”とか“ヤウエの霊”と同じものです。これは使徒行伝2章にある句節から明らかになります。それはペンテコストの日使徒たちが受けた聖霊の注ぎを記録しています。これはヨエルの予言の成就であるとペテロが説明しました。そこには“私(神)の霊”の注ぎと描写されています(使.2:17)。またルカ.4:1にはイエスが“聖霊に満ちて”ヨルダン川から帰って来たと記録されています。後にイエスは“主ヤウエの霊が私に臨んだ”と、これはイザヤ書61章の成就であると話しました。この二つの事実と他の多くの場合その聖霊は旧約聖書の言葉、“神の霊”と同じものである事を示しています。

次の句節らで聖霊が神の力に匹敵することに注目しなさい。

“聖霊があなた(マリヤ)に臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう”(ルカ.1:35)。

“聖霊の力によって、...
しるしや奇跡の力、神の霊の力によって”(ロマ.15:13, 19)。

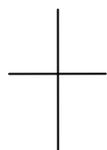
“私たちの福音があなた方に伝えられた時、...
力と聖霊と強い確信とによったからである”(テサ前.1:5)。

イエスが弟子たちに送って下さると話した聖霊の約束は“上から授ける力”でした(ルカ.24:49)。

イエス自身に“聖霊と力とが注がれていた”(使.10:38)。

パウロの宣教は神の力の明白な発揮で後援されていました。“私の言葉も私の宣教も、... 霊と力との証明によったのである”(コリ前.2:4)。

2.2 神の靈感



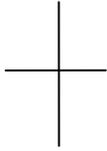
神の霊を彼の力、彼の考え、また彼の性質であると定義しました。それらは、彼の霊がなす行動によって現れるのです。私たちは前の学習で神の霊がその創造作業で働いたのを調べて見ました。“その霊を持って天を飾らした”(ヨブ.26:13)。神の霊が水の面に働いて現在の創造物が現われるようになりました(創.1:2)。なお私たちは、“神が言われて”すべてものが創造されたと創世記の記録が例示している通りに、“ヤウエのみ言葉によって”この世界が造られた(詩.33:6)と話した事を読みます。従って私たちの言葉が心の考えや欲求等、実際“私たち自身”を正確に表わしているように、神の霊は彼の言葉を反映しているのです。“おおよそ、心からあふれることを、口が語るものである”(マタ.12:34)とイエスは賢明にその点を指摘しました。それで、神の言葉は彼の霊、彼の考えの反映です。聖書に神の言葉が書かれて私たちが神の霊、あるいは心を認識することが出来るようになったのはとても大きい祝福です。神は**靈感の過程を通して**彼の霊が記録されたこの奇蹟の表現を成し遂げました。この靈感ははみな霊に根拠しているのです。

霊の行動

“霊”は“呼吸”あるいは“呼吸すること”を“意味し”、“靈感”は“呼吸される”のを意味しています。これは人たちが神から受けた靈感の下で書いたその言葉は神の霊の言葉であったのを意味しています。パウロは神の霊の言葉の驚異な事実を忘れないことと、神に関するすべての知識を与えている聖書と親密にするようにテモテを励ましました。

“また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救いに至る知恵を、あなたに与える書物である事を知っている。聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備が出来て、完全にとのえられた者になるのである”(テモ后.3:15-17)。

靈感によった聖書がそのような知識をすべて私たちに与えることが出来るので、神に対する真理を私たちに現わすために何か他の‘霊的な光’は必要がないのです。しかしあまりにも多くの人々が神に関する彼らの知識の源泉が彼ら個人の感情とか経験にあると話しています。神の靈感の言葉を信仰で受け入れることがクリスチャ



神の霊 33

ン生活に必要な完全なる備えであるから、その生活に必要ななにか他の義の力は必要でないのです。もしもそのような力が必要であるとすれば、パウロが約束した通り、その神の言葉は完全に私たちに備えさせるものでないのです。私たちは聖書が実際神の霊の言葉であるとそれをつかみ信じなければならないのです。イスラエルの人たちは今日の多くの“クリスチャン”と同じく、神の言葉にある程度関心を持っていたけれども、信じてはいないのです。私たちは皆ヘブ.4:2にある回顧の言葉に注意を傾けなければなりません。

“と言うのは、彼ら(荒野いたイスラエル)と同じく、私たちにも福音が伝えられているのである。しかし、その聞いた御言葉は、彼らに無益であった。それが、聞いた者たちに、信仰によって結び付けられなかったからです” (ヘブ.4:2)。

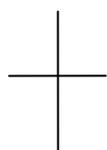
多くの人が受け入れた神の霊の言葉の力で完全な信仰に立とうとしないで、ある霊的近道を選んでたやすく行こうとしています。それは神の言葉に服従するために生活で苦痛を経験し、また神の霊の影響を心に受けさせるよりは、一瞬間に心に來られる義の力が私たちを神が受け入れられる人に造ると言う間違った考えのためです。

神の言葉にある偉大なる霊的力を受け入れる事を望まないこの考えが多くの“クリスチャン”に聖書のすべてが神の靈感によるのかどうか疑問に落ちるようにしました。彼らは私たちが読んでいる聖書の多くがただ賢い老人の個人的意見であると提示しています。しかしペテロはこのような明白でない議論を追い出しました。

“予言の言葉は、私たちにいっそう確実なものになった。...それに眼をとめているのがよい。聖書の予言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである(最も重要である)。なぜなら、予言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである” (ペテ后.1:19-21)。

聖書の筆記者たち

従って聖書が全部神の靈感によって書かれたと堅く信じることはとても重要なことです。聖書を書いた人たちは靈感を受け、その霊によって抑えきれなく駆られ



たので、彼ら書いたことは彼ら自身の考えではなく霊の考えであるのです。真理であり(ヨハ.17:17)、人を“戒め、正しくさせる”(テモ后.3:16、17)神の言葉は人に害を与えるためと思い、人たちに人気がないのです。予言者エレミヤは彼を靈感した言葉を話したので多くの人から反対を受け、彼に与えた言葉を記録することや公に話す事を絶対しないと決心しました。しかし神の言葉を書くことは人間が願う欲求よりも神の意志であるから、彼は“聖霊に駆られて”止むを得なく神の言葉を書きました。“ヤウエよ、... 私は一日中、物笑いとなり、人はみな私をあざけります。... もし私が、「ヤウエの言葉は、重ねて言わない、この上その名によって語ることはしない」と言えば、主の言葉が私の心にあって、燃える火のわが骨のうちに閉じ込められているようで、それを押さえるのに疲れはてて、耐えることが出来ません”(エレ.20:7-9)。

それと同じ様に、バラムはイスラエルを呪うと決心しましたが、神の霊が彼に呪いの代わりに祝福をするようにさせました(民.24:1-13、申.23:5と比較)。

聖書には時代を貫いて神の靈感によってやむを得なく彼の意志を話した多くの人があります。ここに表示された人たちはそれに印象的な方たちです。

モーセ (出. 4:10)

エゼキエル (エゼ. 3:14)

ヨナ (ヨナ. 1:2,3)

パウロ (使. 18:9)

テモテ (テモ前. 4:6-14)

バラム (民. 22:24)

これはみな私たちがペテ后.1:19-21で学んだ事を確認させています。神の言葉は人間個人の意見でなく、神の靈感で神が筆記者に現わした事を書いたのです。予言者アモスはそれをよく反映しています。“主ヤウエが語られる、誰が予言しないでいられよう”(アモ.3:8)。モーセは彼自身の意識すら忘れるほど、とても強く靈感されていました。“ヤウエはモーセに告げられたこれらすべての命令を守らなかった”(民.5:22、23)。実際この言葉はモーセが話したのでした(民.15:17)。

神の霊 35

これを立証する他の基準は聖書筆記者たちが書いていた事を彼ら自身が完全に理解出来なかったことでした。彼らは“正しく解釈するために”それを“たずね求め、かつ、つぶさに調べていました”、“それは、いつの時、どんな場合をさしたかを、調べたのでした。彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがた、すなわち私たちのための奉仕であることを示されていたのでした”(ペテ前.1:10-12)。彼らが生きた実際の記録を彼らが調べて見た時、それらは彼ら自身のためのことではないの分かるようになりました。次の句節らは確かにその実例です。ダニエル(ダニ.12:8-10); ゼカリヤ(ゼカ.4:4-13); ペテロ(使.10:17)。

もしその人たちがただ聖書の一部だけを靈感によって書いたとすれば、私たちは神の言葉あるいは神の霊を正しく受け入れているのでないのです。もし彼らが生きたことが本当に神の言葉であるとすれば、その靈感の間は彼らが完全に神の霊にとらわれていたのです。それでなければその記録は純粋な神の言葉ではないのです。神の言葉が完全に彼のものであると受け入れるなら、私たちはそれらを読み、それに従順でなければなりません。“主の言葉は誠に確かです。それで主の僕はこれを愛します”(詩.119:140)。

このように聖書は人間の作品でなく、霊を通して書かれた神の作品です。この正しさは新約聖書が旧約聖書を参考にして書かれたことから示されるのです。

聖書は“予言者たちを通して”記録されたと話しています。神が彼らを通して書いたのです(マタ.2:5)。

“聖霊がダビデの口を通して予言しています”(使.1:16)。

これはペテロが詩篇から引用したのです(へブ.3:7と比較)。

“聖霊は、予言者イザヤを通して、...

あなたがたの先祖に語られました”(使.28:25,これはパウロがイザヤ書を引用したのです。ルカ.3:4にはイザヤの書でなく、“予言者イザヤの書に記録された”ことであると話しています。

従って聖書の著者たちは初期クリスチャンたちには比較的重要なことではなく、彼らの言葉が神の霊で靈感されたのであるかが重要ことでした。

その記録された言葉を通して神の霊が私たちに現れているのを示めている句節らを提示するによってこの主題を結論しましょう。

イエスは明らかに述べました“私があなたがたに話したものは霊です” (ヨハ.6:63)。彼は神の靈感で話したのです(ヨハ.17:8; 14:10)。

私たちは神の言葉(ペテ前.1:23)と霊(ヨハ.3:3-5)によって生まれたものであると描写されています。

“万軍の主がその御霊により、先の予言者によって伝えられた”(ゼカ.7:12)。

“見よ、私の霊をあなたがたに注ぎ、私の言葉を、あなたがたに知らせる”(箴.1:23)。これは神の言葉の理解は神の霊の行動と連合しているのを示しています。神の霊／心が啓示しないと、主の言葉を理解出来ないから、聖書を読んでもなにも役にたたないのです。

多くの句節が神の霊と彼の言葉が対比的に示しています。“あなたの上にある私霊、あなたの口においた私の言葉...” (イザ.59:21)。“あなたの言葉のゆえに、またあなたのころ／霊に従って、...” (サム下.7:21)。“私はまた私の霊をあなたがたのうちに置いて、私が定めたのに歩ませ、私のおきてを守ってこれを行わせる”(エゼ.36:27; エレ.31:33)。

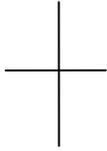
神の言葉の力

神の霊は神の心や性質と言及されているばかりでなく、また彼の考えを現す力であるのです。それは彼の霊の言葉は彼の心と話しているだけでなく、その言葉には偉大なる力があるのを意味しています。

その力の真価を認識すると私たちはその使用を熱望するになります。そうしようとする者に想起するどんな恥ずかしさも、神の言葉に順従するのがこの世のつまらないことから救われる力である事を理解して、それを克服することが出来るのです。これを多く経験したパウロは次のように書いています。

“私はキリストの福音を恥じとしない。それは、...
すべて信じる者に、救いを得させる神の力である”(ロマ.1:16)。

“神には、なんでも出来ないことはありません”(ルカ.1:37)とそれと同じく書かれています。



神の霊 37

従って聖書を研究してそれを私たちの生活に適用すると信仰に偉大なる進行をもたらすのです。それは神学者たちの冷たい学問的接近とか、または聖書の数節を引用して聖書の本意は理解出来なく、あるいはそれらを適用もしない今日の多くのキリスト教とは全く関係がないのです。“神の言葉は生きていて、力があり”、“力ある言葉です”(ヘブ.4:12; 1:3)。“この神の言葉は、信じるあなたがたのうちに働いているのである”(テサ前.2:13)。言葉を通して、神は実際信者の心のうちで一日中働きます。

従ってあなたが学んでいる福音の基礎的メッセージは真に神の力です。もしその力があなたのうちで働くようにさせれば、あなたの生命で働いて、キリストの帰りにおいて神の本性を変えるのを準備させ(ペテ后.1:4)、この世である程度神の霊/心を現し、神の子になさせる事が出来るのです。パウロの福音伝播は“その霊と力の論証”でした(コリ前.2:4)。

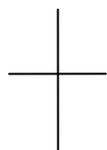
私たちは多くの人がキリストに委任していると主張しながらも、神の言葉である聖書はあまり信じていない人たちに囲まれています。これと同じく彼は神を信じていると主張していますが、彼が実際一人の人格者であることは受け入れないのです。聖書の全部が神の靈感によってなっていることを否認し、またその主権を私たち個人の感情や確信に置くによって、神の力を否定しているのです。テモ后.3:5の言葉に留意せねばなりません。“信心深い様子をしながらその実を捨てる者となる”と話しています。

聖書の根本主義者たちはこの世からからかわれています。“あなたたちはその通りに信じない、そうじゃないか。”そのようにパウロと彼の伝道団はからかわれました。“十字架の道は、滅び行く者には愚かであるが、救いにあづかる私たちには、神の力である”(コリ前.1:18)。

これを念頭に置いて、謙遜な心で聖書を開き、その内容を理解し、またそれに従順するようにしましょう。

神の言葉に対する態度

聖書の記録を注意深く読んで見ると、聖書の筆記者たちは彼ら自身が神の靈感を受けていたのを認識したばかりでなく、また他の聖書筆記者たちも靈感を受けてい

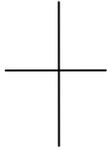


たことを知っていたことを分かります。主イエスはこれについて秀でています。彼はダビデの詩篇を引用する時、この言葉は“ダビデが霊を受けて”(マタ.22:43)書かれたと、ダビデが靈感を受けていた事実を承認しています。イエスはまたモーセの記録に対して話す時(ヨハ.5:45)、彼はモーセが書いたとその五経を信じていました。いわゆる‘聖書高等批評者たち’はモーセがそれらを書いたかどうか疑っていますが、キリストの態度は彼らとは全く違いました。彼はモーセが書いたのを“神の命令”であると話しました(マコ.7:8,9)。疑い深い高等批評者たちはまた旧約聖書の多くが神話であると主張していますが、イエスやパウロは決してそのように取り扱っていません。イエスはシェバの女王に関して歴史的事実と受け入れて話しました(マタ.12:42)。彼はそれがシェバの女王のストーリーだと昔話のように話していないのです。

使徒たちの態度は彼らの主と同じだったのです。ペテロはキリストの話しを聞いた彼の経験からそれをこのように要約しています。“予言の言葉はいつそう確かなものだ”と彼の経験を凌ぐものであると強調しています(ペテ后.1:19-21)。ペテロはパウロの手紙が“他の聖書”、すなわち旧約聖書と同じい“聖書”であると信じていました。このようにペテロはパウロの手紙が旧約聖書の権威を持っていると認めていました。

福音書にあることが使徒行伝、書信書、啓示録に多く言及されています(使.13:51; マタ.10:41と比較)。それらは全部同じ霊によって靈感されていることを指摘しているばかりでなく、また新約聖書の筆記者たちの福音記録が靈感によるのであることを示しているのです。パウロはテモ前.5:18で旧約書の申.25:4と新約書のルカ.10:7を引用しながらそれらが皆“聖書”であると話しました。パウロは彼のメッセージが彼自身の意見でなく、キリストから来たものであるとたたき込んでいます(ガラ.1:11-12; コリ前.2:13; 11:23; 15:3)。これは聖書であると他の使徒たちも認めているのです。ヤコ.4:5はパウロの言葉、ガラ.5:17を“聖書”と引用しているのです。

神は“キリストによって” 私たちに話されました。従ってそれ以上の啓示が必要でないのです(ヘブ.1:2)。聖書は今ではそれを入手出来ないけれども靈感で書かれた他の書物に関して言及しています(例を上げれば、ヤセル、ナタン、エリヤの書、コリントに送ったパウロの手紙、ヨハネの三書で暗示している、ヨハネを受け入れなかったデオテレベスに対して教会に書いた手紙)。なぜその記録が保存されていないの



神の霊 39

でしょうか。確かにそれらは私たちに適切なものでないからです。従って私たちは神が価値あるものだけを保存して下さったのを確信すべきです。

ある人は新約聖書が靈感によってなったことが漸次的に受け入れられたと主張していますが、使徒たちが既にそのすべてが靈感によると取り扱っている事実がそれに対して反証しているのです。靈感によると主張している書信や言葉が靈感によるかいないかをテストとする奇蹟的な霊の賜物がありました(コリ前.14:37;

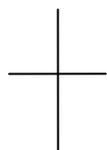
ヨハ 1.4:1;

啓.2:2)。これは書信書らが靈感によるものと直ちに受け入れたのを意味しています。もしも聖書を編集するに神の指導がなく、ただ人たちが選択したとすれば、聖書と言う書物はなんの権威もないでしょう。

2.3 聖霊の賜物

神が人たちを取り扱ういろいろな時に、彼の力である“聖霊”を人たちに遣わして使用しました。しかし、これは絶対“白紙の切手”を与えて気ままに使うようにしたのではなく、それらは必ずすべき事を成したのです。聖霊を使用するにはいつも特別な目的がありました。それが完成した時、その聖霊の賜物は撤収してしまいました。私たちは神の霊が神の心にある目的に従って行動するのを記憶していなければなりません。彼は彼の長期的目的を成就するために時々短期的には私たちの生活で受難を受けるようにしています(学習6.1を見よ)。それで彼の聖霊は必ず人の受難を軽くさせるように使用するのではないのです。そのような救助が、神の意志を私たちに現わして彼の高い目的を成就するのです。

これは今日聖霊に対する通俗のクリスチャンの態度とはとても対照的です。一般的クリスチャンは聖霊が疾病の治癒など、肉体的恩典を与えらると思うので、それが価値あるものとされています。これはなぜウガンダのような内戦が激しい国に疾病の治癒的聖霊の賜物を受けたと主張する人たちが盛行しているかその理由を説明しているのです。歴史的にそのような聖霊の賜物を受けたと言う主張は人間の窮乏がきわめて激しい時代に起こっています。今日霊の賜物を所有していると言う主張もそのようなものです。もしある人が現在の人間の窮乏を克服すべきなにかの経験



を期待するなら、その要求にびったりであるものを発見した後主張すべきではありません。

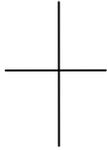
今日多くのクリスチャンがその奇蹟的霊の賜物を所有していると主張していますが、それらの目的はなんであるかと質問すれば、彼らの答えがあいまいなのが普通です。神はいつも彼の霊を特別な定まった目的を成し遂げるために与えました。これゆえに、その霊の賜物を本当に持っていた人たちはそれを何のために使用するかを分かっていました。従ってその部分的成就はないのでした。これは今日治癒の賜物を所有していると主張している人たちの治癒とは全く対照的です。

次の事例は皆霊の賜物を与えた特別な理由と目的を指摘しているのです。いかなる場合にも何の目的がなく霊の賜物を所有したことがなく、またその賜物の所有者が自分の考え通りにそれを使用したことがないのです。私たちは神の霊に関して話している限り、人たちがその使用を指示することは絶対出来なく、それが一定の目的のために下されたから、それを所有する者は限時的に使用することを分からねばなりません。

イスラエルの歴史の初期に、彼らは祭壇とその他の聖物などを保つ事が出来る一つの“幕屋”を造れと神から命令を受けました。そこで神を礼拝するために必要なすべての器具製作に関する詳細な指示がありました。それを完成するために、一定の人たちに神は彼の霊を与えました。彼らは“アロンの祭服を作るなど、幕屋の器具を作るに必要な知恵に満たされていました”(出.28:3)。

モーセに与えていたその霊/力を彼から取ってイスラエルの長老たちに与えた記録があります(民:11:14-17)。それは彼らが民の不平を正しく判断するによってモーセの圧迫を少なくするためでした。またモーセの死ぬ前に、その霊の賜物は彼からヨシュアに移り、神の民を指導するようにしました(申.34:9)。

イスラエルの民が彼らの地に入った時から彼らの初めの王、サウルが擁立されるまで彼らは士師たちによって治まりました。この時期に彼らは度々彼らの敵に圧迫されました。士師記には神の霊が彼らの士師たちに遣わされて奇蹟的に彼らを敵から救った記録があります。オテニエル(士.3:10)、ギデオン(士.6:34)、エフタ(士.11:29)。これらがその霊の行動を例示したのです。



神の霊 41

また他の士師、サムソンはライオンや(士.14:5、6)、30人の人を殺し(士.14:19)、そして彼を結びつけたひもを断ち切るために(士.15:14)霊が与えられていました。従ってそのような“聖霊”はサムソンがいつも持っていたのではないのです。

それは彼に特別な事を成し遂げるように与えられ、その後撤収してしまいました。

神がその民に対する特別なメッセージがあった時、霊に満たされていた者が神の言葉を彼らに話しました。そのメッセージが終わった時、神のために話していたその霊の賜物は撤収してしまい、その人の言葉はもはや神の言葉でなく、平常の通りになりました。次はその例の一つです。

“神の霊が祭司ヨヤダの子ゼカリヤを臨んだので、彼は民に立ち上がって言った、「ヤウエはこう仰せられる、あなたがたがヤウエの戒めを犯して、災いを招くのはどうわけであるか」”(代下.24:20)。

他の実例を読んで見なさい。代下.15:1、2とルカ.4:18、19。

これらから神の霊の賜物は特別な目的に使用された事が明らかにし、下記の条件とは関係がないことを分かるのです。

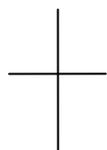
救いの保証

個人の生活のために与える

なにか神秘的な力

個人がある熱狂的経験から得たもの

聖霊の賜物に対する多くのあいまいな考えを話して見ましょう。人たちが‘聖霊を受けた’と主張し、多くの伝道会で伝道師が‘イエスを受け入れたいと’思っている人たちの前で‘霊の賜を受けた’と見せびらかします。しかし重要な問題は何の賜を受けているのかと言うことです。彼らはどの賜物を受けたのかを分らないのです。サムソンは獅子を殺す霊の賜を受けていました(14:5、6)。咆哮する獅子に会った時彼は受けているその霊が何をさせるかを確かに知っていました。彼はそれに対して何の疑いも持っていませんでした。これは今日聖霊を受けていると主張しながら、なにも特別な行動をせず、またどんな賜物を持っているかを分らない人たちとは全く対照的です。



そういう人たちはキリスト教と関連した劇的感情の経験であって、彼らがUターンして通常になれば、それは彼らのうちにあった一つの奇妙な感情であった事だけに残るでしょう。これに気づいて見ると、彼らは聖霊の賜物に関する聖書の句節に捕らえられていた結果、‘私が経験しているのがそれに違いない’と断定する過ぎないことを、彼らの牧師は‘正しくそれである’ハレルヤ！と気を煽てます。そして彼らは他の人に聖霊を受けたと説服する時に聖霊を受けた証拠としてその経験を利用するのです。この下手な模倣は‘改宗’以前に知っていなければならない聖書知識の不足から起因するのです。

人間の“心はよろずの物より偽るものであるから”(エレ.17:9)、私たちは聖書の原則の堅固な磐石の上に足を踏んでいねばなりません。これを正しく把握するにはいかに神の霊が働くかを研究するより他にはありません。私たちはみな神の力が私たちの生活に働く事を欲しています。しかしそれがいかに働くかは知っていません。あなたは本当に聖書に記録されている通りに働いている霊の賜物を所有していますか。もし私たちが本当に神を認識して、彼と関係を持ちたいとすれば、これらの事を正しく認識すべきです。

1 世紀に霊の賜物を与えた理由

既に学んだ神の霊の賜物に対する基本的原則を記憶して、今からは初期教会が所有していた霊の賜物に関する新約聖書の記録を調べて見ましょう。

キリストの最後の命令は使徒たちに全世界に出て行って福音を伝えることでした(マコ.16:15,16)。彼らは、彼らのメッセージにキリストの死と復活をテーマとして、これを伝えました。しかしその時今私たちが知っている新約聖書が書かれていませんでした。彼らは市場の路地で、あるいはユダヤ人の会堂でこの人、ナザレのイエスに対して話しましたが、彼らのストーリーは異様なことでありました。完全な人であったイスラエルの大工が十字架で死に、旧約聖書の予言の通りにその死から復活したので、彼のみ名によってバプテスマを受け彼の例にならえと言うのでした。

その時代、一つの集団がキリスト教を伝播していました。北イスラエルの一団の漁師たちが彼らの哲学でなく、神自身から来た教えを信じていると言うそのクリスチャンたちによって伝播するメッセージはこの世に立証すべきある方法が必要でした。

神の霊 43

今日クリスチャンたちは彼らのメッセージが神から来たのを立証するためにイエスの使役や彼の教理の記録である新約聖書を差し出します。しかし新約聖書が記録される前の時代は、その伝播者たちが話している真理を強調するために聖霊の使用を承認していました。これがこの世でその賜物を使用する特別な理由でした。記録された新約聖書がないので信者の新集団を信仰で成長させるに難しく、また彼らの間に起こるいろいろな実際的问题を解決することが出来なかったでしょう。彼らをキリストにある信仰で成長させる指導的手段がなかったのです。それで彼らのメッセージとイエスの教えが書かれた新約聖書が頒布されるまで、聖霊の賜物を与えて初期信者たちを指導させたのです。

このように、いつも聖霊の賜物を与えていた理由はとても明白にしています。

“彼(イエス)は高い所(天)に上った時、...

人々に(霊)の賜物を分け与えた。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストの体を建てさせるためである” (エペ.4:8,12)。

それで、パウロはローマの信者たちに手紙を書いて送りました。“私は、あなたがたに会う事を熱望している。あなたがたに霊の賜物を幾分でも分け与えて、力づけたいからである” (ロマ.1:11)。

福音の伝播を確認させるために霊の賜物を使用した実例は次の句節で明らかに分かるのです。

“私たちの福音があなたがたに伝えられた時、力と聖霊(霊の奇蹟的わざ)と強い確信によったからである” (テサ前.1:5; コリ前.1:5,6と比較)。

パウロはこのように話しました。“私は、異邦人を従順にするために、キリストが私を用いて、言葉とわざ(霊の奇蹟的行動)、しるしと不思議との力、聖霊の力によって、働けて下さった” (ロマ.15:18,19)。

福音の伝播者たちに関してこのように書かれたことを読みます。“さらに神も、しるしと不思議とさまざまなわざとにより、また、御旨に従い聖霊を各自に賜うことによって、あかしされたのである” (ヘブ.2:4)。

奇蹟的わざでクプロ島の福音伝播運動を支持したので、“総督がこの出来事を見て、主の教えにすっかり驚き、そして信じた” (使.13:

12)。

このようにその奇蹟的わざは彼らが教えた者たちにその教理を尊重するようにさせました。イコニオムでも、“主は彼らの手によってしるしと奇跡とを行なわせ、その恵の言葉をあかしされました” (使.14:3)。

これはみな福音を伝播せよと言うた主の命令に従った使徒たちの従順の説明を要約しているのです。“弟子たちは出て行って、至る所で福音を述べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言葉に伴うしるしを持って、その確かな事をお示しになった” (マコ.16:20)。

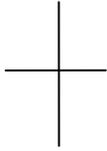
特定な時代に与えた特別なこと

従ってその霊の賜物は特定な時代に特別な事を成し遂げるために与えたのです。これはその賜物を生涯所有すると言う永久的所有を主張している者たちが誤謬に落ちているのを示しています。ペテロと共に、すべての使徒たちがイエスが昇天した後直に、“聖霊に満たされていました” (使.2:4)。それで彼らがキリスト教の福音を伝播するに他国の言葉を公に話すことが出来ました。当局が彼らの福音伝播を取り締まる時、“ペテロが聖霊に満たされて” (使.4:8)、当局を説伏出来る答弁を話すことが出来ました。彼らは牢獄から釈放され、“一同は聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語る” (使.4:31)により、福音伝播を継続する事が出来ました。

聖書を注意深く読む者は“彼らがすでに霊に満たされていて”それらの事をなすことが出来たと話していないことを見つけるでしょう。一定の事をなさせるために彼らは霊に満たされましたが、神の計画の他の目的を成し遂げるためには再びその霊に満たされなければなりませんでした。それと同様に、パウロは彼がバプテスマを受ける時“聖霊に満たされていましたが”、しかし数年後、彼がある邪悪な者を盲目になるように呪うには再び“聖霊に満たされなければなりません”でした(使.13:9)。

その奇蹟的賜物に関して、初期信者たちは“キリストから賜る賜物のはかりに従って”その賜物を所有していたとパウロは書いています(エペ.4:7)。その‘はかり’と翻訳されたギリシャ語の意味は“程度、あるいは限定的分量”を示しています(Str ongの聖書辞典)。ただイエスだけが自由に使うように限りなくそれを賜うていました(ヨハ.3:34)。

1 世紀に信者が所有した霊の賜物に関して詳細に考察して見ましょう。



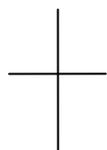
1 世記の霊の賜物

予言

‘予言’と言うギリシャ語は神から靈感を受けて神の言葉を話すのを意味しています。時にはその神の言葉に将来の事件を話しているのが含まれています(ペテ后.1:19-21)。このように“予言者たち”は予言の賜物を受けた者たちであって、“その頃、予言者たちがエルサレムからアンテオケにくだって来た。そのなかの一人であるアガボと言う者が立って、世界中に大飢饉が起こるだろうと、御霊によって予言した所、果たしてそれがクラウデオ帝の時に起った。そこで弟子たちは、それぞれの力に応じて、ユダヤに住んでいる兄弟たちに援助を送ることに決めた”(使.11:27-29)。このように予言した僅か数年後に起った特別な予言が、今日予言の賜物を受けたと言う者たちからは起こっていないのです。しかし初期信者たちにはこの賜物を受けていたので、彼らは予言の通り苦痛を受けている人たちに時間や財政を投資して苦境を克服するように助ける事が出来ました。今日いわゆる聖霊に満たされると教会ではこのような事を見つけられないのです。

疾病の治癒

使徒たちがこの世に完全な国が成就すると言う神の福音を伝播していたことを考えてみれば、“その時、見えない人の目は開かれ、聞こえない人の耳は聞こえるようになる。その時、足の不自由な人は、鹿のように飛び走り、口のきけない人の舌は喜び歌う”(イザ.35:5、6)と言われた時を前もって味わせる奇跡的行為で彼らのメッセージを確認させたのはあまりにも当然なことでした。神の国で起こることに対しては学習5を読んで見なさい。神の国がこの世に設立される時は、この約束は完全に果されるので、その国が成就されているか、あるいは成就されていないかあいまいなことではないのです。従ってその国に関するメッセージに対する神の奇跡的確認は論



争の余地がない決定的形態ものでした。これゆえに、初期信者たちによってなされた多くの奇跡的治癒は一盤大衆の前で公になした事実でした。

私たちは毎朝宮の門のところで施しを乞うていた足のきかない男がペテロが治癒して歩くようにさせたその賜物による治癒の典型的標本を読むことが出来ます。そのことが使.3:2に述べられていますが、人たちが彼を毎日そこに置いていたので、彼は人たちに熟知されていました。ペテロが霊の賜物を使用して彼を治癒した時、彼の“足と、踝とが、立ちどころに強くなって、踊りあがって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神を賛美しながら、彼らと共に宮にはいって行った。民衆はみな、彼の歩き回り、また神を賛美するのを見て、これが宮の「美し門」のそばにすわって、施しをこうしていた者であると知り、彼の身に起ったことについて、驚き怪しんだ” (使.3:7-11)。

その時ペテロは直ちに民衆にキリストの復活について話し初めました。その乞食が治癒された形で彼らに現れました、疑う事が出来なく、また反駁出来ない証拠によって、彼らがペテロの言葉を神の言葉であると見なして確信するようになりました。“祈りの時の” (使.3:1)宮の門は今日百貨店のバーゲンの朝のように人たちが込み合っていたでしょう。神がとても明白な奇跡で彼の言葉の伝播を確認させるに選んだ所は、このような所でした。これと同じ事を私たちは使.5:12で読むことが出来ます。“そのころ、多くのしるしと奇跡とが、次々に使徒たちの手により人々の中で行われた”。いわゆる‘ペンテコスタル派’とかそれに似ている諸派が主張している神癒というのは町の通り角よりは裏路地の彼らの会堂、また冷酷な一般大衆の前よりはその‘奇跡’を期待している信者たちの集りで行なっています。

ところでこの問題に関して現在その霊を所有していると人たちと、そしてまたその霊の所有を立証すると言う人たちと討論して見た著者の経験を話して見ましょう。著者の見解では、彼らの治癒は疾病の完快でなく、大目に見て部分的治癒であると言う事が出来ます。その教派の正直な信者たちはそれが治癒してもその疾病は継続すると思っていました。多くの場合、私はペンテコスタル派の友たちに、“私はあなたが偉大なる力を所有していると言う事を信じることが出来ないのです。神はいつも彼の力を持っている者と、持っていない者とを明らかに示しています。それであなたが霊の賜物を所有している証拠を示すように問う必要がないのです。もしそれを示すとしても、それが聖書の教理と一致するとして、あなたの教理的立場に同意する事が出来ないでしょう”。彼らは私に霊の力を明らかに立証した事が一度もないのです。

神の霊 47

私の態度とは対照的に、一世記の正統的ユダヤ人たちはクリスチャンが神の霊の賜物を所有していると言う可能性に心を閉じていました。彼らはこのように話していました。“この人が多くのしるしを行なっているのに、お互いは何をしているのか”(ヨハ.11:47)。また、“あの人たちをどうしたらよからうか。彼らによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全体に知れわたっているので、否定しようもない”(使.4:16)。それと同様に、使徒たちが他国の言葉で話しているのを聞いて、“彼らがあっけにとられた”(使.2:6)と話しています。今日あのペンテコスタル派の人たちのしゃべりにこれと同じことが起こりません。その奇跡を行うと言う現代のペンテコスタル派の事実をあきらかに明かして、奇跡を行うと言う彼らの不当性を否定出来なくさせるのは、とても重要なことでもあります。エルサレムで起ったただ一つの奇跡の記事がロンドンのトラファルガー広場、あるいはナイロビのナハル公園でもなされると提示するのは適当でないのです。それで今日所有していると言う神の奇跡的霊の賜物は全世界に渡る認定でなければなりません。ペンテコスタル派の人たちが主張している治癒の証拠は主に次のような疾病です。

胃の潰瘍が癒した; 祈りの会後に治癒が初め、進行している。

不具の四肢が成長していると言うこと。

度々前の通りに戻るけれども、聴力や視力がよくなったと言うこと。

うつ病が癒したと言うこと。

これらの実例にまたケンヤのナイロビにあったT.L.Osborn様の治癒伝道集會に救急車で患者を乗せて行った運伝手がそこに留まるべきか、あるいは帰るべきかジレンマに陥ったが、そこに留まりました。しかしその患者は結局治癒を得なく帰りました。

そのような集會には、“来て奇跡を期待せよ”と多くの挑戦的ポスターがひら揺れ、またその講壇は心理的効果を勘案して設置しています。新約聖書のどこにも奇跡が起こる前に大衆の心理的効果をねらって講堂になにか必要ものを設置しておいたヒントが全然ありません。一世紀に治癒された人たちの大部分が信者でなく、イエスがどういう人であるか全然分からなかった人もあります(ヨハ.5:13; 9:36)。

しかし今日の神癒主張者たちの集會は心理的衝撃をねらう祈りの反復、ドラムや感情を激発させる楽器を使って洗脳するによって治癒が起こるのです。そこには神に関するなんの理性的意識がないのです。著者はいろいろな場所で行なったそのよ

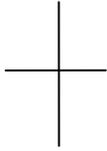
うな集會に参會した経験があります。その所に行く毎にいつもドラムの調子に合わせて拍手する騒々しい音の中で、気をつけ、その誘いにのらず聖書意識を保ち、理性的心を保とうともがいたために頭が割れるような経験をしたのです。これは皆ペンテコスタ派の人たちの‘奇跡の集會’の前奏曲であって、その神癒と言うのが神の霊の作業によるのではなく、感情と心理的結果であるのが立証されました。これとは対照的に、ペテロは本当に神の霊の賜物を使用して人たちが町の街路に置いていた人たちを治癒しました(使.5:15)。パウロが、クプロ島のローマ総督に(使.13:12、13)、またルステラ都市の多くの異教徒たちに(使14:8-13)その奇跡的賜物を使用したのが立証されています。その霊の賜物の目的と本質が要求された時、それらのことは公になされ、そして、神の力が彼らの僕たちによって公に發揮されて、ほかに何の説明も必要がないものでした。

キリストの治癒奇跡の一つの効果も同様でした。“一同は大いに驚き、神をあがめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った”(マコ.2:12)。

他国の言葉

大部分が洗練されていなかった漁師たちであった使徒たちが、世界に出て行って福音を伝えよと言う偉大なる使命を受けました(マコ.16:15、16)。それに対する彼らの最初の態度は恐らく、“他国の言葉を話せないのに、いかに遂行出来るのか”と反応を起こしたでしょう。そればかりでなく、彼らは学校に通ったことがないから、外国語に関する概念もなかったのです。彼らに関して、“彼らが無学な、ただの人たちである事を知って、不思議に思った”(使.4:13)と記録されています。パウロのように比較的の高い教育を受けた人さえ言語の障壁はとても手に負えないものでした。改宗者たちは、彼らお互いの教訓が必要な者たちであつたので、お互いの言葉を分からないのに話すことはとても重要な問題だったでしょう。

これを克服するために、他国語を話しそれが理解できる霊の賜物を与えていました。聖書にある注釈には“Tongue”は確かに“言語”を意味するとしています。聖書の見解は、その“Tongue”が熱狂中に自分自身さえ知らず発する何の意味もない声であると主張しているペンテコスタ派の意見とは全く反対であるのが明らかです。この混同は聖書の定義が“Tongue”は“他国語”であると示していることによつて明らかになるのです。



神の霊 49

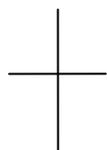
キリストが昇天した後、ユダヤ人のペンテコスト祭りの時に、使徒たちは、“すると、一同は霊に満たされ、霊が語らせるままに、いろいろな他国の言葉を語り出しました。...

この物音に大勢の人が集まって来て、彼らの生まれの故郷の国語で、使徒たちが話しているのを聞いているのを、誰も彼も聞いてあっけにとられた。そして驚きを怪しんで言った、「見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。それなのに、私たちがそれぞれ、生まれ故郷の国語でを彼らから聞かされることは、一体、どうしたことか。私たちの中には、パルテヤ人、メジア人、エラム人もおれば、..

エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者もいるし、またローマ人で旅に来ている者、ユダヤ人と改宗者、クレテ人とアラビヤ人もいるのだが、あの人々は私たちの国語で神の大きな働きを述べるのを聞くことは、どうしたことか」。皆の者は驚き惑って、互いに言った” (使.2:4-12)。これは彼らが今日その霊の賜物を受けたと主張しながら、呪いをでしゃべるような話を聞いて驚き怪しんだのではなく、他国の言葉を学んだ事がない人たちが他国語を上手に話すの聞いてそうだったのでした。呪いをでしゃべるような訳の分からない話を聞いて驚き説得されたのではなく、使.2章に書かれているように、他国の言葉で神の偉大な業を話しているのに彼らは説得されていました。もし彼らが訳も分からない事をしゃべっていたなら、皆立ち去ってしまったでしょう。

使.2:4-11にある“Tongue”は“言語”であるとした確かに定義している以外に、新約聖書の多くの句節に“Tongue”が言語であることを示しています。“あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほど大ぜいの群集が” (啓.7:9; 10:11; 11:9; 13:7; 17:15)と言われた句節は地球のすべての人たちを示し、その“言葉—Tongue”は諸国の言葉を示しています。とにかくギリシャ語の言葉は言語を示すのであって、訳の分からないことを話すその声は聖書では言語と認定していません(創.10:5; 申.28:49; ダニ.1:4を見よ)。

コリ前.14章、“異言を語る”賜物の使用に関する命令表はその21節でこの賜物をいかにユダヤ人たちが使用しているかに関してイザ.28:11を引用して話しました。“律法にこう書いてある。「私は異国の舌と異国の唇とで、この民に語るが、それでも、彼らは私に耳を傾けない、と主が仰せになる”。このイザ.28:11は主にユダヤ人たちが分からない言葉を話しているイスラエルの侵略者たちに対して話している



のです。“言葉”と“舌”と対比して話しているその言葉は外国語を示しているのです。コリ前.14章には“言葉”が外国語であることを示している多くの句節があります。この章では、パウロが初期多くの教会で行なっているその賜物の濫用と、そして言葉と予言の賜物の特性を看破して彼らに霊感的批評を与えたのが書かれています。では、それに対して簡単に説明して見ましょう。その37節がキーになる点であります。

“もしある人が自分は予言者か霊の人であると思っているなら、私があなたがたに書いていることは、主の命令であると認めるべきである”。

誰でも霊の賜物を受けたと主張する者はその賜物の使用に関するこの命令が神の靈感によることであると受け入れなければならない。従って今日その命令に服従しない者は誰でも神の靈感の言葉を見下げているのであります。11節から17節まで

“もしその言葉の意味が分からないなら、語っている人にとって、私は異国人であり、語っている人も、私にとっては異国人である。

だから、あなたがたも、霊の賜物を熱心に求めている以上は、教会の徳を高めるために、それを豊かにいただくように励むがよい。

こようなわけであるから、異言を語る者は、自分でそれを解くことが出来るように祈りなさい”。

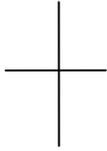
もし私が異言を持って祈るなら、私の霊は祈るが、知性は実を結ばないからである。

すると、どうしたら良いのか。私は霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊で賛美を歌うと共に、知性でも歌おう。

そうでないと、もしあなたが霊で祝福の言葉を唱えても、初心者の席にいる者は、あなたの感謝に対して、どうして「アーメン」と言えようか。あなたに何を言っているのか、彼には通じない。

感謝するのは結構だが、それで、他の人の徳を高めることにはならない”。

従って、礼拝に集まっている人たちに分からない言葉で話すことは無意味なことです。呪いのような訳の分からない言葉で話すのは制裁しなければならないのです



神の霊 51

。意味の分からない言葉を聞いていかに「アーメン」と言われることが出来るでしょうか。祈りの終りに、「アーメン」と言う言葉は真にそうであるとその祈りに同意を現す言葉です。パウロが話していることは教会で兄弟や姉妹さまたちが異言で話すのは誰も意味を分からないから何の徳にもならないにと言っているのです。

私はかつてBilly

Grahamの集会が行われる会館の外で、聖書を基本としているキリスト教に帰れと言うパンフレットを配っていた時起ったことが忘れられません。そこに興奮していた一人の婦人が私に向かって私の教理が“悪魔の教えだ”と訳の分からない言葉で10分間ほどしゃべり続けました。私は彼女になにも話すことが出来ませんでした。パウロはそのようにしないように命令しているのです。

18節

“私は、あなたがたのうちの誰よりも多くの異言が語れることを、神に感謝する”。

パウロはキリストの教えを伝播するために多くの地域を旅行しなければならなかったから、誰よりも多くの異言を話さねばなりませんでした。

19節

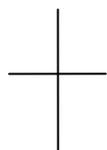
“しかし教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、他の人を教えるために、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい”。

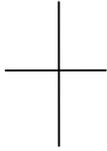
これはとても明らかです。日本語で簡単にキリスト教に関する教理を話すのが他の国の言葉で数時間話し、あるいは呪いのような訳の分からない言葉で話すよりよいのです。

22節

“このように、異言は信者のためではなく、未信者のためのしるしであるが、予言は、未信者のためではなく、信者のためのしるしである”。

だから、異言を話すのは主に他の国に出て行って福音を伝える時に使用しました。しかし今日異言を話す賜物を受けたと主張する人たちは信者たちの中で、あるいは彼ら自身一人おる時も話しています。福音伝播のために奇跡的に外国語で話す人がいると言うことを聞いたことがありません。1990年の初め東ヨーロッパにキリストの福音を伝えるドアが開かれました。しかしいわゆる多くの福音伝道者たちは言





語の障壁のために英語で書かれている伝道パンフレットを配りました。彼らが本当に奇跡的に異言を話すことが出来る賜物を受けていたとすれば、その異言の賜物を使用して伝えたいでしょう。その霊の賜物を受けいれると主張している有名な伝道者 Reinhardt

Seiberは今もやはり Kampala とか Uganda 地方で伝道する時通訳者を雇っているのです。

23節

“全教会が一緒に集まって、全員が異言を語っている所に、初信者か不信者かが入って来たら、彼はあなたがたが気が変になったと言うだろう”。

これは実際その時起ったことです。回教や異教ら同じく西部アフリカで異言の賜物を主張する人たちの奇怪な行動に対してからかいました。またそのペンテコスタルの集会に参加していたわきまへの出来る人たちも彼らが気を取られていると言いました。

27節

“もし異言を語る者があれば、二人か、多くてい三人の者が順々に語り、そして一人がそれを解くべきである”。

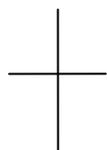
礼拝する間は、ただ二人か、あるいは三人が異言で話すべきだと命令しています。聴衆に三つ以上の異言で話すのは許されないと言うのです。礼拝の時間において、二つ以上の異言を話すとすれば、その話者の話しを二つ以上に翻訳せねばならないから、その話し全体の統一性がそこなうのです。もし英国人たちが集まっているロンドンの真ん中の集会で、その異言の賜物を持っている人がいるとすれば、そこに集まっているフランス人やドイツ人たちの観光客様のためには彼らが話している言葉で話したでしょう。

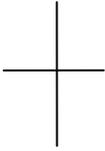
伝道者：今晚は。

最初に異言を話す者：Bon soir(フランス語)。

その次に異言で話す者：Gutenabend(ドイツ語)。

しかし彼らが話す時は“慣わし通り”一人ずつ次々に話すでしょう。彼らが同時に話すとなれば大混乱が起こるでしょう。しかし現在いわゆるその異言を話す





神の霊 53

言う人たちは大体感情的気質が多いために、同時に多くの人たちが話すので、そのゆえに大混乱が起ります。私はその一人が異言を話し始めるや、彼の影響を受けて、多くの人たちが立ち上って騒ぐのを見ました。

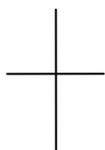
異言の賜物は時々予言の賜物と連合して使用しているのがあります。それで、神からの靈感を受けたメッセージが話者を通して異言で話しています。このように二つの賜物を使用した実例は使.19:6で見られます。しかし、もし英国人たちとフランス人観光客者たちが集まっているロンドンの集会で、その講師がフランス語で話したとすれば、そこに集まっていた英国人たちは“何の徳も得ることが出来なんでしょう”。従って通訳の賜物を受けた者が来て、フランス語から英語に翻訳して集まっているすべての人が理解するようにしなければなりません。それと同様に、もしフランス人から質問をしたら、その話者はフランス語を話す賜物を受けているけれどもその内容を分からないから、それに答えることが出来なかったでしょう。それで通訳の賜物は理解させるために現れたものでした。

通訳する人が居なかったら、その異言を話す者は黙っていなければならないでした。“もし異言を者があれば、.....もし解く者が居ない時には、教会では黙っていて、自分に対した神に対して語っているべじである”(コリ前.14:27,28)。訳の分からない異言を語っている現代の異言主張者たちが通訳する者もないのにその訳の分からない異言を話しているのは神の命令に服従していないことを現わすのです。

32、33節

“かつ、予言者の霊は予言者ののに服従するものである。神は無秩序の神ではなく、平和の神である。聖徒たちのすべての教会で行われているように”。

それゆえに聖霊の賜物を所有するのは人間の正常な意識状態から脱したある経験ではないのです。その霊はその使用者がやむを得なく使用せられるのでなく、それを支配することが出来るのです。悪魔とか‘悪霊’が救われない者たちが所有しているが、しかし聖霊は信者たちに満たすと主張することは大きな間違いです(学習6.3を見よ)。コリ前.14:32に話しているその霊の力は一定した目的のために使う使用者の支配に従っていました。それは人間の本性にある悪の力と対照的であるけれども目的のない善い力ではないのです。その外に使徒たちが受けたその聖霊の力はい



つも彼らのうちにいたのではなく、一定した目的のために一定した時だけ彼らに使用されて撤回したことを、すでに示しました。

平和を愛し無秩序を憎んでいる(33節)神に適切な方法でその賜物を使用せよと訴えるその忠告は、今日の‘ペンテコスタル’教会は全然聞き入れていないのです。

34節

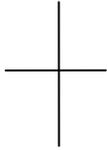
“婦人たちは教会では黙っていなければならない。婦人たちは語ることが許されていない。だから、律法も命じているように、服従すべきである”。

その霊の賜物の使用に対して書いているこの文脈では、婦人たちが教会で礼拝の時その使用が禁止されているのを否定することが出来ません。だからそのように異言を話すのは全体的に無視してもよいのです。訳も知らない言葉をしゃべっているその現象は、聴衆の一人から他の人に移って行く感情の興奮であると説明出来るのです。婦人や子どもたちはそのような感情の興奮の影響を受けやすく、そのような声で叫ぶのが普通です。彼らはそれを異言を話す主張しています。

現代の教会で‘異言を話し’また‘予言を話す’特出な婦人があると言うのはこの句節の明らかな命令とは少しも一致しないことです。使徒パウロは婦人を嫌う者であると言うばかげた論争は次の句節で静められるでしょう。“自分が予言者か霊の人であると思っているなら、私があなたがたに書いていることは、主の命令だと認めるべきである”(コリ前.14:37)。

従って神の靈感による聖書を信じる者は誰でもこのコリ前14章の命令はまじめに考えて見るべきことであると受け入れなければなりません。それを公にあざける者たちは神の靈感による聖書を信じない者であるか、あるいは霊の賜物を受けていない者であるのを彼自身が宣言するのであります。彼は霊の賜物を持っていないからコリ前14章の主の命令を否定していると言えます。この論争の論議が本当に反論を話しています。こういう人たちの教会に一員としてあなたは留まり、交わりを継続することが出来ますか。

本学習の脚注として話しますが、その訳の分からない言葉を聖書の異言だと主張している教派の人たちは他の教派の人たちより比較的うつ病の比率が高いと言う科学的立証はとても重要な意味があります。アメリカのVanderbilt大学の心理学教授Keith



Meadorはうつ病と宗教を信じる者たちの関係を分析し研究しました。彼は“うつ病が一般の信者たちには1.7%であるに対して、ペンテコスタル派の信者たちは5.4%である深刻な比率”を発見しました。彼の研究の結果は、1992年、12月号の、Hospital and Community誌に掲載されています。

面白いことには、それと同じ結論に到達した論文がInternational Herald Tribune誌の1993年2月11日号に掲載されました。“ペンテコスタル派の人たちがうつ病チャートのトップ！”この表題それ自体がよくそれを話しています。なぜそうでしょうか。ペンテコスタル派の人たちが主張している霊所有の‘経験’は確かに心理的作業に過ぎない事実であるからです。

2.4 その賜物の撤収

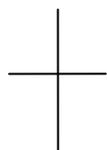
奇蹟を行う神の霊の賜物は、キリストがこの世に再臨した後、この世を神の国に代えるために信者たちがもう一度使用するでしょう。従ってその賜物は“来るべき世の力”(ヘブ.6:4,5)と呼ばれています。ヨエ.2:26-

29にはイスラエルの悔い改めの後にその霊の賜物の大きな注ぎがあると書かれています。キリストが再臨した後信者たちにその賜物を与えるであろうと言われた事実は彼らが今それを所有していない証拠になるのです。聖書から世界に起こっている事件らに目を開けているクリスチャンたちは主の帰りが間近になったのを知っているでしょう(付録3を見なさい)。

その賜物を所有していた1世紀と主が再臨するまでの一定した期間にはその霊の賜物が撤収すると言われた明らかな聖書の予言があります。

“予言はすたれ、異言は止み、知識(賜物による)はすたれであろう。私たちの知識は一部分、予言も一部分だから、完全なものが来た時には、部分的ものはすたれる”(コリ前.13:8-10)。

“完全なものが来た時”1世紀に所有していたその霊の賜物は撤収されるのです。その賜物がもう一度与えられるその時を考えて見ると、その撤収はキリストの再臨を意味するものではありません。“完全”と翻訳されたギリシャ語は厳格的に話



せば‘満たされる、或は完成する’と言う意味です。罪がなくなるのを意味していません。

この完全なものは初期クリスチャンたちが予言の賜物から受けていたその部分的知識と取って代えるものでした。予言は神の靈感の言葉を話すその霊の賜物であったことを記憶してください。それは今聖書となっている記録された言葉です。

1世紀には、普通の信者が今私たちに知られている新約聖書の断片的知識しか持っていなかったのです。彼はいろいろな教会の実践的ことに対して教会の長老たちから予言の言葉を聞いたのです。また彼はイエスの生涯に関する概要を知っており、パウロからの手紙も一つあるいは二つ読んだことがあるでしょう。しかし一度予言の言葉の記録が完成してそれが回された後は、予言の賜物を所有する必要がなくなりました。従ってその完成されたもの、霊の賜物の仕えと取って代えたもの、新約聖書が完成されたのでした。

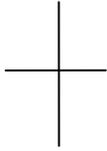
“聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、誤りを正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備が出来て、完全にととのえられた者になるのである” (テモ后.3:16, 17)。

その完全にするもの、あるいは完成したものは“聖書全体”を示すのです。それで“聖書すべて”が一度靈感によって書かれ、“それが完成した”後に、その奇蹟を行う賜物は撤収してしまいました。

エペソ.4:8-14は聖霊の賜物の目的と機能に対する説明をよく組み編んでいる句節です。

“そこで、こう言われている。「彼は高い所に上がった時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。...

キリストの体を建てさせ、私たちのすべての者が、神の子に信じる信仰に一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、キリストに満ちみちた徳の高きまで至るためである。...こうして、私たちは、もはや子ともではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起こる様々な教え風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなくなる”。



神の霊 57

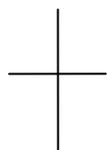
1世紀の賜物はその完全なものが来るまで、あるいは信者を成熟させるために与えられたものであって、テモ后.3:16、17には“聖書のすべて”の導きを受けるによって“完全な神の人になる”と話しています。またコロ.1:28にもその‘完全’は神の言葉に応ずるによって果されると教えています。一度聖書の教えを全部獲得したら、いろいろな教会で提示するいろいろな教理に迷われると言う弁明の余地がないのです。“神の言葉は真理である”(ヨハ.17:17)と言われた唯一の聖書があり、ただその研究を通して私たちはエペ.4:13で言われた“信仰の一致”、“一つの信仰”を発見することが出来るのです。だから真のクリスチャンたちはその一つの信仰を所有するに至るのです。記録された、完成された神の言葉、その完全の結果、こう言う意味で、彼らは完全であります。

エペ.4:14を注意して読めば、その奇蹟の賜物の仕えの下にある者は霊的に幼子であることを分かります。そして予言に関して言われた文脈ではその奇蹟的賜物が廃止されると暗示しています。コリ前.13:11にそのように話しています。従って霊の賜物を所有していると主張する人たちは霊的に成長していないのを示しているのです。読者たちは記録されている神の言葉を深く吟味するによって、神自身が私たちに啓示しているその基本知識の完成を喜び、謙遜な態度でその言葉に順従しなければならないのです。

現在その霊を所有しているとの主張

最後に、その奇蹟的賜物を今所有していると考え、それをくり返し主張している人たちに指摘しなければならない幾らかほかの点を話しましょう。

現在“異言で話すと言う人たち”は訳も全然分からない短い音節をくり返してしゃべる傾向があります。例をあげれば、“ララ、ララ、ララ、シャマ、シャマ、イエス、イエス、...”と。これは構文的語法による言語ではありません。ある外国語を話すのを聞く時、その外国語を全然分からないけれども、その使用している単語らがある形式によってなにか伝達しているのが見分け出来るのです。なおさら現代その異言を話しているその言葉にはこの特徴がなく、訳も全然分からなくしゃべっているのです。それは私たちの信仰に全然役に立ちません。1世紀のその異言の賜物は確かな目的がありました。



あるペンテコスタル派はその異言を話すのが“救い”を受けたしるしであるから、改宗者すべてにそのしるしが伴うと主張しています。この主張は、教会とは一つの体のようなものであって、体には腕とか足とか、各々違う肢体があるように、御霊の賜物にもいろいろなものがあり、皆同じ賜物を受けているのではなく、またその役割も違うと説明して、初期教会に送った使徒パウロの霊の賜物に関する解釈に衝突する難しい問題です。コリ前.12:17, 27-30はこれを明らかにします。

“もし体全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もし体全体が耳だとすれば、どこで嗅ぐのか。 ...

あなたがたはキリストの体であり、一人一人はその肢体である。そして、神は教会の中で、人々を立てて、第一は使徒、第二に予言者、第三に教師とし、次に力ある業を行う者、その次にいやしの賜物を持つ者、また補助者、管理者、種々の異言を語る者を置かれた。皆が使徒だろうか。皆が予言者だろうか。皆が教師だろうか。皆が力あるわざを行う者だろうか。皆がいやしの賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るのだろうか。皆が異言を解くだろうか”。

この章の初めに上記のことと同じことが指摘されています。

“ある人には、御霊によって知恵の言葉が与えられ、他の人には、同じ御霊によって知識の言葉、また他の人にはその同じ御霊によって信仰、また他の人には一つの御霊によって癒しの賜物、また他の人には力あるわざ、また他の人には予言、また他の人には霊を見分ける力、また他の人には種々の異言、また他の人には異言を解く力が、与えられている。すべてこれのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それら各自に分け与えるのである” (コリ前.12:8-12)。

このように強調しているその賜物に関する解釈を無視しているのは聖書に無知の訳であります。

そのペンテコスト派のもう一つの論争点はサマリヤの町でピリポが多くの人を改宗させたことにあります。彼らは神の福音を悟りバプテスマを受けましたが、霊の賜物は受けていませんでした。それで、ペテロとヨハネが彼らに下って行きました。“二人はサマリヤに下って行って、皆が聖霊を受けるようにと、彼らのために祈った。...そこで、二人が手を彼らの上に置いたところ、彼らは聖霊を受けた。シモンは使徒たちが手を置いたために御霊が人々に授けられたのを見た” (使.8:14-18)。そ

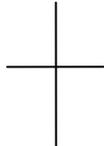
の聖霊の賜物は使徒たちが彼らに手を置くによってのみ授けられたのでした。従って今聖霊の所有を主張している人たちは使徒たちが亡くなったのでそれを実行することが出来ないのです。

また他のペンテコスト派はその異言を話すのが救いを示す証拠でないと言います。これはその賜物を所有すると主張している者たちの間にも主な教理が異なる事実を際立たせているのです。このようにあるカリスマ的信者は神の国がこの地にあると信ずるに反して、他の人たちは天にあると話しています。カトリック教のカリスマ的信者は聖霊がマリヤとローマ教皇を拝むように告げるに対して、あるペンテコスタル派のカリスマ的信者たちの聖霊はローマ教皇を反キリストと公に非難し、カトリック教の教理を呪うべきものと話しています。イエスは弟子たちに、“あなたがたが所有する聖霊の助け主”は“あなたがたをあらゆる真理に導いて行き、... その日には、あなたがたが私に問うことは、何もないであろう。しかし、助け主、すなわち、父が私の名にうよって遣わされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また私が話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう”と話しました(ヨハ.14:26; 16:13, 23)。

その助け主を所有している人たちの間にさえ基本教理の分裂があると言うのはとんでもないことです。そんなことが起こるのは霊の所有を主張する者たちが聖書に注意していないことを示しているのです。その主張者たちは彼らの信仰の正しさを聖書で証明出来ない事実が、彼ら自身その助け主が示す知識に無知であることを現わしているのです。

その異言を主張する人たちは聖書の記録とは別に、聖霊の賜物の中でその異現の賜物が最も重要な賜物と思っているのです。エペ.4:11にある霊の賜物のリストには異言に関する賜物については一言も言及されていないのです。またそれと同じリストのコリ前.12:27-30にはようやく最終に少し話しているのです。その異言を話す賜物を使用した記録は新約聖書にただ三度書かれているのです(使.2:4; 10:46; 19:6.)。

その異言を話し奇跡を果していると主張している現代のカリスマ的クリスチャンたちは、私たちがこの学習で提示している、聖霊の賜物に関する説明を深く考察しなければならないのです。その根本的要点は、彼らが果していることが何であろうとも、それは絶対聖霊の所有から生ずるものではないと思うことです。今その賜



物の所有を主張している者は誰でも、私たちが提示したことに対して聖書の論拠で答えるべき重要な宿題があるのです。

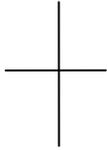
ところで、なぜそのような部分的治癒とその異言を話す現象が起こるかと言うことを説明します。

そもそも人間と言う存在は彼らの脳の力の一部だけ、心理学者の算定によるとその力の1%も使用していない言うことを認識しなければならないのです。また私たちは心が体の全部を心理的に管理していると認定していることです。従って、心の管理で体が火に焼けないと信仰を持っているヒンズー人たちは、裸足で火の中を歩いても足が焼かれないのです。人間が興奮した時には、脳の力を普通の時よりも多くのパーセンテージ使用出来るのです。だからその心理的効果を発揮する時の体の経験は普通の時以上のものです。戦争が激しい時、ある兵士は彼の手が爆発で吹き飛ばされたのも意識せずに数時間戦ったこともあります。

熱狂的信仰の状態と音楽の刺激で興奮している者に、カリスマ的指導者の影響は、普通人間が経験する領域以上のことを経験させるのです。今日‘クリスチャン’たちが主張しているその‘奇跡’は他の宗教でも起こるものであって、現在科学でも究明出来ない経験である例外なことです。だから、Voodoo教(アメリカの南部と西インド諸島にある土人たちの原始宗教)信者たちもその訳も解らぬ異言を話し、またモスLEM教信者たちも現代クリスチャンたちが主張しているのと同じ奇跡を果しているのです。しかし1世紀に聖霊の賜物を所有していた重要な点は、他の宗教よりキリスト教が確かに優れているのを示したことです。今日クリスチャンたちの‘奇跡’が他の宗教のものに比べて優れていない事実は彼らが1世紀の聖霊の賜物を持っていない証拠です。

この分野に関した多くの意義ある情報を‘ペンテコスト主義者’ William Campbellが与えています(1967年、Church of Christ)。彼は多くの異教がこの異言を話す同じ‘特徴’を持っていると示しています。Kawaii教信者は、彼ら神Oroの祭司たちが神の意志を啓示するにその訳の解らぬ異言を話し、他の祭司が通訳すると信じます。それと同じことが‘ペンテコスタル派’の教会でも起こっています。

もし現在一般のキリスト教がその1世紀にあった規模の大きい奇跡を行ない、そしてその説得力を持っているなら、今アフリカの多くの処で起こっているキリスト教に勝利するイスラム教はあり得ないでしょう。聖霊の賜物である“助け主”の所

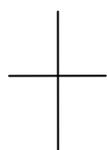


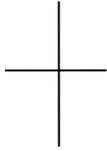
有者たちはイエスがなしたことよりもっと“偉大なこと”をなすようになっているのです(ヨハ.14:12、16)。信者がもっと多くの信仰を所有するならそのような奇跡を行うと言う彼らの弁解はあり得ないことです。確かに彼らがその助け主の賜物を所有するなら、信仰の所有の多少とは別に、“私を信じる者は、また私のしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きい業をするであろう。私が父のみもとに行くからである”(ヨハ.14:12)でしょう。

2.5 聖書の権威

この学習で学んだ通り、神の霊とは彼の意志や目的を話すものであって、そしてそれは神の意志とか目的が実行されて成就させる活力です。私たちはその霊によって啓示されたのが神の言葉、聖書だと強調しました。今日キリスト教が皆紛らわしくなって多くの問題を提示しているのはただ一つ聖書知識の欠乏から来たのです。そのような偉大なる力が一冊の本、聖書に付与されているの信じないし、またその一部も理解出来ないから、人間に対する神の啓示が、聖書以外の他の形式で来ると惑われているのです。その本性が根本的に腐敗している人間は(エレ.17:9)神の言葉の清らかな真理(ヨハ.17:17)を心に入れて置くことが出来ないので、多くの人がその人間性に魅了されて他の形式で神の啓示を受けようと惑わされるのです。そのいくつかの実例を挙げてみましょう。

宗教団体	人間の本性に魅力的 意見を提案する	他の形式の 啓示を主張する
ローマカトリック教	教皇や枢機卿の意見が神の意志を反映している権威ある神の言葉である。	信者各自が聖書を読む必要がない、過去には聖書の所有さえ禁止された。聖書よりもむしろ人たちの意見を信頼する。
モルモン教	モルモンの書	聖書には望みがなく、モルモン聖典が救いを与える





カリスマ 的 キリスト 教	信者には内住する聖霊の 光があつてそれが信者 を導くと主張する。	信者の感じることを神の考え と思い、聖霊が聖書と一致しな い方法で導くと主張する。

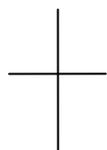
このリストに記入されたすべての他のものはそれが神の言葉である聖書を基本的に受けているか調べて見なければなりません。要点は、“一つの聖書であるのに、なぜ多くの種類の教会があるか”と言うことです。すべての教会がある程度聖書の教理を持っていますが、問題はそれに他の形式の人間の啓示を付け加えて、純粋な神の意志、彼の目的が歪曲されているからです。

もしあなたが真の教会、真の一つの信仰と真の一つのバプテスマを探そうとすれば(エペ.4:4-6)、どうぞ“**聖書に帰きなさい**”と言う他ないのです。

間違った解釈4: 聖霊は果たして人格的であるか

学習2.1と学習2.2で神の霊は彼の力であり、それがいろいろな方法で神の“心”を反映している多くの証拠を与えました。神の霊の行動はそうのように正確に神の要素と人格を反映するので、ある人たちは神の霊が一人の人格者でありまた神であると論じています。前の学習を注意して読んだら神の霊は彼の心や力を示しているのを分かっているでしょう。では、その心や力がまだ一つの人格体になるでしょうか。電気は人間が管理して生産された一つの見えない力ですが、しかしそれは一つの人格体となることは出来ません。愛は人の性格の一部ですが、それが人格者ではありません。神の霊は、彼の性格の一部である彼の愛とかまた力を含んでいますが、しかしそれらが神自体から離れて一つの人格者にはなれません。

このようにその霊の存在が一つの人格体であると言うのは間違った見解であるにも拘わらず、今日多くのクリスチャンたちが三位一体論を信じているために、そのように信じています。彼らは神である父、神である聖霊、神であるイエスと、同等な三人の人格的神が一体であると主張しています。神は一つの人格者でないと言いながら、また聖霊は人格者であると主張しています。それは余りにも矛盾なる論理です。それは聖霊がイエスの父となっているのです。





神の霊 63

その‘三位一体説’は根本的に異教からキリスト教に輸入された考えであるから、聖書にはそんな単語が全然見つかりません。神が三位一体であると言う考えを受け入れているので、キリストチャンたちは神の霊/力が一つの人格者であり、それは実に神でないけれども、まだ神であると言う不可思議な結論に至るのです。彼らはその考えが非論理的であると論駁すれば、神は神秘であると討論を回避し、それに対する論理的説明が必要がなく、ただそれを信仰で受け入れべきであると主張するのです。

これはキリストの言葉と彼の使役を通して啓示された神の存在の神秘に対して新約聖書で話していることを見逃しているのです。

“兄弟たちよ、自分を賢い者とうぬぼれないように、次のような神秘をぜひ知ってもらいたい” (ロマ.11:25)。

“この福音は世々にわたって隠されたいた、神秘を啓示するのです” (ロマ.16:25)。

“私はあなたに神秘を告げます” (コリ前.15:51)。

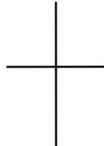
“神秘を私たちに知らせて下さいました” (エペ.1:9; 3:3)。

パウロが福音を伝播しながら“私たちがキリスト神秘を語れるように、また、私が語るべきことを大胆に示すことが出来るように、私のために祈って下さい” (エペ.6:19; コロ.4:3, 4)。

“世の初めから代々にわたって隠されていた、神秘が、いまや、神の聖徒たちに明らかにされたのです” (コロ.1:26,27)。

これは新約聖書に書かれている神秘と言う単語の全部であって、聖書の基本的教理に神秘的なことがあると言うのではないのです。そうであるのに今も神秘があると主張している者はまだ暗い闇に留まっているのです。このような人は“神秘”と啓示録に描写されている偽りの宗教の制度、“バビロン”に対する聖書の言葉に気付いていないのです(啓.17:5)。この制度の信仰が神秘であると宣布しているのです。真の信者たちはその女の神秘を知っているのです。

勿論、このようなあいまいな理論は神を認識するにおいて、人間の経験の主観的根拠に置くか、あるいはいつか彼らの心を動かした確実でなくあいまいな外部の影響に置く者たちに起こるのです。もし私たちが本当に神の言葉の教えを受け



謙遜になったとすれば、そのメッセージを把握するために論理を展開させる人間の基本的能力と推理力を使用しなければならないのです。

神の福音伝道者は誰でも、‘これは一つの完全な神秘です。あなた方はそれを認識することが出来ません’と言われたことが聖書に書かれていません。その代わりに、彼らは理性と聖書から論理的結論を引き出して人たちに訴えてたと書いています。

この学習で熟考して見た通り、福音の基本教理を伝道するにおいて、パウロは“聖書を引用して論じ合い、「メシアは必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた」と、また「このメシアは私が伝えているイエスである」と説明し、論証しました”(使.17:2,3)。それは体系的であり、論理的聖書解説であります。またその文章の序文には“パウロはいつものように、...論証した”と書かれています。従ってこれは彼の通常の伝道方法でした(使.18:19を見よ)。彼がコリントでの伝道大運動の間も、“パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシャ人の説得に努めていた。...

しかし、彼らが反抗し、...”(使.18:4-6)と話しています。聖書を根拠したパウロの論証の説得過程を受けた人たちが改宗されました。そこには‘イエスに関するヴィジョンを見た’とか、‘なんとも表現出来ない感情になった’とか、あるいは、‘ある晩主イエスに会った’とかのうわごとがないのです。

注目すべきことは、神の靈感によって書かれている聖書には、“彼らに反抗する”点に対して論理的にそして理性的に訴えたと話していることです。それと同じくアンテオケでも、パウロとバルナバは“彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めました”(使.13:43)。彼らが訪れた次のイコニオンですが、そこでも彼らは“ユダヤ人の会堂に入って話したが、その結果、大勢のユダヤ人やギリシャ人が信仰に入った”(使.14:1)と書かれています。

後ほどパウロは彼を審問する裁判官の前でも、靈感による彼の確かな将来の望みをその栄光的論証で話しています。“彼が正義や節制や来るべき裁きについて話すと、ベリクスは恐ろしくなりました”(使.24:25)。

私たちの改宗はこのような論証の過程に根拠しているから、私たちの望みや教理に関しては必ず論証的聖書知識を持たなければならないのです。

“あなたがたの抱いている望みについて説明を要求するひとには、いつでも弁明出来るように備えていなさい”(ペテ前.3:15)。

神の霊 65

ある個人の経験を落ちついた声で話すことは福音の望みに対して論理的に話しているとは言えないのです。多くの‘福音的クリスチャンたち’によって福音伝道方法としている‘個人の証し’によることは彼らの“望み”に対する“論理的答え”の不足を表しているのです。そのようなクリスチャンたちはすべての単語を動員して‘主が自分の生活に成して下さったことを伝えよう’とするのであります。そのような個人の逸話はパウロの言葉とは全く対照的です。“私たちは、自分自身を述べ伝えるのではない”(コリ后.4:5)。「イエスと個人が関係を持つこと’よりはすべての人が関係を持つように伝えなければならないのです。

聖書の論理的講論による伝道方法によって改宗された人たちは彼らの生涯を通して神との多くの関係において模範になるのです。いつも私たちの模範になるのは彼らの管理問題を理性的に考えたすえ解決している初期クリスチャンたちです(使.6:3)。新約聖書の手紙もまたその読者たちが聖書の論理的伝えによって受け入れることを教えています。モーセの律法の下で大祭司長であった人たちも、その“理性によって”教えていたように、私たちもキリストの仕業を理性的に理解すべきです(ヘブ.5:3)。パウロは神に対するキリストの愛を話し、それに応じて、私たち自身を神に捧げるのが“霊的(理性的)礼拝である”(ロマ.12:1)と勧告しました。その“理性”と言う言葉はギリシャ語の‘Logos’から由来する言葉で、神の言葉である聖書には“言葉”と翻訳されています。聖書の言葉による私たちの“論理的”応答は神の言葉から由来するのです。

このすべてに照らして見ると、神の霊は神ではないのであるが、しかし神である一人の人格者であると言う主張は明白に非論理的です。そしてまたその反論に答えるにそれは神秘であるから、論理的に当てはまらないと言うのは聖書を受け入れないのを示すのです。もし私たちが聖書から論理的結論を引き出すことが出来ないなら、その聖書学習はむなしく、また聖書学習の必要もないのです。それはただ陳腐な、あるいは魅惑の一つの文学書物に過ぎないでしょう。多くのクリスチャンの本棚にある聖書がそのように取り扱われているのです。

また神の霊が一人の人格者であると信じている者たちの中にも、それに対する聖書の論拠を与えようとする者があります。彼らが引用する聖句は普通神の霊を擬人化して人格者と話すようにした、“助け主”(ヨハ.14章-16章)とか、また霊が“嘆く”と言う言葉がある句節です。

学習4.3には人の“霊”が憤慨し(使.17:16)、あるいは騒ぎ(創.41:8)、喜びあふれた(ルカ.10:21)と確証しています。彼の“霊”は彼の要素、彼の心や目的であって、それらは彼の行動によって起こるのです。従って別の人として話すのであって、勿論、これは実際の人ではありません。神の霊もまたそのように話すことが出来るのです。

聖書には、知恵を婦人として話したように(箴.9:1)、抽象的なことを擬人化した言葉を度々使用しています。これは知恵ある人がその知恵を実行するように現わしています。その知恵は人の心を離れて別に存在するものではないが、擬人化して使用しました(間違った解釈5の“擬人法の原則”を見なさい)。

間違った解釈5: 擬人法の原則

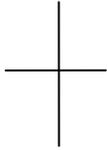
聖書ではくり返し悪魔を人のように言及されているために、人たちはそれから混同を起こして、悪魔に関して使用している擬人法の説明を聞き入れようとしないのです。これは擬人化している知恵、富、罪、教会と同じく、存在していないものを一つ的人格体と擬人化して使用している聖書文章の特徴です。その悪魔は幻想的憶説が仕込まれています。次の例はその点を説明するでしょう。

知恵の擬人化

“知恵を求めて得る人、悟りを得る人はさいわいである。知恵によって得るものは、銀によって得るものにまさり、その利益は精金よりもよいからである。知恵は宝石よりも貴く、あなたの望む何物も、これと比べるに足りない。その右の手には長寿があり、左の手には富と、誉れがある” (箴.3:13-16)。

“**知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた**” (箴言.9:1)。

この句節と、その章の残りの句節には知恵を一人の女に擬人化して使用していません。しかし誰でも知恵が実際町をうろつき回っている女とは考えません。これは聖書を読む者皆が記憶せねばならない聖書文章の特徴であります。



富の擬人化

“誰も、二人の主人に仕えることは出来ない。一方を憎んで他方を愛するか、一方を親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなた方は、神と富とに仕えることは出来ない” (マタ.6:24)。

ここでは富を主人のようにしています。多くの人が熱心に富を儲けようとするので富がこのように彼らの主人になっています。イエスは私たちに金儲けと神を拝むのを同時にすることが出来ないと話しています。この教えは単純でありますがとても効果的です。誰も富をマンモンと呼ぶ人であると思いません。

罪の擬人化

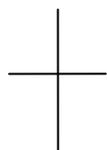
“すべて罪を犯す者は罪の奴隷である” (ヨハ.8:34)。“罪が死によって支配した” (ロマ.5:21)。“あなたがたは知らないのか。あなたがた自身が、誰かの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であって、死に至る罪の僕ともなり、或は、義に至る従順の僕ともなる” (ロマ6:16)。

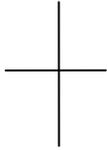
富の場合のように、罪を主人として、罪を犯す者たちは罪に奉仕する僕になると言うことです。この句節を正しく理解出来ないで、パウロが罪を一人の人と教えてたとすれば大間違いです。

霊の擬人化

“けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語る” (ヨハ.16:13)。

イエスはここで彼の弟子たちに彼らが聖霊の力を受けることを話していますが、これは使2:3-4に書かれているように、ペンテコストの日に成就されました。そこには“舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、一人一人の上に留まった。すると





、一同は聖霊に満たされた”と話されています。それは彼らの権威が神から来たのを立証している素晴らしい業を行うべき力でした。聖霊は一人の人格者でなく、神の力でした。しかしイエスはそれを話す時人格者に使用する“彼”と言う代名詞を使用しました。

死の擬人化

“そして見ていると、見よ、青白い馬が現われ、乗っている者の名は「死」と言い、これに陰府が従っていた” (啓.6:8)。

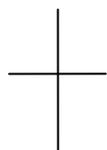
イスラエルの擬人化

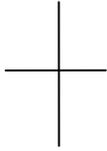
“おとめイスラエルよ、再び、私はあなたを固く建てる。再び、あなたは太鼓をかかえ、楽を奏する人々と共に踊り出る” (エレ.31:4)。“私はエブライムの嘆くのを確かに聞いた。「あなたは私を懲らしめ、私は馴らされていない子牛のように懲らしめを受けました。どうか私を立ち帰らせて下さい。あなたは主、私の神です” (エレ.31:18)。

この句節の文脈はその予言者が文字通りのおとめ、あるいは一人の人であるエブライムに話していないのではなく、イスラエルの国に話しているのが明らかに現れています。この実例が事物を擬人化したのであって、日本語にも使用されています。

キリストにある信者を擬人化

“遂には、私たちは皆、神の子にたいする信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストも満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです” (エペ.4:13)。“体は一つです” (エペ.4:4)。“あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその肢体です。” (コリ前.12:27)。“キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主である” (エペ.5:23)。“また、御子はその体である教会の頭です。...





神の霊 69

今や私は、あなたがたのために苦しむ事を喜びとし、キリストの体である教会のために、キリストの苦しみの欠けたところを身を持って満たしています” (コロ.1:18、24)。“私はあなた方を純潔な処女として一人の夫と婚約させた、つまりキリストに捧げたからです” (コリ后.11:2)。“小羊の婚礼の日が来て、花嫁は用意を整えた” (啓.19:7)。

これらの句節は皆キリストの内にある信者である人たちの共同体、あるいは“教会”と呼ばれるものに関して話しているのが明らかです。しかしこれは現在の伝統的教会と混同してはいけません。そのキリストの内にある真の信者たちによる教会は遠く前になくなってしまいました。

その真の信者たちとは聖書が教えている真の教理を保ち信ずる人たちであって、彼らを“純潔な処女”と引用し、彼らが必ず守らなければならない純潔を指摘しています。そして彼らによって構成された共同体は多くの機能を持つ一つの人間の“体”に比喻し、したがってその真の教会は多くの責任を持ち、またいろいろな機能を成し遂げると言われたのです。その教会を一つの“体”と話した時、正しく翻訳されていない言葉から、悪魔とサタンをグロテスクな怪物とかあるいは墮落した天使と考え、またもし過去の偽りの教会から由来した間違った教理を持たないなら、誰でもそれを一人の個人と間違わないのです。

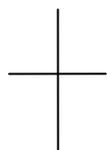
間違った解釈6:カルビン主義

約300年前の頃、カルビンと言う人は人間には神の予定があるので、人間の自由意志の決定はないと教えました。従って人間が救われるか拒絶されるかは既に予定されたと言うことです。この観念が現代キリスト教の教理に現れています。

もし私たちがどうせ救われるとすれば、聖書を学びキリスト教を信ずる努力が必要でないのです。

人間の意志とは別に悪魔と言うものが罪を犯せ、そして問題を起こすと言うのです。この偽りの観念は学習6で討議することになります。

私たちが旅行する時、安全を保つために願う祈りと、神の気かかりを願う祈りが必要ないのです。救いが空港の待ち合い室でフライトを



待っているように、時間が来ればそのフライトは離陸してしまうのです。

福音教会の大分が聖霊の働きなしにはキリストを信じ、聖書を理解することが出来ないと言うのです。

このような人間の哲学を拒絶すべき論拠が聖書にはとても多くあります。

それは人間が神に順従せねばならない概念全体を無意味にしています。聖書は私たちが神の掟を守ることによって彼に喜びを与えることが出来ると継続的に話しています。もしも神が私たちが彼に強制的に順従させるならば、この掟の概念は意義がないのです。キリストは“彼に従順であるすべての人に対して、永遠の命を与える”(ヘブ.5:9)のです。

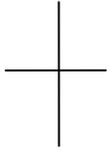
ヘブ.11章は私たちの生活に神の介入と究極的救いの付与は私たちの信仰と関係があると示しています。もし人間のすべてが予定されているとすれば、困難の時に神に救いを願っていた祈りに関する多くの聖書の事例は何の意味がないのです。同様にキリストにある私たちの信仰の結果である救いの考えも意味がないのです。

バプテスマは救いの前提条件です(マコ.16:16; ヨハ.3:3-5)。カルビン主義はこれを否定するのです。しかし救いはその抽象的予定論によって得るのではなく、キリストの使役によって得られるになっています(テモ后.1:10)。私たちはバプテスマを受けることによって、私たち自身を彼に連合させるのを選ばねばならないのです。聖書はバプテスマによって、罪に従順なる生活から義に従順なる生活に変えるのと話しています(ロマ.6:15-17)。

“あなたがた自身が、誰かの僕になって服従するなら、あなたがたは自分の服従するその者の僕であるのです”。この服従すると言う言葉は自由意志を示すのであって、条件のない予定とは全くで反対であります。“あなたがたは罪の僕であったが、伝えられた教理の本体に心から服従した”(ロマ.6:17)と話しています。

もし私たちの救いが究極的に予定しているとすれば、神は私たちにそれを話す必要がなく、また伝道も必要がないでしょう。しかし聖書は伝道することを命令し、その事例が記録されたことは、人が救いに至るのがその伝道を通してなることをと示しているのです。“この救いの言葉は私たちに送られたのである”(使.13:26)。

私たちは私たちの行為によって裁かれるのです(啓.22:12)。もし救いに関する自由意志の行動が重要でなければ、そのように話す必要がないでしょう。パウロはユ



神の霊 71

ダヤ人たちが神の言葉を退けたので、彼ら自身が永遠の命にふさわしからぬ者にしてしまったと話しました(使.13:46)。彼らは彼ら自身が裁いたのです。神はそれを予防しませんでした。もし神がある人の救いは予定し、他の人は予定してないとすれば、神がある人は罪人になし、ある人は義人に成すと言うことになります。アダムの罪のために、“すべての人が罪を犯したので、死が全人類に入り込んだ”(ロマ.5:12)と話しています。これは、神がアダムが罪を犯す前に彼を罪人になるようにしたためではなく、罪に対する刑罰として、人間が死ぬ理由であります(ロマ.6:23)。

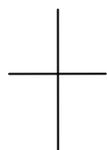
コリ前.10章と他の多くの句節が、信者たちの警告として、過去に一度神と関係を持っていた者たちが墮落している事例を上げています。“恵みから落ちられる”(ガラ.5:4)可能性がある事実は、‘一度救われれば、永遠に救われる’と言うカルビン主義の救いの制度はいられないことを意味するのです。ただ真の教理を継続的に持っている者だけ救われることが出来るのです(テモ前.4:16)。

イエスは神の言葉を理解することは人間の自由意志によることであると明らかに教えています。“読者よ、悟れ”(マタ.24:15)。このように私たち自身が理解出来るのは何か強要によることではありません。これに匹敵する言葉、“耳のある者は聞きなさい”、あるいは理解せよとイエスは度々話しました。したがって耳のある者は聞きなさいということは神の言葉を読んでみなさいということです。神の霊はイエスの靈感によって話した彼の言葉は“霊である”(ヨハ.6:63)と言われた彼の言葉を通して良く現れました。神の霊は、人をその言葉に服従させるために働いていますから、彼の言葉とは別に働くことが出来ないのです。

福音で発見される命の水の言葉に応じて、“命の水が欲しい者は、値なしに飲むことが”(啓.22:17)出来るのです。人間の救いは神の予定にかかわらずなく、人間の自由意志で決定されるのです。これと同様に、主の名にあづかるバプテスマを通して、“主の名を呼び求める者は、みな救われるであろう”(使.2:21)と定められています。

間違った解釈7: “聖霊の賜物を受けよ”

ペテロはそのペンテコストの日が集まった大群集に、悔い改め、主の御名によってバプテスマを受けて、聖霊の賜物を受けなさいと言う訴えで彼の説教を終わりました。これはその文脈上、使徒たちがその群集に話している異言等、その賜物が神の



霊の賜物であることを話しているのです。そのように説明しながら、彼らは奇跡的賜物を与えると言ったヨエルの予言が成就されたと告げています(使.2:16-20)。従ってそれはペテロが彼の話しを聞いているユダヤ人の群集に霊の奇跡的賜物を約束しているのと考えなければなりません。その群集は異邦人でなく、ユダヤ人で構成されていました(使.2:5)。その賜物を与えると言うヨエルの予言は主にユダヤ人に関したことでした。このようにペテロは彼らに強調しました。“この約束は、...あなたがたとあなたがたの子らである”(使.2:39)と、ことによるとヨエルの予言はそのユダヤ人たちと彼らの子らに霊を与えることででした(使.2:17、ヨエ.2:28-32比較)。この奇跡的賜物の約束は、当時ペテロの話聞いている人たちと、彼らの子ら、一ただその二つの世代に限るのでした。

私たちは1世紀の末(ペテロが演説した70年後)その賜物が撤回したのを示しました。これはまた歴史の記録が確認しています。その二つの世代の間その霊の賜物を異邦人が得ていました。“遠くにいるすべての人にも”(使.2:39)。エペ.2:14-17に“遠くにいる者たち”と記録されたのを注目しなさい。

しかし、使.2章に起こったことはヨエルの予言のただ一部の成就であると信ずべき相当な理由があります。その主な成就是イスラエルが敵軍に侵攻されて破壊される時、そしてイスラエルが悔い改め神と親しい交わりで住む時起こるでしょう(ヨエ.2:20)。“その後、私はすべての人にわが霊を注ぐ”(ヨエ.2:28)。その条件が成就するまで、使.2章に描写された、ペンテコストの日見られた極少しの部分的成就以外にヨエルの予言は成就したことがないのです。

そのバプテスマを受けた後霊の賜物を受けると言った約束は、今も効果がありません。霊は一つですが、いろいろな方法で現れることが出来るのです(コリ前.12:4-7; エペ.4:4)。1世紀にはその霊は奇跡的賜物を通して現れましたが、今はそれらが撤回して、“その霊の賜物の約束は”他の方法で現れました。“聖霊の賜物”は‘聖霊によって与えられた賜物’を意味することで、また聖霊が話している神の霊感の言葉が約束した贖罪と救いの賜物があります。この“言葉”を使用した多くの実例があります。“神に関する知識”(コロ.1:10)は神が持っている知識、あるいは神に対する知識を意味します。“神の愛”と“キリストの愛”(ヨハ.1.4:9、3:17; コリ后.5:14)は神とイエスが私たちに持っている愛、あるいは私たちが彼らに持っている愛を意味することが出来るのです。“神の言葉”は神に対する言葉、あるいは神から来た言葉を意味することが出来るのです。従って聖霊の賜物は聖霊が可能な

こととそれが話すこと、すなわち聖霊の力が構成する賜物を意味する事が出来るのです。

霊の賜物：贖罪

ロマ.5:16とロマ.6:23には、使.2:38にある霊の“賜物”と比較出来る“その賜物”が救いと描写しています。実に使.2:39は救いに関するヨエ.2:32を引用したのであって、これはその霊の賜物でありました。“遠くにいる者たち”に約束した賜物であると言うペテロの話はイザ.57:19をほのめかしているのです。“遠くにいる者たちに平和(贖罪による神との和解)があれ、平和があれ”。エペ.2:8もまたその賜物を救いとして描写しながら、“一つの霊(この賜物)に結ばれて、御父に近づくことができる”(エペ.2:18)と話しています。これはなおエペ.2:13-17がまたイザ.57:19をほのめかしている事実を確認させるのです。“しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。実に、キリストは私たちの平和であります。...

キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、...

平和の福音を告げ知らせました”。イザ.30:1には神の霊の賜物によるのでなく彼ら自身の方法で救いを求めているユダヤ人たちを呪詛しています。“わが霊によってではない。罪に罪を加えるためである”。イザ.44:3にはまた同様な言葉でイスラエルの末の日の贖罪を描写しています。“私は、固い地(霊的に不妊の地)に水を注ぎ、干からびた地に流れを注ぎ、わが霊をあなたの子らに注ぎ、わが恵みをあなたの子孫に与えるからである”。アブラハムの子孫の祝福はキリストを通して与えられる彼らの贖罪です(使.3:25、26)。それはここでユダヤに注ぐその霊に匹敵するのです。これは明らかにヨエ.2章と使.2章の言葉です。ガラ.3:4にはこれを変えて多くの言葉で現わしています。“それは、アブラハムの受けた祝福が(贖罪)、イエス・キリストにあって異邦人に及ぶためであり、約束された御霊を、私たちが信仰によって受けるためである”。コリ前.6:11には“神の霊によって”私たちの罪が洗われ、清められたと話しています。ローマ書には霊の賜物(恵み)と贖罪に導く容赦が関連しているのを示しながら、“恵み...贖罪...霊”を受けるのが(1:5; 5:11;

8:15)平行しています。新約聖書は特別にその読者層が主にユダヤ人であったこととその書信らが持つ影響の観点から考えて見ると、旧約聖書の言葉と概念の上に建てられたと言うのは誇張した表現ではないのです。モーセの五経時代とヨシュアの時

代神は重ねて彼の民に地を与えると約束しました。“あなたの神、主が与えて獲させられる地”と言う句節が通常使用されています。しかし新しい契約の下ではその地に対応するのが救いです。従って今はそれが予期される神の賜物、罪の容赦と連合している贖罪です。

ガラ.3:2、5と3:8-

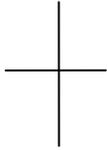
11を比較して見れば、霊を受けるのが救いと贖罪のアブラハムの祝福を受けるのに匹敵するのを見出します。“約束された霊”(ガラ.3:14)はその文脈上アブラハムにして下さった約束を話しているのです。

ペテロはユダヤ人たちに彼らとその賜物を受ける前に悔い改めることを要求しました。これはまた個人の祈りでありました。霊の賜物は祈りがかなえられたのを描写する一つの方法と信じているようです。祈りで“よいものを下さる”(マタ.7:11)ことは聖霊の賜物を下さることと(ルカ.11:13)同じことです。ピリ.1:19の“あなたがたの祈り”が“イエス・キリストの霊の助け”に匹敵しています。それと同じく、ヨハ.1:3:24は私たちがその掟に服従の結果として霊が与えられると話しています。またその22節にはその掟に服従は私たちの祈りがかなえられると話しています。このように私たちの祈りが聞き入れて下さることを確信すること(ヨハ.1:5:14)と霊を持つことが(ヨハ.1:3:21、24; 4:13)同様な表現であります。

“恵み”と度々翻訳されたギリシャ語‘charis’は霊の賜物に関連して度々使用されています。

“確かに、主イエス・キリストの恵み(賜物)によって、私たちは救われるのだと信じる”(使.15:11)。またその“恵み”と言う言葉は度々かなえられた祈りと連合しています(出.33:12; 民.32:5; 詩.84:11; コリ后.12:9; ヘブ.4:16; ヤコ.4:6)。ゼカ.12:10には末の日ユダヤ人たちに“恵みと祈りの霊”の注ぎについて話しています。これは私たちが示唆したこと、祈りが贖罪の霊の賜物をもたらし、そしてその祈りのかなえの霊の与えは1世記のユダヤ人たちの悔い改めで例証されたことと、また末の日にあることを要約したのです。同じ文脈でパウロは悔い改めと贖罪に対する“神の賜物と召し”(ロマ.11:29)に関して話しています。

助け主



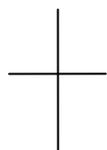
神の霊 75

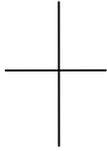
ヨハ.14-16章にあるその助け主の約束も同じく取り扱うべきです。これは主に弟子たちに与えられた奇跡的力に関して話しているのであって、まず彼らに約束していますが、私たちにもその奇跡的なものでなく、他のもので適用出来るのです。その賜物らは“私(イエス)が話したことをことごとく一弟子たちに思い起こさせて下さる”(ヨハ.14:26)ことで、それはだぶん福音書を書くことが出来るようにしたと思います。その“思い起こさせる”と言う言葉それ自体が弟子たちに約束した助け主を奇跡的要素だけに制限しています。彼らはイエスが使役する間彼と一緒に生きた者たちでした。彼らはその助け主の助けでイエスが話した言葉を思い起こさせることが出来たのでした。その約束の“助け主”はまた完成した聖書の力にも適用されるのです。したがって私たちはこれと他の霊の約束が1世紀には奇跡的形で成就されたと結論出来すが、しかし今は聖書に書かれている神の言葉を通して霊が現れたのを適用しています。

勿論過去にも神の霊が言葉によって啓示されたのが事実ですが、しかしそれは今私たちが持っている完全な言葉と比べてみると極めて部分的啓示でした(コリ前.13:9-13)。新約聖書の完成でその賜物が撤収した後には神から来た他のどんな啓示も書かれていないのです。モルモン聖典とか他の類似した著作品などを神の啓示であると主張するのは完成されたその聖書が神の完全な啓示でないと主張することになります。今日はその霊の賜物の撤収が聖書の完全性を立証しています。もし私たちが聖書にある神の啓示を完全に使用しようとするれば、旧新約聖書すべての部分を使用すべきです。その言葉に現れた神の完全を全部使用するによって私たちは神の人になる過程に出発するのです。

間違った解釈8: “信じる者にはこのような徴がある”

この句節から、誰でも信ずる者にはその奇跡的賜物が与えられると論議されるようになります。しかし、“彼らは手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けない、病人に手を置けば治る”(マコ.16:18)と話したことも立証しなければなりません。これは、理論上信者が十分な信仰があったなら起こると言う約束ではないのでした。これらは信者たちによって決定的なされると言うた確かな約束でした。この偉大な奇跡が明らかに施行出来ないなら、この句節の約束は現在適用できないのです。あなたはパウロが噛まれることなしに毒蛇を取り扱ったのを記憶しているでしょう(使.28:3-7)。その結果は彼の伝播が神から来たのを確認させました。

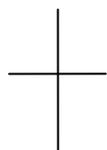




過去100年の間、その霊を所有していると主張したカリスマ的クリスチャンたちのすべてがそのように施行する力の実際的証拠を持っていません。すべての信者がそのような偉大なる奇跡をなすことが出来ないなら、この約束は今日適用できないのです。これは既に私たちが霊に対する聖書の教えを調べて引き出し結論に任せます。1世紀の初期キリスト教信者たちがこの奇跡的賜物を所有していましたが、しかし新約聖書が完成した後彼らはその所有が停止されました。

マルコ福音書16章の最後の句節に、信者たちに“伴う”その奇跡は福音に関して話した言葉を確認させる特別な目的のために遣われたものでした。“信じる者には、こようなしるしが伴う。...

彼らは出て行って、至る所で福音を述べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言葉に伴うしるしを持って、その確かなことをお示しになった” (マコ.16:16, 20)。しかし、今私たちが新約聖書に持っている通り、一度話された言葉が完全に書かれて後には、信ずる者たちに伴った奇跡的しるしが必要なくなりました。



学習2: 問題と解答

1. 次の何が‘霊’という言葉の意味ですか？

- a) 力
- b) 聖なるもの
- c) 息
- d) 塵

2. 聖霊は何ですか？

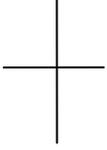
- a) 一人の人
- b) 力
- c) 神の力
- d) 三位一体の神の一人

3. 聖書はなにが書かれましたか？

- a) 人たちが彼らの考えを書いた
- b) 人たちが神に関する考えを書いた
- c) 神の霊による靈感を書いた
- d) 一部は靈感、ほかは靈感でないもを書いた

4. 次のなにが霊の賜物を与えた理由ですか？

- a) 福音の口語的伝播を支持するため
- b) 初期教会の発展のため



78

神の霊

- c) 人たちを義にするため
- d) 使徒たちを彼らの困難から救うため

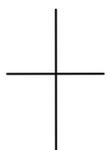
5. 神の真理は何から習えますか？

- a) 聖書と人間の考えから
- b) 聖書とは別に、聖霊が直接人に告げる
- c) ただ聖書から
- d) キリスト教の牧師やまた教師から

6. 1世紀の霊の賜物の名をあげなさい。

7. それらはいつ撤収されたですか？今もそれを所有出来ますか？

8. 今日聖霊は信者の生活にいかにか働きますか？



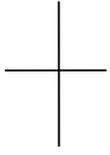
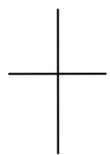
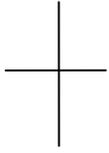


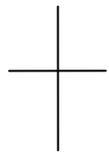
写真 3





学習 3

神の約束



3.1 神の約束:序論

今までの学習では神はどういう方であり、また彼はいかに働いているのかに関して広く考えて見ました。そうするによって、私たちはこれらのことに対する多くの間違った考えを正しくすることが出来ました。これからは神が“彼の掟を守り”(ヨハ.14:15)、“彼を愛する人々に約束された”(ヤコ.1:12; 2:5)ことは何であるかを調べて見ようと思います。

旧約聖書にある神の約束は本当にクリスチャンの望みとなることであります。パウロは、彼の命がかかっている裁判で、“今私は、神が私たちの先祖に約束なされた望みを抱いているために、裁判を受けているのであります。...王よ、この望みのために、私はユダヤ人から訴えられています”(使.26:6,7)と、彼がこの世のすべてを失ったのは、その将来の補償のためであることを話しました。彼は生涯の殆どを福音伝播のために消費しました。その福音は、“神が先祖たちに対してなされた約束を、...神は、イエスを蘇らせるによって私たち子孫にこの約束を、お果たしになった”(使.13:32,33)とすることでした。パウロはこの約束を信じ、裁きと神の国を建てるイエスの再臨に関する知識を持っている者は(使.24:25; 28:20,31)、皆死者の中から復活する望みが与えられていると説明しました(使.26:6-8; 23:8と比較)。

これは旧約聖書が永遠の命に関して話しているのではなく、ただとりとめのないイスラエルの伝説であると言う主張を沈めるのです。神は今から2000年前イエスを通して人間に永遠の命を与えることを突然決定したのではないのです。この目的は最初から彼の心にあったのでした。

“偽りのない神が永遠の昔に約束された永遠の命の望みに基くのである。神は、定められた時に及んで、御言葉の宣教によって明らかにされた”(テト.1:2,3)。

“この生命は、父と共にいましたが、今や私たちに現れたものである”(ヨハ.1.1:2)。

神が彼の民に永遠の命を与える目的が始めから彼と共にいたと考えると、旧約聖書に書かれている人たちを取り扱う4000年の間彼はそれに対して黙ってはいなかったでしょう。実に、旧約聖書は神が彼の民のために備えておいたこの望みを詳細に話した予言と約束に満ちているのです。だからユダヤ人たちの先祖たちになした神の約束を理解するのが私たちの救いにとても重要なことです。そう言うことで、パウロはエペソにある信者たちに彼らがこれを分かる前には、“その頃、(彼らが以前の異教の信仰で神を知り、ある望みがあると思っていたけれども)、彼らはキリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなく、この世の中で望みもなく神もない者であった”(エペ.2:12)ことを思い起こさせました。旧約聖書の約束を分らないと言うのはとても重大な問題であって、実際、“この世の中で望みがなく、神もない者”であります。パウロがクリスチャンの望みは“ユダヤ人たちの先祖たちになした神の約束である”(使.26:6)と定義しているのを記憶しておきなさい。

今日、クリスチャンの教会が必ず強調しなければならない旧約聖書のこの部分をなほざりにするのはとても嘆かわしい事実です。‘キリスト教’が旧約聖書からただ幾つかの句節だけを使用する傾向の、新約聖書に基礎を置く宗教に退化してしまいました。イエスは明らかにそれを正すことを強調しています。

“もしモーセと予言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう”(ルカ.16:31)。

肉の心を持っている人間はイエスの復活を信ずることで充分であると論ずるでしょう(ルカ.16:30と比較)。しかしイエスは確かな旧約聖書の知識がなければ、それは聖書を全部知っていると言うことが出来ないと話しました。

その十字架処刑の後弟子たちの信仰がくづれたのは旧約聖書に対する彼らの注意の欠乏であるとイスがその原因を指摘しました。

“そこでイエスが言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く予言者たちの言ったことすべてを信じない者たちよ。キリストは必ず、こういう苦しみを受けて、その栄光に入るはずではなかったのか」。こう言って、モーセやすべての予言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自分について書かれていることを説きあかされた”(ルカ.24:25-27)。

イエスは旧約聖書**全体**が彼に関して話しているのだと強調したことに注目しなさい。これは弟子たちが旧約聖書の言葉を読んだことがないとか聞いたことがないと言うのではなく、彼らがそれを正しく理解していなかったから、それを本当に信じていなかったと言うことでした。それで神の言葉をただ読むのではなく、それを正しく理解するのが信仰を発展させると言うことです。ユダヤ人たちは熱狂的に旧約聖書を読んでいたけれども(使.15:21)、彼らはイエスに関する事と彼の福音に関して理解出来なかったから、それを本当に信ずることが出来ないのです。

“もし、あなた方がモーセを信じたならば、私も信じたであろう。モーセは、私について書いていたのである。しかし、モーセの書いたものを信じないならば、どうして私の言葉を信じるであろうか”(ヨハ.5:46,47)。

彼らは聖書から救いを得ると考えて、聖書を多く読んでいたけれども、イエスに対するメッセージは分からなかったでした。イエスは彼らにその点を告げました。

“あなた方は、聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、私についてあかしをするものである”(ヨハ.5:39、使.17:11と比較)。

従って多くの人が旧約聖書の事件と教えに関してそれ相当の知識を持っていますが、それは彼らが偶然に得た知識であります。キリストと神の国の福音に関する素晴らしいメッセージは会得していないのです。この学習の目的は旧約聖書にある主な約束の意味を論証するによって、あなたがたをその位置から連れ出すことであるのです。

エデンの園での約束

ノアとの約束

アブラハムと約束

ダビテとの約束

それらに関することはモーセによって書かれた彼の五経(創世記から申命記までの五つの本)と、旧約聖書の予言者たちが書いた他の聖書にあるのです。それは皆キリスト教の福音の要素であって、この学習で学ぶのです。パウロはこの福音の教えを“予言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません

。つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、この民にも異邦人にも光を語り告げることになると宣べ伝えました”(使.26:22, 23)と説明しました。また彼の生涯の後ほど、彼が歌った歌もやはりそのことでした。“パウロは、...

神の国ついて力強く証しし、モーセの律法や予言者の書を引用して、イエスについて説得に努めました”(使.28:23)。

最高のクリスチャンであるパウロの望みはまた私たちの望みでなければならぬのです。それは彼の暗い人生のトンネルの末まで導いた栄光的な光でありました。すべてのクリスチャンがそうでなければなりません。この動機に刺激されて、私たちも熱心に“聖書を調べて見ようではないでしょうか”。

3.2 エデンの園での約束

人間の墮落に関する悲しい物語が創世記の3章に書かれています。その蛇が神の言葉を誤って引用しエバを神の掟に従わないように誘惑したために人間は呪われました。その男と女もその不順従によって刑罰を受けました。しかし、神がその蛇に話した暗い闇の時にも彼らには一筋の望みが照らすようになりました。

“私は恨みを置く、お前と女のあいだに、お前のすえと女のすえの間に、彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかどを砕くであろう”(創.3:15)。

この句節はとても注目すべき言葉です。その言葉の中に含まれているいろいろな事の正確な意味をはっきり分かっていなければならないのです。その“すえ”とは子孫あるいは子を意味しますが、しかしそれはまた特定の“子孫”と連合している人たちにも言及しているのです。私たちは後に、アブラハムの子孫がイエスであるが(ガラ.3:16)、もし私たちがバプテスマ受け、イエスの“内に”おるなら、私たちもまたこの子孫になること(ガラ.3:27-29)を分かるようになります。この言葉“蛇の子孫”はまたその蛇の考えを持っている者たちを指示しています(ペテ前1:23)。それで子孫は彼らの父の性格を持っていることになっています。

その蛇の子孫はその蛇の性質を持っていないなければならないのです。それは、

神の言葉を歪曲すること

嘘を話し

他の人に罪を犯すようにすること

これらをなす者は実際の人ではなく、私たちの内にある肉性であると学習6で説明しています。

“私たち内にある古き人” (ロマ.6:6)

“生まれながらの人” (コリ前.2:14)

“情欲に迷って滅び行く古き人” (エペ.4:22)

“嘘を言っている古き人” (コロ.3:9)

私たちの内にあるこの“罪の人”は聖書では“悪魔”、蛇の子孫と言われていません。

その女の子孫は一人の特定な人であって、“お前は彼のかかどを砕く” (創.3:15) とその蛇に話しましたが、しかし“彼はお前(その蛇)の頭を砕く”と、罪を永遠に抹殺する事を話しました。頭に脳があるので、蛇の頭を打つのは蛇を殺すことです。その女の子孫に値する唯一の人は主イエスであります。

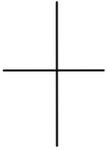
イエス.キリスト、“彼は十字架によって(罪の力である、ロマ.6:23)死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現わしてくださいました” (テモ后.1:10)。

“罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪(その蛇の子孫、すなわち聖書の悪魔)を罪として処断されたのです” (ロマ.8:3)。

イエスは“罪を除くために現れました” (ヨハ 1.3:5)。

“その名をイエスとなづけなさい。彼は、自分の民を罪から救うからです” (マタ.1:21)。

イエスは彼の父が神であったけれども、事実はマリヤの子として“女から生まれました” (ガラ.4:4)。こ言う意味で、彼は普通の人とは別に神によって生まれたけれども、やはりその女の子孫でした。この女の子孫はその蛇の子孫である罪によって一時的に傷つけられるのでした。“お前は彼のかかどを砕くであろう” (創.3:15)。蛇の頭を打って永久に傷つけるのに比べて、かかどが蛇に噛まれるた状態では一時

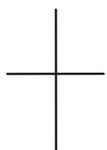


的の傷つかれです。聖書には多くの比喩的表現がありますが、これもその一つです。

蛇の子孫の罪に対する刑罰は主として十字架上のキリストの犠牲を通して果されました。罪に対するキリストの勝利を話すに引用した上記の句節が過去時制になっているのに注目しなさい。従ってイエスが被った一時的傷つけは彼の三日間の死を話しているのです。彼の復活で、彼が罪に与えた致命的打撃に比べて、彼の死はただ一時的傷つけであった事を立証しているのです。これは聖書以外の歴史の記録にあるのですが、彼らが罪囚を十字架にくぎつけるに彼らのかかどでしたと示しているのはとても関心を引くことです。そのようにイエスは彼の死によって“かかどが傷つかれました”。キリストの十字架の死が神によって‘傷つけられた’とイザ.53:4,5は描写しています。これはキリストがその蛇の子孫によって傷つけられる創.3:15の予言を明らかにほめかしているのです。しかし、それは“彼を砕くことは主のみ旨である”(イザ.53:10)と描写されているように、彼の子を傷つけた罪の力を支配するによって、究極的にはキリストが対抗した罪を通して神が働いたのでした。そのように神は彼の子らの各々の罪の経験を通して働いているのです。

今日の闘争

しかし読者の心にはこう言う質問が起こるでしょう。“イエスが罪と死を滅亡させたのに、なぜ今もそれらが存在しているのか”と。その答は十字架の死でイエスは彼自身にある罪の力を滅亡させたと言うことです。創.3:15の予言は元来イエスと罪の間の闘争に対することです。今これは彼の勝利に預かるように彼が招いているために、私たちも結局的に罪と死を克服することが出来るのを意味しています。勿論、彼の勝利に預かるように招かれていない人たち、あるいはそれを辞退している人たちは罪と死の経験をするでしょう。信者たちも罪と死の経験をするけれども、彼らはキリストに預かるバプテスマを受け(ガラ.3:27-29)、その女の子孫と連合しているのです。彼らは罪の赦しを受けることが出来るので、結局的には罪の結果から来る死から救われるのです。これを期待して、イエスは十字架の死で“死を滅ぼしました”(テモ后.1:10)。実際人たちが死に死にすることが無くなるその千年王国の末の時、死を絶対この地で目撃することが出来ない時、この地に対する神の目的が完成するまでは死亡があります。“なぜなら、彼はあらゆる敵をその足の下に置く時まで、



支配を続けることになっているからです。最後の敵として滅ぼされるのが、死であるのです” (コリ前.15:25、26)。

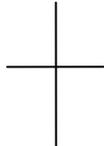
もし私たちが“キリストに預かるバプテスマを受けているなら” 創.3:15のイエスに対する約束は私たち自身のものになるのです。それらは聖書の面白い物語りばかりでなく、たちにして下さった予言であり、た約束であります。私たちは女の子孫であるので、やはりしばらくの間死が私たちに勝利するのを経験するでしょう。主が私たちの生涯の間この地に再臨しないならば、私たもやはりイエスのように、かどが傷つかれ、ぬでしょう。しかし私たちが本当にその女の子孫であれば、だ一時的に“傷つかれる”でしょう。水の中に浸るによって正しくキリストに預かるバプテスマを受けた者たちは、水から上がるのを象徴している(ロマ.6:3-5)主の死と復活に連合されているのです。

もし私たちが本当にその女の子孫であれば、たちの内に正義と不義の敵意、闘争が起こり、創.3:15の言葉を私たちの生活に反映するでしょう。偉大な使徒、パウロは彼の内で彼自身と罪との間に起こっている激しい闘争を描写しています(ロマ.7:14-25)。

キリストに預かるバプテスマを受けた後、私たちの内に起こる罪に対するこの闘争は一層増加して生涯の間それが続きます。罪の力が強いのでその闘争はとても難しいのです。しかし私たちが既にその闘争を戦い勝利を得ているキリストの内におるなら、それが難しくないので。信者たちがその女であると描写されているように(エペ.5:23-32)、私たちがその女の子孫になるとその女になるのに注目しなさい。

その女の子孫はイエスと彼の品性を現わす者たちであるように、その蛇の子孫は罪と罪性を現わす者たちであります。このような人たちは神の言葉を無視し、あるいは歪めて伝えています。その結果人たちを罪の恥じに入れ、神から遠ざかるように導いています。それがアダムとエバに起こったのでした。ユダヤ人たちが実際イエスを死に渡したこと、すなわちその女の子孫のかかどを傷つけるにより、彼らはその蛇の子孫になったのです。これはバプテスマ、ヨハネとイエスによって確認されました。

“ヨハネは、パリサイ人やサドカイ人が大勢バプテスマを受けようとして来たのを見て、彼らに言った、「まむしの子よ、迫って来ている神の怒りから、お前たちは逃れると、誰が教えたのか」”(マタ.3:7)。



“イエスは彼ら(パリサイ人たち)の思いを見抜いて言われた、「まむしの子らよ、あなたたちは悪い人間であるのに、どうして良いことが言えようか」”(マタ.12:15, 34)。

この世は、公義を叫ぶ宗教界でも、その蛇と同じ性格を持っています。ただキリストに預かるバプテスマを受けている者たちだけがその女の子孫と連合しているのです。その他の人たちは程度は違うけれども皆その蛇の子孫です。イエスが蛇の子孫であったその民を取り扱った方法は私たちが学ぶべき標本です。

彼は愛と真理の霊で彼らに伝えました。

彼らの方法や考えが彼自身に影響を与えないようにしました。

彼は生活において神の愛の品性を彼らに見せました。

しかし彼らはこれを皆憎みました。神に対する彼の従順の努力は彼らをしっとさせました。彼の家族と親しい友達さえ彼に垣をめぐらし、彼から去って行きました(ヨハ.7:5; マコ.3:21)。パウロも終始変わらずに彼に対抗する者たちからこれと同じことを経験し嘆きました。

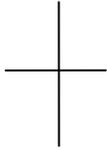
“私は、真理を語ったために、あなたがたの敵となったのですか”(ガラ.4:14-16)。

この真理はこの世で絶対歓迎されないのです。これを分かりこのように生きることはいつも問題が起り、たまには迫害も受けるのです。

“その当時、肉によって生まれた者が、「霊」(神の言葉ペテ前.1:23)によって生まれた者を迫害したように、今でも同様である”(カラ.4:29)。

もし私たちが本当にキリストと連合しているなら、私たちは必ず彼の受難を経験するでしょうが、それによって私たちはまた彼の栄光に預かることが出来るのです。パウロはもう一度これに対してうまく説明しています。

“次の言葉は確実である。もし私たちが、彼と共に死んだら、また彼と共に生きるのです。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるのであろう。だから、私は...いっさいのことを耐え忍ぶのである”(テモ后.2:10-12)。



“もし人々が私を迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。...
彼らは私の名のゆえに、あなたがたに対してすべてそれらのことをする
であろう” (ヨハ.15:20, 21)

私たちはイエスの名によってバプテスマを受けているから、彼の名によって迫害を受けるになっているのです(使.2:38; 8:16)。

それらの句節を読む時、このようなことが推論出来るでしょう。“もし女の子孫であるイエスと連合しているならば、むしろそんなことがあるはずが無いじゃないか”と。勿論、私たちは決して対抗するに耐えないことには会えないでしょう。それに反してキリストと完全に連合するためには決定的自分自身の犠牲が要求されているのであって、彼との私たちの連合には“今のこの時の苦しみは、やがて私たちに現れようとする栄光に比べると、言うに足りない”、このような栄光の補償の結果を生ずるのです。そして今でも、彼の犠牲を考えて見れば、私たちの生活から起こる精神的傷創に癒しを与え、神の力が溢れるようにする祈りを上げるようにします。

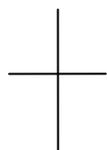
“神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、逃れる道も備えて下さるのである” (コリ前.10:13)。

“これらのことをあなたがたに話したのは、私にあっても平安を得るためである。あなたがたは、この世では悩みがある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っているのです” (ヨハ.16:33)。

“もし、神が私たちの味方であるなら、誰が私たちに敵しようか。ご自身の御子をさえ惜しまないで、私たち総ての者のために死に渡された方が、どうして、御子のみならず万物をも賜らないことがあろうか” (ロマ.8:31, 32)。

3.3 ノアとの約束

アダムとエバの時代後人類の歴史はずっと進行して、人たちはとても不道徳なよこしまな者になりました。神がノアと彼の家族(創.6:5-8)を除いては、すべての人を



滅ぼすことを決定するほどに、この世の文化と制度、また道徳は完全に墮落してしまいました。ノアは神がこの世を洪水によって滅亡される時の間、彼と彼の家族とまたすべての動物の代表が生きるように箱舟を造れと言いつけられました。ついでに言えば、聖書とは別に、この巨大な洪水が実際起こったことを信ずべき十分な科学的証拠があるのです。地(この遊星)を滅ぼすと神が言われたのは地球を破壊するのではなく、よこしまな人間がその上に設立した墮落した文化、社会制度であることに注目すべきです。“地の上に動くすべて肉なるものは、...皆滅びた”(創.7:21)。イエス(マタ.24:37)とペテロは(ペテ后.3:6-17)ノアの世に行われた裁きがキリストの再臨でも同じく行われると話しました。このように、キリストの再臨において刑罰されるべき現在の世は、ノア時のようにすべてが極不道徳のよこしまな社会になっているのです。

現在人間の総体的罪悪とこの恒星の自体的破滅への進行のために、クリスチャンの中にも、この地が滅ぼされると言う信仰が起こるようになりました。この考えは明らかに聖書の基本メッセージ、すなわち、神がこの恒星の事変に関して活動していることと、イエス・キリストが間もなくこの地に神の国を建てるためにお帰りになることを全く知っていない証拠です。もし人間がこの恒星を破壊するように黙っておれば、これらの約束は守ることが出来なんでしょう。神の国がこの地に建てられる多くの証拠が学習4.7と学習5で見つけられるのです。さしあたり、次の句節はこの地と太陽系が滅ぼされないことを十分に立証するでしょう。

“彼はとこしえに定められた地を建てた”(詩.78:69)。

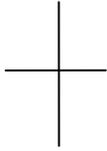
“世は去り、世は来たる。しかし地は永遠に変わらない”(伝.1:4)。

“日よ、月よ、...輝く星よ、主をたたえよ。...

主はこれらをとこしえに堅く定め、廃することの出来ない掟を定められた”(詩.148:

3-6)。

“水が海をおおっているように、主を知る知識が地に満ちるからである”。 “主の栄光は全地に満ちている”(イザ.11:9; 民.14:21)。もし神がこの地を滅ぼすと、この約束は成就されないのです。



“神はまた地をも造り成し、これを堅くし、むなしく創造されたのでなく、人の住む所として造られた” (イザ.45:18)。

創世記にもどって見れば神がこれを皆ノアに約束していました。ノアがその洪水によって新しく造られた世界で再び生き始める時、彼はまだ全世界が滅ぼされると恐れ、その洪水の後雨が始まる時はいつも、この考えが彼の心に起こったかも知らないのです。それで神がこのことは絶対に再び起こらないと彼に約束なされました。

“私はあなたがた及びあなたがたの後の子孫と契約を立てる。...私があなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起こらないであろう” (創.9:9-12)。

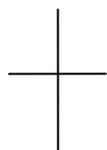
ノアに話したこの契約は雨が降った後に空に虹が上がるによって確認されました。

“私が雲を地の上に起こす時、虹は雲の中に現れる。私は、私とあなたがた...との契約を思い起こす、...
神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き者との間に立てた永遠の契約を思い起こすであろう。...
これが私と地にあるすべて肉なる者との間に、私が立てた契約のしるしである” (創.9:13-17)。

それは神が地に住む人間や動物の間になされた永久的契約であるためにこの地は人間と動物が永久に住むように保存せられなければなりません。これは神の国が天のどこかに建てるのではなく、この地に建てるのを自ら立証しているのです。

このようにノアとの約束は神の国の福音の基本であります。それは神の心使いがこの恒星に集中しているのと、彼がそれに対する永久的目的があるのを論証しているのです。神は怒りの内にも、哀れみを思い起こすように(ハバ.3:2)、彼の愛は彼が造った動物界にも広く及んでいるのです(コリ前.9:9、ヨナ.4:11)。

3.4 アブラハムとの約束



イエスと使徒たちによって教えた福音はアブラハムが認識していたことと根本的に違うのがないのです。聖書によると、神が“アブラハムに福音を予告された”(ガラ.3:8)となっています。ペテロが彼の福音の公表を始めから終りまでそれらを説明しているほど(使.3:13、25)、この約束は極めて重要なことです。もし私たちがアブラハムに教えたことを完全に認識しているとすれば、もう私たちは基督教の福音に関する基本知識を持っていると言えるのです。その福音はイエスの時代初めて起こったことでないのを証明する多くの証拠があります。

“私たちは、神が先祖たちに対してなされた約束、ここに述べ伝えているのである。神は...この約束をお果たしになった”(使.13:32、33)。

“この福音は、神が、予言者たちにより(アブラハム、創.20:7)...あらかじめ約束されたものである”(ロマ.1:1、2)。

“死人にさえ福音が宣べ伝えられた”(ペテ前.4:6)。1世紀以前に生き死んだ信者たちを示しているのです。

“彼らと同じく、私たちにも福音が伝えられている”(へブ.4:2)。その荒れ野にいたイスラエル人たちです。

神がアブラハムにして下さった約束には二つの基本的主題があるのです。

(1) アブラハムの子孫に関すること。

(2) アブラハムに約束された地域に対すること。

この約束は皆な新約聖書で説明しています。私たちは聖書の解釈はそれ自体がするようにさせながら、アブラハムにして下さった契約の完全な絵が浮き上がるようにその二つの聖書の教えを組み合わせで見ましょう。

アブラハムはもともと今イラクにある繁栄していた都市ウルに住んでいました。その都市はアブラハムの時代とても高いレベルの文化に到達していたのを現代の考古学が発見しました。そこには銀行制度があり、都市の基幹施設が備わっていました。私たちが知っているのと同じく、アブラハムはこの都市に住んでいた、この世の人でした。しかしその時アブラハムに、この世になれた生活を離れ、約束の地に行けと言う神の特別なお召しがありました。どこにどんなに行くかなにも分からなかったのです。結局、それは1500マイルに至る遠い旅に出るのです。その地はカナン、現代のイスラエルの地でした。

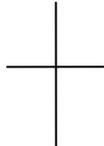
アブラハムの生涯の間、神が彼に度々現れ彼の約束を詳述して下さいました。その約束がキリスト教の福音の基本であります。従ってクリスチャンはアブラハムにあったようなお召しによって、つまらないこの世の生活を離れ、信仰の生活に入り、神の約束が最高の価値あるものと考えながら、彼の言葉について生きるのであります。私たちはアブラハムが彼の永い旅程でいつもその約束を思いめぐらしたことを十分想像出来るのです。“信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出て行った”(ヘブ.11:8)。

私たちも彼と同じくまずその約束を考える時、神の国が約束された地は果たしてどのような所であるか分からないのです。しかし神の言葉を信じて熱心に従順しなければならぬのです。

アブラハムはその約束を捕まえるのが最善の機会と考えるによってもう流浪する遊牧民ではなかったでした。彼が持っていた本来の条件、彼の背景はおおよそ私たちのものと同様でした。彼が直面していたコンプレックス、もだえた決心らは、今も神の約束を受け入れ、それについて行動するか否かと考慮するに直面しなければならない多くの者と同様でした。職場の同僚から変な人に見られ、隣人からずいぬに見られるなど、アブラハムはこのすべてを体験したでしょう。アブラハムを旅に連れ出したその動機はとても巨大なものであったのに違いありません。彼の長い旅のあいだを通して彼に与えていた唯一のことはやはりその約束の言葉でした。彼はその言葉が実際彼になにを意味する化を記憶し、そしてそれを日ごとに瞑想したでしょう。

アブラハムと同じく、私たちも神を信じて行うによって、彼のように、神の友と呼ばれ(イザ.41:8)、神に関する知識を見出し(創.18:17)、その永遠の命の望みを持つ栄誉を得ることが出来るのです。キリスト教の福音はアブラハムになしたその約束に基礎としていると強調して止まないのです。キリストのメッセージを信じている私たちは、確実にアブラハムにして下さったその約束を知らねばならないのです。それを知らない信仰はつまらない信仰です。従って私たちは神とアブラハムの対話を再三読んで見なければならぬのです。

その地



1)

“「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、私が示す地に行きなさい」”(創.12:1)。

2)

“彼はネゲブから旅路を進めてベテルに向かい、...ヤウエはアブラムに言われた、「目をあげてあなたのいる所から北、南、東、西を見わたしなさい。すべてあなたが見わたす地は、永久にあなたとあなたの子孫に与えます。...あなたは立って、その地を縦横に行き巡りなさい。私はこれをあなたに与えます」”(創.13:3、14-18)。

3)

“主はアブラムと契約を結んで言われた。「私はこの地をあなたの子孫に与える。エジプトの川から、かの大川ユフラテスまで」”(創.15:18)。

4)

“「私はあなたと後の子孫とにあなたの宿っているこの地、すなわちカナンを永久の所有として与える」”(創.17:8)。

5)

“神はアブラムやその子孫に世界を受け継がせることを約束された”(ロマ.4:13)。

ここで私たちはアブラムになされたその約束は漸進的に啓示されたことが分かります。

1) ‘神が彼に与えようとする土地’。

2)

‘あなたは今その地域に到着した。あなたとあなたの子孫はここで永久に生きるであろう’。その永遠の命がなんの強調もなく記録されています。それには人間の誇張的表現の必要がないのです。

3) その約束の地域をもっと詳細に話しています。

4)

アブラ

ハムは彼の生涯にその約束を受けると期待していませんでした。後には彼がそこで永久に住むになっているけれども、その時には彼が“旅人”として住みました。これは彼が死んだ後死人から復活してその約束を受けるとを暗示しているのです。

5)

パウロ

は靈感によって、その約束はアブラハムが全世界の相続者となるのを意味するのを知りました。

聖書はアブラハムの生涯にこの約束の成就を受けられなかったことを私たちにこのように思い出させています。

“信仰によって、彼は他国にいるようにして約束の地に留まり、...幕屋(テント)に住んだ” (ヘブ.11:9)。

彼は外国人として、ことによると避難民がなんの安全性もなく寄留するようにその地で住んだのでしょう。彼は彼の子孫と一緒に土地を所有して生きることが出来なかったでした。彼の子孫、イサク、ヤコブと共に、彼は“信仰を抱いて死にました。約束されたものは手に入れませんでした、はるかにそれを見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら公に言い現わした” (ヘブ.11:13)。その四つのステージを注目しなさい。

約束を知っていなければならないのです、私たちがこの学習で学んでいるように。

それを“確信していた” (were persuaded of them)、アブラハムのように、私たちがその約束を確信すべきです。

それを“歓迎していた” (Embracing them)、キリストに合うバプテスマを受け、その約束を受け入れた(ガラ. 3:27-29)。

この世が私たちの国でないと霊的生活でそれを公に言い現わし、この地に来るべき世に対する望みながら住むことです。

この信仰によってアブラハムは信者すべての英雄であり、彼の信仰生活は私たちの模範であります。その約束は将来果されると信じた彼の確信に対する試練が、彼は老い妻が死んだ時に起りました。彼は彼女を葬るために実際その約束の地一部を買いました(使.7:16)。神は彼に“一步の幅の土地すらも、与えられなかったのです。ただ、その地を所領として授けようとの約束が与えられたのです”(使.7:5)。現在のアブラハムの子孫にも、彼らにはこの地が彼らの永久の所領として約束されていますが、それに似合う方法で土地を買うとか借りて使用しなければならないのです。

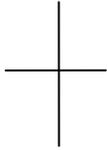
しかし神は彼の約束を絶対守るのです。アブラハムと彼の子孫にその約束が実現せられる時が必ず来るのです。ヘブ.11:13、39、40は次のように力説しています。

“この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手入れ
ませんでした、はるかにそれを見て喜び、...
神は、私たちのために、更にまさったものを計画して下さったので、私
たちをほかにしては彼らが全うされることはないのです”。

従って信者たち皆が末の日の裁きの座にて同時に補償されるようになっているのです(テモ后.4:1、8; マタ.25:31-34; ペテ前.5:4)。その裁きを受けるために、この約束を知っていたアブラハムと他のすべての信者が裁きの前に復活されなければならないのです。彼らが今その約束されたものを受けずキリストのお帰りにおいて復活して裁き後それを受けることになるから、アブラハムと同じく彼らはキリストのお帰りを待ちながら無意識の状態で墓に留まっているのです。それにもかかわらず、ヨーロッパの多くのカトリック教の聖堂にはアブラハムが今天で彼の信仰生活に対する約束の補償を受けて楽しむのを描写したモザイクのステンドグラスで飾っています。数百年の間数多くの人々がそれらの絵に挿入されて、大部分のクリスチャンがその考えを受け入れるになりました。あなたは聖書の知識でその迷夢から醒めているのですか。

その子孫

学習3.2で説明しているように、子孫に関する約束は主にイエスを示していることですが、その次には、“キリストの内に”ある者たちであって、やはりアブラハムの子孫と見なされる者たちも示しているのです



神の約束 97

1)

“「私はあなたを大なる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める。...地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」”(創.12:2, 3)。

2)

“「すべてあなたが見渡す地は、永久にあなたとあなたの子孫に与えます。私はあなたの子孫を地の塵のように多くします。もし人が地の塵えを数えることが出来るなら、あなたの子孫も数えられることが出来るでしょう」”(創.13:15, 16)。

3)

“「天を仰いで、星を数えることが出来るなら、数えて見なさい。...あなたの子孫はあのようなになるでしょう」。...主はアブラムと契約を結んで言われた。「私はその地をあなたの子孫に与える」”(創.15:5, 18)。

4)

“私はあなたと後の子孫とにあなたの宿っているこの地、すなわち、カナンを永久の所有として与える。そして私は彼らの神となるであろう”(創.17:8)。

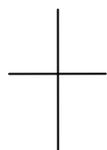
5)

“私は大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫を増やして、天の星のように、浜辺の砂のようにする。あなたの子孫は敵の城門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう”(創.22:17, 18)。

またその“子孫”に関するアブラハムの知識も漸次的に拡大するようになりました。

1)

始めにアブラハムは彼の一人の特別な子孫が生まれることが告げられましたが、そ



れはその“子孫”を通して地のすべてのやからが祝福されるということでした。

2)

アブラ

ハムは後ほどその子孫から多くの後孫に繁盛することが告げられました。この人たちは彼と一緒に彼が到着した土地、カナンで永遠に生きるのです。

3)

アブラ

ハムは彼の子孫が空の星のように多くなることが告げられました。これは彼が多くの肉の子孫を持つと同じく、霊的の子孫を持つことを彼に暗示したのでした。

4)

その子

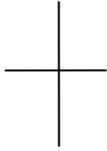
孫の一部になる多くの人が神と個人的関係を持つことが出来ると言う追加の確認で以前の約束がみな支持されています。

5) その子孫が彼の敵に対して勝利を得ることでした。

その子孫がこの世のすべての人に“祝福”をもたらすことに注目すべきです。聖書で祝福とは度々罪の赦しと関係されています。結局、これは神の愛する者が願っている最大の祝福です。それで聖書に、“そのとがが赦され、その罪を覆っていただいた者は祝福された”(詩.32:1)と書いているのです。“祝福する祝福の杯”(コリ前.10:16)は、私たちの罪が赦すことが出来るキリストの血を現わす葡萄酒の杯を描写しています。

勿論、この世に罪の赦しをもたらしたアブラハムの唯一の子孫イエスと、そしてアブラハムに約束の基礎としている新約聖書がその子孫を堅く支持しているのです。

“さて、アブラハムとその子孫に対して約束が告げられましたが、その際、多くの人を指して「子孫たちとに」とは言われず、一人の人を指して「あなたの子孫とに」と言われています。この「子孫」とは、キリストのことです”(ガラ.3:16)。



“あなたがたは予言者の子孫であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。「地上の諸民族は、あなたの子孫によって祝福される」と、神はアブラハムに言われました” (使.3:25、26)。

ここにペテロが創.22:18を引用してその子孫を解釈していることに注目しなさい

。

その子孫 = イエス

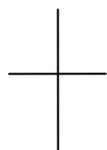
その祝福 = 罪の赦し

その子孫であるイエスが彼の敵に勝利するつもりであるその約束の根源を一層近く追跡して見れば、それは、一神の民の最大の敵であり、またイエスの敵でもあるその罪に対する彼の勝利を意味することを分かります。

その子孫との連合

今はキリスト教の福音の基本的知識を悟るのはアブラハムを理解することであるのが明らかになったでしょう。しかしこの重要な約束はアブラハムと彼の子孫、イエスにしたものでした。その他に誰にしたのでしょうか。アブラハムから生まれた肉の子孫の誰でも自動的にその特定の子孫の一部になることが出来ないのでした(ヨハ.8:39; ロマ.9:7)。私たちはついにイエスの一部として彼と連合するになっているので、その子孫に約束しているものを分けるようになりました。これはイエスに預かるバプテスマを受けるによるのであります(ロマ.6:3-5)。私たちは聖書で度々彼の名に預かるバプテスマを受けたと書いているのを読むのです(使.2:38; 8:16; 10:48; 19:5)。ガラ.3:27-29の句節は他のどの句節よりもこれをもっと明らかにしています。

“キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのです。そこにはもはや、ユダヤ人もギリシャ人(異邦人)もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト、イエスにおいて一つからです。あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、取りもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束の相続人です”。



この地で永遠に生きるその永遠の命の約束はイエスを通して罪の赦しを受ける祝福であります。それはその子孫であるキリストに預かるバプスマによって、彼になされた約束を分ける事が出来るのです。ロマ.8:17には私たちが“キリストと共同相続人”と呼んでいます。

その子孫を通して、その祝福がこの地のすべての人にもたらしたことを記憶して置きなさい。その子孫は浜辺の砂と空の星のように、多くの人の群れになるのです。イエスが先ずその祝福を受けたので、彼をその“子孫”と言われたのはあまりにもあたりまえなことです。このように一人の子が、“子々孫々、主に仕え、主のことを来るべき代々に語り伝える”(詩.22:30)と多くの人たちになることを歌っています。

私たちはアブラハムにして下さったその約束を二つの要素に要約することが出来るのです。

(1) その土地

アブラハムと彼の子孫、イエス、そして彼の内にある者たちはカナンの地と全世界を基業の地として受け継ぎ、そこで永遠に生きるでしょう。この世では彼らがそれを受けることが出来ないけれども、イエスがお帰りになる終わりの時、それを受けるでしょう。

(2) その子孫

これは主にイエスを指摘しているのです。彼を通して信者たちが人類の敵である罪に勝利するので、罪の赦しの祝福がすべての人に及ぶのです。

イエスのみ名に預かるバプテスマを受けるによって私たちはその子孫の一部になるのです。

この二筋のことが新約聖書のすべての説教であって、人たちがその教えを聞いてバプテスマを受けたと度々書かれていることは変な話ではありません。これが過去と現在にその約束を私たちに結ばさせる方法でした。私たちはなぜ年老いたパウロが死ぬ際において“イスラエルの望み”を持って彼の望みにしたのであるかを今理解出来るのです(使.28:20)。クリスチャンの望みは本来のユダヤ人の望みであります。“救いはユダヤ人から来る”(ヨハ.4:22)と、霊的ユダヤ人になるのが救いを受け

るとキリストが説明しました。従って私たちは霊的ユダヤ人の祖先になっているキリストを通してなされた救いの約束の恵みを得ることが出来るのです。

1 世紀の初期クリスチャンたちが伝えた福音

- 1) “神の国に関すること”と、
- 2) “イエスキリストの名に関すること” (使. 8:12)。

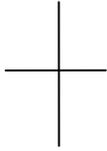
この二つが少し違う論題ではありますが、アブラハムには説明しているその約束です。

- 1) 土地に対する約束くと、
- 2) その子孫に対する約束

その国とイエスに対する“事等”(複数)を教えたのを、“イエス、キリストを宣べ伝えた”と要約しているのに注目すべきです(使.8:5, 8:12と比較せよ)。多くの人たちがこれを“イエスさまがあなたを愛する、イエスがあなたのために死なれたのを信ずると救われます”と言う意味に使っています。しかしその句の“キリスト”は彼と彼の国に対する数多くの教えを要約したのであります。アブラハムに伝えられたこの国に対する良い便りはその福音の初期の伝播にて大きい役割をしました。

パウロがコリントで、“三か月のあいだ、神の国について大胆に論じ、人々を説得しました”(使.19:8)。エペソでも彼は町を巡回しながら“神の国を宣べ伝えました”(使.20:25)。そして彼の最後の業績としてローマでも同じく、“彼は朝から晩まで説明を続けました。神の国について力強く証しし、モーセの律法や予言者の書を引用して、イエスについて説得しました”(使.28:23, 31)。そのように多くのことが話されているのは神の国とイエスに対する福音の基本的メッセージの伝播がただ“イエスえを信じなさい”と言うことでなかったのを示しています。アブラハムに現わした神の啓示はもっと詳細に話しており、さらに彼になされたその約束はキリスト教の福音の基本知識であるのです。

イエスに預かるバプテスマを受けた私たちはその子孫に連合し、約束を継げることが出来るのですが(ガラ.3:27-29)、しかしただバプテスマだけを受けるによって約束されたその救いを得るものではありません。もしその子孫に約束したものを受けようとすれば、私たちは常にその子孫であるキリストの内に留まっていなければなら



ないのです。だからバプテスマはただその始め部分であります。私たちが走ればならない一つの競争の出発点に入っているのです。ただ技術的にアブラハムの子孫になったので神が受け入れると思わないで下さい。イスラエル人たちは皆アブラハムの子孫であります、これは彼らがバプテスマを受けることとキリストとアブラハムの模範に従って生きることなしに救いを得ることが出来るのを意味するのではありません(ロマ.9:7、8;

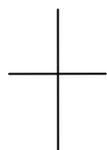
4:13、14)。イエスはユダヤ人たちに話しました。“あなたがたがアブラハムの子孫だと言うことは、分かっている。だが、あなたがたは私を殺そうとしている。...もしあなたがたがアブラハムの子孫なら、アブラハムと同じ業をするはずだ(ヨハ.8:37、39)、神とキリストにある信仰の生活で生きるのがその約束の子孫である”(ヨハ.6:29)。

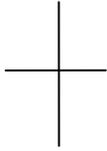
その“子孫”は彼の先祖から受けた本性を持たねばならないのです。もし私たちがアブラハムの子孫であるならばバプテスマを受けるばかりでなく、また彼が持っていたように、神の約束に対する信仰を持たねばならないのです。従って、“父アブラハムが割礼以前に持っていた信仰の模範に従うすべての人の父と呼ばれるようになったのです”(ロマ.4:11、12)。“だから、信仰にとって生きる人々こそ、アブラハムの子であると知りなさい”(ガラ.3:7)。

信仰にはそれに伴う行動があるのです。神の目から見て、その行動がない者は真の信仰でないと(ヤコ.2:17)話しています。私たちはこの学習で学んだその約束を信ずる信仰をバプテスマを受けるによって論証し、私たちのものとするのです(ガラ.3:27-29)。読者よ、あなたは本当に神の約束を信じていますか。

古い契約と新しい契約

アブラハムにして下さった約束がキリストの福音であることが今明白になったでしょう。神がなしたその他の主な約束はモーセの律法の文脈にあるユダヤ人たちに対するものです。それらは、もし彼らとその律法に従順するとこの世で肉体的に祝福されると言うことでした(申.28章)。その約束の中には永遠の命の約束が含まれていないのです。それで私たちは彼らには二つの約束、あるいは契約があったと思います。





1)

アブラハムと彼の子孫には、キリストのお帰りの時罪の赦しと神の国にある永遠の命が約束されたのです。この約束はエデンの園でなされ、またダビテになされたのです。

2)

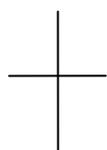
モーセ時代にユダヤ人たちには、もし彼らが神がモーセに与えた律法に服従するとこの地で現在平安と幸福に生きると言う約束でした。

神はアブラハムに神の国にある贖罪と永遠の命を約束しましたが、しかしこれはただイエスの犠牲を通して可能なことでした。このわけで、私たちは十字架の上のキリストの死がアブラハムして下さった約束を確認しているのを知るのです(ガラ.3:17; ロマ.15:8;

ダニ.9:27; コリ后.1:20)。従って彼の血は“新しい契約の血”と呼ぶのです(マタ.26:28)。このことを思い出すために、イエスが彼の血を象徴する葡萄酒の杯を定期的に飲むように私たちに話したのを常に記憶すべきです(コリ前.11:25)。“この杯は、私の血による新しい契約です”(ルカ.22:20)。私たちがこのことを理解出来なく、イエスと彼の使役を記念する“パンを裂く”のはなんの意味もないのです。

イエスの犠牲によって神の国に入られる贖罪と永遠の命を得るようになしました。だから彼はアブラハムにして下さったその約束を確実にしたのです。彼は“その優れた契約の保証です”(ヘブ.7:22)。ヘブ.10:9にはイエスが“第二のものを立てるために、最初のを廃止された”と話しています。これはイエスがアブラハムにして下さった約束を確認した時、彼が他の契約を廃止したと示しているのです。それはモーセを通して与えた契約でした。イエスが彼の死によって新しい契約を確認するに引用されたこの句節は、彼が廃止してしまった古い契約があったのを暗示しているのです(ヘブ.8:13)。

これはキリストに関する契約が始めにしているけれども、彼の死があるまではそれが完全に作用出来なかったのを意味しています。従ってそれが“新しい契約”と呼ばれるているのです。モーセを通してなされたその“古い契約”の目的はイエスの作業を予示するのであって、キリストに関する約束を信ずる信仰の重要性を強調しているのです(ガラ.3:19, 21)。逆に言えば、キリストを信ずる信仰はモーセに与えたその律法の真理を確認するのです(ロマ.3:31)。パウロは面白くそれを要約しています。“このようにして律法は、信仰によって義とされるために、私たちキリス



トに連れて行く養育係となったのでした” (ガラ.3:24)。モーセを通して下されたその律法が保存され、そして今も私たちが学ぶ価値があるのは、この目的のためです。

これらのことは始めはとも理解するのが難しいですが、次のように要約することが出来ます。

新しい契約： アブラハムにしたキリストに関する約束。

古い契約： モーセに与えた律法と結合したイスラエルに対する約束。

キリストの死によって古い契約は廃止され(コロ. 2:14-17)、新しい契約が作用し始めた。

この理由で、その古い契約の部分である“十分の一税、安息日ら”を守る必要がなくなりました。これは学習9でもっと詳しく調べてみることにします。その新しい契約は肉のイスラエルが悔い改めてキリストを受け入れる時彼らと結ばれるでしょう(エレ.31:31, 32; ロマ.9:26, 27; エゼ.16:62;

37:26)、勿論、ユダヤ人は誰でも今イエスを認定し彼に預かるバプテスマを受けるなら、ただちにその新しい契約に入ることが出来るのです(それにはユダヤ人とか異邦人の区別がありません。ガラ.3:27-29)。

これらを本当に認識すると神の約束が確実に体得するようになります。初期のキリスト教伝道者たちが積極的にメッセージを伝えることが出来なかったと懐疑論者たちが不当に非難していました。パウロはキリストの死のために神の約束が確認されて、彼らが話している望みが確実なものであると話して彼らに答えました。“神の真実をかけて言うが、あなたがたに対する私たちの言葉は、「然り」であると同時に、「否」であると言うものではありません。私たちが、...

あなたがたの間で宣べ伝えた神の子のイエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となった方ではありません。このがたにおいては「然り」だけが実現したのです。神の約束は、ことごとくこの方において「アーメン」となったからです”(コリ后.1:17-20)。

3.5 ダビテとの約束

神の約束 105

神の約束を受領したアブラハムや他の人たちと同じように、ダビテも彼の若い時期の生活はたやすいものでありませんでした。彼はB.C.1000頃、イスラエルの一つの大家族の末っ子に生まれ、羊の群を監督し、親方風を吹かす兄たちの走り使いをしながら育ちました(サム上.15章-17章)。その時期の間に彼は誰も到達することの出来ない高い水準の信仰を習いました。

イスラエルは彼の攻撃的隣国であるペリシテ人たちに挑戦を受ける日か来ました。ペリシテ人たちは彼らのチャンピオンである巨人ゴリアテを出させて、誰でも彼と戦って勝つ者に従うと挑戦していました。神の助けによってダビテは投石袋の小石を使ってゴリアテを打ち破ることが出来ました。このことによって彼はイスラエルでサウル王よりも偉大なる人気を得るになりました。“妬みは墓のように残酷だからです”(雅.8:6)と、言われた通り、ダビテは後20年間、南イスラエルの荒れ野で鼠が猫に追われるようにサウル王の迫害を受けました。

結局、ダビテは王のなりましたが、彼は荒れ野の生活の間、彼に対する神の愛に感謝して、神の聖殿を建てようと決心しました。しかしこれに対する神のお答は、ダビテの子、ソロモンが神が必要とするその聖殿を建てることでした(サム下.7:4-13)。それにはアブラハムにしたその約束をもっと詳細に話したことがあります。では、ダビテに話したその約束を詳細に調べて見ましょう。

“あなたが生涯を終え、先祖と共に眠るとき、あなたの身から出る子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者が私の名のために家を立て、私は彼の王国の王座をとこしえに堅く据える。私は彼の父となり、彼は私の子となる。彼が過ちを犯す時は、人間の杖、人の子らの鞭をもって彼を懲らしめよう。私は慈しみを彼から取り去りはしない。あなたの前から退けたサウルから慈しみを取り去ったが、そのようなことはしない。あなたの家、あなたの王国は、わたしの前に長く保つであろう、あなたの王座はとこしえに堅く据えられる”(サム下.7:12-16)。

以前の学習で私たちは“その子孫”としてイエスを期待していました。これは彼を神の子として描写しているのですが(サム下.7:14)、聖書の他の多くの部分でこれを確認しています。

“私は、ダビテの若枝、また子孫であり、輝く明けの明星です”(啓.22:16)。

“御子(イエス)は、肉によればダビテの子孫から生まれました” (ロマ.1:3)。

“神は約束に従って、このダビテの子孫の中から救主イエスをイスラエルに送られた” (使.13:23)。

その天使は処女マリヤに彼女の子イエスに関して告げました。“主なる神は彼にダビテの王座をお与えになり、...彼の国はどこしえに限りなく続くであろう” (ルカ.1:32,33)。これはサム下.7:13にあるダビテの子孫に関するその約束をイエスに適用しているのです。

その子孫は確実にイエスであると確認している細部事項にはいろいろな意義があります。

1) その子孫

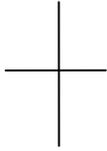
“あなたの身から出る子孫、...

私は彼の父となり、彼は私の子となる”、“私はあなたの身から出る子を、あなたのあとに立ててその王国を堅くする” (サム下.7:12,14;

詩.132:10,11)。その子孫であるイエスは実際ダビテの子孫でしたが、しかし彼の父は神でした。これは新約聖書に書かれているようにただ処女から生まれることによって成就されることが出来たのでした。イエスの母親はダビテの子孫であるマリヤでしたが(ルカ.1:32)、彼は人間の父親を持たないのです。神はマリヤがイエスを孕むように聖霊を遣わして彼女の子宮で奇跡的作業するようにしました。それで、その天使は“だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる” (ルカ.1:35)と説明しました。その“処女出生”はダビテになさったこの約束が適切に成就せられる唯一の方法でした。

2) 聖殿

“彼は私の名のために家を立てる” (サム下.7:13)とはイエスが神のために肉と霊の聖殿二つを建てることを示しています。エゼキエル書40章から48章にはその千年王国(啓.20:6)で一つの聖殿がエルサレムに建てられることが書かれています。彼が住む所が神の“家”であって、イザ.66:1,2には神はへりくだって心悔い、彼の言葉に恐れおののく者に来て住むと告げました。従ってイエスは神が入って住む霊的聖殿



神の約束 107

を信者たちで建てるのです。イエスに関して神の聖殿の基礎石と描写し(ペテ前.2:4-8)、クリスチャンたちに関しては聖殿の石ら(ペテ前.2:5)と現わしています。

3) 御座

“私は彼(キリスト)の王国の王座をとこしえに堅く据える。...
あなた(ダビテ)の家、あなたの王国は、...
あなたの王座はとこしえに堅く据えられる”(サム下.7:13、16、イザ.9:6、7比較)。従ってキリストの王国はイスラエルのダビテ王国の上に基礎しています。これは来るべき神の国がイスラエルの国の再建であることを意味しています。もっと詳細に知りたいなら学習5.3を見なさい。この約束を成就するためにはキリストがダビテの“王座”で治めなければならないのです。この王座は実際エルサレムにあり、その約束が成就するためには、この地にその国が建てられなければならない証拠であるのです。

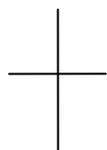
4) 神の国

“あなたの家、あなたの王国は、あなたの行く手にとこしえに続く”(サム下.7:16)とはダビテが永遠なキリストの王国の樹立を目睹することを提示しているのです。従ってこれは、キリストの帰りに彼が復活して、その国が世界に広く建てられ、イエスがエルサレムから治めているのを彼が目睹するになることを示した一つの間接的約束でした。

ダビテに約束されたこのことは信者が理解していなければならないとても重要なことです。ダビテはこのことに関して“永遠の契約...私の救い、私の喜びだ”(サム下.23:5)と嬉しく話しています。このことはまた私たちの救いに関連されています。私たちもこれにおいて喜び、願うべきことです。再び重ねて話しますが、この教理はとても重要なものです。今日キリスト教会がこの素晴らしい真理とは矛盾な教理を教えているのが人類の悲劇であります。

もしイエスが肉体的に“先在していた”とすれば、すなわち彼がこの世に生まれる前に人格者として存在していたとすれば、彼がダビテの子孫になると言われたその約束はこっけいな話になるのです。

もし神の国が天のどこかに樹立されるとすれば、イエスはイスラエルのダビテの国を再建することが出来なく、またダビテの“王座”で治める



ことも出来ないでしょう。これらは皆この地のことであるから、それらの再建は皆同じ所、この地で成就されるのです。

ソロモンの時代の成就

ダビテの子、ソロモンはダビテにしているその約束の一部を果しました。彼は神のために聖殿を建て(王上.5章-8章)、そしてとても繁盛した王国を持っていました。彼の周囲の国々からソロモン王に尊敬を払う代表者たちを遣わし(王上.10章)、またその聖殿を使用するによって偉大なる霊的祝福を得ました。従ってそのソロモンの統治は将来来るべきキリストの王国で見られるダビテにして下さったその約束のより大きな成就の予示に過ぎないことであります。

ある人はダビテにして下さったその約束がソロモンにおいて完全に果されたと主張しています。しかしそれは次の証拠で承認されないのです。

新約聖書にある多くの証拠が“その子孫”はソロモンでなく、イエス・キリストであることを示しています。

ダビテにしている神の約束はアブラハムにしていることと関連されています(代上.17:27 = 創.22:17, 18)。

その“子孫”、イエス・キリストの国はとこしえに堅く建てられるように予言されています。しかしソロモンの国はそうでなく、すぐ崩れてしまいました。

ダビテはその約束が永遠の命に関することであり、またそれは彼の直接の家族に言うているのではないことを認識していました。“私の家はそのように神と共に居ないけれども、彼は私ととこしえに契約をなされた”(サム下.23:5)。

ダビテの子孫は罪から私たちを救うメシヤであります(イザ.9:6, 7; 22:22; エレ.33:5, 6, 15;

ヨハ.7:42)。しかしソロモンは後ほどイスラエルの望みを持っていない多くの女たちと結婚するによって神から目をそらして、遂には神から呪いを受けました(王上.11:1-13; ネヘ.13:26)。

間違った解釈9:天と地の滅亡

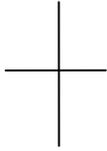
この地に神の国を立てるのが神の目的であるから(学習5を見なさい)、神がこの恒星を破壊するということは想像の出来ないことです。学習3.3で彼はそのようなことはしないと約束と一致することを論証しています。上記の天と地が滅亡すると言うのは比喩的表現で解釈しなければならないのです。

ペテロが話したその文章はこの地に対するノアの時の裁きと将来“主の日”に起こる裁きが類似しているのを示しているのです。“当時の世界は、その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、...
不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれたのです”(ペテ后.3:6,7)。

ペテロはノアの時には水が滅亡させる執行者であったのと、そして主の再臨にて使用されるのは火であると両者の間の対照を指摘しているのです。ノアの時の“天と地”は実際滅ぼされたのではなく、一
地上で動いていた“肉なるすべて”が滅ぼされたのでした(創.7:21と6:5,12比較)。従ってその‘天と地’は人間が設定している文化制度を話しているのです。この句節を誤解している者たちが‘天’が滅ぼされと見なしているのです。その天は実際のものに取り扱うことが出来ないのは、そこが神の居られる所であるからです(詩.123:1)。そこには罪がある者は誰もおる事が出来ないので(ハバ.1:13; 詩.65:4,5)。そしてそれは神の栄光を現わしているのです(詩.19:1)。その天が比喩的言葉であるなら、その地もまた比喩的なければならないのです。

次の句節は聖書の他の部分にある‘天と地’と書いている言葉も文字通りの意味でなく、この地にある人間制度を話しているのを分かります。

“私は地を見たが、それは混沌してむなしかった。天を仰いだが、そこには光がなかった。...
それは主がこう言われたからだ、「全地(イスラエルの地)は荒地となる」。このために地は悲しみ、主なる天は暗くなる”(エレ.4:23-28)。これはイスラエルの人たちが



の‘天と地’に来るべき裁きに関する予言です。それに対して彼らが(文字通りの天と地でなく)嘆くのを現わしているのです。

モーセがイスラエルのすべてに向かって演説しました。“天よ、耳を傾けよ、私は語る、地よ、私の口を言葉を開け”(申.32:1)。これは二つの部類の人たちに話しているのです：1) “あなたがたの部族のすべての長老たちと”、
2) “イスラエルの全会衆”(申.31:28, 30)です。その長老たちが‘天’を示し、一般大衆が‘地’を示しています。

イザヤが類似した方法で彼の予言を話しました。“天よ、聞け、地よ、耳を傾けよ。

...
あなたソドムのつかさたちよ、主の言葉を聞け。あなたゴモラの民よ、私たちの神の教えに耳を傾けよ”(イザ.1:2, 10)。またここで天はつかさたちと、地は一般の民として対比的に表現しています。

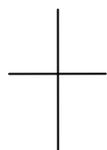
“神はその民(イスラエル)を裁くために、上なる天及び地に呼びかけた”(詩.50:4)。これはそれ自体(イスラエル)に対して話しています。

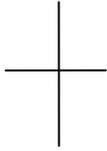
“私は全国民を震う。...
私は天と地を震う”(ハガ.2:7, 21)、上記の句節に類似しています。

“私の剣は天において憤りをもって酔った。見よ、これはエドムの上にくんだり...
主の剣は血で満ち、脂肪で肥え、...エドムの地で大いに殺されたからである”(イザ.34:5, 6)。ここで‘天’はエドムを示し、その以前の予言、“天の万軍は解散される”(イザ.34:4)はエドムの崩壊を話しているのです。

イザヤ13章に崩壊されると言及している天と地はバビロンの人たちに関したことです。バビロンに対する一連の声明で私たちは神が“私は天を震わせる。地はその基から揺れる。...追われるかもしかのように、...
各々身を翻して自分の民に帰り、自分の国へ逃げて行く”(イザ.13:13, 14)と言われたことを聞きます。ここで天と地が逃げて行くのはその民を示しています。ヘブ.9:26で“世の終わり”と話したのは1世紀に起こった、ユダヤ人の国の終末を意味しているのです。

この総てを確実に心に留めて置くなら、新約聖書に言及されたキリストの帰りに起こる“新しい天と地”はこの地に神の国が樹立された時に見られる社会制度であることが充分に分かるでしょう。





神の約束 111

ペテロ後書の3章はこれを確認しています。ペテロは‘現在の天と地が終える’ことを描写した後、その13節は、“しかし、私たちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち込んでいます”と継続しています。これはイザ.65:17の、“見よ、私は新しい天と、新しい地とを創造する”と言われた神の約束を引用したのです。イザヤ書65章の残りの句節は継続的にこの地に樹立される新しい社会制度の完全なことを描写しています。

“見よ、私は新しい天と、新しい地とを創造する。 ...
私はエルサレムを造って喜びとし、その民を楽しみとする。 ...
私はエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。 ...
百才で死ぬ者も、なお若者とせられ(人の寿命が永くなる)、百歳で死ぬ者は、のろわれた罪人徒される。...彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる” (イザ.65:18-25)。

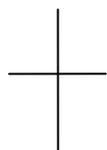
この祝福は明らかにこの地に来るべき神の国で人間が享受すべきことであり、現在の罪悪の惨めな制度と代える新しい‘天と地’の制度とに関係があるのです。

間違った解釈10: ‘British-Israelism’ の主張

この考えはH.W.Armstrongの‘Plain Truth’の団体が提案しているのであって、神がアブラハムにしたその約束はブリトンとアメリカの人たちに成就されたと言いながら、彼らがエフライムとマナセ部族であると主張しているのです。‘British - Israel’運動の会員は英国の王や女王がダビテ王が始めたそのユダ部族から出た子孫であると信じています。彼らの論議を正当化するために、彼らはユダヤ人たちは神に拒絶され、その代りにブリトン族が選ばれたと結論するのです。

学習3に従えば、それは聖書的には正当化出来ない主張であることが明らかになります。次はそれが不当であることを述べている多くの論説の内のただ幾節であります。

すべての人間が同じく罪の呪いの下にあるから(ロマ.3:23)、キリストはもろもろの民族が救いの機会を得ることが出来るように死なれました。私たちがどの民族の人であろうとも、キリストに預かるバプテスマを受けて霊的イスラエル族の一部になるには全く関係がないのです(ガラ.3:27-29)。私たちは世界のすべての人に福音を



伝え、信ずる者にバプテスマを施せよと命令を受けています(マコ.16:15,16)。このように新しいイスラエル人はブリトン人ばかりでなく、すべての人から構成されるのです。

ブリトン人とアメリカ人の起源を証明するのがとても難しいです。彼らは世界のもろもろの所から来て集まった人たちの混合です。人が生まれる民族によって神に選ばれるのでありません。

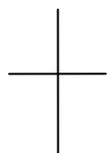
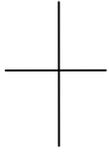
British-

Israelの会員たちは、神に服従するのとは別に、アブラハムの子孫に対して約束された祝福はブリトンの人たちに成就されたと主張しています。これは神の祝福は服従の条件によるとくり返し告げられた彼の原則に逆するのです。レビ記26章と申命記28章はそれ全体が、もし彼らが神の言葉に服従すると祝福であり、その言葉に服従しないと災いであると、イスラエルに及ぶ祝福の概要を述べています。神の言葉に服従するにかかわらず、彼がブリトン族にこの祝福を与えていると言う主張は聖書に全然根拠がない妄想であると言う外はないのです。

神が彼の民イスラエルを捨てて、その代りにブリトン族を選んだと言う示唆はロマ.11:1,2の句節に真っ向から反対するのです。“私(パウロ)は問う、「神はその民を捨てたのであろうか」。断じてそうでない。私もイスラエル人であり、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の者である。... 神は、予め知っておられたその民を、捨てることはされなかった”。

過去に神の国はイスラエルの国でした(代下.9:8)。それは彼に服従しなかったから、破滅されたが、しかしその国は再建されるでしょう(エゼ.21:25-27)。その国はイエスがダビテの王座で治める時(ルカ.1:32)、エルサレムに帰るでしょう(ミカ.4:8)。

現在世界に散らばれているイスラエル人たちがこの地球のもろもろの所から彼らの故土に再び集まるでしょう。“私はイスラエルの人々を、その行った国々から取り出し、四方から彼らを集めてその地に導き、その地で彼らを一つの民となしてイスラエルの山々におらせ、一人の王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて二つの国民とならず、再び二つの国に分かれない”(エゼ.37:21,22)。これは今肉のユダヤ人たちが彼らの故土に帰る方法で成就されています。その完全な成就はその国で成就されるでしょう。現在イスラエル人たちの故土に帰りがその時がまもなく至ることを示しているのです。



学習3: 問題と解答

1. 次のどの約束が罪と義との間に闘争が継続すると予言されていますか？

- a) ノアとの約束
- b) エデンの約束
- c) ダビテとの約束
- d) アブラハムとの約束

2. 次のどちらがエデンの約束を正しく話していますか？

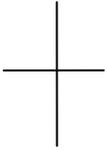
- a) そのへびの子孫はルシフェルである
- b) キリストと義人がその女の子孫である
- c) 蛇の子孫はキリストによって一時的に傷付かされた
- d) 女の子孫はキリストの死によって傷つかされた

3. アブラハムの子孫は何処で永久に生きるのですか？

- a) 天で
- b) エルサレムの都市で
- c) この地で
- d) ある者は天で、あるものはこの地で、

4. 次のどちらがダビテになした約束ですか？

- a) 彼の偉大なる子孫が永久に治める
- b) 彼の子孫が天の国を所有する



神の約束 115

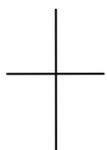
- c) その子孫が神の子となる
- d) 彼の子孫イエスがこの地に生まれる前に天に生きていた、

5. 私たちは如何にしてアブラハムの子孫になれますか？

6. この地がいつか滅ぶるでしょうか？

7. 問題の6に対する神の約束はどんなふう立証していますか？

8. 創.3:15にあるエデンの約束を説明しなさい



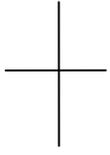
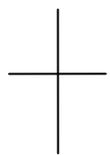
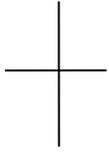


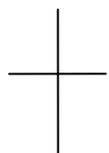
写真 4





学習 4

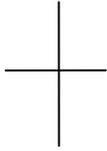
人間と死



4.1 人間の本性

人間の大部分が死とか、また死の根本的原因である彼らの本性に対しては少しも考えていないのです。そのように人間自体に対する内省がないので人間の本性には無知になって、人々は一生をあてどこもなく漂い、彼らの自身の肉欲の指示に従って決定して生きるのです。人生と言うとても短い航海の舟に乗っている大部の人はすぐ運命の港に入港することを知っていますけれども、その正体を重々しく隠して、死を拒否しています。“あなたがたには自分の命がどうなるか、明日のことは分からないのです。あなたがたは、わずかの間現れて、やがて消えて行く霧に過ぎません”。“私たちは皆、死ぬべき者、地に流されれば、再び集めることの出来ない水のようなものです”。“あなたは人を大水のように流れさらせられます。彼らは一夜の夢の如く、朝に萌え出る青草のようです。朝に萌え出て、栄えるが、夕べには、萎れて枯れるのです” (ヤコ.4:14; サム下.14:14; 詩.90:5, 6)。モーセはこれを認定していた本当に思慮深い人でした。それで彼は神にこのように訴えています。“私たちにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させて下さい” (詩.90:12)。従って、私たちは短き人生であることを考慮して、先ず亨寿を数える知恵を得なければならないのです。

死の終局に対する人々の反応は多様です。ある文化圏では死と葬式が人生の一部と解釈して、人が死んで亡くなる感情を少なくしようとします。大部の‘クリスチャン’が人間には彼らの内に‘不滅の靈魂’とか不滅の要素があるので死んだ後も生き残って、賞罰を受ける天とか地獄に行く結論しています。死は人間が経験する最も根本的問題であり、また最も嘆かわしい悲劇であるから、彼らはその精神的ショックを極めて少なくしようとします。それゆえに死と人間の本性に関してすべて完全な偽りの説が起り、それが世に広がりました。この重要な主題に対する真理を発見するために聖書を研究すべきであります。私たちが記憶して置くべきことはエデンの園で蛇が話した最初の嘘が聖書に書かれていることです。人間は罪を犯すと“必ず死ぬであろう” (創.2:17)と言われた神の明白な声明とは反対に、その蛇は“あなたがたは決して死ぬことはない” (創.3:4)と断言しました。死の終局と死全体を否定しようとするこの試しがすべての宗教の特性となっています。この分野、特に宗教では、一つの仮定の教理は他の仮定の教理を生み、そう言う仮定的教理に発展した宗教を創っているのが普通です。それとは逆に、一つの真理は他の真理に



人間と死 119

導くとコリ前.15:13-17に示しています。ここでパウロは一つの真理から他のことに飛躍すると話しています。

私たちが人間の本性を認識するには、聖書に書いている人間創造に対する記録を研究する必要があります。その記録は分かりやすく人間の本性について書かれています(間違った解釈:18、エデンで起こったことを参考しなさい)。“ヤウェなる神は土の塵で人を造り、...あなたは土から取られたのだから、あなたは、塵であり、塵に帰る”(創.2:7;

3:19)。ここには人間が不滅的要素を継げ受けたとか、あるいは死の後も継続的に生きている部分があると言う暗示が全然ないのです。

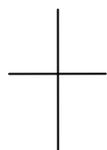
人間は根本的にただ土から構成されている事実を聖書ははっきり強調しています。“私たちは粘土であります”(イザ.64:8)。“人は地から出て土に属します”(コリ前.15:47)。人間は“塵をその基とする者です”(ヨブ.4:19)。“人は塵に帰るであろう”(ヨブ.34:14、15)。アブラハムは彼自身“灰に過ぎない”と話しました(創.18:27)。エデンで神の命令に不服したすぐ後に、神は人たちが“手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない”から、彼らを追い出しました(創.3:22-24)。もし人間が不滅の要素を持っていたとすれば、この事はするはずがないのでした。

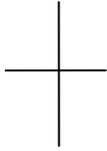
条件付きの不滅

聖書に継続的にくり返している福音のメッセージは人がキリストの使役を通して得られた永遠で不滅の命を得る方法を見つけることです。これが聖書が話している唯一の不滅(Immortality)のタイプであって、罪を犯した靈魂が困難を受けながら永遠に生きるという考えは聖書の教えではありません。不滅の命を得る唯一の方法は神の命令に服従するによるものであって、そのように服従した者たちは完全な状態、すなわち義人に与える補償の永遠の生命で生きる事が出来るのです。

次の句節はこの不滅の命は条件的で得るのであって、私たちが生来持っているのではないと立証しています。

“キリストは死を亡ぼし、福音を通して不滅の命を現わして下さいました”(テモ后.1:10 ; ヨハ 1.1:2)。





“人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない(その命は生来のものではないのです)。私の肉を食べ、私の血を飲む者は永遠の命を得、私は終わりの日に復活させる”。彼に“永遠の命”を与える(ヨハ.6:53, 54)。ヨハネ6章を通してキリストが論じたのは彼が“命のパン”であるので、ただ彼に正しく反応するによつてのみ不滅の望みがあると云われたのです(ヨハ.6:50, 51, 57, 58)。

“神は私たちに永遠の命を与えられました”(ヨハ 1.5:11)。“キリストの内に”居ない者たちは永遠の命の望みがないのです。ただキリストを通してのみ不滅の命を得る可能性があります。彼は“永遠の命の創始者”であり(使.3:15)、“彼に従順したすべての人々に対して、永遠の救いの創始者となる”のです(ヘブ.5:9)。したがって人間の不滅はキリストの使役にを通して始まったのです。

信者はこの不滅の命を求めています、これは恵みの賜物として補償されるのです。彼は生来これを持っていないのです(ロマ.2:7; 6:23; ヨハ.10:28)。私たちのこの死ぬべき体がキリストのお帰りに“朽ちないものを着る”(コリ前.15:53)のです。このように不滅の命は約束されたものであって、今持っているものではありません(ヨハ 1.2:25)。

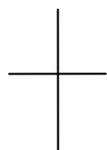
神だけが生来不滅の命を持っているのです(テモ前.6:16)。

4.2 霊魂

既に学習したことを照らして見ると、人間は彼らの本性の内に‘不滅の霊魂’とか、なにか不滅の要素を持っているとは考えられないのです。それでは、霊魂と言う言葉に纏れているすべての混同をすっかり解いて見ましょう。

聖書に‘霊魂’と翻訳されているヘブル語の‘Nephesh’とギリシャ語の‘Psyche’はまた次のように翻訳されています。

体	呼吸	生き物
心意志	人間	人自身



従ってその‘靈魂’は人、体、自身を話すのです。あの有名な救命の言葉、S.O.S. は‘Save Our Souls’であって、‘命を救って下さい’と言う意味です。それで‘靈魂’は‘あなた’あるいは人を構成するすべてのことの総和であります。だから現代訳本の聖書はその‘靈魂’の代りに‘あなた’あるいは‘人’として翻訳されています。神が創造した動物が“動く生物、...すべての生物”と呼ばれています(創.1:20,21)。“生物”と翻訳されたヘブル語は‘Nephesh’であって、それはまた‘靈魂’とも翻訳されています。例を上げると、創.2:7に“人はこうして生きる者になった(Man became a Living Soul)”。動物が‘靈魂(Soul)’であるように、人も一つの‘靈魂(Soul)’であります。ただ人間と動物が違うのは人は動物より精神的に優れているのです。彼は神の形に創造されていました(創.1:26; 学習1.2を見なさい)。ある人たちは彼らに開かれている不滅の命の望みである福音を分かるように呼ばれています(テモ后.1:10)。動物であろうと人間であろうとその根本的本性と死の本性についてはなんの差別がないのです。

“人の子らに臨むところは獣にも臨むからです。すなわち一様に彼らに臨み、これらの死ぬように、彼も死ぬのである。...人は獣に優るところがない。...みな一つの所(墓)に行く。皆塵から出て、皆塵に帰る”(伝.3:19,20)。靈感によって書いた伝道書にはこの理解し難き事実を人たちが悟ることが出来るように神の助けを祈りました。“神は彼らを試して、彼らに自分たちが獣に過ぎないことを悟らせられるのです”(伝.3:18)。従ってこれは多くの人々が理解し難き事実であることを予想していました。本当に、人間は生来動物と同じく、自己保存の本能、適者生存と生殖にて生きていることを悟って謙遜になるべきです。伝.3:18は神が人が動物と同じことを悟るように人を‘試した’と話しています。すなわち、謙遜な人だけがこの事実を悟りますが、しかしそうでない人たちはこの‘試し’に落第するということです。人間が動物よりとても優秀であり、価値があると言うのが20世紀の世界に広がっている哲学思想であります。私たちは皆その哲学思想の影響を一掃すべき重大な課題があります。詩.39:5の明白な言葉がそれに助けを与えるでしょう。“まことに、すべての人はその盛んな時でも、はかないものです”。“歩む人が、その歩みを自分で決めることの出来ないことを”(エレ.10:23)。

私たちが分かっている最も根本的ことはすべての人間の体は実に“生物”であるために、結局死んでしまうということです。従ってその‘靈魂’、‘生物’は死に

ます。それが不滅と言うことはあり得ないことです。聖書に翻訳された‘靈魂’と言う単語は死と滅亡が含まれている言葉です。その単語、靈魂がこのように使用された事実はそれが滅亡しない不滅のものでないことを現わしています。

“罪みを犯した靈魂(Soul)は必ず死ぬ” (エゼ.18:4)。

神は靈魂(Soul)を殺すことが出来ます(マタ.10:28)。他の句節も靈魂が殺されると話されています。エゼ.22:27; 箴.6:32; レビ.23:30。

“ハズル城内にいたすべての靈魂(Soul)が殺されました” (ヨシュ.11:11、ヨシュ.10:30-39と比較)。

“その中の靈魂(Soul)が皆死んでしまった” (啓.16:3、詩.78:50と比較)。

モーセの律法には“靈魂(Soul)”がある掟に不服従すると死刑に処せられると度々言われています(民.15:27-31)。

もし靈魂(Soul)が殺されることを理解するならば、その靈魂(Soul)が絞め殺され、わなに捕らえられると言われることが出来るのです(箴.18:7; 22:25; ヨブ.7:15)。

“皆(すべてのSoul)そのみ前に跪くでしょう” (詩.22:29)

キリストは“彼の命(Soul)を死に注いだので”、彼の“Soul”、あるいは命が罪のために供え物になりました(イザ.53:10、12)。

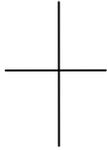
聖書ではその‘靈魂’が現れる多くの句節がその‘靈魂’は何か私たちの内にある不滅なスパークよりは私たち、人間自体、または体を示しています。次はその実例です。

“あなたの着物のすそには、罪のない貧しい人の命(Soul)の血がついている” (エレ.2:34)。

“もし人(Soul)が” 証人に立ち、誓いの声を聞きながら、その見たこと、知っていることを言わないで、罪を犯すならば、彼はそのとがを追わなければならない。もし人(Soul)が汚れた野獣の死体に、...

触れるならば、もし人(Soul)がみだりに唇で誓い、...

とがを得る” (レビ.5:1-4)。



“わが魂(Soul)よ、...

わが内なるすべてのものよ、...わが魂よ、主を誉めよ、...良き物を持って
あなたを飽き足らせられる” (詩.103:1、2、5)。

“誰でも自分の命(Soul)を救おうと思う者はそれを失い、私のために、...
自分の命(Soul)を失う者は、それを救うであろう” (マコ.8:35)。

これは霊魂が人の内にある何か霊的要素を示していないことを充分立証して
います。ここで‘霊魂’と翻訳されたその言葉はただ人間の肉体的命を意味するの
です。

民.21:4は民は“霊魂(Soul)”が途中耐えきれなかったと、一つの群れの
人が“霊魂”を持つことが出来るように示しています。従ってその“
霊魂”は私たち各々の内にある不滅のスパークを言うのではないので
す。

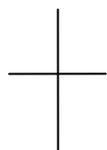
4.3 人間の霊

不幸にも多くの人が聖書にある霊魂と霊の単語の区別を混同しています。これ
は聖書の霊魂(Soul)と霊(Spirit)の単語を同義語に取り扱う事実によって悪化させてい
ます。‘霊魂’はすべて根本的に人の構成要素であるのに、たまたまそれが霊と言
及されています。しかし聖書では‘霊魂’と‘霊’の単語について“霊と霊魂を切
り離す” (ヘブ.4:12)と言われたように、通常それらは相違う意味に使用しています。

‘霊’のヘブル語とギリシャ語の“Ruach”と“Pneuma”は次のように翻訳され
ています。

生命	精神	心
呼吸	魂	風

私たちは学習2.1で‘霊’について学びました。神は人を始めに、すべて彼の被
造物を保存するために彼の霊を使用しています。従って人の内にある神の霊は人の



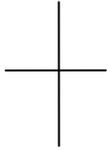
生命力であります。“霊がない肉体は死んだものである”(ヤコ.2:26)。“神はその(アダム)鼻に命の息(生命力)を吹き入れられた。人はこうして生きる者(被造物)となった”(創.2:7)。ヨブは“神の霊また私の鼻にあるもの”(ヨブ.27:3、イザ.2:22と比較)と話しています。従って私たちの内にある生命の霊は私たちが生まれる時に下さったもので、私たちの体が生きる限り留まっているのです。神の霊が生物から撤回する時、一その霊は生命力であるから、その生物はただちに死んでしまいます。“もし神が、その霊をご自分に取りもどし、その息を自分に取り集めるならば、すべての肉は共に滅び、人は塵に帰るであろう”(ヨブ.34:14-16)。この終わりの文章は普通言葉で表現し難き人の本性をよく説明しています。

人間が死ぬ時神が彼の霊を取り去り、私たちは死ぬばかりでなく、完全に無意識の状態になるのです。これをよく認識していたダビテは人間のような弱い被造物を信頼しないでむしろ神を信頼するようになりました。詩.146:3-5、“もろもろの君に信頼してはならない。人の子に信頼してはならない。彼らに助けがない。その息が出ていけば彼は土に帰る。その日には、彼のもろもろの計画は滅びる。ヤコブの神をおのが助けとし、その望みをおのが神、主に置く人は幸いである”。

人が死ぬ時“塵は、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る”(伝.12:7)。既に私たちは神は彼の霊を通してどこにも居られるのを示しました。この意味で、“神は霊であります”(ヨハ.4:24)。人が死ぬ時私たちの内にあった神の霊が離れて行くので、彼は最後の息を出します。そしてその霊は私たちが囲んでいる神の霊に吸収されてしまいます。それで、死ぬ時“その霊が神に帰ると言うのです”。

神の霊がすべての被造物を扶養しているから、死に対する同一の過程が動物にも起ります。人と動物が同じ霊、あるいは生命力を彼らの内に持っています。“人の子らに臨むところは獣にも臨むからである。すなわち一様に彼らに臨み、これの死ぬように、彼も死ぬのである。彼らは皆同様の息(霊)を持っている。人が獣に優るところがない”(伝.3:19)。この筆者は、人の霊と獣の霊が何ら差別がなく行く所も同じと話しを継続しています(伝.3:21)。この人と獣が同じ霊を持ち、同じく死ぬると言われた描写は、神から与えた生命の霊を持っている人と獣両者がその洪水で同じく死んだと描写しているのを言及しているのです(創.2:7;

7:15)。“地の上に動くすべて肉なるものは、鳥も家畜も獣も、地に群がるすべての這うものも、すべての人も皆滅びた。すなわち鼻に命の息(霊)のあるすべてのもの、...死んだ。地からぬぐい去られた”(創.7:21-23)。ついでに言えば、詩.90:5の如く、“人を大水のように流れ去らせたのです”。創7章の記録は明らかに人は根本的に“



肉なるもの、すべて生き物”と同じ範疇にあることを示しています。これは彼らが持っている霊と同じ霊を持っているからです。

4.4 死の状態

私たちが今まで学習した人の靈魂と霊から、死んだ人は完全に無意識の状態であることを分かるようになりました。神に対してなした行動は彼に記憶されるけれども(マラ.3:16; 啓.20:12; ヘブ.6:10)、死の状態では何の意識もないと聖書に暗示しています。これに関した次の明らかな声明がそれを論証しています。

“その息が出て行けば彼は土に帰る。その日に彼のもろもろの計画は滅びる” (詩.146:4)。

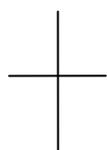
“死者は何事も知らない、...
その愛も、憎しみも、ねたみも、既に消えうせてしまう” (伝.9:5、6)。“
あなたの行く黄泉(墓)には、わざも、計略も、知識も、知恵もないからです” (伝.9:10)。

ヨブは死んだ者に対して、“あたかも存在しなかったようなものである”と話しています(ヨブ.10:19)。彼は死を永遠の忘却、無意識のみならず全く存在しない、人が生まれる前にいたのと同じく思いました。

人は獣のように死にます(伝.3:18)。もし人が死んだ後何処かに生き残っているなら、聖書と科学の論証はみな嘘になります。

神は“私たちが塵であることを覚えていられます。人は、そのよわいは草のごとく、その栄えは野の花に等しい。風がその上を過ぎると、うせて跡なく、その場所にきいても、もはやそれを知らない” (詩.103:14-16)。

死とは本当に無意識状態になることです。だから義人でさえ、神の僕たちは彼らの寿命を永くしてくれるように継続的に神に訴えました。彼らが、死は無意識の状態であることを分かっていたので、死の後は彼らが神を誉め称え、彼に栄光を授ける



事が出来ないのを知っていたからです。ヒゼキヤ(イザ 38:17-19)とダビテ(詩.6:4、5; 30:9; 39:13; 115:17)がその良い例です。死を繰り返して、義人と悪人両者に眠るとか休むと話しています(ヨブ.3:11、13、17; ダニ.12:13)。

人の死後義人の靈魂がただちに天に行って補償を受けて祝福の状態になると言う愚かな一般の観念は聖書では発見されない考えであると十分な証拠を与えました。死と人間の本性に関する真の教理は私たちに大きな平和を与えます。人生のすべての精神的外傷と痛みの後行く墓はその総てを永遠に忘れる忘却の所です。神が要求したのを分からなかった者たちは、この忘却の処に永遠に留まるのです。この未完成の残念な悲劇的人生はこの世で決して再び生きることが出来ないのです。人生のつまらない望みと恐怖は再び悟る事がないでしょう。

悲しむべきことには、この世には聖書を無視して創った多くの人間の宗教があるのです。しかし聖書を学習すると、神の宗教の真理体系が発見されるのです。死の終局を和らげようとした人間の必死の努力が‘不滅の靈魂’と言うものが人間にあると信ずる様にしました。そのように一度人間に不滅の要素があると受け入れたら、死んだ後にそれが天の何処かに行くと思ふになります。これはまた死の後義人と悪人の運命が違ふと言う考えを持つようになります。この論に適応させるために、‘義人の靈魂’は天国へ、‘悪人の靈魂’は地獄へ行く結論つけるのです。私たちはすでに‘不滅の靈魂’は聖書では探せないを示しました。それらすべて虚偽の考えは下記のように分析出来ます。

1.

私たちが死後信仰の補償として‘不滅の靈魂’を天のどこかに選定されるということ。

2. 死後義人と悪人が分離されるということ。**3.** 義人に与える補償が天に行くということ。**4.**

もしすべての人が‘不滅の靈魂’を持っているなら、すべての者が天があるいは地獄に行くということ。

5. 悪人の‘靈魂’は地獄と言う刑罰の所に行くということ。

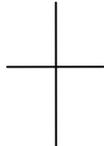
私たちがこのように人間の本性を分析して示す目的はただ否定的部分だけを強調するためではありません。このように確実に考えて見るによって、私たちは人の本性に関する真の絵の重要な部分である聖書真理の多くの要素を信ずるになるからです。

4.5 復活

聖書は義人に与える補償が、キリストのお帰りの、復活の時にあると強調しています(テモ后.4:16)。死んでいる信者たちを復活させるのがキリストがすべき最初の事です。その次に従うことは裁きです。もし信者が死後その‘靈魂’が天に行くとすればこの復活は必要がないでしょう。パウロは、もし復活がないなら、神に服従しようとしたすべての努力は何の価値もなくなると話しました(コリ前.15:32)。彼は死後彼の靈魂が天に行って補償されるであろうと信じ、そんなに論じていないのです。彼は形態を持つ体の復活が補償であると信じていたことを提示しました。キリストは忠誠的な生活をした者に与える補償は“復活”であると私たちに勧告しています(ルカ.14:14)。

聖書は、神、キリスト、天使たち、そして人たち、すべて形のないものは存在しないと教えています。キリストの帰りに、彼が“私たちの卑しい体を、ご自分の栄光の体と同じ形に変えて下さるのです”(ピリ.3:20, 21)。彼は今事実には体の形を持つ人ですが、血によるのではなく、霊によってエネルギーを得ている体を持っているのです。私たちがそのような体を受けるのでしょうか。裁きで、私たちは自分が行ったことに応じて酬いをうけるのです(コリ后.5:10)。肉の生活を生きた者たちは今持っているその死ぬべき体に残り、それは朽ちて塵に帰るのです。その代わりに、霊で肉の心を克服した生活をした者たちは“霊から永遠の命を刈り取るのです”(ガラ.6:8)。

聖書には将来義人に与える報償が体の形態のものであると言われた多くの証拠があります。一度この教理を受け入れると、復活の重要性が分かりやすくなります。どうせ私たちの体は死によってその存在が終わるのです。私たちが永遠に生きる不滅の体を経験するには、私たちの体が再び創造され神の本性が与えられるまで、死の無意識的状态に入らなければならないのです。



コリント前書15章はその全章が復活について詳細に話しています。それはいつも注意して読まねばならないところでもあります。コリ前.15:35-44には説明しています、一つの種が地に蒔かれ、それが神によって地から芽を萌え出し一つの体を持つように、死んだ者も地から起き上がり一つの体を得られるのです。キリストが墓から起き上がり彼の朽ちるべき体が朽ちない体になったのと同じように、信者も彼が補償されたのに預かるのです(ピリ.3:21)。バプテスマを通してキリストの死と復活に連合されている私達もやはり彼が復活を通して得たその補償を受ける信仰を現わしているのです(ロマ

6:3-5)。今私達たちは彼の受難に預かるによって、彼の補償に預かるのです。“いつも主イエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスの命がこの身に現れるためです”(コリ后.4:10)。“キリスト、イエスを死人の中から蘇らせた方は、あなたがたの内に宿っている御霊によって、あなたがたの死ぬべき体も、生かして下さるでしょう”(ロマ.8:11)。したがって私達はこの望みを持って、その朽ちない体になるように、“体の贖いを待ち込んでいるのです”(ロマ.8:11)

この体の補償を初期信者たちがよく知ってそれを望んでいました。アブラハムは、彼が縦横に行き巡るカナンを永久に継ぐと約束されました(創.13:17、学習3.4を見なさい)。その約束が彼の信仰通りに成就されるには、彼はどうしても、将来復活して朽ちない体を得なければならないのです。

ヨブは、彼の体が墓で虫たちに食われてなくなるにも拘わらず、他の体が彼に補償されることを明らかに分かっていました。“私は知る。私を贖う者は生きておられる。末の日彼は必ず地の上に立たれる。私の皮がこのように滅ぼされた後、私は肉を離れて神を見るであろう。しかも私の味方として見るであろう。私の見る者はこれ以外の者ではない。私の心はこれを望んでこがれる”(ヨブ.19:25-27)。イザヤの望みもそのようなものでした。“私の死者は生き、彼らの亡骸は起きる”(イザ.26:19)。

イエスの親しい友人であったラザロの死に関する物語りにもそれと同じ言葉が話されています。主イエスは彼の姉妹を慰めるに彼の霊魂が天に行ったと言わずに、復活の日に関して話しました。“あなたの兄弟は蘇ります”。これに対してラザロの姉妹のマルタはただちに彼女の復活信仰を現わしました。“マルタは言った、「終わりの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」”(ヨハ.11:23,24)。ヨブと同じく、彼女も死が祝福の天に入る瞬間でないことを知っていたので、「終わりの日に復活する」ことを期待していると答えました。主は約束しました。“父

から聞いて学んだ者は、皆私に来るのである。...

その人々は終わりの日によみがえらせるであろう” (ヨハ.6:44,45)。

4.6 審判

裁きに関する聖書の教えは信仰の基本原則の一つであって、バプテスマを受ける前に必ず明らかに知っていなければならないのです(使.24:25; ヘブ.6:2)。聖書には度々神の知識を得て信じた者たちが補償を受ける時の“裁きの日”に関して話しています(ペテ后.2:9; 3:7; ヨハ1.4:17; ユダ.6)。その人たちはみな“神の裁きの座に立つのです” (ロマ.14:10)。私たちは善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれに酬いを受けるために“キリストの裁きの座の前に現れるのです” (コリ后.5:10)。

キリストの再臨に関するダニエルのヴィジョンは御座の前にこの裁きの座が開けているのを見せています(ダニ.7:9-14)。これに関するいろいろな比喩の話がそれを詳細に説明しています。一人の主人が僕たちに金のタラントを与えて他国への出張から帰り来て、その僕たちを呼び集めてそのタラントを如何に使ったか査定する比喩の話があります(マタ.25:14-29)。また福音の呼び出しを網として人々を取る漁師たちの比喩で、彼らはいろんな種類の人を取り集め、浜辺に坐って良い者と悪い者とを分かつ(裁き)のようなことであります(マタ.13:47-49)。その解釈はとても明らかす。“世の終わりにも、その通りになるであろう。すなわち、御使いたちが来て、義人のうちから悪人を選び分けるであろう”。

私たちが今まで調べて見たことから、主の帰りに復活があり、その福音の呼び出しを受けて出てきた者たちみんなを一つの処に集める特定の時があり、そこでキリストに出会うことが想定出来るのです。そこで主が彼らに対する評価により、その国に入ることが出来る補償を受けるに値するか否かを決定するのです。義人だけがその補償を受けるのです。これは皆羊と山羊の比喩のように集めるのです。“人の子が栄光の中にすべての御使いたちを従えて来るとき、彼はその栄光の座に(ダビテの御座、ルカ.1:32,33)つくであろう。そしてすべての国民を集めて(すなわち、すべての民族の民、マタ.28:19と比較)、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをよりわけ、羊を右に、山羊を左におくであろう。その時、王は右にいる人々に言うであろう

う。「私の父に祝福された人たちよ、さあ、世の始めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」(マタ.25:31-34)。

神の国を継ぐこと、すなわちアブラハムに約束したものを義人たちに補償されることです。なおこれはキリストが帰って来て、裁きの後受けるのです。従ってキリストの帰りの前に約束したその不死の体を補償として受けるのは不可能です。それで人は体がなくては存在出来ないから、私たちは死から復活まで、信者は何の意識もない状態であると結論を出すのです。

キリストが帰り来て補償を与えるので、その前にはそれを受けることが出来ない
と聖書の原則をくり返し話しています。

“そうすれば、大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠をうけるであろう”(ペテ前.5:4,1:13と比較)。

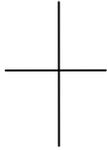
“生きている者と死んだ者とを裁くべきキリスト.イエスの御前で、キリストの出現と御国とを思い、...
今や、義の冠が私を待っているばかりである。彼の日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう”(テモ后.4:1,8)。

終わりの日メシヤが帰り来て、“また地の塵の中に眠っている者のうち(創.3:19と比較)、多くの者は目を覚ますでしょう。そのうち永遠の生命に至る者もあり、また恥と、限りなく恥辱を受ける者もあるであろう”(ダニ.12:2)。

キリストがその裁きに来る時、“墓の中にいる者たちみなが神の子の声を聞き、善を行った人々は、生命を受けるために蘇り、悪を行った者人々は、裁きを受けるためによみがえって、それぞれ出て来る時が来るであろう”(ヨハ.5:25-29)。

“見よ、私は(イエス)すぐに来る。報いを携えて来て、それぞれの仕業に応じて酬いよう”(啓.22:12)。私たちはその補償を受けるために天に行くのでなく、キリストがそれを携えて天からこの地に来るのです。

イエスが私たちの補償を携えて来るのを天で私のために用意していると暗示しています。それは彼がこの地に帰る時携えて来るでしょう。この意味で、ペテロはアブラハムに約束された土地を私たちが継ぐのを“あなたがたのために天に貯えてある、...



人間と死 131

あなたがたは、終わりの時に(キリストの帰りの時)啓示さるべき救いに預かるために、信仰により神の御力に守られている”(ペテ前.1:4、5)と述べています。

これを完全に認識すると、間違いやすいヨハ.14:2、3が正しく解釈出来るのです。“私が(イエス)、あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意が出来たならば(天に貯えたら)、また来て、あなたがたを私の所に迎えよう。私のおる所にあなたがたもおらせる”。イエスは他の所で私たちの酬いを携えて来ると話したので(啓.22:12)、その補償を裁きにおいて与えると知っています。そして彼はエルサレムのダビテの御座で(ルカ.1:32、33)“永久に”治めるのです。彼はこの地で永遠に生きるのです、彼が居られる所、この地である神の国に、私たちもおられるのです。従って“あなたがたを迎える”と言われた彼の約束は裁きの座で私たちが彼に受け入れられるのを意味しています。その迎えると言う言葉が、ヨセフがマリヤを“妻として迎えた”(マタ.1:20)と使用されています。従ってその言葉はイエスの所に移動する肉体的動きを意味するものではありません。

キリストが帰り来て裁きの後その補償が与えられるので、義人と悪人は彼らが死んで、残っている所、墓から起き上がってそこに行くのです。彼らの死においては何の差異がないのです。次の句節はそれをよく立証しています。

ヨナタンは義人でしたが、サウルは悪人でした、しかし、“彼らが死んだ後別れていません”(サム下.1:23)。

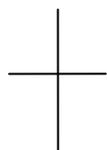
サウル、ヨナタン、サムエルみな死んで一所に行きました(サム上.28:19)

。

義人であった“アブラハムは高齢に達し、老人となり、年が満ちて息絶え、死んでその民に加えられた”(創.25:8; ヨシュ.24:2)のでした。

霊的に賢い者と愚かな者すべてが同じ死を経験します(伝.2:15、16)。

こらは皆一般キリスト教の主張とは鋭く対照的であります。義人が死後ただちに天に行くと言う彼らの教えは復活や裁きの教理を破壊するのです。しかし、これらは救いに関する神の計画においてとても重要な事件であり、その福音のメッセージであります。義人は死ぬるやすぐ天に行って補償されると一般的考えは提示しているので、その次の日、次の月、次の年に他の義人たちが死ぬとそうなるのです。これは義人たちが皆が同時に補償されると言われた聖書の教えとはとても対照的です。



その裁きで羊と山羊が一人一人分かれるのです。その裁きを終えて、キリストは彼の右に集まったすべての羊にこう話すでしょう。

“私の父に祝福された人たちよ、さあ、世の始めからあなたがたのために用意されている御国を受け継ぎなさい” (マタ.25:34)。このように眠っていた者すべてが同時に神の国を継ぐのです(コリ前.15:52)。

キリストが帰り来て裁きの、“刈り入れる時”、福音のために働いたすべての者が“共に喜ぶのです” (ヨハ.4:35、36、マタ.13:39と比較)。

啓.11:18には、“死人を裁き、あなたの僕なる予言者、聖徒、小さき者も、大いなる者も、すべて御名を恐れる者たちに酬いを与えた”とその酬いの時を定義しています。

ヘブル11章は旧約聖書の多くの義人を列挙されている一章です。その13節はこのように解説しています。“これらの人は皆、神の国に入るのを通して救いを得るアブラハムに約束したものは受けていないで、ただその信仰を抱いて死んだのです” (ヘブ.11:8-12)。これは彼らが死んだ後、一人ずつ、天に行ってその酬いを受けたのでないのです。彼らは“約束されたものを手に入れませんでした。...

私たちを除いては、彼らは完全な状態に達しなかったのです”。彼らに約束した補償を遅滞させるのは、忠誠な者すべてを同時に“完全な状態にさせる”神の計画であります。これはキリストが帰り来て、裁きの後起こるのです。

4.7 補償の所、天か地か？

上記の教えとは別に、今もなお神の国がこの地でなく、天に建てられると思っている者たちには、次のようにその補償の約束について説明しています。

‘主の祈り’は神の国が来るように祈るのです。それによって神の要求が天に行われた通りに、この地でも行われるように祈るのです(マタ.6:10)。従って私たちはこの地に神の国が来るように祈るのです。数知れない多くの人たちが、この言葉の意味も知らず、神の国は既に天に建

てられ、この地は滅ぼされると信じながら、毎日祈っているのは本当に人類の悲劇であります。

“柔和な人は、幸いである、彼らの靈魂が天に行くのではなく、彼らは地を受けるのであります” (マタ.5:5)。これは詩篇37章を引用して、義人に対する補償がこの地であることを力説しているのです。悪人がちょうどその地で彼らの短い人生を楽しみましたが、義人たちが永遠の生命に酬いられて、悪人たちが支配していたこの地を永遠に所有するのです (詩.37:34, 35)。

“柔和な者はこの地を継ぎ、...

主に祝福された者は地を継ぎ、...

正しい者は地を継ぎ、とこしえにその中に住むことが出来るのです” (詩.37:11, 22, 29)。とこしえに約束された土地、この地で生きることは天にて永遠に生きるのを意味することが出来ません。

“ダビテは死んで葬られ、... ダビテは天に上がっていないのです” (使.2:29, 34)。その代わりに、ペテロは彼の望みがキリストの帰りに死者の中から復活するのであったと説明しています (使.2:22-36)。

地は人類に対する神の作業場であります。“天はヤウエの天である。しかし地は人の子らに与えられた” (詩.115:16)。

啓.5:9、10は義人たちがその裁き座で主に受け入れられた時歓声を起こすのに関するヴィジョンと関係されています。“あなたは(キリスト) 私たちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう”。この地に建てられた神の国を治めているこの絵は私たちが祝福の天で楽しむと言う漠然な考えを取り除いてしまうでしょう。

ダニエル書2章と7章の予言は一つの国の政治力が継続するのを要約しています。それはキリストが帰り来て、神の国を建て、結局この世が変わるのを現わしています。この国の支配は“全天下の国々に至り”、“全地に満ちます” (ダニ.7:27;

2:35と44節と比較)。この永遠な国が“いと高き者の聖徒たる民に与えられるのです” (ダニ.7:27)。従って彼らの補償は天下のこの地に建てられるこの神の国で生きる永遠の生命であります。

4.8 神に対する責任

もし人が生まれつき‘不滅の靈魂’を持つなら、彼は補償を受けるか、あるいは呪いを受けるか、いずれにしても永遠の運命が決まっている所へ行かねばならないのです。これとは別にすべての人が神に責任があるのを暗示しています。すなわちそれとは対照的に、私たちは動物と同じく人間は生来何か不滅の要素を持っていないと聖書が教えているのを示しています。しかし、ある人たちには神の国の永遠な命が提供されています。それにはこの世にかけて生きたことがあるすべての人が復活するわけではありません。動物のように、人はこの世に生き死んで、塵に分解されてしまうのです。しかしある人たちは呪いを受け、ある人たちは永遠な命の補償を受ける裁きがあるため、その裁きで補償を受けるために復活する範疇の人があるのです。

復活するか復活しないかはその裁きの責任があるかないかによるのです。その裁きの基本は神の言葉の知識を持ち、それに如何に応じたかによるのです。キリストはそれを説明しています。“私を捨てて、私の言葉を受け入れない人には、その人を裁く者がある。私の語ったその言葉が、終わりの日にその人を裁くであろう”(ヨハ.12:48)。キリストの言葉を聞いたことのない者、あるいは分からない者は彼を捨てるとか受け入れることが出来ないので、裁きの座に立たせる必要がないのです。“そのわけは、律法なしに罪を犯した者は、また律法なしに滅び、律法の下で罪を犯した者は、律法によって裁かれる”(ロマ.2:12)。このように神が要求するのを知らない者たちは動物のように滅んでしまいます。それとは反対に、神の掟を犯した者たちは裁かれる必要があるから、必ず復活して裁きを受けるのです。

神の観点では“律法がなければ、罪は罪として認められないし”、“罪は神の律法を犯すのであり”、“律法によって、罪の自覚が生じるのです”(ロマ.5:13; ヨハ1.3:4; ロマ.3:20)。彼の言葉に啓示されている神の律法を知らない者は、“罪を罪と認めないから”、彼らは復活や裁きがありません。神の言葉を知らない者たちは死んで、動物や植物のように、そのまま永遠に留まります。“悟り得ることの出来ない人は屠られる獣に等しいのです”(詩.49:20)。“彼らは墓に定められた羊のように、死が彼らを牧するであろう”(詩.49:14)。

神の道を知る者は彼らの行動において責任がありますから、復活してその裁きの座に現れなければならないのです。したがってバプテスマを受けた義人だけが復活するばかりでなく、理性的に神に関する知識を得た者だけが裁きに立つのです。次の句節はこの主題に反復的に使用されるのです。

ヨハ.15:22は神の言葉の知識には責任があることを示しています。“もし私が(イエス)来て彼らに語らなかつたならば、彼らは罪を犯さないで住んだであろう。しかし今となつては、彼らには、その罪について言い逃れる道がない”。ロマ.1:20-21も同じく、“神が彼らに知られているから、彼らは弁解の予知がない”とされています。

“父から聞いて学んだ者は、みな私に来るのである。...私は(キリスト)その人々を終わりの日によみがえらせる”(ヨハ.6:45,44)。

神が、彼の道に無知な者たちの行動を大目に見ますけれども、彼の道を知っている者たちには、彼がいつも見つめ、彼に応ずることを期待しているのです“(使.17:30)。

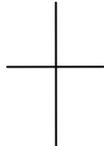
“主人の心を知っていながら、それに従つて用意もせず勤めもしなかつた僕は、多く鞭打たれるであろう。しかし、知らずに打たれるようなことをした者は、打たれ方が少ないであろう。多く与えられた者からは多く求められ、多く任せられた者からは更に多く要求される”(ルカ.12:47、48)。神もそのようにするでしょう。

“人が、なすべき善を知りながら行わなければ、それは彼に取つて罪である”(ヤコ.4:17)。

神に対するイスラエルの特別な責任は、彼らに彼自信を現わしたためでありました(アモ.3:2)。

責任に関したこの教理のために、“義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒めに背くよりは、むしろ義の道を知らなかつた方がよい”(ペテ后.2:21)。これと同じ意味が次の句節にもあります。ヨハ.9:14; 3:19; テモ前.1:13; ホセ.4:14; 申.1:39。

神に関する知識を持つ者にその裁きの座に立つ責任を与えるのです。その知識がない者たちは、裁く価値がないので、復活も出来ないのです。“悟り得ることの出



来ない人は屠られる獣に等しいです” (詩.49:20)。この世に一度生きたことのある人がみな復活出来ないと言われた多くの句節があります。

昔バベロニヤの国の人たちは、彼らが神に対する知識がなかったから、彼らが死の後“永い眠りに入り、もはや目を醒ますことのないようにする”と話しています(エレ.51:39; イザ.43:17)。

イザヤは、“我々の神、主よ、あなた以外のもろもろの主が(ピリシテとバビロニヤンの人たち)我々を治めました。彼らは死んで、再び生きることはなく、死霊が再び立ち上がることはありません。それゆえ、あなたは逆らう者を罰し、滅ぼし彼らの記憶をすべて無に帰されました(イザ.26:13, 14)と彼自身が励まれています。彼らは復活されないと、“再び生きることなく、再び立ち上がることなく、彼らの記憶をすべて無にする”と三度も強調しています。これとは対照的に、イスラエルは神に関する知識を持っているので復活を期待しているのです。“あなたの死者は(イスラエル)生き、彼らのなきがらは起きる。塵に伏す者よ、醒めて喜び唄え”(イザ.26:19)。

神の民、イスラエルに対して話しているのは、キリストの帰りに起こることです。“また地の塵の中に眠っている者のうち、多くの者は目を覚ますでしょう。そのうち永遠の生命に至る者もあり、また恥と、限りなく恥辱を受ける者もあるでしょう”(ダニ.12:2)。このように、すべての人でなく、多くのユダヤ人が神の選ばれた民として責任があるために復活するでしょう。“主の言葉を求めてさ迷ったけれども、それを得なかったから”、神に関して全然無知な者であるから、“再び起き上がることはないのです”(アモ.8:12, 14)。

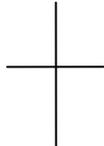
私たちが学んだこと：

1. 神の言葉に関する知識を持っている者は責任がある。
2. その責任がある者だけが復活し裁きを受ける。
3. 従って神を知らない者たちは獣のように死後死に留まる。

この結論が提示するのは人間の自慢と自分の気ままに信じようとする人間性に大きい衝撃を与えるでしょう。現在と過去に福音に関して無知な数百万の人が深刻な精神病で聖書のメッセージを理解することが出来なかったのです。数多くの子供たちが福音を認識することが出来る年齢の前に死んでしまいました。これらの範疇に属する者たちはみな神に関する知識を得る前に死んだので、神に対する責任がないのです。これは彼らの父母の霊的状态であったのにも拘わらず、彼らは復活されないのを意味しているのです。これは人本主義や人間の肉の欲望と感情に完全に逆らう教理であります。真理である神の言葉に対して謙遜になり、取るに足らない人間の意見を捨てるによって、この真理を受け入れることが出来るでしょう。聖書の導きに依らないでも、人間の経験の事実らに対する公正な検討で上記のグループの人は来るべき世に命の望みがないと結論に至るでしょう。

この問題に対する神の方法に関して私たち人間が疑問を持つと言うことは総体的に不当だと思います。“ああ、人よ、あなたは、神に言い逆らうとは、一体、何者なのか”(ロマ.9:20)と、パウロは大きく叱責しています。私たちはそれを理解することが出来ないけれども、神が不義であるとか、不公平であると訴えることが出来ないのです。ダビテ王はサム下.12:15-24でこのように話しています。“子が生きている間に私は断食して泣いたのは、ヤウエが私を哀れんで、この子を生かして下さるかも知れないと思ったからです。しかし今は死んだので、私はどうして断食しなければならないでしょうか。私は再び彼を返らせることが出来ますか。..彼は私の所に帰って来ないでしょう”。ダビテは彼の妻を慰め、すぐほかの子を持つようになりました。

終わりに当たって、多くの人が神に対する責任に関するこの原則を認識しては、彼らが神に責任を持ち、また裁きを受けなければならないの分かるから、彼らは神に関するもっと多くの知識を得ようと欲しないようになると言われるでしょう。しかしそのような人はもはやある程度神の言葉の知識を持っているから、神が彼らの生活で働き、自分と関係を持つように提示しているから、彼らは神に対して責任があるのです。“神は愛である”のことをいつも記憶していなければなりません。彼は“ただ、一人も滅びることなく、すべての者が救いを得ることを望んでいます”。“神はその一人子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためです”(ヨハ 1.4:8; ペテ后.3:9; ヨハ.3:16)。神は私たちみなを彼の国に入るのを好んでいます。



このような荣誉と特権にはそれ相当な責任が負われているのがあたりまえです。またその責任は重いか面倒なものではありません。私たちが本当に神を愛しているならば、私たちが行った業でなく、ただ彼の恵みによって与える彼の救いの提供に感謝し、彼の子たちに与えたその責任を尽くすでしょう。彼は私たちに永遠の命と、幸福を与えているのです。

神が彼の言葉を通して私たちがこの世から呼び出しているのを聞き、そしてその価値を認識する時、私たちは人の群集を通して歩いていても、神が特別な関心を持って私たちを見守り、その責任ある生活を果たせない私たちが期待するのではなく、彼の愛に応じて送る私たちの信号を熱心に求めていることを悟るでしょう。神は決して彼の愛の目を私たちから離さないのです。私たちは肉を満足させ、神に対する責任を免れるために、彼に関する私たちの知識を忘れるとかだいなしにすることは決してしないのです。その代わりに、私たちは神と特別な関係にいるのを喜ぶことが出来るし、またそれを喜ばなければなりません。そうするによって彼の愛の偉大さを信頼し、彼に関して少なくでなく、もっと多く分かろうといつも求めるのです。神の道を愛しそれらを知ろうと欲するによって、私たちは彼を習い、彼の神聖に関する私たちのいけいをなによりも価値があることにするのです。

4.9 地獄

地獄に関する一般の概念は死の後悪人の‘不滅の靈魂’を罰する処、あるいは裁きで拒絶された者たちを永久に拷問する処となっています。聖書では地獄が、人が死後行かれる墓であると教えています。

その地獄と翻訳されたヘブル語はSheolであって、それは隠すことを意味するのです。だから私たちが‘地獄(Hell)’と翻訳されたのを読む時私たちは正しく翻訳しているのを読んでいるのでありません。鉄かぶとの英語、‘Helmet’は頭を隠す意味を持っているのです。聖書的に、‘Hell—地獄’は隠す所、すなわち死体を隠す墓を意味しているのです。その言葉、ヘブル語‘Sheol’が‘墓’と翻訳されている多くの実例があります。現代語で翻訳された聖書はその言葉をよく‘墓’と翻訳されています。その‘Sheol’が‘墓’と翻訳された実例をあげて、永遠に硫黄の火が

燃る悪人を拷問する所と考えている一般人たちの概念に大きい衝撃を与えて見ましよう。

“悪しき者に恥じを受けさせ、声を上げさせずに墓に行かせて下さい”
(詩.31:17)。彼らは苦痛で声を張り上げないでしょう。

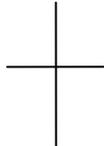
“神は私の靈魂を墓の力から贖うでしょう” (詩.49:15)。ダビテの靈魂、彼の体は、墓、あるいは地獄から復活するのでしょうか。

‘地獄(Hell)’が悪人を罰する所であり、人がそこから絶対に出られないと信ずる信仰者たちに絶対受け入れないことを話して見ましよう。義人が‘地獄(墓)’に行き、またそこから出て来るのです。ホセ.13:14はこれを確認しています。“私は彼ら(神の民)を墓の力から贖うことがあるだろうか。私は彼らを死から、贖うことがあるだろうか”。これはコリ前.15:55で引用してキリストの帰りにある復活に適用させました。それと同じく、再びの復活のヴィジョンで(学習5.5を見なさい)、“死も陰府もその中にいる死人を出す”(啓.20:13)。死と墓を等しく取り扱っている句節、詩.6:5を見なさい。

サム上.2:6にあるハンナの言葉はとても明らかです。“主は殺し、また生かし、墓に降し、また上げられます”。

‘地獄(Hell)’が墓であることを分かったなら、義人が永遠の生命への復活を通してそこから救われるのを期待するのです。このように‘地獄(Hell)’、あるいは墓に入り、後ほど復活を通してそこから出てくるのです。その最高の模範がイエスです。彼の“靈魂(体)はよみ(陰府-墓)に捨て置かれることがなく、またその肉体が朽ち果てることもなかったのです”(使.2:31)。なぜなら彼は復活したからです。キリストの‘靈魂’と彼の‘体’あるいは彼の‘肉’が等しいのに注目しなさい。彼の体が“陰府に捨て置かれることがなかった”と言うのは彼が墓にしばらくの間、すなわち三日間留まっていたことを暗示しています。キリストが‘陰府’に行ったことはそこが悪人の行く所でないのを立証しているのです。

義人と悪人共に‘陰府(墓)’に行くのです。このようにイエスは“彼の墓を悪しき者と共にしました”(イザ.53:9)。これに並んでいる、他の義人たちが‘陰府(墓)’に行った実例があります。ヤコブは“私が嘆きながら陰府に下って、我が子のもとへ行こう”(創.37:35)と話しました。



罪を犯す者に対する罰は死であるのが神の原則の一つです(ロマ.6:23;8:

13;

ヤコ.1:15)。私たちは既に死は完全な無意識の状態であると示しました。罪に対する刑罰は永遠な拷問でなく、あの洪水で滅亡した人たちのように(ルカ.17:27、29)、また荒れ野で死んでしまったイスラエルの人たちのように(コリ前.10:10)、完全な滅亡に帰着するのです(マタ.21:41; 22:7; マコ.12:9;

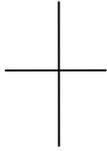
ヤコ.4:12)。上記の二つの事件で、罪人たちは永遠の拷問を受けたのではなく、みな死んでしまいました。従って悪人が意識状態で永遠の拷問を受けると言うのはあり得ないのです。

また神は彼のおきてを知らない者、あるいは彼の言葉に無知な者には罪を認めていないのを(ロマ.5:13)、分かるようになりました。この位置における者たちはみな死んでそのまま永遠に留まるのです。神が要求していることを知っている者がキリストの帰りに復活して裁きを受けるのです。悪人に対する罰が死であるのは、罪に対する刑罰が死であるからです。それでもし彼らがキリストの裁きの座に現れるなら、彼らは罰せられて死に、永遠に死に留まるのです。これは啓.2:11;

20:6で話している“第二の死”です。その人たちは一度死にますが、完全な無意識の状態に死ぬのです。キリストの帰りに復活して裁きを受ける者たちは第二の死に罰せられるのです。彼らは彼らの始めの死のように、また完全な無意識状態になるでしょう。この状態がとこしえに続くのです。

罪に対する刑罰が“とこしえに続く”と言うのは、彼らの死の終わりが無いと言う意味です。とこしえに死に留まることは一つの永遠な刑罰です。このような表現を使用した聖書の一例が申.11:4で発見されます。これは、神が一度紅海でパロの軍隊を滅ぼしたが、その滅亡がとこしえに続くので、その軍隊が決してイスラエルを再び悩ますことが出来ないと言う描写です。ヤウエが紅海の水を彼らの上にあふれさせて滅ぼし、今日に至っている。

旧約聖書の初期でも信者たちは終わりの日に復活があり、その後責任がある悪人は墓に帰るのを知っていました。ヨブ.21:30、32に、これを明らかにしています。“悪人は...怒りの日に連れられて来て(すなわち復活して)、...彼はかかれて墓に行き、塚の上で見張りされる”。キリストの帰りと裁きに対する一つの比喩の話はその悪人が彼の前で“打ち殺される”(ルカ.19:27)と話しています。これはその悪人が意識を持つ状態でとこしえに存在し、継続的に拷問を受けると



人間と死 141

言う考えとは絶対一致しないのです。わずか70年間の行動に対して

とこし

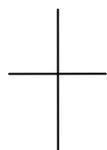
えに刑罰すると言うのは、ある意味ではとても非合理的刑罰です。神は悪人たちを罰するのを好まないのです。従って神は彼らに永遠な刑罰を科しないのです(エゼ.18:23、32; 33:11、ペテ后.3:9と比較)。

背教的現代のキリスト教の教理にはその‘陰府 (Hell)’と拷問の硫黄の火が共にあると思っています。これは陰府を墓であると教えている聖書の教えとは鋭く対照的であります。“彼らは羊のように陰府一墓に横たえり、死が彼らを牧するであろう”(詩.49:14)と、その墓は安らかな忘却の所であると暗示しています。キリストの体(Soul)はその墓に三日間いたにも拘わらず、朽ちなかったのです(使.2:31)。エゼ.32:26-30には戦争で勇猛であった周囲にあるいろいろな国の武士たちが彼らの墓に安らかに横たえているのをこのように描写しています。“彼らは昔倒れた勇士、... これらの勇士は、武具を持って陰府一墓に下り、剣をまくらとし、... つるぎで殺された者と共に横たわる。...

穴に下る者と共に恥を負う”。これは勇士を彼の武具と共に墓に葬った当時の習慣を引用して話したのです。しかしここでもその陰府は墓を描写したのです。この勇士たちが眠っている墓を硫黄の火がとこしえに燃える陰府とは絶対言えないのです。物質的のものが(武具ら)同じく人の靈魂が行く所に行くと言うのは、その陰府が靈的拷問の闘技場ではないのを示しています。ペテロはこのように悪人に告げています。“お前の金と共にお前は滅ぼされる”(使.8:20)。

ヨナ書にもまたそれに矛盾する記録があります。一つの巨大な魚に生きているままに呑まれた“ヨナは魚の腹の中からその神、主に祈って、言った、...「私が院府の腹の中から叫ぶと、あなたは私の声を聞かれた」”(ヨナ.2:1、2)。ここに“その陰府の腹”はその巨大な魚の腹と等しいのです。その魚の腹が実に‘ヨナの隠し所’であって、その言葉‘Sheol’は‘陰府’と翻訳されています。これは確かに硫黄の火がとこしえに燃えている地獄ではなく、またヨナは其処、‘魚の腹’から出ることが出来ました。これはキリストの帰りに墓から復活することにも注意させています(マタ.12:40を見なさい)。

比喩的 火



しかし聖書は罪に対する神の怒りを現わすために永遠に燃える火のイメージを度々使用しています。それは罪人たちが墓で完全に滅亡するのを示しているのです。ソドムは“永遠の火”で刑罰されました(ユダ.7)、すなわち、その住民の罪悪が完全に消滅したのでした。今日その都市は廃墟になり、死海の水の底に水没されていて、文字通りに燃えている‘永遠の火’はないのです。それと同じ様に、エルサレムもイスラエルの罪のために、神の怒りの永遠な火に脅かされています。“私は火をその門の中に燃やして、エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。その火は消えることがない”(エレ.17:27)。将来の神の国の首都になると言われているエルサレムに(イザ.2:2-4; 詩.48:2)、対して話したこの話はその文字通りの意味ではありません。エルサレムの偉大なる聖殿は火で滅ぼされましたが(王下.25:9)、その火は継続的に燃えていないのです。

それと同様に、神はエドムの地を火で刑罰しました。“その火は夜も昼も消えず、その煙は、とこしえに立ちのぼる。これは世々荒れすたれて、とこしえまでもそこを通る者はない。...ふくろと、からすがそこに住み、...その城には、いらくさと、あざみとが生える”(イザ.34:9-15)。今いろいろな獣と草がその廃墟のエドムの土地に存在するのを見れば、その言葉、永遠の火は神の怒りと神が其処を完全に滅亡させることを意味しているを分かります。

“とこしえ”と翻訳されているヘブル語とギリシャ語の句節のその言葉は厳格な意味では“世々”を示しているのです。例をあげると、“永遠なる神の国”は、永久的でなく、その国の時代を示すのです。イザ.32:14, 15はその一つの例です。“丘とやぐらとはとこしえにほら穴となり、...しかし、ついには霊が上から我々の上に注がれるまで”。これはまた‘とこしえの火’の‘そのとこしえ’の本当の意味を分かる方法の一つです。反復してエルサレムとイスラエルの罪に対する神の怒りを率直に現わしました。“見よ、私の怒りと憤りを、この所と、人と獣と、畑の木と、地の産物にとに注ぐ、怒りは燃えて消えることがない”(エレ.7:20; 他の例、哀.4:11; 王下.22:17)。

火はまた罪に対する神の裁きと連合して話しています。特別にキリストの帰りにある裁きです。“見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽くして、根も枝も残さない”(マラ.4:1)。わらも人の体もみな焼かれて塵に帰るのです。だから人の体や枯れ草がとこしえに燃えると言うのではないのです。従って‘とこしえの火’は実際

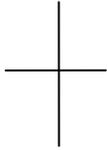
とこしえの拷問を意味しているのではないのです。なにも焼かれる物がないなら、火は消えてしまいます。“死も陰府も火の池に投げ込まれた”(啓.20:14)と話したのに注目すべきです。これはその陰府、墓が“火の池”でなく、完全な滅亡を意味します。啓示録は象徴的方法で書いているので、“死と陰府を火の池に投げ込む”と言う表現は、死と墓が完全になくなると言うのです。なぜならその千年王国の後はこの世に死がないからです。

ゲヘナ

新約聖書には二つのギリシャ語の単語が‘地獄’あるいは‘陰府’と翻訳されています。そのうち‘Hades’は私たちが既に論議したことがあるヘブル語の‘Sheol’と等しい言葉です。そして‘Gehenna’はエルサレムの外郭にあるごみ捨て場の名前です。そこにはいつもその都市から集めたごみを焼いていました。このようなごみ捨て場が今日発展している多くの日本の都市の外郭に設けています(例を上げれば、フィリピンの首都、マニラの外郭にあるSmoky Mountainなど)。これは固有名詞であるので、‘地獄’と翻訳されるより‘ゲヘナ’とそのまま発音した方がよいのです。‘Gehenna’はヘブル語の‘Ge-ben-Hinnon’をアラム語式で話しているのです。これはエルサレム上に近い所に位置していて(ヨシュ.15:8)、キリストの時代にもごみ捨て場として使用されていました。いつも火を燃やしているそこに処刑された死体らが捨てられて燃やされてしまうので、‘ゲヘナ’と言う単語は完全に消滅されるのを意味する象徴として使用しています。

再び指摘しますが、そこに捨てられた死体が永遠に燃やされるのではなく、燃やす間分解され塵となってしまうのです。“私たちの神ヤウェは、実に、その裁きの日、焼き尽くす火であります”(ヘブ.12:29)。罪に対する彼の怒りの火が罪人たちを焼き焦がす状態に永遠に置くのではなく、彼らを焼き尽くしてしまうのです。神が以前彼の民イスラエルをバベロニヤの国によって裁く時、その‘ゲヘナ’は神の民の中にいた罪人の死体で満ちていたと話しているのです(エレ.7:32,33)。

それに精通していた主イエスは、彼が‘ゲヘナ’の言葉を使用する時に、それに関する旧約聖書の考えを全部引き出しているのです。彼は度々彼の帰りにある裁きの座で捨てられた者たちはみな“ゲヘナ(地獄)に入る、そこはうじが付き、火も消



えることがない” (マコ.9:43,44)と話しました。‘ゲヘナ’はユダヤ人たちの心に人が罰せられて、その死体が捨てられて、永遠に滅亡すると言う考えを現わしていました。

その永遠な火とは罪を罰することに対する神の怒りを現わす慣用語であって、罪人は死を通して永遠に滅亡されてしまうのです。“そこではうじがつきず、火も消えることがない”と言われたのも確かに完全消滅を現わす慣用語であって、文字通りに火のなかで絶対死なないうじはないのです。‘ゲヘナ’が神の民の中の悪人たちを罰して、その死体を処置していた場所であるなら、この比喩的‘ゲヘナ’の言葉をキリストが使用して罪人が刑罰を受けて永遠になくなると言われたことはあまりにも適切な表現であります。

間違った解釈11:煉獄

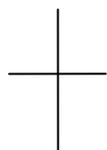
ローマ・カトリック教は神の民の霊魂が死の後、天と地獄の中途にある‘煉獄’と呼ばれる所に行くと言っています。それは人を清める所で、そこで霊魂が暫くの間困難を受けて天に行く救いを得るに相応するになると言っています。彼らの友たちや親戚の人が祈りを上げ、教会の聖燭や献金を捧げるによって、その霊魂が‘煉獄’での困難の期間が短くなるというのです。このような考えは次のことから完全に間違っているのです。

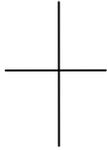
聖書はそのような所に関して何のことも話していません。

私たちは聖書で‘霊魂(Soul)’とは私たちの中にある何か不滅の要素でなく、人の体を話すのであると示しました。そしてその‘地獄’は永遠に罰する所でなく、死体を葬る墓であると示しました。

義人たちの霊魂が天に行くと言っています。救いはキリストが帰り来て裁きの時に下さるのであり、死後暫くの間‘煉獄’に行くのではありません(マタ.25:31-34; 啓.22:12)。

すべての義人が、一人一人違う時に救いを受けるのではなく、同時に彼らの補償を受けるのです(ヘブ.11:39,40; テモ后.4:8)。





煉獄の教理が提示しているように死後も行動があるのでなく、死は完全に無意識の状態です。

私たちはキリストに預かるバプテスマを通して罪が取り除かれ、死後しばらくの間受ける困難を通してでなく、この世で生活する間彼の使役を信ずる堅固な信仰によって発展するのです。私たちは生活で“古いパンの種をきれいに取り除くように”(コリ前.5:7)、罪の仕事からきれいになることを(テモ后.2:21;

へブ.9:14)告げられています。従って私たちを罪からきれいにする期間は今この世で生きる時であって、死後‘煉獄’でするものではありません。今は“恵みの時、救いの日であります”(コリ后.6:2)。私たちが、煉獄で暫くの間留まるのでなく、バプテスマを受け神に服従し、靈的性格に発展するのが救いになるのです(ガラ.6:8)。

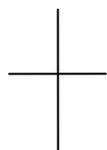
他の人たちが救われるように聖燭や献金をカトリック教会に捧げるのは私たちの救いを得るに何の効果もありません。“財宝を頼みとする者は、...

彼の兄弟をも贖い得なく、神に身代金を払うことは出来ない。...とこしえに払い終えることは出来ないのです”(詩.49:6-9)。

間違った解釈12:幽霊と靈魂来臨説

人が死んでも、彼には靈魂、あるいは霊があって、継続的に存在すると信ずる信仰は人類の歴史の初期から、人の死が人生の終わりでない自ら自慰しようとするところから起こった考えです。

私たちは人間の霊は彼らの内にある人の呼吸、生命力であって、それが人が死ぬ時神に帰する(伝.12:7)と示しました。これは彼の霊が‘幽霊’となって動き回るのではなく、また他の人、あるいは動物に入ってその者の人格になって継続的に生きるのではないのを意味しています。私たちは私たちが行ったことについて裁き受けるでしょう(コリ后.5:10)。もし私たちの行動や品行が他の人の性格の機能から生じたとすれば、私たちの行動に従って補償されると言われた神の言葉は何の意味がないのです(啓.22:12)。



人が死ぬと彼の霊が神に帰し、すべての意識がなくなります。従って死者と関係を持つことが出来ると言うのは死に関する聖書の教えを全く誤っているのです(イザ.8:19、20を見なさい)。聖書は人たちが死んだ後彼らの家とか彼の町に帰り来ることが出来ないとはっきり説明しています。だから人が死んだ後彼の幽霊とが靈魂があちこち動き回るのはないのです。ヨブ.20:7-9でそれはあまりに愚かな考えであると話しました。“彼は(人)おのれの糞のように、とこしえに滅び、彼を見た者は言うであろう、「彼は何処におるか」と。...

彼を見た目はかさねて彼を見ることができなく、彼のいた所も再び彼を見る事がなからう”。ヨブ.7:9、10には、それと同じく話しています。“墓に下る者は上がって来ることがない。彼は再びその家に帰らず、彼の所も、もはや彼を認めない”。これを謙遜に受け入れる者だけが死者の‘幽霊’か彼の古い家にめぐり回るのを見たとき主張する偽りを無視することが出来るのです。それは皆想像のトリックに過ぎないのです。

間違った解釈13:復活される体質

私たちは永遠の命と神の本性に変える体質はその裁きで忠誠な者たちに与えると示しました。キリストがこの世に帰ってすることは始めにその責任ある人たちを復活させることであって、その後は彼らを集めて裁くのです。その不滅の命は裁きの後に与えるから、彼らは以前と同じく死ぬべき体で復活するのです。もし彼らが不死の命を持つ体で復活するなら彼らを裁く必要がないでしょう。

私たちはその裁きを受けた後ただちに神の国に入ります(マタ.25:34)。従って忠誠的信者でもその裁きがある迄は神の国に入ることが出来ません。“肉と血とは神の国を継ぐことが出来ないのです。...またたく間に、一瞬に変えられる。...なぜなら、この朽ちるものは必ず朽ちない者を着、この死ぬものは必ず死なないものを着ることになるからである”(コリ前.15:50、51、53)。死ぬべきものから死なないものにならなければ神の国に入れないから、その本性の变りは裁きの座において起こるのです。

しかし、靈感されていた使徒パウロは度々裁きの後永遠の命を受ける義人の復活、“命の復活”をただ“復活”と話しています。勿論彼は、“正しい者も正しくな

い者も、よみがえるのを” (使.24:15)知っていました。彼は責任ある者が“裁きを受けるために蘇り、善を行った人々は、生命のを受け、悪を行った人々は呪いを受ける” (ヨハ.5:29)ことを充分認識していたでしょう。

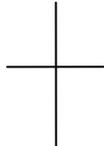
パウロは“復活”に関して話す時、“命の復活”と積極的方法で話していたと思います。義人たちは“生命の復活”を得るために彼らの墓から出て来ると、彼は地から出て来て裁きを受け永遠の生命を得ると話しています。これは“生命の復活”の全過程を話しているのです。彼らが墓から出る復活と“生命の復活”とは違うのです。パウロは、彼がクリスチヤンの生活をしているのは“なんとかしても死人のうちからの復活に達したい” (ピリ.3:11)のであると話しました。彼は責任があるから復活して裁きを受けるのです。従って彼が何とかしてもと復活したいと話しているその“復活”は“生命の復活”に違いないのです。

その“復活”が“生命の復活” (ルカ.14:14)を意味している他の例はルカ.20:35; ヨハ.11:24; コリ前.15:21、42; ヘブ.11:35; 啓.20:6に含まれています。詩.17:15でダビテは“彼が”起こされた瞬間補償を受けることを話しています。彼は裁きがあるところを知っていたけれども、パウロと同じ復活観を持っていました。パウロがコリ前.15章で使用した“復活”は、コリ前.15:52で“死人が朽ちない者によみがえらせる”と言うのを説明しているのです。その句節で“死人”と言う言葉は義人を話しているのに注目しなければなりません。彼らは裁きで永遠の生命を受けるために復活するでしょう。コリ前.15:13、21、35、45; テサ前.4:16; ピリ.3:11; 啓.14:13; 20:5、6。

テサ前.4:16、17はキリストの帰りに連合して起こるべき事件を列挙しています。

1. キリストは私たちが見られるように来られる
2. キリストにあつて死んだ者が起き上がる
3. その時生きている信者たちは裁きの座に奪い行く

その永遠の生命を与えるのはその裁きのために集まった後にあるのです(マタ.25:31-34; 13:41-43)。従ってこの集まりがあることを考えて見ると、不死の体は復活と同時に与えるものではありません。私たちはすべての義人が同時に補償されることを示しました(マタ.25:34; ヘブ.11:39-40)。復活した者が生きていた信者たちと共に集まるのを考えて見ると、不死の体が復活と同時に与えると言うことは不可能でしょう。



しかし、私たちは、時間の概念が極人間的であることに留意すべきです。神はその時間概念に限定される方でないから、キリストの帰りの時期に起こる事件らの特定な順序を割り出すことが出来るのです。裁きの座で復活した者が不死の体に変えるのは“またたき間に、一瞬に”起こると描写しています(コリ前.15:51、52)。必然的に、キリストの帰りに瞬間には、少なくとも裁きを受ける彼らのためには時間が違う次元で進行するでしょう。その裁きに責任がある人たち各々が裁きの座で彼らがこの世で生きた生活を告げ、ある程度彼らの審判官である主イエスと討論するというのが一般的聖書の原則です(マタ.25:44; 伝.3:17; 12:14; ルカ.12:2、3; 19:23; エゼ.18:21、22; テモ前.5:24、25; ロマ.14:11、12)。その責任を持つ人の数がおびただしいので、彼らをいちいち短い瞬間に審査するには、時間の流れが休止あるいは圧縮されると思います。この段階において時間が圧縮されると考えて見ると、復活と裁きの全過程が“またたきの間に、一瞬間”に起こるので、復活を度々義人に永遠な生命を与える意味として話したのが理解出来るのです。しかし、これは私たちが墓からその裁きの座まで移転する時の速度のためであって、その後は神の恵みによって私たちは不死の状態です。このために、テサ前.4:16、17は義人たちをラッパが鳴り響くうちに裁きに連れて去ると話し、コリ前.15:52でも同じくそのラッパが彼らに与える永遠の命の補償と連合して話しています。これはまたパウロが復活が裁きで神に受け入れられるのと一致すると考えているのを説明しています(ピリ.1:23)。

間違った解釈14:空中で主に出会う‘携擧’

‘エヴァンジェリ派’の教会らには、キリストの帰りに義人の霊魂が空中で主に出会う‘携擧(Rapture)’と言う信仰が広がっています。この信仰は度々この地が破壊されてしまうと言う考えと連合されています。間違った解釈9でこれは不可能なことであると説明しています。また学習4.7で信仰の補償を受ける処が天でなく、この地であると示しています。この間違った信仰はテサ前4:16、17の間違った解釈から起こった教理です。“主ご自身が...天から下って来られる。その時、キリストにあって死んだ人々がまず最初に蘇り、それから生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会い、こうして、いつも主と共にいるであろう”。

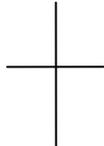
そのような重要な信仰をただ一ページの句節にて確立する明らかな危険を離れて、義人が天に“引き上げられる”と言及したことがないのに注意すべきです。信者がキリストを合うに前に彼が天から下ってくるのです。キリストはエルサレムにあるダビテの御座で永遠にこの世を治めるのです。従って私たちが空中に浮遊しながらとこしえに彼と一緒に居ると言うのはとても不可能です。地球の表面からただ数キロ.メターの所に神が住む処、天とは言えないのです。

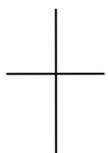
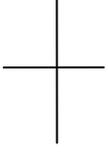
その“引き上げられる—Caught up”と翻訳されたギリシャ語の意味は奪い去るということです。その言葉には特定の方向の意味が全然ないのです。その言葉は品物が泥棒に“奪われる”とギリシャ語の旧約聖書(70人訳本)、レビ.6:4と申.28:31にあります。それはまた使.8:39にあります。“主の霊がピリポをさらって行ったので、宦官はもう彼を見ることが出来なかった。...その後、ピリポはアゾトに姿を現わした”。この記録はピリポが奇跡的に一つの処から他の処に移転しているの説明しているのです。

キリストが帰り来る時、責任ある者たちがそのように裁きの座に集まるでしょう。彼らは彼ら自身の道を選んで其処に行かないでしょう。私たちが其処に行くには多分空中を通じて移転するでしょう。

イエスは、人の子が現れる日も、ちょうどそれと同様であろう。...二人の男が畑におれば、一人は取り去られ、他の一人は残されるであろう”(ルカ.17:30、36)と話しました。これは突然取り去られるのを描写しているのです。“弟子は本気で、「主よ、それはどこであるのですか」と尋ねた。するとイエスは言われた、「死体のある所には、またはげたかが集まりものである」”(ルカ.17:37)。はげたかは本能的に空中を通して死体がある所に飛んで行きます。そのように責任がある者たちが主に会われるその裁きの所に連れられて来るのです。

私たちはもう一度キリストの裁きの座に関する教理の重要性を強調します。義人たちが補償される前に、まず責任ある者たちがに其処に現れるのです。テサ前.4:16、17を皮相的に読んだら、責任あるすべての者が空中に引き上げられるて、そこにキリストと一緒に永遠に留まるように思われます。その代わりに、私たちは責任ある者たちが裁きの所に集まり、多分空中を通して移転するでしょうが、その後補償されるのです。





学習 4: 問題と解答

1.人が死んだ後にはその人にどんなことが起こりますか？

- a) その人の霊魂が天に行く
- b) 無意識の状態になる
- c) その霊魂が裁きまで何処かに留まっている
- d) 悪人の霊魂は地獄に行き義人の霊魂は天に行く

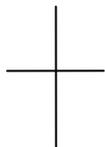
2.霊魂とはなんですか？

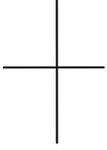
- a) 人間の不滅の部分
- b) その言葉は人間自体、‘体、人、生物’の意味
- c) 霊と同じもの
- d) 死後天にあるいは地獄に行くもの

3.人間の霊は何ですか？

4.人間の本性に関して説明しなさい。

5.死は無意識の状態であると言う二つの聖書句節を記入しなさい。



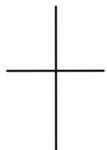


6.キリストの裁きの座に対して知っていることを話さい。

7.誰が復活し裁きを受けますか？

8.地獄とは何ですか？

9.ゲヘナとは何ですか？



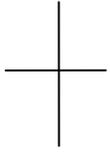
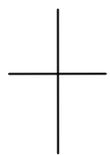
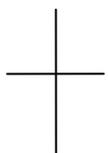
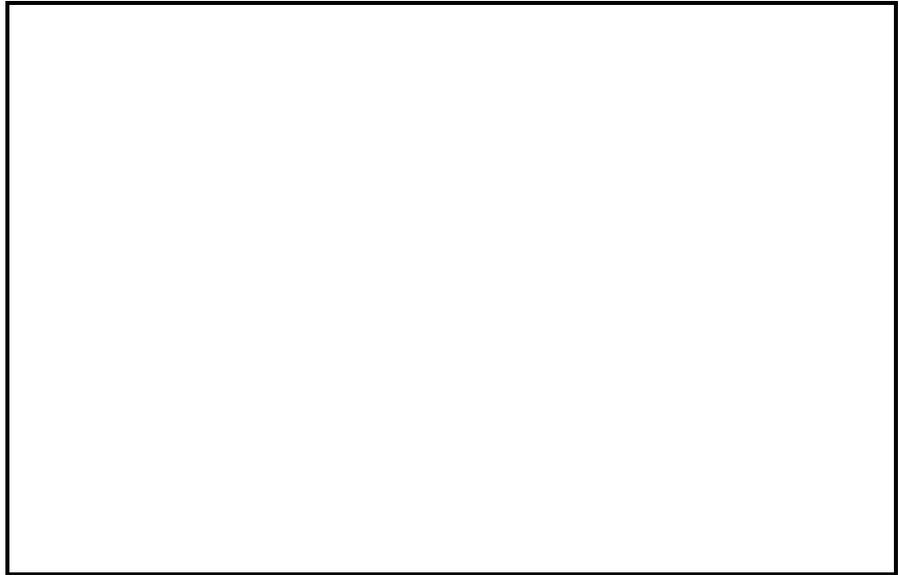
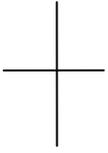


写真 5





5.1 神の国:その定義

前の学習で神が彼の忠誠な民に与える補償は永遠な命であると示しました。この永遠な命はこの地で生きるのであります。神がくり返して約束しているその補償は忠誠な者が天に行くのではないのです。“神の国に関する福音は”(マタ.4:23)この地で永遠に生きると言う約束の形式でアブラハムに伝えられました(ガラ.3:8)。従って“神の国は”キリストがこの地に帰り、この約束が成就された時建てられるのです。神は今もすべての被造物に支配者でありますけれども、しばらくの間人間が自由意志で治めるように与えているのです。従ってこの世界は現在“人間の国”となっているのです(ダニ.4:17)。

キリストの帰りで、“この人間の国は、私たちの主とそのキリストの国になり、主は限りなく支配するになるでしょう”(啓.11:15)。それでこの地は神の意志と要求が完全に実行されるでしょう。イエスは私たちにこのように祈ることを命令しました。“御国が来ますように、み心が天に行われる通り、地にも行われるように”(マタ.6:10)。このゆえに、“神の国”を“天国”と取り替えた句節があります(マタ.13:11; マコ.4:11,比較)。私たちは‘天にある国’とは決して読まないのに注目すべきです。それはキリストの帰りに彼によって建てられる神が計画した天国です。天における天使たちが完全に神に服従しているように(詩.103:19-21)、将来のこの地に建てられる神の国もそのようになり、“天使たちに等しく”(ルカ.20:36)なった義人たちによってこの地が治められるのです。

従ってキリストの帰りに神の国に入ることはこの世でクリスチャンが努力する結果によるのです(マタ.25:34; 使.14:22)。だからそれに関して正しく分かるのが絶対に重要です。“キリスト”に関するピリポの伝播の主旨は“神の国に関することとイエス・キリストの御名に関することでした”(使.8:5、12)。パウロの伝播の主な仕事は“神の国”であったことを聖書のページごとに思い起こさせています(使.19:8; 20:25; 28:23、31)。神の国は福音メッセージの重要な部分であるので、その教理を完全に理解するのはもっとも重要なことです。“「私たちが神の国に入るのには、多くの苦難を経なければならぬ」”(使.14:22)。それはこの世の長いトンネルの末にある光であり、クリスチャン生活に含まれている犠牲を払う動機となるのです。

バビロニアの王ネブカデネザルは世界の将来に対して分かろうと悩んでいました(ダニ.2章を見よ)。彼はいろいろな金物で造られた大きい像が立っているヴィジョンを見ました。ダニエルは金で造られたその像の頭はバベロンの王を現わしている(ダニ.2:38)と解釈しました。彼の後にイスラエルの周囲に主な帝国が次々に起こり、“その足の一部は鉄、一部は粘土であったように、その国は一部は強く、一部はもろいになる”(ダニ.2:42)状態に発展すると結論づけました。

今ヨーロッパは多くの国に分裂して一部は強く、一部は弱い状態の勢力均衡になっています。そしてダニエルは一つの石がその像の足を撃ち、その像が砕かれましたが、その像を撃った石は全地に満ちる大きな山となるのを見ました(ダニ.2:34,35)。この石はイエスを現わすのです(マタ.21:42; 使.4:11; エペ.2:20; ペテ前.2:4-8)。彼がこの地に造る“山”はどこしえに続く神の国を現わし、その国は彼がこの地に帰って設立するのです。この予言はそれ自体がその国を天に建てるのでなく、この地に建てることを明らかに示しています。

その国は唯キリストの帰りによって完全に設立されることを他の句節でも主題として話しているのです。パウロは“生きている者と死んだ者とを裁くために来られるイエスとその御国を思いなさい”(テモ后.4:1)と話しています。予言者ミカも、神の国が巨大な山であるとダニエルの概念をくみ取って話しています。“末の日になって、主の聖殿の山はもろもろの頭として堅く立てられる”。彼は続いてこの国が地でどうなるかを描写しています(ミカ.4:1-4)。神がイエスにエルサレムにあるダビテの御座を下さるでしょう。“彼はどこしえにヤコブの家を治め、その支配は限りなく続くでしょう”(ルカ.1:32,33)。これはイエスがダビテの御座で支配し始め、彼の国が始めることを指摘しているのです。これはキリストがこの地に彼らなければ始まる事ができないのです。“彼の支配は限りなく続く”と言われたのがダニ.2:44とつながるのです。“天の神は一つの国を建てられます。この国はいつまでも滅びることなく、その主権は他の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすでしょう”。啓.11:15もこれと同じ言葉で主の帰りにおいでなされることを描写しています。“この世の国々がわが主とキリストの国となり、主は限りなく支配するであろう”。この地にキリストの国が設立され、彼が支配し始める時、この地には特定な時期に入るのです。これは必ず彼の帰りによって起こるでしょう。

5.2 神の国は今設立されていない

神の国が現在信者たちから構成されている教会であると解釈して、もはやこの地に完全に存在すると言う観念が世界に広がっています。これに対して真の信者たちは将来救われ神の国に入ることを期待しています。キリストが帰り来て神の国を建てていないのをはっきり分かっていると、今その国がこの地にいないと言うのは恐らく疑われない事実でしょう。

それは私たちが今まで学習した“肉と血は神の国を継げ受けることが出来ない”(コリ前.15:50)としていることから明かに知っていることです。バプテスマを受けた私たちはアブラハムにして下さった約束、一神の国に関する基本的福音を構成している約束を継ぐ者たちであるから、(マタ.4:23; ガラ.3:8、27-29)、私たちは“神を愛する者たちに約束された御国の相続者であります”(ヤコ.2:5)。従ってアブラハムにして下さった約束が果たされる時(マタ.15:34; コリ前.6:9、10; ガラ.5:21; エペ.5:5)、キリストが帰り来るその時約束のその国を相続するのです。将来の相続と言う言葉を使用しているその事実が今信者たちがその国を所有していなのを示すのです。

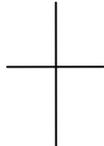
イエスは彼らの考えを正しくするために比喻の話しで告げたことがあります。“人々が神の国はたちまち現れると思っていたためである。それで言われた。ある身分の高い人が、王位を受けて帰って来るために遠い所へ旅立つことになった”。それで彼の僕たちにある仕事を与えて発ちました。“さて、彼が王位を受けて帰って来た時、彼は僕たちを呼んで来させ、彼らを裁きました”(ルカ.19:11-27)。

その身分の高い人は“遠い所”天に王位を受けるために行って、それを受けて帰って来た時裁きを行うキリストを現わしています。従って彼らの主がまだ帰って来ないのに、その“僕たちが今その国を所有している”と言うのは言語道断のことで

す。

次の句節らはこれに関してもっと多くの証拠を示しています。

“私の国はこの世のものではない”(ヨハ.18:26)とイエスは明白に話しました。しかしその時でも“私は王である”(ヨハ.18:37)と話しましたが、それは彼の国が今設立されている事を意味するものではありませんでした。1世紀の忠誠な信者たちさえも“神の国が来る”のを期待していました(マコ.15:43)。



キリストは彼の弟子たちに“私の父の国であなたがたと共に、新しく飲むその日までは私は今後決して、葡萄の実から造った者を飲むことはない”(マタ.26:29)と告げました。これは明らかにその国が将来にあることを意味しています。そして人たちが“神の国に関する福音の”キリストの教えも(ルカ.8:1)もそのように理解していました。彼が話した、“神の国で食事する人は、幸いです”(ルカ.14:15)と、この句節の神の国も将来の国でした。

ルカ.22:29、30にこの主題が継続しています。“私もその国をあなたがたにゆだね、私の国で食卓について飲み食べませす”。

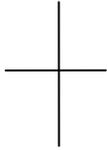
イエスは帰りの時にあるべきしるしを説明し、この言葉で結論つけました。“これらの事が起こるのを見たら、神の国が近いのだと悟りなさい”(ルカ.21:31)。彼が帰って来ていないのに、神の国が今この地に存在すると言うのはナンセンスです。

“私たちが神の国に入るのには、多くの苦難を経なければならない”(使.14:22)のです。信者がどんな苦難に会っても、その国が来るのを熱心に祈るべきです(マタ.6:10)。

神は“あなたがたを御国に召してくださった”(テサ前.2:12)のです。これに応じて、今私たちは霊的生活によってその国に入ることを求めなければならないのです(マタ.6:33)。

神の国はあなたがたの内にある

このように神の国が設立さえる時に対して力説してにも拘わらず、いわゆる正統的‘キリスト教’は神の国が今信者の心の内にあると“神の国はあなたがたの内にある”(ルカ.17:21)と言われた一つの句節に彼らの信条を置いています。この句節をもっと正しく翻訳すると、“神の国はあなたがたの中にある”と言うことです。その文脈はイエスがパリサイの人たちに話しているのであって(20節)、その“あなたがた”は彼らパリサイたちでした。彼らは確かにクリスチャンではなかったのですから、神の国が彼らの心にあったはずがないのです。



ユダヤ人たちは公にメシヤを求める彼らの熱心を見せていました。メシヤが神の国の王であるから、この句節の、“その神の国”とはメシヤの主権を話しているのです。かつてイエスがエルサレムに入場した時、群集は呼び叫びました。“ヤウエの御名によって来る者(メシヤ)に、祝福あれ。今来る、私たちの父ダビテの国に、祝福あれ”(マコ.11:9,10)。このメシヤと“神の国”は等しいものです。パプテストヨハネも“天国は近づいた”(マタ.3:2,3)と伝えました。これは予言されている彼(イエス)を示すのでした。ルカ.17:20-24には、“神の国はいつ来ますか”と“人の子”の帰り来るに対して尋ねた時、イエスが答えたのです。

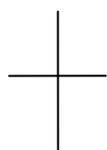
キリストは、メシヤが突然ユダヤ人たちに勢力を持って来ると期待しながら、熱心に彼の現れを求めている彼ら自身が、“一神の国”のメシヤが現れたのも悟ることを出来ずにいるので、イエスは“「神の国は、見られるかたちで来るものでない。... 見よ、神の国は既にあなたがたの中にあるのだ」”(ルカ.17:20,21)自分自身がメシヤであると彼らを悟らせようとしたのでした。

5.3 過去の神の国

神の国は信者たちに与える将来の補償です。それはキリストを模範として彼を習う信者たちの犠牲的生活の動機であり、たとえ、短い期間の受難と苦痛であってもそれを目当てにしています。従って彼らは素晴らしい将来の世を期待して総ての日を生きているのです。その国は信者たちが受ける霊的努力の総計であり、父として愛する神が彼の子らに宣布する完全な宣言であるのです。

聖書は神の国がどんなものであるかを詳細に説明しています。あなたが一生涯それを研究してもほんのわずかしは見出さないでしょう。その一つの方法は、過去のイスラエルの国の形で存在した神の国を認識するのがこの将来の神の国の基本原則を理解出来るに至らせるのです。この国はキリストが帰り来て設立するのです。聖書の多くが将来組織される神の国のアウトラインを理解させるのために、イスラエルの国に関する知識を与えています。

神は度々“イスラエルの王”と描写されています(イザ.44:6; 41:27; 43:15; 詩.48:2; 89:18;



149:2)。またイスラエルの人たちが彼の国になりました。彼らがエジプトから出て紅海を渡り進行してシナイ山に至り、神と契約するによって彼の国になりました。自発的にこの契約を守ることに応ずるによって、彼らは“神に対して祭司の国となり、また聖なる民になるようになっていました”(出.19:5、6)。“イスラエルがエジプトをいで、...ユダは神の聖所となり、イスラエルは主の所領となった”(詩.114:1、2)。この契約に入った後、イスラエルがシナイの荒れ野を経て約束したカナンの中に入りました。神が彼らの王でしたが、彼らはその王によらずに、むしろ“士師たち”(ギデオン、サムソン)によって治められました。この士師たちは彼らの王でなく、神の導きにより彼らの全地でなく、一部の土地だけを治める行政官でした。彼らは特定の目的、イスラエルを悔い改めさせて、彼らの敵から救うために、度々神が呼び起こした人たちでした。イスラエル人たちが士師ギデオンに彼らの王になることを要請した時、彼は、“私はあなたがたを治める事はいたしません。...ヤウエがあなたがたを治められます”(士.8:23)と答ました。

サムエルはイスラエルの最後の士師でした。彼の時代イスラエル人たちは彼らの周囲にある国のように人間の王を立てることをサムエルに要求しました(サム上.8:5、6)。歴史を通して、神の民は彼らの神との親密な関係を過小評価して、彼らの周囲の人たちと同じくならうと彼らの神を捨てました。この誘惑は現在の世がもっと激しいのです。神はサムエルの嘆きを聞き、“彼らは私を捨てて、彼らの上に私が王であることを認めないのである”(サム上.8:7)と話しました。しかし、神は彼らに悪人サウルを始めに王として与えました。その次には義人ダビテが王となり、彼から王の家系が続きました。もっと霊的心を持っている王たちは、彼らが神の王権を拒絶しても、イスラエルが神の国であることを悟りました。したがって彼らは彼ら自身の権力でなく、むしろ神に代ってイスラエルを治めることを認めていました。

この原則を認識すると、ダビテの子、ソロモンが“神の御座”につかせ治めるようにしたと描写されている意味を理解することが出来るのです(代下.9:8; 代上.28:5; 29:23)。ソロモン王の偉大なる平和と繁栄の統治は将来神の国に対して予表しているのです。これは彼が神に代ってイスラエルの王となっていたのが、将来はイエスがまたイスラエルの王として神の御座に坐って治める(マタ.27:37、42; ヨハ.1:49; 12:13)になるのです。

旧約聖書に書かれたいる多くの正しい王は将来のキリストの国の予表であるイスラエルの国を治めました。ソロモンがエルサレムに神の家を立てたように、またキリストも将来そこに聖殿を立てるでしょう(エゼ40章-48章)。ヘゼキヤとソロモン

王が周囲の国から貢ぎ物を受けました(王上.10:1-4; 王下.20:12)。彼らが仰天すべき豊富と繁栄で祝福されたイスラエルの地を見て驚いたのと同じく(王上.10:5-15; イザ.37:30)、世界のすべての国民がそれより大規模の平和と繁栄のキリスト王国を見るでしょう。

ソロモンの乱婚

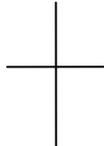
ソロモンはとても良い出発をしたけれども、なお若い時に間違った婚姻関係により年をとるほど彼の霊力が次第にそこなってしまう。 “ソロモン王は多くの外国の女を愛した。すなわちパロの娘、モアブの人、アモン人、エドム人、シドン人、ヘテ人の女を愛した。主はかってこれらの国民について、イスラエルの人々に言われた、「あなたがたは彼らと交わってはならない。彼らもまたあなたがたと交わってはならない。彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせるからである」。しかしソロモンは彼らを愛して離れなかった。...

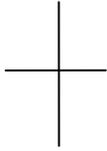
その妻はたちが彼の心を転じたのである。ソロモンが年老いた時、その妻たちが彼の心を転じて他の神々に従わせたので、彼の心は父ダビテの心のように、その神、ヤウエに真実でなかった。...

このようにソロモンはヤウエの目の前に悪を行ない、...

ヤウエに従わなかった。...ヤウエはソロモンを怒られた。...それゆえにヤウエは彼に言われた。...私は必ずあなたから国を裂き離して、それをあなたの家来に与える” (王上.11:1-11)。

ソロモンの背教への墮落は一生涯続きました。イスラエルの神の知識を持っていない女との関係は彼を彼女らの神々へ同感するようにに導きました。彼の妻らに対する彼の愛は彼が信ずる真の神に対する霊的悪逆の行動であることに思わないようになりました。時が過ぎるによって、彼の心はもはやイスラエルの神を拝まなくなりました。 “彼の心はイスラエルの神に真実でなく”、すなわち、その神々を拝むことが彼の良心になんの呵責もなくなりました。真の神に対する彼の信頼の欠乏によって、“ソロモンは神の目の前に悪を行ない”、神が彼と断交するようになってしまいました。神は異邦の女と結婚しないことをイスラエルにくり返し告げました(エゼ.34:12-16; ヨシュ.23:12、13; 申.7:3)。





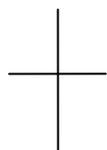
私たちはキリストに預かるバプテスマを受けて霊的イスラエルになっています。もし独身者であれば、私たちは霊的イスラエルと結婚すべきです(コリ前.7:39)、すなわち、バプテスマを受けた他の“キリストチャン”と結婚すべきであります。もしバプテスマを受ける時既に結婚しているとすれば、その妻と離婚してはいけません。私たちの結婚生活は信仰によって清められます(コリ前.7:12-14)。意識的に真の神を知っていない人との結婚は、結婚生活の間知らず知らずに背教に落とされるのです。ソロモンはそのような妻たちとの結婚に対する神の警告の真価を分からなかったのです。“彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせるからである”(王上.11:2; 出.34:16)。

私たちは既にいわゆる正統的キリスト教がクリスチャンの望みをユダヤ人たちの望みに基礎していないと提示しました。彼らは真の神イスラエル神を知っていないのです。そのような人たちとの異族結婚は私たちをその救いの基礎である栄えある真理の教理から漸次的に衰退させて行きます。このわけで、イサクとヤコブは遠い所まで行って真の神を信仰している娘たちと結婚しました。イサクは正しい女を見つけるために40歳になるまでも待ちました(創.24:3、4; 28:1)。エズラとネヘミヤはあるユダヤ人たちが非ユダヤ人と結婚したと言う事を聞いて悩み、この問題の深刻さを現わしています(エズ.9:12;10:29、30)。

結婚は一層深く考えなければならない重要な問題であるから、この問題はこの段階で提起して置き、学習11.4でもっと詳細に検討して見ましょう。

神の裁き

ソロモンの背道の結果、イスラエルの国は二つの国に分裂されました。ソロモンの子、レハブハムはユダ部族とベニヤミン部族そしてマナセ部族の半分を治め、これに対してヤルブアムは他の十部族を治めるようになりました。その十部族の国をイスラエル、あるいはエブライムと呼び、その二部族の国はユダヤと呼ぶようになりました。そのすべての部族がソロモンの悪の模範に従って、彼らが真の神を信ずると主張しながら、同時に周囲の国の偶像を神として崇拜しました。神は予言者たちを通して悔い改める事を重ねて彼らに訴えましたが、何の役にも立たないのです。これゆえに、神はイスラエルの国を罰して敵の国に追放しました。これはアッシリ



アとバビロニア帝国がイスラエルを侵略し、彼らを捕虜として連れて行くによってなされました。“それでもあなたは年久しく彼らを忍び、あなたの予言者たちにより、あなたの御霊を持って彼らを戒められましたが、彼らは耳を傾けなかったので、彼らを国々の民の手に渡されました”(ネへ:9:30)。

十部族のイスラエルの国は彼らの歴史に良い王を全然持っていないのです。ヤルブハム、アハブ、エホアハズ等、皆が偶像崇拝者であったことが列王記に書かれています。イスラエルの最後の王、ホセアは彼がイスラエルを治める間アッシリアの国に敗北され、その十部族は捕虜として連れられて行き、故国に帰ることが出来ず散り消えました(王下:17章)。

二つの部族のユダヤ国も大部分が悪い王が治めたけれども、かなり多くの良い王がありました(ヘゼキヤ、ヨシヤ王等)。その民の反復した罪のために、神はその国の最後の王ゼテキヤの時、ユダヤの国を転覆させました。これはバビロニア帝国の侵略と彼らをバビロンに捕虜として連れて行くによってなされました(王下:25章)。彼らは70年間バビロンに留まった後エズラとネヘミヤの導きでイスラエルに帰る事が出来ました。彼らがバビロニア、ギリシャとローマ帝国に統治されて以来彼らは決して彼ら自信の王を持つことが出来なくなりました。イエスはローマ帝国の時代に生まれました。イスラエルがイエスを排斥したため、A.D.70年ローマ帝国が侵略し、彼らは全世界に散り広がるようになりました。今からただ100年前に彼らは故土にパレスチナに帰り始めました。これはこの地にキリストの再臨が迫っているのを徴しているのです(付録3を見なさい)。

エゼキエルは、神の国、イスラエルの国の滅亡を予言しました。“汚れた悪人であるイスラエルの王君よ(すなわち、ゼテキヤ)、あなたの終わりの日の刑罰の時である日が来る。主なる神はこう言われる、かぶり物を脱ぎ、冠を取り離せ。すべてのものは、そのままに残らない。...

ああ、破滅、破滅、破滅、私はこれを来させる。私を与える権威を持つ者が来る時まで、その跡形さえも残らない”(エゼ:21:25-27)。このの句節と句節は神の国の終わりを嘆いています。ほかの予言者たちもそれと同じく話しています(ホセ:10:3; 哀:5:16; エレ:14:21; ダニ:8:12-14)。

そのエゼ:21:25-27の三重の“破滅”はバビロンの王ネネブカデネザルによる三度の侵略を話しているのです。思慮深い読者はこの句節でその神の国とその王が取り預かれた他の例を考えて見るでしょう。ゼテキヤの破滅は神の国の破滅でした(

学習5.2を見よ)。このようにイスラエルの国であった神の国は終わりました。“イスラエルの家の国の支配を絶つてであろう”(ホセ.1:4)。“私が与える権威を持つ者が来るまで”と言われているのは、“神が与えるその権威を持つ者がくると”その国がよみがえるのを暗示しているのです。キリストの帰りに、神は“彼の先祖ダビテの位とその国をイエスに与えて、とこしえに治めるようにするでしょう”(ルカ.1:32、33)。従って、これはその国の回復に関する約束が果される時でしょう。

イスラエルの回復

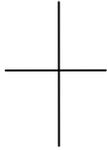
旧約聖書全体にわたって、メシヤの帰りに神の国の回復に関する予言者たちの素晴らしい一つの論題があります。キリストの弟子たちはこれに対して聞きました。“さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルの国を回復なさるのは、この時ですか」と尋ねた”。すなわち、‘エゼキエル書21:25-27の予言が今果たされるのですか’。たとえ天使たちがただちに彼の帰りを彼らに確約したけれども、イエスは自分の再臨の時はあなたがたが分からなくなっていると言う言葉で答えました(使.1:6-11)。

従って神の国、イスラエルの回復はキリストの再臨の時にあるのです。ペテロは“神がイエス・キリストを遣わして下さるでしょう。しかし、イエスは、神が聖なる予言者たちの口を通して、昔から予言しておられた万物更新の時まで、天に留めておかねばならなかった”(使.3:21)と伝えました。キリストの再臨に昔のイスラエルの国が回復しその上に神の国が設立されるのです。

神の国の回復は実に神の聖なる予言者たちすべての論題でした。

“その時、ダビテの幕屋に王座が慈しみを持って立てられ、その上に、治める者(イエスが再臨して、ルカ.1:32、33)が、真を持って座し、彼は公平を求め、正義を速やかにもたらす”(イザ.16:5)。

“その日には、私はダビテの倒れた幕屋(ダビテの“王座”ルカ.1:32、33)を興し、その破損を繕い、その崩れた所を興し、これを昔の時のように建てる”(アモ.9:11)。この最後の句は明らかにイスラエルを回復するということです。



神の国 165

“その(イスラエルの)子らは、いにしえのようになり、その会衆は私の前に堅く立つ” (エレ.30:20)。

“主はエルサレムを再び選ばれるであろう” (ゼカ.2:12)、エルサレムは彼の世界的王国の首都にするのです(詩.48:2; イザ.2:2-4 と比較)。

“私はユダヤとイスラエルの捕虜を帰えさせ、...

彼らを始めの時のように建て直す。...

再び喜びの声、楽しみの方が聞こえる。...それは、私がこの地を再び栄えさせて始めのようになるからである。...

羊の群れは再びそれを数える者の手の下を通り過ぎる” (エレ.33:7-13)

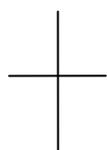
。

この国を建てるためにキリストが帰来するのは本当に“イスラエルの望み”であり、私たちはキリストに預かるバプテスマを受けるによってこれと連合されるのです。

5.4 将来の神の国

この学習の1と3で神の国に関する情報を十分得させるために相当の説明を割愛しました。私たちはアブラハムに彼の子孫を通して世界のすべての人が祝福を受けることになることと約束したことを考えて見ました。ロマ.4:13には、‘アブラハムの子孫であるキリストの内にある者たちに’ この世界を相続させるとその意味を拡大しています。ダニ.2章のその像に関する予言はキリストが一つの石として帰来して、その国が漸次的に世界的国家となることを説明しています(詩.72:8と比較)。これは神の国がエルサレムとかイスラエルに位置するばかりでなく、勿論そこがその国の中心になるけれども、全世界的であることを意味するのです。

キリストに生涯従う者たちはその国で“王と祭司になり、この地を治めるでしょう” (啓.5:10)。彼らの中に、ある者は十の町を治め、ある者は五つの町を治めるになるでしょう(ルカ.19:17)。キリストはこの統治権を私たちに割り当てるのです(啓.2:27; テモ后.2:12)。“見よ、一人の王が(イエス)、正義を持って統治する。君たちは(信者たち)公平を持ってつかさとる” (イザ.32:1; 詩.45:16)。



キリストは再建されたダビテの王座でとこしえに治めるのです(ルカ.1:32, 33)、すなわち彼はその権府があったエルサレムで、ダビテの地位と身分を持って治めるでしょう。キリストがエルサレムで治めるので、そこはその国の首都になるでしょう。またその地域に聖殿が建てられるのです(エゼ.40章-48章)。人々が広く世界のあらゆる所で神を礼拝するのに対して(マタ.1:11)、この聖殿は世界的礼拝の中心になるでしょう。諸国の人が“皆年々エルサレムの聖殿に上がって来て、王なる万軍の主を拝み、仮庵祭を祝う”(ゼカ.14:16)。

エルサレムに上がるこの年々の巡礼はまたイザ.2:2, 3にも予言されています。“末の日に、主の聖殿の山(国、ダニ.2:35, 44)は、山々の頭として堅く立ち、... 国々はこそってそこに向かい、多くの民は来て言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家(聖殿)に行こう。主は私たちに道を示される。... 主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る”。これは信者たちが他の人たちにキリストの治めを伝えるによって、その国の初期に現れることであって、彼らに“神の国の山”に登るのが世界に広がるでしょう。ここで私たちは神に対する正しい礼拝を熱望している人たちの絵を見ているのです。

今日人類の大悲劇の中の一つはすべての人が神を彼らの父や創造者であると認識したのを基礎として神を‘礼拝’するのではなく、社会的、政治的、文化的に、あるいは感情的行動によって礼拝するのです。しかし、神の国では神の道を習おうとする世界的熱意があるでしょう。人々はこの念願に動かされ、神に関する知識をもっと得るために世界のすべての地方からエルサレムに旅するでしょう。

その神の国は、人間の政治と行政制度による混同と不公平に代って、“主の教えと言葉”による、絶対に公平な制度と法律があるでしょう。その教えと言葉はキリストがエルサレムで世界に公表するでしょう。この教えの期間に“あらゆる国の人が”エルサレムに流れて来ると言うことは、神の知識を得ようとする一般の願いを示唆しているのであって、それは国家間の紛争は少なくなるでしょう。また個人間にも彼らの生涯とその知識を得るに献身するでしょう。

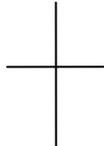
あらゆる国の人がエルサレムに流れて来ると言うこの描写はイザ.60:5に現れている絵に類似しています。そこでユダヤ人たちが異邦人たちと一緒にエルサレムに神を拝むために“流れ来る”と言われていています。これはゼカ.8:20-23の神の国に関する予言と完全に連結しています。

“更に多くの民、多くの町の住民が来る。一つの町の住民は他の町に行つて言う。「さあ、共に行つて(一 “年々エルサレムに上がつて” ゼカ. 14:16)、主の恵みを求め、万軍の主を尋ね求めよう」。「私も喜んで行きます」。多くの民、強い国々の民も来て、エルサレムにいます万軍の主を尋ね求め、主の恵みを求める。...あらゆる言葉の国々の中から、十人の男が一人のユダヤ人の裾をつかんで言う。「あなたたちと共に行かせて欲しい。私たちは、神があなたたちと共におられると聞いたからです」。

これはユダヤ人たちが悔い改めと神に従順するによってあらゆる国から“頭となり、尾とはなれない”のを現わす絵を書いているのです(申.28:13)。救いに関する神の計画の基礎であるユダヤ人たちはすべての人から感謝をうけるでしょう。これに関して無知な今日のキリスト教はその時突然消え去るでしょう。人々は熱心にこのことを検討し、彼らがユダヤ人たちに言うでしょう。“私たちはあなたがたと神と一緒にするのを聞いたのです”と。彼らの対話は、今日全世界の人が考えているようなつまらない妄想でなく、霊的ものを語るでしょう。

この偉大なる使命が敬虔な人たちに与えられて、キリストが“国々の争いを裁き、...
彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない”(イザ.2:4)と言われた事が果されたのを驚くべきではないのです。キリストの絶対的権威と紛争に対する彼の仲裁はすべての国家が自発的に彼らの戦争武器を農機具に替えるし、戦争練習を止めるでしょう。“彼の世に義は栄え、平和は月のなくなるまで豊かであるように”(詩.72:7)。その時は霊的者が高貴になり、神の特徴である愛、慈しみ、正義らを現わす者が尊敬されるでしょう。これとは対照的に、現在は高慢な者、我の強い者、利己の野望を持つ者が高められます。

自発的に“剣を打ちかえて鋤を作る”によって、この地には農耕に大なる変化をもたらすでしょう。アダムの犯罪の結果、この地は呪われて(創.3:17-19)、食糧を生産するに多くの努力が必要になっています。その国では、“一面に麦が育ち、山々の頂にまで波打ち、その実はレバノンのように豊かになるでしょう”(詩.72:16)。“耕す者は、刈り入れる者に続き、葡萄を踏む者は、種蒔く者に続く。山々は葡萄の汁を滴らせ、すべての丘は溶けて流れるでしょう”(アモ.9:13)。このように土地が肥沃に改良され、エデンの園で下されたその呪いは少なくなるでしょう。



そのような巨大な農企業に多くの人々が参加するでしょう。その国に関する予言は人たちが自給自足の農家スタイルの生活に変える事を話しているのが印象的です。

“彼らは皆その葡萄の木の下に座し、そのいちじくの木の下にいる。彼らを恐れさせる者はない” (ミカ.4:4)。

この自給自足の制度は伝統的雇用制度の乱用を克服する事が出来るでしょう。今人たちが生涯他の人の富のために働いたことは過去の昔言葉になるでしょう。

“彼らは家を建てて、それに住み、葡萄の畑を作って、その実を食べる。彼らが建てる所に、他の人は住まず、彼らが植えるものは、他の人がたべない。 ...

私が選んだ者は、その手の業をながく楽しむ。彼らの勤労はむだでない” (イザ.65:21-23)。

イザ.35:1-7には“荒野と、かわいた地とは楽しみ、砂漠は喜びて花咲き、さふらんのように、さかんに花咲き、かつ喜び楽しみ、かつ歌う。 ... それは荒野に水がわさいで、砂漠に川が流れるからである。焼けた砂は池となり、かわいた地は水の源となるからである”。動物間の敵意もなくなるのです。“おおかみと小羊とは共に食らい”、乳のみ子さえ毒蛇のほらに戯れる事が出来るのです(イザ.65:25; 11:6-8)。

創造の自然界に置かれた呪いも同じい方法で多く削減せられるので、人類に置かれた呪いが少なくなるでしょう。啓.20:2,3には、その一千年間は悪魔(罪と罪の効力)を“つなぎおき”、あるいは制限すると象徴的言葉で話しています。人間の寿命が増加するので、百歳になって死ぬ者が乳のみ子が死ぬように思われるのです(イザ.65:20)。女たちの出産の苦しみも少なくなるでしょう(イザ.65:23)。“その時、見えない人の目は開かれ、聞こえない人の耳は聞こえるようになる。その時、足の不自由な人は、鹿のように飛び走り、口のきけない人の舌は喜び歌うようになるでしょう”(イザ.35:5,6)。これは奇蹟的霊の賜物を再び所有するになるからです(ヘブ.6:5)。

神の国は熱帯地方の島のような楽園の自然の風景の中で義人たちが日光浴を楽しむような所でないのを強調してもなお足りないのです。神の国の根本的目的は神に栄光を捧げるのであって、この地が“海が水でおおわれているように、主の栄光の知識で満たされる”(ハバ.2:14)ことです。これは神の究極的目的です。“私は生きている。また主の栄光が、全世界に満ちるのである”(民.14:21)。神の栄光を捧げ

と言うことは、この地に住む住民皆が彼の義を認め、誉めたえ、それを模範としてえ行うのを意味してします。なぜならこの世がその状態なれば、神が実際彼自信をこの世に繁栄することになるからです。気楽な生活を楽しむよりも、“宥和な者が国を継ぎ、豊かな繁栄を楽しむことが出来る”（詩:37:11）ことです。“義に飢えわいている人たちは、幸いである。彼らは飽き足りようになるであろう”（マタ:5:6）。

いわゆる今日のキリスト教は神の国で永遠の命を得ることをちょうど人たちに‘にんじん’を与えて誘惑するように人を得ようとしています。しかし、神に栄光を捧げるべき、その国で存在することには理性的に深く考えて見なければならぬのです。バプテスマを受けた後、信者はいつでもこの認識を継続的に発展させなければならぬのです。著者は神に対して完全と良心の喜びでただ十年を生きるのがこの世で精神的な外傷を受けながら一生涯を生きるのより価値があると思います。その素晴らしい栄光的状態がとこしえに続くであろうと言う考えは人間が理解出来る限界の外に私を連れて行くような考えになります。

神の国は、もう少し物質的な条件を考えても、この世の進歩や唯物主義を見下げる私たちの至高の動機でなければならぬのです。その国がただちにくると過敏に思わないで、イエスの忠告を受け入れなさい。“先ず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう”（マタ:6:30-34）。実際神の国で果されることは今私たちが想像出来るいかなることとも比較が出来ないのです。

私たちは“神の義”を求めること、すなわち神の性格の愛で発展する必要があるのです。それは、神の国では義人が栄光を受けるようになるために、私たちがそこで生きたい望みを現わしているのです。また私たちがただ死を免れ永遠に気楽な生活を楽しむよりは、むしろ道徳的に完全な状態なることを望んでいるためです。

多くの伝道者はその福音の望みを人間の利己心に訴える方法で提示しているのです。勿論、神の国で生きたい私たちの動機は日増しに変わるのです。ここに提示していることは一つの理想です。私たちが先ずすべきことは福音を学び神に順従する動機からバプテスマを受けるによってそれに服従しているのを示すことです。神が与えているその望みの認識と、その国で生きたい正確な理由は、バプテスマを受けた後成長し成熟するのです。私たちが生涯追求すべき課題であります。

5.5 千年王国

神の国で住む生活を学習した今は、思慮深い読者は多分このように尋ねるでしょう。‘神の国で住む生活はこの世の生活と何も違うことがないじゃないですか’と。その国で人たちはまだ子を産み(イザ.65:23)、死ぬこともあります(イザ.65:20)。この人たちはなおキリストが解決すべき紛争があり(イザ.2:4)、現在よりは気楽に生きるけれども、なお生きるために地で働かねばならないのです。この人たちは皆、義人たちが永遠の命を得て神の本性になり、結婚も子の産みもしない、天使たちと等しくなっている(ルカ.20:35、36)その約束から遠くにあるのです。その答は神の国の始めの部分は一千年間続く(啓.20:2-7)と言う事実にあるのです。その千年の間下記の二つのグループの人がこの地に織るでしょう。

1. 聖徒たち

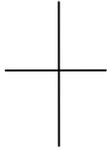
一この世でキリストによく従った者たちはその裁きで永遠の命が与えられるでしょう。聖徒とは‘呼び出された’人と言う意味であって、真の信者を話すのです。

2.

キリストが帰り来られる時に一般に福音を分らない者たちは神になんの責任もないから裁きの座に行かないのです。

キリストが帰り来られる時、二人の男が一つ寝床にいるならば一人は取り去られ(その裁きに)、他の一人は残される(ルカ.17:36)。その“残された者たち”が上記の2のグループでしょう。

裁きの座で神の本性を受けた者たち、一聖徒たちは死ぬことも子を産むことも出来ないのです。従って神の国でこのことを経験する人たちはその2のグループの人たちであって、キリストの帰りの時生き残っていますが、神が要求するのを分からなかった人たちです。義人たちに与える補償はまたその国で王と祭司になってこの地を治める”のです(啓.5:10)。王には治められる民があるべきです。従って主の再臨の時生き残っているその福音に無知な者たちが彼らに治められるのです。キリストの中にある者たちは彼と共に補償を受けこの世界の王となり治めるでしょう。“勝利を得る者は...



神の国 171

諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄の杖を持って...彼らを治めるであろう” (啓.2:26, 27)。

ポンドに関するキリストの比喩の話はここに適切です。一忠誠な僕たちがその国で十町あるいは五つの町を治めるように補償されました(ルカ.19:12-19)。キリストがエルサレムで帝王と宣言されるとただちに神の道が世界に広がるのではないでしょう。人たちが神に対する知識を得るためにエルサレムにあがるでしょう(イザ.2:2, 3)。神の国を現わすダニ.2:35、44の山がこの地に漸次的に広がるのを思い出さない。神の国で神の知識を広げるのが聖徒たちの仕事であるでしょう。

以前イスラエルが神の国であった時、祭司たちの仕事は神に関する知識を教えるのでした(マラ.2:5-7)。この目的のために彼らはイスラエルのもろもろの町に住んでいました。その時再建されたもっと栄えある神の国で、聖徒たちは祭司の役割を果たすでしょう(啓.6:10)。

キリストが今日帰来するとすれば、

1.

先ず神に責任ある者が墓から復活し、生きた者と共にキリストの裁きの座に連れられて行くでしょう。

2.

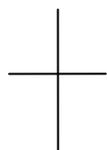
その責任ある悪人は刑罰せられて再び死に、義人は永遠の生命が与えられるでしょう。またキリストに対抗する国民を裁くでしょう。

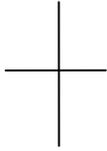
3.

その裁きで永遠の命が与えられた義人たちが、その時生き残った人たちを治めるでしょう。また義人たちは“王と祭司”となって彼らに福音を教えるでしょう(啓.5:10)。

4.

その統治期間は一千年間です。この時期の間すべての人がその福音を聞き大部分の人がそれを受け入れるでしょう。この人たちは永らく幸福に生きるでしょう。





5.

その千年の末にキリストと聖徒に背く群れがあり、神は彼らを鎮めるでしょう(啓.20:8、9)。

6.

その千年の末に、その間死んだ人たちが皆復活して裁きを受けるでしょう(啓.20:5、11-15)。

7. その中の悪人はまた滅ぼされてしまい、義人だけ永遠に命を得るでしょう。

この地に対する神の目的がその時完成されるでしょう。そこには義人たち、永遠の命を持つ人が満ちるのです。神の名、‘Yahweh Elohim’ (He who will be revealed in a group of mighty

ones)の通りに完成されるのです。従ってこの地でもう罪も死も経験せられないでしょう。蛇の子孫は彼の頭が完全に砕かれて、その約束が完全に果されるでしょう(創.3:15)。その一千年の間、“キリストはあらゆる敵をその足下に置く時まで、支配を続けるでしょう。しかし、その最後の敵として滅ぼされるのが、死であります。

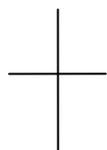
...

そして、万物が神に従う時には、御子自身もまた、万物を従わせたその方(神)にしたがうでしょう。それは、神がすべての者において、すべてとなられるためであります”(コリ前.15:25-28)。

“その時、キリストが国を父になる神に渡されるのである(コリ前.15:24)と言われたこの時が、この世の終末です。その時代の後には“神がすべての者において、すべてとなられて” 続くのです。私たちが皆知っているのは永遠の命を得て、神の本性を持つことであり、神を喜ばしめ彼に栄光を捧げるのです。その一千年の後の状態を問うのさえ推測に過ぎないのです。

“神の国に関する福音” の認識はすべての読者の救いに重要なことです。私たちは読者がこの学習を反復して読み、引用された聖書句節を必ず参考するようにお願いします。

神は私たちが彼の国に入れるのを願っています。彼の目的全体が、彼の創造の能力を現わしたのでなく、私たちみなはその国の一部になることを計画しています。バプテスマはこの神の国に関する約束と関係があります。バプテスマを受け、その後わずか数年の間謙遜に神の言葉に従順するによって、その栄光の永遠な国に入る事が出来ると言うことは信じ難いのです。しかし私たちは神の偉大なる愛を確信し



なければならないのです。私たちの短い生涯にどんな問題が起こるうとも、神の福音の呼び出しに逆らうことは出来ないのです。

“もし、神が私たちの味方であるなら、誰が私たちに敵し得ようか” (ロマ.8:31)。

“私は思う。今のこの時の苦しみは、やがて私たちに現わされようとする栄光に比べると、言うに足りないのです” (ロマ.8:18)。

“このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりに私たちに得させるからです” (コリ后.4:17)。

間違った解釈15: 神の国は地に設立される

旧約聖書の予言で見つかる神の国に関する実際の描写は度々神学者たちや教会の会員たちにあざけりになります。彼らはこの地球と言う遊星は焼け尽くしてしまうと思っているので、信者が補償される所がこの地でなく、他のある所を示す比喩的言葉であると主張しています。

これに対する解答には、聖書学習の基本法則は、靈的に解釈しなければならない充分な理由がない限り、聖書の解釈はいつもその言葉の文字通りの意味に認識しなければならないことです。一例を上げれば、啓示録の始めの節は啓示録にあるヴィジョンは大体象徴である(啓.1:1)と知らせているので、これが啓示録を正しく理解するように導くのです。またある言葉、あるいは句節を象徴的に読むべきか否かを指示出来る適切な言葉の使用法と写実主義に対する確実な判断があるのです。もし“地は酔いどれのようによるめき、仮小屋のように動く、その咎はその地に重く、ついに倒れて再び起き上がることはない” (イザ.24:20)を読む時、これは確かに象徴的に読まねばならない種類の言語使用法であると判断すべきです。これとは対照的に、将来の神の国を描写するに使用した言語はとて易く文字通りに認識するようにしています。これを象徴的に解釈する必要がないのです。

この地に神の国が実際設立される時が来ることを人たちが信じようとしなから、彼らは説明も出来ない空論を考案しています。その国が靈的であるとか、

あるいは天にあると言う彼らの代替論は漠然として具体的でないから信じ難いものであるから要求するとか、勧めるべきものでもないのです。足の不自由は者が癒され、砂漠が肥沃の地になると言われた描写を靈的に解釈しているから、それを正確に解釈するよう答えてくださいと尋ねるのです。‘何が象徴的であるですか’。これらの句節は神の国を描写しているのです。もし私たちがそれらが皆象徴的であると確信するなら、私たちは神の国の福音を知っていないのであるから、それに対するなんの期待もないのです。

更に、提示されたすべての証拠からそれは確かに明らかであり、また神はこの地の人たちに永遠の目的を持っています。彼はアブラハムのその子孫に永遠の約束しているから、この遊星を破壊することなどはしません。従って私たちはこの地に来るべき神の国に関する聖書の記録を文字とおりに期待せねばならないのです。

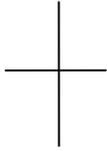
次の句節はこれを確認しています。

“天を創造された主、すなわち神であって、また地をも造り成し、いたずらにこれを創造されず、これを人の住みかに造られた” (イザ.45:18)。
もし神がこの地を破滅すると、それは彼がこの地をいたずらに創造したのです。しかし、これとは対照的に、この地は不死の人たちの住みかとする神の目的があります。

“世は去り、世は来る。しかし地は永遠に変わらない” (伝.1:4)。

“神はこれらを(太陽系の制度)とこしえに堅く定め、越えることの出来ないその境を定められた” (詩.148:6)。

啓.20:4に記録された通りに、その千年王国の期間が1000年間であることも、この時期の本質に関するほかの予言が示す意味と一致させるために、文字通りに受け入れなければならないのです。啓示録にある数のすべても象徴的にとるに制限されていないのです。そこに多くの数がありますが、“第三”と言われたのはその一例です。最も意義あるのは、その千年王国が休みの安息日としてヘブ.4:4-9に描写されているのです。神の“一日”が一千年間のように描かれています(ペテ后.3:8)。この地に対する神の目的の一千年の‘六日’間の後に、一日の一千年間の安息が来るのです。



聖書の日付けに従って、創造から(B.C.4000年)A.D.2000年までは6000年間(すなわち六日間の創造)になります。これはその千年王国がA.D.2000年後にあることを意味しています。私たちは時が限定されていることを悟らねばなりません。今はキリストの早い帰りがの期待に直面しています。私たちはこの短い人生の瞬間、瞬間を彼の帰りに備えなければならないのです。

間違った解釈16:イスラエルの歴史要約

アブラハムはカルデアのウルから呼び出され、始めのユダヤ人になり増ました。神は彼とカナンの地と、彼の子孫に関して約束しました。彼はこの約束したものを受けなくて死にました。

イサク.

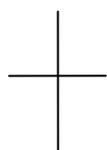
アブラハムは彼の子イサクを祭物として神に捧げようとしてしました。アブラハムは神に忠誠であったから、神はアブラハムに誓いを立てて彼の約束を確認させました。イサクが彼の父の命令に従って死のうしたのはキリストの予告です。その約束はイサクに更新されました(創.26:3-5)。

ヤコブはイサクの子でした。その約束は彼にもくり返し伝えられました。彼は十二の子がありました。ルベンは長男であり、ベニヤミンは末の子でした。レビは祭司長の祖先になりました。ヨセフは最も寵愛を受けた子でした。

ヨセフ.

彼は少年の時彼の兄弟を治める者になる二つの夢を見ました。彼らはヨセフをねたみ、彼をエジプトに奴隷として売りました。彼はそこで統治者になり、その地方の人をひどく苦しめる七年の飢饉の時使用すべき穀物の貯えを計画しました。その間、ヤコブと彼の子らはエジプトにいるヨセフと住むために移住しました。彼らと彼らの子孫がエジプトのゴセンの地に住むようになりました。後ほどイスラエルの歴史を知らないパロがイスラエル人を虐待し始め、遂に彼らを奴隷にしていきました。

モーセはその時生まれました。彼はパピルスで編んだ籠に隠し入れてナイルの河に流しましたが、パロの娘に見つかり彼女の養子にされました。彼がまだある時、



イスラエル人を打つ一人のエジプトの人を見たので、彼を殺しました。その後モーセはミデヤン地方に逃げ行き、そこで40年間エテロの羊飼いになって働きました。その時神は柴の中の燃え上がっている炎のうちに彼に現れました。彼はパロに行ってイスラエルを救えと神の命令を受けました。彼は神が遣わしたのを立証するために奇蹟の徴を見せました。しかし、パロは絶対イスラエルを放してやろうしないので、十の種類 of 災い、すなわち、蛙、暗黒、あられ、そして最後に彼らのすべて始め子を殺す災いをエジプトに送るになりました。イスラエル人たちは各家庭が一匹の羊を殺してその血を彼らの家のドアに塗らなければならぬのでした。これはイエスの血が私たちを死から救うのを指摘しているのです。これを過ぎ越しの祭りと言われました。

出エジプト.

遂にイスラエル人たちはエジプトを離れることが許されました。彼らは昼の間は雲の柱、夜の間は火の柱の神の天使の導きよって旅しました。パロの軍隊が紅海まで彼らを追いかけて来ました。その時紅海の水が奇蹟的に開かれて彼らは陸地のよう歩いて行き、すぐその水が閉じてエジプト人たちは皆水没してしまいました。その後イスラエルは荒野を通して約束のカナンの地に旅して行きました。神はその途中、岩から水を出して彼らに与え、毎朝マナの形の食べ物を彼らに与えました。彼らがシナイ山に到達した時、神は彼らにその十戒とモーセの律法を与えました。それで彼らは神の国を構成しました。神は彼らに一つの特別なテントを作るように命令し、その幕屋を立て、そこで神を拝むようにさせました。神は彼に祭物を捧げる大祭司長と祭司たちを彼らに与えました。その幕屋のすべての器具と祭司職はイエスを予表するのです。

約束の地に彼らが近づいた時、彼らは十二名の斥候を選んでそこを探らせるために遣わしたが、彼らが帰ってきて、そのうち十人はカナンの地を得るのが難しい報告しました。他の二人ヨシュアとカレブは、彼らが神の約束を信ずるなら、その地を所有するところが出来ると確信を話しました。すべての人たちがその十人の態度に一致するので、イスラエルはその後40年間20歳以上でエジプトを出た者みな死んで荒野をさ迷うになりました。

ヨシュアはモーセの後継者となって、イスラエルをカナンの地に導いて行きました。その地を占領した最初の都市はエリコでしたが、そこにはラハブと言う遊女が住んでいました。その後はアイを占領し、次々にすべての都市を占領しました。彼らがその地に定着しては、土師たちが断続的に彼らを治めるようになりました。

士師たちが彼らを治めていたけれども、実際は神が王でした。その士師たちの中には、ギデオン、エフタ、サムソンらが含まれています。彼らは皆イスラエルが神に罪を犯していることから悔い改める時、彼らの敵から彼らを救いました。イスラエルの歴史はイスラエルが神に従わないので、隣の国々から侵略される刑罰を受けては、彼らの罪を悔い改めて神に救われ、また罪を犯すことの繰り返しでした。彼らの最後の士師はサムエルでした。彼の時、イスラエル人たちは隣の国の制度のように人間の王を要請して、彼らの王である神に背きました。

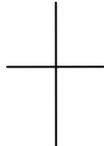
王たち.

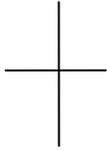
彼らの最初の王はサウルでした。彼は良く出発したが、悪人になって、神の命令に従わなく、ダビテを迫害しました。彼の死後、ダビテが王になりましたが、彼はイスラエルの最高の王でした。神は彼に偉大な約束をしました。彼の後、彼の子ソロモン王は良く出発したが、隣の国々から娶った多くの妻たちによって彼もまた悪く変わりました。彼の死後、その国は二つの国に分裂されて、十部族はヤラベアムによってイスラエルの国を構成し、その他の二つの部族、ユダとベニヤミン部族はソロモンの子、レハベアムによってユダヤの国を構成しました。

その十部族のイスラエルの国には良い王がありませんでした。彼らは継続的に神に背きました。神は彼らに多くの予言者を遣わして悔い改めることを訴えましたが、彼らは聞き入れませんでした。従ってアッシリア人たちがその国を侵略して、彼らを捕虜として連れて行きました。彼らは世界中に散り去りました。

その他の二部族のユダヤの国は少ないけれども良い王(アサ、ヘゼキヤ等)はいたけれども、漸次に神に従わないようになりました。従って、神はバビロニア帝国を遣わして彼らを侵略し、捕虜として彼らをバビロンに連れて行き70年間そこに留まりました。その後彼らは彼の王を持ったことがないのです。その70年の後彼らの一部がエズラ、ネヘミヤ、ヨシュア(当時大祭司長)、総督ゾロバベルの領道の下に、イスラエルに帰りました。その後彼らはペルシャ、次にはギリシャとローマ帝国によって治められました。彼らがローマ帝国と下にいた時イエスが生まれました。ユダヤ人たちの背きの結果、神はA.D.70年ローマの大軍をエルサレムに遣わしてエルサレムを破滅した結果、すべてのユダヤ人がイスラエルの地から追い出されました。

最近、旧約聖書の予言が部分的に果されて、ユダヤ人たちがイスラエルの地にかえり始めました。イスラエルの国の復興はイエスがすぐこの地に帰り来て神の国であるイスラエルの国の再建を示すしるしです。





学習5: 問題と解答

1. 次のどの時が神の国が設立される時ですか？

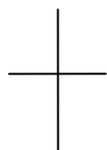
- a) 既に設立された
- b) キリストが帰り来る時
- c) 1世紀のそのペンテコスト日
- d) 悔い改めて信者になった時信者の心に

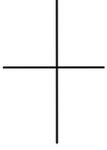
2. 神の国は過去に存在しましたか？ではどんな形で？

3. 何時その国は終わりましたか？

4. 千年王国は何ですか？

- a) 私たちの心を恵みで治めること
- b) 天で一千年間信者たちを治めること
- c) この地でサタンが一千年間治めること
- d) 将来神の国がこの地に建てられ、キリストが一千年間の治めること





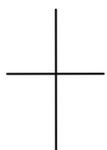
5. 一体神の国はどのような国ですか？

6. 現在の信者たちはその千年間何をするでしょうか？

- a) 普通の人間たちを治める
- b) 天で統治者になる
- c) 分からない
- d) 他の遊星で住む

7. 神の国に対するメッセージを教えた所？

- a) ただ新約聖書に
- b) イエスと使徒たちだけが教えた
- c) 旧約と新約聖書共に教えている
- d) 旧約聖書だけ



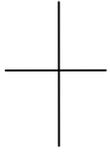
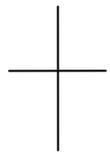
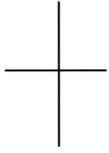


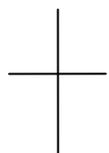
写真 6





学習 5

神の国



6.1 神と罪悪

キリスト教界の多くの教会、また他の多くの宗教界では、この世と人間の生活で問題を起し、人間に罪を犯させる悪魔、あるいはサタンと呼ばれる存在、怪物があると信じています。しかし聖書は神だけが全能であると明らかに教えています。私たちは学習1.4で、天使たちは罪を犯すことが出来ないことを学びました。私たちがこれを確信しているとすれば、この宇宙にはその全能の神に敵対して働く如何なる超自然的存在もありえないのです。もし私たちがそう言う存在があると信ずれば、全能の神の至上権を信ずることが出来ません。この問題は‘悪魔とサタン’に対して正しく認識すべき必須的教理となっているほどとても重要なことになっています。イエスが彼の死によって悪魔を滅亡させたと私たちにヘブ.2:14は告げています。従って私たちが悪魔に関する正しい知識を持って居ないなら、イエスのなした仕事も彼の本性も理解出来なくなるのです。

この世一般的に、特にいわゆるキリスト教界では、人間生活に良い事は神から、悪いことは悪魔あるいはサタンから来ると言う概念があります。これは何か新しい思想ではありません。また今日その背教的キリスト教界だけに限定されている思想でもありません。例を上げると、バビロンの人たちはこの宇宙には光明な善神と暗黒の悪神の二つの種類の神があつて、その二人の神が人間の紛争に関与すると信じていました。ペルシャの王、クロスはこれを信じていました。従って神は彼に告げました。“私は主である。私のほかに神はない。一人もない。... 私は光を造り、また暗きを創造し、繁栄を造り、また災いを創造する。私は神であつて、ほかに神はないからだ” (イザ.45:5-7,22)。神は平和を創造し、また神は災い、悪を創造します。神が“悪”の創造者、その創始者です。この意味で神には“災害”と“幸い”差異はなく、それはただ人間の心から起こったものです。それは人間の犯罪の結果この世に入りました(ロマ.5:12)。

神は“私の他に神はない”クロスとバビロンの人たちに告げました。ヘブル語から翻訳された“神”の言葉は根本的には‘力’あるいは‘力の源泉’を意味するのです。神は私の他には力の源泉がないと話しています。これがその神を信者が超自然的悪魔とか鬼神がこの宇宙に存在するのを絶対受け入れない理由です。

神：災いの創始者

聖書は神が“悪”を人たちの生活に、またこの世に持って来ると多く話しています。アモ.3:6にはある都市に災いがあるのは、それは神が送ったからであると話しています。例を上げると、ある都市に地震が起こったら、人たちはそれを‘悪魔’のいたずらであり、彼が災いを起こしたと思っています。しかし信者たちは神がそれに関与していることを認識しなければならないのです。ミカ.1:12には、“災いが主から出て、エルサレムの門に臨んだからである”と話しています。ヨブ記には、義人であるヨブが生涯集めた財産をなくしている記録を読みます。その記録は人の生涯経験する‘悪’は神に対する彼の服従とか不服従の比例によらないことを教えています。ヨブは“ヤウエが与え、ヤウエが取られた”(ヨブ.1:21)と認識しました。彼は“神が与え、サタンが取って行った”と話していません。彼は彼の妻にそれを説明しています。“私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも、受けるべきではないか”(ヨブ.2:10)と。その本の終わりには、ヨブの友たちが彼に来て、“かつ主が彼に下されたすべての災いについて、彼をいたわり、なぐさめた”(ヨブ.42:11、19:21;8:4比較)と話しています。私たちの生活で会うすべての問題の究極的認可者が神であると言う意味で、神は“悪”の源泉であります。

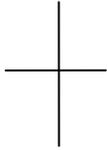
“主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を、鞭打たれるのである。...しかし後になれば、それによって鍛えられし者に、平安の義の実を結ばせるようになる”(ヘブ.12:6-11)と、これは神が私たちに与える訓練は結局私たちが霊的に成長させるのを示しています。だから悪魔と言う存在が私たちに罪を犯して悪人になるようにすると同時に、“平安の義の実を結ばせるに”発展させるために私たちの生活に問題を起こすと言うのは神の言葉それ自体に反するのです。一般的キリスト教の悪魔に関する考えはここで深刻な問題に落ちるのです。特に深刻な問題になるのは、“霊が主の裁きの日に救われるように、人をサタンに引き渡してしまった”とか、“彼に神を汚さないことを学ばせるために、サタンの手に渡した”(コリ前.5:5; テモ前.1:20)と言われた句節です。もしサタンが実際人たちに罪を犯させ、彼らの霊的成長を阻害する存在であれば、なぜその句節には“サタン”を光の使いのように話したでしょうか。その答は対抗者、“サタン”、あるいは生活を難しくするものが度々信者の生活で霊的發展をもたらす事実で得られるものです。

もし私たちが悪、あるいは災いが神から来ると受け入れるなら、私たちが当面した問題の解決を神に頼んで祈った時、その祈りに応答がなければ、それは神が私たちの霊的成長のために送ってくださったと考えなければならないのです。もし私たちに問題を起こしている悪魔とかサタンと呼ばれる者がいると信じれば、彼らが私たちを霊的に発展させるために来る者でないとされるでしょう。また私たちに問題を起こす悪魔とかサタンと呼ばれる者がいるとすれば、人にたちに訪れる不具、疾病、急死、あるいは災いはみなただ不幸と取り扱うべきです。もしその悪魔が力強い墮落した天使であるとすれば、彼は私たちよりもっと強いので、私たちは彼の手から逃されることが出来ないでしょう。これとは対照的に、私たちは神の管理の下にあるので、慰められます。“万事を益となるようにして下さる”(ロマ.8:28)。従って信者たちには‘幸運’と言うのがないのです。

罪の起源

私たちは私たち各々の内に罪があると強調し止むを得ないのです。罪を犯すのは私たちの誤りです。勿論、私たちが罪を犯していると信ずるのは気分が良い事ではありません。私たち自身が罪を犯すのではなく、罪を犯させる者は悪魔であると弁解して、私たちの罪に対する非難を悪魔に負わせているのです。とても悪いことをなした者の場合、その犯人はその行為をなした者は自分自身でなく、自分の内にある悪魔がなしたと話しながら、慈悲を求めるのが共通です。しかし、正しく話せば、その貧弱な弁解は決して正当だとは判断出来ないから、彼は刑罰が課せされなければならないのです。

私たちは“罪の支払う報酬は死である”(ロマ.6:23)ことをいつも記憶しなければならないのです。罪は死に導きます。もし罪を犯すのが私たち自身の過ちでなく、その悪魔のためであるとすれば、公義の神は私たちよりもむしろその悪魔を刑罰しなければならないのです。しかし、私たちが罰せられる事実は、私たちが罪に対して責任があるのを示しています。私たちが罪を犯すのは私たちの内にある罪性でなく、悪魔と言う特別な人格的存在であると言うのは罪に対する私たちの責任を他の者に転嫁しようとする考えから出たものです。これはまた人間性に対して聖書が教えている状態を否定しようとする他の一例です。人間性は根本的に罪深いものです。

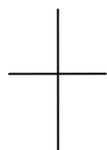


神と罪悪 185

“すべて外から人の中に入って、人を汚しうるものはない。かえって、人の中から出て来るものが、人を汚すのである。...すべて、外から人の中に入って来るものは、人を汚し得ないことが、分からないか。それは人の心の中に入るのではなく、腹の中に入り、そして、外に出て行くだけである。イエスはこのように、どんな食物でも清いものとされた。さらに言われた、人から出て来るもの、それが人を汚すのである。すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴、これらの悪は内部から出て来て、人を汚すのである” (マコ.7:15-23)。

私たちの外にある罪深い者が私たちの内に入って罪を犯していると言う考えはイエスの明らかな教えとは一致しないのです。すべての罪悪が外から私たちに入るのでなく、既に私たちの心にある者が外に出て来るのです。なぜなら、その大洪水の時、神は“人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである” (創.8:21)と言われたからです。ヤコ.1:14には“人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、誘われるからである”と私たちに告げました。私たちが誘惑されるのは他でなく、私たち自身の欲情、悪性によるのです。“あなたがたのなかの戦いや争いは、一体、何処から起こるのか”と尋ね、“あなたがたの肢体の中で相戦う欲情からではないか”と答えています。私たちは皆その罪の誘惑を受けるようになっているのです。従ってそれらは私たち自身の欲情から起こるのであるから、私たち自身を最も悪いあだと思ふべきです。

ローマ書は大部分が罪、その起源、またそれを克服する方法を話しています。そこには悪魔とかサタンに関して全く言及されていないのが最も意義あることです。罪の起源に対して話していながらも、パウロは悪魔とかサタンに関しては一度も言及していないのです。やはり“悪魔”は新約聖書の概念であります。もし私たちに罪を起こさせるある外部の存在があるとすれば、彼は確かに旧約聖書から広範囲にそれを説明しているでしょう。しかし彼はこれに対しては格別に重く沈黙しているのです。士師時代や荒野にいたイスラエル時代の記録は、その時イスラエルが多く罪を犯しているのを示しています。しかし神は彼らに超自然的存在とかあるいは悪魔とはサタンが彼らの内に入って罪を犯す勢力ある者に対しては全然警告していないのです。その代りに、彼は彼らを自分の言葉に向けて、彼ら自身の肉の欲に落ちないように勧告しています(申.27:9, 10; ヨシュ.22:5)。



パウロは、“私の内に(すなわち、私の肉に)、善なるものが宿っていないことを、私は知っている。なぜなら善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。...

もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはや私でなく、私の内に宿っている罪である”(ロマ.7:18-21)と嘆いています。しかし、パウロは彼の犯す罪に対して悪魔と呼ばれる自分の外の存在に罪を負わせていないのです。彼には罪の源泉である彼自身の悪性が宿っていたのでした。“それをしているのは、もはや私でなく、私の内に宿っている罪である。そこで、善をしようとする私に、悪が入り込んでいると言う法則があるのを見る”。それで、彼が霊的になろうとするに反対しているもの、彼の内に宿っている罪と呼ばれるものがあると話しています。霊的になろうとする思慮深い信者は皆これと同様な知識を持つ様になるでしょう。当時最高のクリスチャンであったパウロさえ改宗の後本性の変わりとか、罪を犯すことが出来ない存在になっていなかったことに注目すべきです。現代のいわゆる‘福音派’の人たちは彼らがそんな身分になっていると主張し、パウロは‘彼の声明通り’(ロマ.7:15-21)に‘救われていなかった’と言うのです。しかしこの句節は彼らの主張の間違いを立証しています。ダビテはもう一人の義人でしたが、彼のいつも罪を犯している本性に対してパウロと同じく説明しています。“私は不義の中に生まれ、私の母は罪のうちに私をみごもりました”(詩.51:5)。

聖書は人が根本的に悪性を持っていることをはっきり話しています。もしこれを認識すると、私たちの罪に責任を持つ人間の本性以外の存在を発見しようとする必要がないのです。エレ.17:9には“心はよろずの物よりも偽るもので、甚だしく悪に染まっている”と私たちが認識することが出来ないほど人間は完全な悪性になっているのを話しています。イエスもまたマコ.7:11に人間の根本的悪性に烙印を押しています。伝.9:3“人の子らの心は悪に満ちている”と明白に断言しています。エペ.4:18は“人たちの知力は暗くなり、その内なる無知と心の硬化とにより、神の命から遠く離れている”と人間性を非難しています。これと同じく、ガラ.5:19には、“肉の働きは明白である”と私たちの罪に関して話しました。人間の存在それ自体が肉性からなるものであって、それが罪を犯しているのです。この句節ではなにも私たちの内にあるその罪の起源を悪魔のためであると彼に責任を負わせていないのです。罪性は人間が生まれながら自動的に人間に各々に賦与されたものであって、それが人間の本性であるのです。

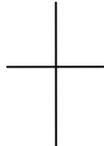
6.2 悪魔とサタン

日本語の聖書にはその原文のヘブル語やギリシャ語の単語を翻訳せずにそのまま日本化して発音しているものがあります。‘サタン’もその中の一つであって、その意味は‘対抗者’あるいは‘敵’であります。それに対して、‘悪魔’はギリシャ語の‘diabolos’であって、その意味は‘嘘つき’あるいは‘中傷者’です。もし私たちがサタンとか悪魔が人に罪を犯させる実際の存在物であるとすれば、聖書でその言葉に出会う時、それらは悪人であると考えなければならないのです。しかし、聖書ではその単語を普通の人を描写する形容詞として使用しています。この事実は聖書で使用しているその単語、サタンと悪魔がとても悪い悪人とかあるいは私たちの外にあるある存在物を話しているとは言えません。

聖書にある単語 ‘サタン’

王上.11:14には“こうして主はエドムの人とハダデを起こして、ソロモンの‘敵’ (ヘブル語のサタンを翻訳した)とされた”、“神はまたエリアダの子レズンを起こしてソロモンの‘敵’ (ヘブル語のサタンを翻訳した)にした” (王上.11:23、25)。これは神が超自然的存在の者とかあるいは墮落した天使を起こしてソロモンのサタン、あるいは‘対敵’にしたのでありません。神は普通の人を起こして彼に対敵させたのです。マタ.16:22、23には、他の例がありますが、ペテロがイエスがエルサレムに行って十字架で死ぬのを留めようとようと説得しようとしたのです。イエスは振り向いて、“サタンよ、引きさがれ。...あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている”とペテロに話しました。このようにペテロをサタンであると話しました。この記録はキリストがその言葉話す時、墮落した天使とか、あるいはある怪物に対して話したのではなく、ペテロに話したのです。

その単語‘サタン’は良かれあるいは悪かれ対敵を話すのであるから、神様さえもサタンと呼ばれています。その言葉自体に罪がある者と考えべき必要がないからです。私自身が‘サタン’あるいは対敵である事実から、また大体その言葉が罪と関連して使用しているから、その言葉は罪の含蓄性があるのです。神自身が私たちにサタンになるのは彼が私たちの生活に試練をもたらし、まだ私たちがしようとする悪いことに制動を掛けるためであります。しかし神がサタンと呼ばれても、彼が罪人であるという意味ではないのです。



サムエル記と歴代志には、新約書の四福音書が同じ事件を違う観点で書かれているような、同じ書き方で書かれている事件があります。サム下.24:1には、“ヤウエは、再びイスラエルに向かって怒りを発し、ダビテを感動して彼に逆らわせ、「行ってイスラエルとユダを数えよ」と言われた”と書かれているが、これと同じ事件の代上.21:1の記録では、“時にサタンが起こってイスラエルに敵(サタンとなり)し、ダビテを動かしてイスラエルを数えさせようとした”と書かれています。一つは神がダビテを感動させたと記録し、他の句節ではサタンが彼を動かしてその行動するようにしたと書かれています。その結論は神がダビテのサタン、あるいは対敵となっているのです。彼はヨブにも彼の生活にそれと同じく試練をもたらせたので、ヨブは神に対してこのように話しています。“なぜあなたはみ力の手を持って私を攻め悩ますのですか”(ヨブ.30:21)と、ヨブが話したのは‘あなたは私に対敵として行動しているのですか’と言うのでした。

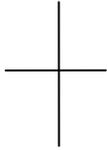
聖書にある単語 ‘悪魔’

‘悪魔’と言う言葉もまたそれと同じく話されています。イエスは“あなたがた十二人を選んだのは、私ではなかったか。それなのに、あなたがたのうちの一人は悪魔である。それは、イスカリオテのユダをさして言われたのでした”。しかし彼は私たちのような普通の人でした。イエスは頭に角がある怪物とか、あるいは霊物を言うのではなかったのです。ここでその悪魔はただ悪人に対して話すのでした。テモ前.3:11には他の例を上げています。教会の長老の婦人たちは“他人を誹らしてはならない”と話しています。その“誹る”と言うギリシャ語は‘diabolos’です。その言葉を他の所では‘悪魔’と翻訳しています。パウロは教会で年老いた婦人たちが“中傷者”とか“悪魔”にならないようにせよと警告しています(テト.2:3)。彼はまたテモテにもそのような意味に話しています。“終わりの時には、...無情な者、融和しない者、誹る者がある”(テモ後.3:1,3)。これは人間が超自然的存在に変わると言うことでなく、人々が漸次的にもっと悪化すると言うことでした。これで読者は聖書の悪魔とかサタンが墮落した天使とか、あるいは罪深い霊的存在があるのでなく、その単語は“対敵者”、あるいは“中傷者”を意味しているのを明らかに分かったと思います。

罪、サタン、悪魔

‘サタン’と‘悪魔’という言葉は学習6.1で話しているように、人間の内にあ
る罪深い性向を比喩的に描写している単語です。これらが‘サタン’、あるいは‘
悪魔’に関する情報です。聖書は度々それらを人格化して、私たちの敵、あるいは
真理を誹る者と話しているのです。私たちの‘肉の人’これがその‘悪魔’です。
その悪魔と私たちの内にある悪の肉情を結合して説明した数節があります。“この
ように、子たちは(私たち自身)血と肉と共に預かっているので、イエスもまた同様
に、それらを備えておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死
によって滅ぼすためである”(ヘブ.2:14)。ここでその悪魔は死に対する責任がある
者と描写しています。“罪の支払う報酬は死であります”(ロマ.6:23)。従って罪と
悪魔は対等者であります。それと同様に、ヤコ.1:14には私たちの悪の肉情が私たち
を誘惑し罪を犯し死に導くと話しています。しかしヘブ.2:14にはその悪魔が死をも
たらすと話しています。その同じ句節はイエスが園悪魔を滅ぼすために私たちの肉
性持っていたと話してします。これはロマ.8:3と対照的です。“神は、御子を罪の肉
の様で(すなわち私たちの肉性)罪のために遣わし、肉において罪を罰せられたので
ある”。これは悪魔と私たちに内にある罪深い性向が実際に同じものであるのを示
しているのです。これはイエスが私たちのように誘惑されたのを認識させるとても
重要な事です。その悪魔の教理を正しく認識しないと、イエスの本性と彼がなした
仕事を正しく認識することが出来ないのです。イエスが私たちの内にある‘悪魔’
、すなわち人間の肉性を持っていたのは、ただ私たちが救いの望みを持つことが出来
るようにするためでした(ヘブ.2:14-18;
4:15)。イエスは彼自身の肉性、聖書の悪魔を克服するによって、十字架でその悪魔を
滅ぼすことが出来ました(ヘブ.2:14)。もしその悪魔が人格的存在であったなら、彼は
もう存在することが出来なくなっただけでしょう。ヘブ.9:26はキリストがご自身をいけ
にえとしてささげて罪を取り除くために現れたと話しています。これはヘブ.2:14の
彼の死を通してキリストは彼の内にある悪魔を滅ぼしたと言う声明と一致してい
るのです。イエスは十字架の死で彼の内にある罪、すなわち人間性、“罪の体”(ロ
マ.6:6)を滅ぼしたのでした。

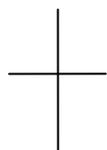
“罪を犯す者は、悪魔から出た者である”(ヨハ1.3:8)。罪は私たち自身の肉性、
悪の肉情、聖書で‘悪魔’と呼ばれる者の誘惑に落ちた結果です(ヤコ.1:14,15)。“

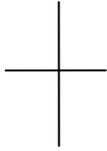


神の子が現れたのは、悪魔の業を滅ぼしてしまうためである” (ヨハ 1.3:8)。もしその悪魔が私たちの悪の肉情であると言うのが正しいとすれば、罪は私たちの肉情の仕事、私たちの肉情の働きの結果です。これをヨハ 1.3:5が確認しています。“彼は罪を取り除くために現れたのである”。これはまた“私たちの罪性”と“悪魔の働き”が同一のことであることを確認するのです。使.5:3には悪魔と私たちの罪の結合に関するもう一つの例を与えています。ペテロはアナニヤに、“どうしてあなたは、自分の心にサタンに満ちているのか”と言って、その4節では、“あなたは神を欺いたのだ”と話しました。私たちの心でなにか欺くことはサタンが心に満ちているのと同じことです。もし私たちが何か欺けるならば、すなわち罪深い計画を立てれば、罪は私たちの内から始めるのです。もし婦人が子を孕むと、その孕み子はその婦人の外に存在するのではないのです。しかしそれは内で働きを始めます。ヤコ.1:14、15は私たちの肉情が罪を孕み、それが成長して死をもたらすと罪を犯すのを過程を描写しています。詩.109:6は罪深い人と‘サタン’が同じ言葉であることを示しています。“彼に対して逆らう者を置き、彼の右にサタンを立たせて下さい”、これは“あなたの敵をあなたの足台とする” (詩.110:1)とすることです。

擬人法

しかし、あなたはかなり理にかなう質問があるでしょう。‘その悪魔はちょうど人格的人間のよう話しているんじゃないですか’と。それは正しい話です。ヘブ.2:14に“死を司る者、つまり悪魔”と話しています。聖書を少し読んで見ても、度々抽象的考えを人格のある人とした、擬人法を使用しているのが見つかります。そのように、箴.9:1では‘知恵’を家を建てる一人の婦人として話しています。それと同様に、ロマ6:23では罪が支払うべき報酬の主計者として話しています。この特徴に関してはもっと詳細に述べている間違った解釈5で説明しています。聖書でその‘悪魔’、‘Diabolos’は度々私たちの悪の欲情を現わしています。しかしあなたはある抽象的悪魔を持つことが出来ないでしょう。人の心の内にある肉情は人の身体とは別に存在することが出来ないのです。従って‘悪魔’が人格的に擬人化されたのです。罪は度々雇用主として擬人化されています(ロマ.5:21; 6:6、17; 7:3)。それは理解しやすいのです。‘悪魔’が罪を示しているのだから、また‘悪魔’も擬人化されています。それと同じ方法で、パウロは私たちの肉には二人の者が





神と罪悪 191

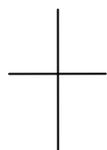
あると話しています(ロマ.7:15-21)。肉の人、その悪魔が‘霊の人’と戦っているのです。しかし私たちの内に文字通りの二人の人が戦っていないのは確かです。私たちの本性のこの罪深い部分、聖書の悪魔を“悪の人”と擬人化しています(マタ.6:13)。ギリシャ語の原文は“罪の人”と翻訳されていますがコリ前.5:13では“悪の人”と書かれています。従って人が罪を犯す時、彼の“悪人”、彼自身が“悪人”、あるいは“悪魔”となるのです。

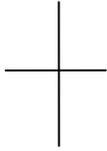
政治制度を示す悪魔、サタン

聖書のこの言葉、悪魔とサタンはまた私たちが住んでいるこの悪の世、罪深い社会制度を描写するに使用されています。人類の社会制度、政治制度、そして宗教の聖職制度が“悪魔”と言う言葉で話されています。新約聖書にあるその悪魔とサタンは度々ユダヤの制度とかローマ制度の社会と政治の権力に対して言及されています。私たちはローマ当局が信者たちを投獄したのについて、悪魔が信者たちを獄に入れた(啓.2:10)と言われるのを読みます。この文脈で、ペルガモ教会がサタンの位がある所、その王座がある所に位置していると読みます。すなわち、そこはペルガモ植民地にあるローマ当局の総督があった所でした。ここで私たちはサタンが人格の人としてペルガモに王座を設けていたと考えるのではないのです。

個人の罪は神の律法を犯すのに限定しています(ヨハ 1.3:4)。しかし罪が神に反対する政治的、社会的権力として集合的に表されると、その力は個人のものよりも強いものになります。これが度々悪魔と呼ばれる強い存在を擬人化した集合的勢力であります。この意味で、イランと他のイスラムよう勢力は米国を“偉大なるサタン”と呼んでいます。すなわち、彼らの政治、宗教に対敵するからです。これが聖書で度々使用されている‘悪魔’と‘サタン’の言葉です

終るに当たって、この主題にはほかのどの論題よりも多くの事実を話していることに注目しなさい。悪魔に関する一般の概念を諷刺の文句として現わしている、わずかいくつかの句節の上に大きい教理を建てるよりは、聖書全体を釣り合わせた見解の上に私たちの認識を基礎づけるのが正しいのです。学習6.1とこの段落は祈りと注意を傾けて読むべき課題であります。これは悪魔とサタンが言及された聖書句節を正しく理解出来る唯一の方法を提示しているためであります。その単語は普通





の形容詞として使用され、ある所では人間の本性の中で見つかる罪を話しているのです。それについて一般の考えの弁護に引用されている最も広く考え違いしている句節はこの学習に付随させた間違った解釈で考察して見るようにしています。

私たちの結論を受け入れるに問題が起こる者たちは彼ら自身に尋ねて見さい。(1)

この世に人格的罪があるのでしょうか。確かにそうでないのです。(2) ‘サタン’ は一つの形容詞として使用されています。確かにそうであります。では、何が問題になりますか。罪を私たちの対敵、すなわちサタンとして擬人化した言葉が受け入れないのですか。使徒ヨハネの書信と福音書にはこの世を度々擬人化して使用しました。罪を ‘サタン’ あるいは ‘悪魔’ と擬人化した名称より勝るのではないでしょう。

6.3 悪霊

以前の二つの学習で私たちはなぜサタンとか悪魔を人格的存在とかあるいは怪物と信じていないのを説明しました。もし私たちがそう言う存在がないと受け入れるならば、その悪魔の僕たちとなっている悪霊も存在しないことを確信するでしょう。多くの人が神は私たちに良い物を与え、悪魔は悪いもの、災いを与えるばかりでなく、良い物を取り去って行くと思っています。

聖書は明らかに神がすべての力の源泉であり(学習6.1を見よ)、また彼が私たちの生活に良い物、悪しき物を皆与える方であると教えています。

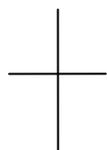
“私は光を造り、また暗きを創造し、平安を造り、また災いを創造する。
私は主である、すべてこれらの事を成す者である” (イザ.45:7)。

“災いが主から出て、エルサレムの門に臨んだからである” (ミカ.1:12)

。

“町にラッパが鳴ったら、民は驚かないだろうか。ヤウエがなされるのでなければ、町に災いが起こるだろうか” (アモ.3:6)。

従って私たちが試練を受ける時、私たちはそれを悪魔とか悪霊のせいとせず、神から来ることであると受け入れなければならないのです。ヨブは神が祝福して下さ



った多くの財産と子らを失ったけれども、彼は決して、“神が下さった物をその悪霊たちが持って行った”と話していないのです。彼が話したのを聞いて見なさい。

“ヤウエが与え、ヤウエが取られたのだ” (ヨブ.1:21)。

“私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも、受けるべきではないか” (ヨブ.2:10)。

私たちが生活で問題に出会う時、普通私たちは神にそれを処理して下さいと祈りますが、私たちが一度すべてが神から来るのであると認識すれば、彼がそれらを私たちに送って、私たちの性格を発展させ、私たちを良くするために、彼がもたらしたのであると確信するになるのです。

“私の子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められる時、弱り果ててはならない。主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を、鞭打たれるのである。あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである。一体、父に訓練されない子があるのか。誰でも受ける訓練があなたがたに与えないとすれば、それこそ、あなたがたは私生児であって、本当の子ではない” (ヘブ.12:5-8)。

神はすべての力の源泉

神はすべての力の源泉であります。

“私は主である。私の他に神(神は‘ヘブル語’で‘力’を意味します)はない、一人もない” (イザ.45:5)。

“私の他に神があるか。私の他に岩はない。私はそのある事を知らない” (イザ.44:8)。

“ヤウエこそ神であって、他に神のない事を知らせるためであった” (申.4:35)。

このような句節が聖書を通して繰り返し話しているのが見出されます。神はすべての力の唯一の源泉であるために、彼はねたみがあることに留意しなければならないのです(実例、出.20:5; 申.4:24)。

神の民が神に対して、‘あなたは力強い、偉大なる神であります、私たちは実際には、ほかの神たち、あなたよりは力が少ない神たちを信じています’と言ったから、神は彼らを妬みました。これは私たちが神と共に悪魔とか悪霊の存在を信ずることが出来ないのを意味しているのであり、またイスラエルが誤解していたそのことでした。旧約聖書の多くはイスラエルが真の神と共に他の神らを信ずるによって神を怒らしたのを現わしているのです。聖書の観点から見ると、今日悪霊を信じている人たちは昔偽りの神を信じていたイスラエルとちょうど同じことです。

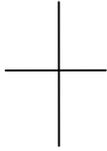
悪霊は偶像を意味する

コリント前書で、パウロはなぜクリスチャンが偶像崇拜とかそのような物を信じてはならないかを説明しました。新約聖書の時代の人たちは悪霊が彼らの生活に訪れる災いを留めることが出来る神であると信じそれを崇拜していました。したがって彼らは偶像である、悪霊のモデルを造り、それを拝みました。それゆえに、パウロは彼の書信に同意の“悪霊”と“偶像”の言葉を交替的に使用していました。

“人々が供える者は、悪霊ども、すなわち、神ならぬ者に供えるのである。私は、あなたがたが悪霊の仲間になることを望まない。...しかし、誰がこれはささげ物の肉だと言ったらそれを知らせてくれた人のために、また良心のために、食べないがよい” (コリ前.10:20, 28)。それで偶像と悪霊は実際等しい者であることを示しています。パウロが“彼らは悪霊に供えるのであって、神に供えるのでない”と、一偶像は神でないと話しているのに注目しなさい。神はすべての力の源泉である唯一な方であるから、悪霊などはなんの力もない者です。要点はコリ前.8:4に説明しています。

“私たちは、偶像なるものは実際は世に存在しないことと、また、唯一の神の他には力のある者がいないことを、知っている”。偶像、あるいは悪霊は全くこの世に存在しない者です。唯一の神だけがおり、彼がすべての力の唯一の源泉です。パウロは続いて説明して行きました(コリ前.5 : 6)。

“たとい神々と言われるものが、あるいは天に、あるいは地にあるとしても、そして、多くの神、多くの主があるようであるが、私たちには、父なる唯一の神がいますのである”。

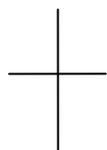


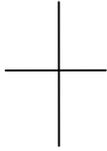
更に新約聖書の時代の人たちは悪霊を‘偶像’あるいは‘神’と信じていたのを立証しています(使.17:16-18)。これはパウロがアテネで福音を伝えていたのを描写しています。そこは全市が偶像で満ちていて、多くの人がいろいろな神を拝んでいました。彼らがパウロが福音を伝えるのを聞いた後、彼らはこのように話しました。“あれは、異国の神々(一新しい神)を伝えようとしているらしい”と、それは、“パウロがイエスと復活とを、述べ伝えていたためでした”。そのように人たちは彼が説明している“イエス”と“復活”は新しい悪霊、あるいは偶像とっていました。その章の残りの部分を読んで行けば、パウロが彼らにいかにも真理を教えたかその方法が分かるようになります。その22節ではこのように話しています。“あなたがたは、あらゆる点において、すこぶる宗教心に富んでおられる(一悪霊崇拝が多い)と私は見ている”。しかし真の神はあなたがたの悪霊や偶像のように供えることを欲しないと説明しました。あなたは神はすべて力の唯一の源泉であることをいつも記憶していなさい。もし神がその悪霊の内になければ、その悪霊はなにもなすことが出来ないのです。なぜならこの宇宙にはヤウエの神以外には力の源泉がないから、力のある悪霊はこの世に存在しないのです。

旧約聖書の悪霊は偶像

旧約聖書にもどって見ると、“悪霊”が偶像であると言われたもっと多くの証拠があります。申.28:22-28、56-61は、精神疾病は民の偶像/悪霊崇拝に与える一つの刑罰であると予言しています。これは悪霊が新約聖書の精神病と連合しているのを説明しているのです。しかし悪霊と言う言葉は罪でなく、病気と連合しているのに注目すべきです。新約聖書にはキリストが嫉妬とか殺人の悪霊を追い出したと書いていないのです。また悪霊が病気を起こすと言わないで、人たちが悪霊/疾病を持っていたと言っているのに注目すべきです。旧約聖書のギリシャ語翻訳本(70人訳本)は申.32:17と詩.107:37で偶像の単語を話すに“悪霊”と使用しているのです。これが新約聖書には“偶像”と翻訳されています。詩.106:36-39はイスラエルがカナンの偶像、悪霊に祭事を執り行つたと彼らの過ちを描写しています。

“彼らは(イスラエル)自分たちのわなとなった偶像に仕えた。彼らはその息子、娘たちを悪霊にささげ、罪のない血、すなわちカナンの偶像にささげた。...





このように彼らはそのわざによっておのれを汚し、その行ないによって姦淫をなした”。

偶像は確かに悪霊の一つの違う名称であります。彼らの悪霊崇拝は人間が想像して考案した物を崇拝している信仰するに過ぎないから、“彼ら自身の業、...彼ら自身が考案した物を”崇拝しているのであると描写しています。彼らが創造したその偶像は彼らの業でした。それで今日悪霊を信ずる者たちは神が私たちに教えていることでなく、人間が創造した物、皆人間が考案して作った物を信じているのです。

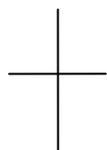
申.32:15-24は神は彼の民が悪霊を信ずるのに怒りを引き起こしたことを描写しています。“あなたがたは肥え太って、つややかになり、自分を造った神を捨て、救いの岩を侮った。彼らは他の神々に仕えて、ヤウエの妬みを起こし、憎むべき行ないをもってヤウエの怒りを引き起こした。彼らは神でもない悪霊に犠牲をささげた。それらは彼らがかって知らなかった神々、近ごろ出た新しい神々、先祖たちの恐れることもしなかった者である。...そして言われた、「私は私の顔を彼らに隠そう。...彼らは背き、もとのやから、真実のない子らである。彼らは神でもない者をもって、私にねたみを起させ、偶像を持って、私を怒らせた。...私は彼らの上に災いを積み重ね、私の矢を彼らに向かって射つくすであろう”。

神は悪霊を忌まわしいもので信ずるに価値がないもの、実際存在しないものだと描写しています。悪霊を信ずることは神に信仰がないのを現わしているのです。実は神が良いものと悪いものとを、皆私たちに与えていると信ずることが難しいのです。悪いものは神以外の他の者から来ると信ずるのがたやすいからです。なぜなら私たちが一度それら皆が神から来ると言うなら、私たちに益を与えるために、また神がそれら皆を取り去って行くと信じなければならないからです。

新約聖書の悪霊

しかし、あなたは“悪霊に対して明らかに話している新約聖書のすべてのページは如何に理解出来るのですか”と質問するでしょう。

私たちは一つ明らかにせなければならないことがあります。聖書は全能の神の言葉であるので、絶対矛盾があり得ないのです。もし神が私たちに問題を起こし、彼がすべての力の源泉であることを確かに知っているならば、聖書には、私たちに問



題を起し、神に対抗する小さな神、悪霊は存在しないことをはっきりと分かるでしょう。旧約聖書にはただ四度“悪霊”と言う言葉が出て来て、それらが偶像崇拝を描写しているのに対して、新約聖書の福音書には数多くその言葉が出て来るのはとても意義があるのです。これは福音書が書かれる当時、原因を知らない病気は悪霊によって起こると誤った考えで人たちが話していた当時の語法を使用したためであります。もし悪魔が実際存在し、疾病を犯し、人たちに問題を起しているとすれば、旧約聖書にもそれに対して書かれていることを多く読むことが出来るでしょう。しかし私たちは旧約聖書でそれらに対して書かれた句節を見出すことが出来ないのです。

新約聖書にある悪霊

その悪霊が人から追い出されたと言う言葉は彼らが精神病、あるいは原因を知らない病から治癒されたと言う意味でした。1世紀に住んでいた人たちは彼らが分からないことはすべて彼らの想像に存在する者“悪霊”から起こったとその悪霊を咎める傾向がありました。彼らの医学水準では精神病にかかる原因を知らなかったから、人たちはその患者を‘悪魔に所有された’と話しました。旧約聖書の時代では、精神病にかかって病む人たちを悪霊あるいは汚い霊が彼らに入って作用すると思っ

ていました(士.9:23; サム上.16:14; 18:10)。新約聖書の時代でも、精神病にかかって病む人は汚れた悪霊/鬼神につかれたと話していました。その悪霊とその疾病を連合して話したのを次の句節らが示しています。“夕暮れになると、人々は悪霊につかれた者を大ぜい、みもとに連れて来たので、イエスは言葉を持って霊どもを追い出し、病人をことごとくおいやしになった。これは、予言者イザヤによって、「彼は、私たちのわずらいを身に受け、私たちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである”(マタ.8:16, 17)。だから人間のわずらいと病気は“悪霊”と“汚れた霊”つかされたと同じ意味です。

当時の人たちはイエスが悪霊を持っているために気が狂っていると思っていました。“彼は悪霊にとりつかれて、気が狂っている”(ヨハ.10:20; 7:19, 20; 8:52)。従って彼らは悪霊が気を狂わせると信じていました。

疾病治療法

彼らはその病気が癒された時、“悪霊につかれていた”者が“正気になった”と話しました:マコ.6:15;
ルカ.8:35。これは精神的に正しくない者を“悪霊につかれた”者であると他の言葉で話しているのです。

その精神疾病に掛かっている者を癒したと話すことを(マタ.4:24; 12:22;
17:18) “悪霊を追い出した”と違う言葉で話しました。

ルカ.10:9でイエスは70人の使徒を遣わしながら、彼らに“病者を癒せ”と告げましたが、彼らはそれをなすことが出来ました。彼らは帰って来て、“あなたの名によって、悪霊までが私たちに服従しました”(17節)とイエスに報告しています。繰り返して言いますが、悪霊は精神病と同じ言葉です。使徒たちは度々イエスの名によって人たちを癒しました。ここにその実例があります(使.3:6; 9:34を見なさい)。

当時使用していた言語

新約聖書が書かれる時代には、人が精神病とかあるいは原因の分からない疾病に掛かっている者を悪霊に取り付かれていると話していました。同時代のローマとギリシャ文化の信仰は人に悪霊が入って来て精神病を起こすと考えていました。今も悪霊の存在を信じている‘クリスチャン’は実際その地域にあった当時の異教的信仰が正しいと話しているのです。聖書は当時の人たちが理解出来る言葉で書かれています。聖書は当時の言葉を使用したためにそのように表現されているのであって、悪霊の存在とかあるいはイエスがそれを信じていたのではありません。それと同じく、英語を使用している地域では癲癇病を‘Lunatic’と言って、それは月の神の怒りを受けて(Moon-Struck)、そのようになると思っていました。昔からその人たちは明るい月の夜歩いていると、月の神の怒りを受けて癲癇を起こすと考えていました。今でも病院ではその言葉、“Lunatic”を使用していますが、誰もそのように月によって癲癇が起こるとは思っていないのです。

もしイエスがこの地に帰って来ないで、この言葉が書かれている聖書を2000年の後の人たちが読むとすれば、彼らは月が人を発狂させると私たちが信じていたと考

えるでしょう。しかしそれは2000年前イエスが当時の言葉を使用したように、私たちもそれを使用しているのを考えていないのです。それと同じく、英語の言葉を使っている地域では混乱されている状態を“St.VituのDance”と言う伝来の言葉があります。それはその混乱がSt.VituのDanceによって起こったのでないけれども、今もその言葉を使っています。またイエス・キリストの誕生日が12月25日でなくても、本著者もその日を‘クリスマスの日’と使用しています。その言葉を使っている、その日をキリストの誕生日とは信じていないのです。週間の曜日の名前もそれと同じく、日曜日は太陽、土曜日は土星、月曜日は月を崇拝する異教の偶像崇拝に基礎してつけた日の名前であります。しかしこれらの言葉を使用しているけれども、その異教の信仰を持っているのではないのです。‘インフルエンザ’ (Influenza)も今日使用しています。その言葉‘インフルエンザ、Influenced by demons’は元来悪霊の影響を受けたと言う意味です。ダニエルの名が、異教の神を反映するベルテシャザル(Belteshazzar)とつけ直され時、神の靈感によって書かれているダニ.4:19はその間違った考えを正さずそのまま呼んでいます。私が‘教王’と呼ぶ時、その人が実際キリスト教の王であるから、そんなに呼ぶのではなく、それが間違っていることを知っていても、彼が誰かを認定するためにそんなに呼んでいるのです(マタ.23:9)。

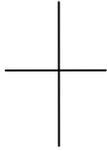
エゼキエルの時代イスラエルにはイスラエルの土地に住む者には不幸に落ちると言う迷信がはやっていました。これは事実でないと神は当時流行して考えを使ってイスラエルに説き伏せました。“ヤウエなる神はこう言われる、彼らはあなたがたに向かって、「あなたは人を食い、あなたの民に子のない嘆きをさせる」と言う。あなたはもはや人を食わない。あなたの民に重ねて子のない嘆きをさせることはないと、ヤウエなる神は言われる”(エゼ.36:13,14)。その時海は地を飲み込もうとする一つの巨大なる怪物であると言う異教の概念が広がっていました。これは確かに事実でないのにも拘わらず、聖書は度々その言葉を使用し比喩的に現わしてその意味を良く把握するようにしています(ヨブ.7:12; アモ.9:3; エレ.5:22; 詩.89:9; ハバ.3:10; マタ.14:22; マコ.4:30を見なさい)。アッシリアの迷信はこの反逆的海の怪物を‘ラハブ’と呼び、その名をエジプトにつけていました(イザ.51:9)。

聖書が神の靈感によって書かれていると信じるなら、聖書に当時の異教概念を反映していることは絶対ないでしょう。神が究極的力の源泉であることを示すために、同時代の信仰を意識的に言及しているのに違いないのです。彼は海の‘怪物’を

支配する唯一なかたです。そこで、そのように使用したのは彼の意志によるのです。従って神はその人たちの信仰にある根本的過ちを正しました。それはこの世に神の支配に従わないで、作用する力、すなわち悪の力を暗示するのです。しかし、聖書はこのことに関して、海に飲み込もうとしている巨大な怪物があるとか、あるいは海が怪物であると言う、愚かな信仰を破壊するのであり、それを指示するのではないのです。

他の実例は稲妻とあらし雲を“曲がった大蛇”(ヨブ.26:13; イザ.17:1)と話していることです。これは確かに同時代の異教が稲妻とあらしの雲は曲がっている巨大な蛇が実際形成すると信じていた信仰でした。この句節はそのような愚かな考えを明かすとか、科学的に説明しないでそのままその言葉を使用しているのです。その代りに神がそれらを支配すると力説しています。人たちが広く悪霊を信じている信仰に対するキリストの態度もこの点に関しては彼らと全く同じでした。彼の奇蹟らはいわゆる‘悪霊’に関して迷信している人たちに神の力が絶対的に完全であり、限りのないことを明らかに立証しました。‘悪霊’に関する新約聖書の記録がそのようなものが実際存在することを立証していると信じている者たちは海が実際怪物であり、稲妻が実際巨大な蛇であることも受け入れなければならないのです。これは必ず留意すべき点であります。聖書は、その言語を基礎とした信仰を指示することとは別に、そこに書かれている当時の言葉を使用していることを認識しなければならぬのです。私たちはそれと同じく現在の言葉を使用しています。聖書は学習6.1と学習6.2で学習した神は全能であると言う基礎真理を確認させるためにそれらを利用しているのです。神は私たちの試練に与えますが、私たちに罪を犯させるのではないから、罪は私たちに責任があります。これは皆私たちが救う神の力の偉大さを認識させるに意味があるのです。いわゆる‘高等批評家たちは’継続的に靈感されて書かれた聖書に、その言葉と信仰と周囲の文化概念が連合されていると思いその連結の輪を発掘しています。私たちが一旦聖書はその地方の異教で話していた言語が使用されていることを認識すると、靈感された聖書を読んで、予言者の口から出たさわやかな時期を知っている者たちが既に持っていたつまらない信仰の対象よりは唯一の神、“ヤウエ”がはるかに偉大なかたであることを示すためにそのようにしたのを理解するでしょう

これを留意して聖書を読むなら、新約聖書には当時使用していた理に合わない言葉を訂正しないでそのまま使用している数多くの実例を発見するでしょう。ではその実例を上げて見ます。



神と罪悪 201

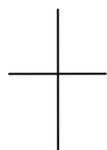
パリサイ人たちはイエスがバアル・ゼブブと呼ばれる偽りの神の力によって奇蹟をなすと彼を訴えました。それに対してイエスは“もし私がバアル・ゼブブによって悪霊を追い出すとすれば、あなたがたの仲間是谁によって追い出すのであろうか”(マタ.12:27)と話しました。王下.1:2にはバアル・ゼブブがペリシテノ偽りの神であると明らかに告げています。‘さあ、王下.1:2を見よ、バアル・ゼブブは偽りの神です。だからあなたがたの訴えは正当ではありません’と言わないで、彼は自分の教えを聞いている人たちに彼のメッセージを納得させるために、バアル・ゼブブが存在しているように話しました。それと同じくイエスは、その悪霊は存在しないと言わないで、悪霊を追い出したと話しています。彼は当時使用していた言葉で彼の教えを伝えました。

使.16:16-18は使徒ルカが靈感によって話したことです。“私たちは占いの悪霊(Pythonの霊)につかれた女奴隷に出会った”。そのPythonは1世紀アポロと同じく人たちが信じていた一つの偽りの神でした。それでPythonは決定的に存在しないものです。しかしルカはそんなに言わないで、その小女が‘Pythonの霊につかわれた’と言って存在していない偽りの神が存在しているように話しました。それと同じく、福音書でも、そのように、イエスは存在していない悪霊を追い出したと話しています。それはただ当時の言葉で話したのです。

ルカ.5:32の記録は、イエスが悪のユダヤ人たちに“私が来たのは、義人を招くためではない”と話しているのです。これは彼が‘私は彼ら自身義人であると信じている人たちを招くために来たのではない’と言うことでした。イエスは、事実を話していなかった当時の話し方で話したのです。ルカ.19:20-23には、その比喻にある一タラントを受けていた者の事実でない言葉をイエスが使用して示しています。しかし彼はその事実でない話しを訂正していません。

聖書は度々‘太陽が上り、沈む’と話しています。これは普通人たちが使用している言葉ですが、科学的には事実でないのです。それと同じく病気にかかっているのを悪霊につかれていると言うのは科学的には正しくない表現です。使.5:3でアナニアが聖霊を欺いたと話しています。これは実際に不可能なことです。実際はそうでないですが、しかしアナニア自身は事実のようになが考えていたのです。

聖書に書かれている言葉は当時の人たちには良く理解出来る言葉でしたが、今は私たちに不慣れである言葉であります。その実例を上げれば、“皮には皮”(ヨブ.



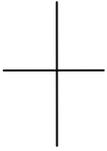
2:4)と言ったのは古代の貿易の価格計算法を言及しているのであり、男娼が“犬”と呼ばれていました(申.23:18)。悪霊の言葉はその一つの例です。

キリストの時代のユダヤ人たちは彼らはアブラハムの子孫であるから、義人であると思っていました。従ってイエスは彼らを“義人”と呼び(マタ.9:12、13)、そして“私はあなたがたがアブラハムの子孫であることを知っている”(ヨハ.8:37)と話しました。しかしイエスは彼らが義人であると信じなかったのです。彼は度々その点について明らかにし、彼らがアブラハムの子孫になれない理由を上げて話しました(ヨハ.8:39-44)。そのようにイエスは人たちの信仰を直接に反駁しないで、額面通り取り扱いましたが、その代わりにただ真理を立証するだけでした。これが旧約聖書の時代一般的に異教の信仰を取り扱う神の取り上げ方であった事を示しました。新約聖書で悪霊に対するキリストの態度はそれと同じです。すべての患者を癒す偉大なる力を持つ神であると言う観点から、神が下さったイエスの奇蹟らは、すべての力が他でなく、ただ神から来るのをもっと明らかにしました。

パウロはギリシャの詩人たちが教えたことを信じている者たちを混同させるために、彼らがかき回されるべきその詩人たちが話している非聖書的ナンセンスを引用しました(テト.1:12; 使.17:28)。私たちが提示していることはパウロが“知れない神”、すなわち存在するであろう思っている異教の神を拜むために捧げた祭壇を見つけて反応したのを要約したのです。しかしアテネの人たちはそれを見逃していました。パウロはこれを見逃す彼らの愚かさを非難する代りに、彼らが知らない神から真の神を理解するように取り扱って話しました(使.17:22、23)。

エペ.2:2は“空中の権を持つ君”と話しています。これは確かにパウロの読者たちがかねて信じた種類のゾロアスター教の神話の概念を言及しているのです。パウロは彼らがかねて“空中の権を持っている君”の下で生きていたと話しています。この句節で、パウロはこれは“不従順の子ら(肉の人たち)の中に今も働いている霊(心の態度)”であると定義しました。以前に彼らは天の霊的君を信仰する異教の概念を信じていました。今パウロは彼らが実際堅苦しく従順していた権力は彼ら自身の肉の心であるとその点を力説しています。このように、罪に関する真理を示すために、何の特別な非難もせずに、異教の思想が言及されています。

使.28:3-6は一匹の致死のまむしがパウロの手にかみついたことを話しています。周囲の人たちは、パウロが人殺しであるから、“ディケーの神が生かしておかない



神と罪悪 203

” と思っていました。その事態に対する彼らの考えは全く間違っていました。しかしパウロはその間違っていた考えに対して詳しく説明しないで、その代りに、彼は奇蹟を行ない、彼の手に噛付いているその蛇を取って火の中に放しました。

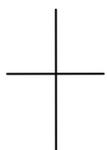
イエスはその地方の間違った考え、習慣、例えば、悪霊等に対して、多くの言葉を話してその考えを正しくする代りに、奇蹟を行ってそれらをなくしました。ユダヤ人たちがイエスに対して、彼は神の冒流者であり、そして神だけが罪を赦すと、二つことで非難しました(ルカ.5:21)。しかしイエスは言葉で彼らの考えを正しくしないで、その代りに奇蹟を行って彼らの間違った考えを立証したのでした。

イエスの信条は論より証拠でありました。彼は間違った考えを直接に摘発したことはありません。彼はモーセの律法が救いを与えることが出来ないと言った代りに、安息日に病者を癒す等、行動を持って真理を示しました。イエスはサマリア人であると偽りに訴えられた時、彼がアブラハムのその子孫であるユダヤ人であったけれども、重要な神の救いの計画のために(ヨハ.4:22)、それを直接に否認していないのでした(ヨハ.8:48、49、4:7-9,比較)。

ユダヤ人たちが故意的にイエスが“自分を神と等しい者とする”と非難する時さえ(ヨハ.5:18)、イエスはそれを否認する説明をしなかったのでした。その代りに、彼の奇蹟を彼らに見せて彼が神の代りに働いている人である事を強く説破して、自分が神と等しくないのを見せました。それと同じく、イエスの奇蹟は彼らが悪霊の存在を信じている間違いを現わしました。ベテスダの池のそばで不具の者を治癒したキリストの奇蹟は、過ぎ越しの祭りの時天使が降りてその池の水を動かせるのでその水につけると病気が癒されると言う神話を信じているユダヤ人たちの信仰の愚かさを現わしました。この神話はその真実に関して何の否定もしないでそのまま記録されています。キリストの奇蹟の記録はその偽りをさらしています(ヨハ.5:4)。

ペテロ.2:4には悪人はタルタロス(多くの訳本はよみ{陰府}と翻訳している)に行くと言われた言葉を使用しています。タルタロスは一つの伝説の所でした。しかしペテロはその観念を正しくしないで、そこを罪の刑罰のために完全に滅亡する所の象徴として使用しました。キリストがゲヘナと言う言葉を使用したのもそれと同じことです(学習4.9を見よ)。

悪霊が実際病気を起こすのか



悪霊が存在すると信じている者は誰でも彼自身に尋ねて見なければならないのです。“自分が病気にかかった時、これはその悪霊が起したのか”と。あなたが、もしその悪を行ないながら巡り回る小さい神たちと言われる悪霊に対する新約聖書の言葉を信ずるなら、“そうである”と答なければならないのです。その場合、あなたは悪霊が起している多くの病気が薬によって癒され、あるいは病勢が良くなる事実を如何に説明出来るのですか。マラリアはその標準的実例であります。アフリカにいる大部分の人が最近までマラリアは悪霊が起す病気と信じています。しかしそのマラリアがキニーネ剤によって癒されるのを私たちは良く知っています。ではあなたはその悪霊がその小さな黄色いタブレットがあなたの喉に降り行くのを見て怖がられて飛び去ると思うのですか。イエスが治癒した病気のいくつかは悪霊につかれていた結果起こったと描写されていますが、それは破傷風や癲癇病でした。これらは現在薬で充分治癒出来るのです。

ウガンダのカムパラの郊外の小さい村に住んでいる友人が一度私を訪れたことがあります。彼はマラリアが悪霊によって起されると信じていた人たちが一度薬がその悪霊を支配するのを見て、彼らは悪霊を非難することを止めたと彼は私に告げました。しかし大脳マラリア(精神攪乱を起す深刻なマラリア病の一種)にかかった時は、彼らがまだその悪霊を非難していると話していました。近くの都市にある医者に来てその患者に強い反マラリア剤を与えたが、彼はそれを拒絶しました。それはマラリアでなく、悪霊であるから彼と戦わなければならぬ言うのでした。その医者は帰り来て“私はその悪霊を追い出す薬を持って来た”と話しました。彼はその薬を熱心に服用して良くなりました。その二番めのタブレットはその始めのものと同じものでした。その医者は悪霊の存在を信じていなかったけれども、その患者を癒すためにその言葉を使用しました。2000年前の“偉大なる医者”主イエスもそれと同じくその言葉を使用したものでした。

間違った解釈17:魔術使

この‘間違った解釈’は大部分魔術が人たちの日常生活に一般化されているアフリカとその他の未開の地方の人たちから収録したのです。アフリカの医者たちと

真理を保たない者たちが魔術に頼っているのを聖書学徒たちはみな認定していることです。しかし、私は彼らに一般の医者よりも魔術使の治療価が安く、魅力があり、受け入れやすい者であることを良く認識しています。私たちはこの問題を論理的に、聖書的方法で考察すべき必要があります。これはあなたが彼らが使用している魔術の誘惑を撃退する力を得る唯一の方法であるからです。

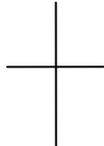
魔術使の主張

第一に、その魔術使たちの成功したと言う主張を分析して見る必要があります。彼らの成功に対する主張には多くの誇張があるのを確かめることが出来るのです。彼らの治癒はすべての人が見ることが出来るように、決して公になしていないのです。もし彼らが治癒に成功したとすれば、彼らは病院で働いて、世界的に広く知らせるべきです。彼らが治癒すると主張した正確な状況はまだ全然知られていないのです。実際彼らが治癒したかは不明瞭です。

この誘惑に直面しているあなたはがたは彼らの力に対する決定的証拠を持っているかどうか自分自身に尋ねて見る必要があります。例をあげれば、製材所でのこぎりに腕が切られた人が魔術使に行って完全に働くことが出来る新しい腕に直されて帰ったのを見たことがありますか。これは私たちが彼らに信頼を置く前に必ず持たなければならない種類の必要な証拠です。申.13:1-3はそれよりもっと強く話しています。イスラエルは、もし魔術使がしるしや奇蹟を湿しても、彼らが神の言葉の通りに正しい教理を話さなければ彼らを信じてはならないと教えられました。魔術使は聖書に啓示されている真理を信じないのが事実です。従って私たちはすべての力は神から来るのですから(ロマ.13:1;

コリ前.8:4-6)、彼らに本当に力があると信頼を置いてはいけません。

第二に、彼らが問題を処理していると訴える人たちが問題になるのです。今は人間が彼らの脳力の1%しか使用せないと認識されています。その残りは私たちが意識せなくても、それを皆私たちの身体に実際作用していると思っているのです。この心理学者たちは、ある血液疾病患者が自分の血液が適切に構成され正常的であると言う強い想像力を持つによってもその病気が治癒されるのを知っています。医者たちはたまたま正統的医学によらないでそのような方法で治癒されるのを是認してい



ます。これと同様に、人の心の多くのストレスが胃潰瘍と頭痛を起しているのです。心のくつろぎとかある方法による心の働きによってそれらの痛症が去り行くのです。しかし、例を上げれば、もし私たちが製材所ののこぎりに手を切り取られたとすれば、いくら心の努力をしてもそれをもとの通りに回復する事は出来ないのです。魔術使たちが治癒出来るのはただ心を治める軽い精神的疾病だけです。私たちは心の働きを完全に知らないために、そのようなことが身体に起こるのを魔術使が持つ力によると信ずるのです。それは彼らが力を持っているからではなく、彼らはその効力をもたらすように人の心を働かせるに影響を与えるのだけです。

力の源泉

しかし、すべての力は神から来るのです。良いことと病気のような悪いこと皆が魔術使から来るのではなく、神から来るのです。これは聖書にあるとても一般的論題であります。イザ.45:5-7; ミカ.1:12; アモ.3:6; 出.4:11; 申.32:39; ヨブ.5:18。このすべての句節は注意して読むべきです。次に私たちが病気にかかったら、その治癒のために慣例的薬を使用して人間が出来るすべてをなし、そして神に向かって祈ることです。もしも私たちが魔術使に行くとすれば、私たちが‘暗黒の勢力’を支配すると主張している者たちに帰るのです。しかし私たちは彼らが存在もしない勢力を信じているのを知っています。私たちが魔術使に帰るのは神がすべての力の源泉でないと信ずることであり、私たちに病をもたらす者は神でなく、魔術使たちが主張している他の者であると信じているのです。

神は全能であるために、彼が人に病ももたらすと言う考えは、神を怒らしめ、彼を冒瀆することである考えであります。イスラエルはヤウエの神を信じたが、また彼らの生活に働いている他の力も信じました。それは彼らが他の力である偶像を造ってそれを崇拝したからです。これは神を怒らして彼の民をその地から追い出すようにさせました(申.32:16-24)。私たちが神に完全な信仰を持たないのは実際彼を信じていないのです。イスラエルの神を信ずると主張する者は誰でも、神とは別の他の勢力の存在を受け入れず、過去イスラエルがしたような、魔術使の影響からは離れるでしょう。イスラエルの悲しい長い歴史は“私たちの教訓のために書かれているのです”。私たちは神以外の力を信ずる者と交わりをしてはならないのです。

“不信者と、つり合わないくびきを共にするな、義と不義と何の係りがあるか。光と闇となんの交わりがあるか。...
神の宮と偶像となんの一致があるか。あなたがたは、生ける神の宮である。...
だから、彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主はいわれる。...
そして私はあなたがたの父となり、あなたがたは、私の息子、娘となるであろう” (コリ后.6:14-17)。

私たちが実際これらのことから離れるために努力し犠牲すると、私たちには神の子らになるその栄光が確証されているのです。普通の人間の父も彼らの子らが病にかかれば、本能的に世話するのです。私たちの天の父は彼らよりもっと世話してくれると信ずることが難しいですか。

魔術使はただ彼を信ずる者に影響を与えるのが事実です。それと同じく、愛する人を亡くしたある者が魔術使に行ってその死んだ人を見せて下さいと尋ねたとしましょう。その魔術使は彼に目を閉じてその人の顔を心に明かに描きなさいと言うでしょう。その顧客は彼が明らかに記憶出来るその人の写真に心を注ぐでしょう。そこでその魔術使はその顧客の心を読むことが出来るし、すこし誇張した言葉でその人に対して実際的な状態に話します。するとその顧客は魔術使がその死んだ人が生きかえったのを見たように説得されてしまうのです。彼は決してその人が生きかえった確実な証拠を与えることが出来ないのに注目しなさい。その顧客が魔術使を信じないとか彼に服従しないとその魔術は効力を発揮することが出来ないのです。

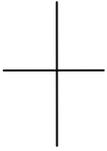
エジプトのパロやバビロニアのネブカデネザルに彼らの夢を正常的に告げていた‘魔術使’は彼らが夢うらを話すことが出来ないから、彼らの地位が危なくなった時があります。疑いなく、彼らは読心術を使っていたのでしょ。しかし、神がパロとネブカデネザルの生活に介入して、人間の事に関係を持つ時、その魔術使たちは彼らの神通力を発揮することが出来ませんでした。それと同じく、バラクは予言者バラムの言葉の力を信頼して、“あなたが呪う者は呪われることを私は知っている” (民.22:6)と話しながら、彼に多くの補償金を与えてイスラエルを呪うようにさせました。しかし、バラムは彼がイスラエルの人たちを呪うとした時彼の正常の力が去って行ったのが分かりました。如何に有名な魔術使であっても、確かにこのような人が神の民を処理しようとした時に彼には力がなかったのです。

聖書にある魔術使

これの実際的意味は、私たちが魔術使に誘惑されて彼に行くのは彼を全的に信頼しているのです。私たちは良くなりたくて魔術使を使用しないで、彼らが最善を尽くすように、私たちも最善を尽くしましょう。そのような人たちを信頼し、彼らが支配していると主張する力の存在を信ずるのは全能の神に対する信仰の欠乏を示しているのです。もし私たちが上記のパロ、バラク、ネブカデネザルの記録を実際信ずるなら、魔術使が私たちに何か効力があると思って彼らに行かないでしょう。調べて見た実例は、魔術使が神の民を支配する力を持っていないのを示しているのです。神の呼び出しに応じてバプテスマを受けた私たちは自身がどう言う身分であるかを確実に知らなければならないのです。

パウロは魔術が“偶像崇拜、好色、異教”の範疇に入る“肉の働きである”と規定しています(ガラ.5:19-21)。“私は以前も言ったように(これはパウロが力説した彼の教えでした)、今も前もって言うておく。このようなことを行う者は神の国を継ぐことがない”と彼は説明しました。これと同じく、モーセの律法の下にいた者たちにも“占いをする者、卜者、魔法使、他の神に犠牲を捧げる者”は必ず殺さなければならないと命令しています(申.18:10, 11; 出.22:18)。彼らの子を火の中を通過させたのは実際魔術使ではなかったのです。魔術使と偶像崇拜者たちは悪の勢力から保護するために火の中を通過することを教え、その保護を欲する者たちの子は火の中を通過させたのです。私たちはその魔術使とそれを行う者を共に殺したことを知っています。新しい言約ではそのような事をする者は神の国に入れないのです。

魔術使を利用して幸運をつかむもうとするのは神が望むのではありません。キリストの内にある私たちの生活に直面するすべてのこと決定するに‘神が本当にこれを欲するであろうか、私のそばに居られるイエスはどんなにこの問題を解決するであろうか’と深刻的に自身に尋ねるべきです。魔術使に対する神の呪詛の観点で、その答は自明であると思います。神は私たちがそれを使用するのを欲しないのです。魔術は神の言葉を“捨てる”のと等しいとサムエルは定義しました(サム上.5:23)。イスラエルが偶像と魔術を信ずるによって、全能者を怒らせたことは絶対してはならないのです(申.32:16-19)。魔術使を信ずる信仰は神がもっとも憎む事であるから、神はイスラエルにカナン人を全部追い出せと命令したのはとても重要なことです。しかしイスラエルは彼らと一緒にそれを行いました(申.18:9-14)。だから、バプ



テスマを受けて新しいイスラエルになった者たちは周囲の悪の世で学んだことを止めなければならないのです。そうでなければ、約束のその国を継ぐことができないのです。それは魔術使が使用するものであり、私たちはそれを利用してないから、係りがなくとも、魔術使に力があると信ずる限り、実際それを利用しているのと等しいのです。

この異邦の世から光と真理と栄光の彼の国に向かってこの終わりの時代を通して歩き行く私たちすべてに神が加護を与えるように祈ります。

“彼らが滅びるのは、自分らの救いとなるべき真理に対する愛を受け入れなかった酬いである。そこで神は、彼たちが偽りを信じるように、迷わす力を送り、...しかし、主に愛されている兄弟たちよ、私たちはいつもあなたがたの事を、神に感謝せずにはおられない。...

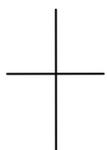
そこで、兄弟たちよ、堅く立って、私たちの言葉や手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り続けなさい。どうか、私たちの主イエス・キリストご自分と、私たちを愛し、恵を持って永遠の慰めと確かな望みとを賜わしたる私たちの父なる神とが、あなたがたの心を励まし、あなたがたを強めて、すべての良いわざを行ない、正しい言葉を語る者として下さるように” (テサ后.2:10-17)。

間違った解釈18:エデンで起こったこと

創.3:4,5には、“蛇は女に言った、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神たちのように善悪を知る者となることを、神は知っておられるのです」” その女に話したと書かれています。

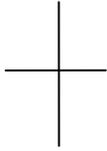
通俗的解釈

ここで一般のキリスト教は、その蛇は既に罪を犯していた“サタン”と呼ばれる者であると推測して、彼は天で罪を犯したために地に落とされていたいわゆる、霊的存在がエバのうちに入って彼女に罪を犯すように誘惑したと言うのです。



解説

- 1.その句節は“蛇”に対して話しています。“サタン”とか“悪魔”と言う言葉は創世記全体に出て来ないのです。蛇は彼らの腹で這いまわりながら、実際私たちと共にいる事実がエデンにいた実際の動物である事を立証するのです。その他の推測を信じる者たちは彼らが蛇を見る時はいつも、そのサタンを見ていると思わなければならないのです。
- 2.聖書には蛇が天使として描写されたことがないのです。
- 3.従って創世記には誰も天から地に落とされたと言及していないのに驚くべきことではないのです。
- 4.罪は死をもたらします(ロマ.6:23)。天使たちは死ぬことが出来ないのです(ルカ.20:35-36)。また義人の補償は天使と同等になることです(ルカ.20:35-36)。もし天使たちが罪を犯すことが出来るとすれば、義人たちも罪を犯すことが出来るので、彼らも死ぬことが出来るのです。それは彼らが永遠の命を持っていないと言う意味です。
- 5.人の墮落に関する創世記の記録に含まれている者は、神、アダムとエバ、そして蛇です。その他の者に対しては全然言及されていないのです。その嘘をさせるに蛇が人の心に入ったと言う証拠がないのです。パウロは“エバが蛇の悪巧みで誘惑された”(コリ后.11:3)と話しています。神は蛇に“おまえは、この事を、したのだ”(創.3:14)と告げました。もし“サタン”が蛇を使用したとすれば、なぜ彼には罪を責め、刑罰を与えなかったのでしょうか。
- 6.アダムはエバに彼の罪を負わせました。“あの女が木から取ってくれたので、私は食べたのです”(創.3:12)。エバはその蛇に罪を負わせています。“蛇が私をだましたのです。それで私は食べました”(創.3:13)。
- 7.今日蛇は話すとか、エデンの園でしたように理性がないじゃないかと議論がするなら、このような事を思い出しなさい。(a)ろばが彼(パラム)に話し、彼と議論したのでした。“ものを言わないろばが、人間の声でものを言い、この予言者の狂気じみたふるまいをはばんだのである”(ペテ后.2:16)。(b)蛇はすべての動物の中最も知的な者でした(創.3:1)。彼に与えた呪いによって、アダムとエバに話していた能力を取り去ってしまったでしょう。

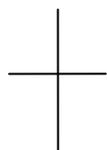


8. 神が蛇を創造しました(創.3:1)。他の者が“サタン”と呼ばれる存在に変わったのではないのです。私たちがこれを信じると、結局、ある人が他の人の心に入ってその人を支配すると言う異教の考えを信ずるのです。それは絶対聖書の教えではありません。蛇がアダムとエバを誘惑して罪を犯させたために、もし神が蛇を創造していないと議論する者は、罪は人を通してこの世に入って来たと言われた事を記憶しなさい(ロマ.5:12)。従って蛇は道徳的でないから、彼の気ままに話したことだけで、なんの責任もなく、罪も犯していないのです。

ある人たちは蛇が“セラフィム(Seraphim)”と関係があると主張しています。しかし、創世記3章にあるヘブル語の“蛇(Serpent)”は“セラフィム(Seraphim)”の言葉と全然関係がないのです。ヘブル語の“セラフィム(Seraphim)”は根本的に“炎”、あるいは民.21:8にある“火の蛇”を意味するのです。これが創3章で蛇と翻訳されていないのです。ヘブル語の黄銅はその言葉の根が創3章の“蛇”と同じくしています。銅は罪を現わしています(士.16:21; サム下.3:34; 王下.25:7; 代下.33:11; 36:6)、このように蛇は罪の概念と連合されていますが、罪深い天使を現わしているわけではありません。

この句節に対して提示している説明

1. 創世記の始めの章に書かれている天地創造や人間墮落の記録は疑いなく実際その通りに取り扱うべきです。“その蛇”もその通りの蛇でした。今日私たちがその呪いを受けて腹で地を這いまわる蛇を見ることが出来る事実が(創.3:14)それを立証しています。それと同じく、私たちは人たちがその時その場所で呪われを受けて今も苦しんでいるのを見ます。私たちはアダムとエバが、私たちよりは良き体をもっていたけれども、今日私たちが見ている男と女である実際文字通りの人たちであった事を認識することが出来ます。そこで本来の蛇は今日の蛇よりは良き体をもっていたけれども、やはり文字通りの実際の蛇であった事を知っています。
2. 次の句節らは創世記の始めの数章が文字通りに解釈しなければならない事を指摘しています。



イエスは結婚と離婚に対する彼の教えをアダムとエバの創造の記録を引用して話しました(マタ.19:5-6)。これを比喩的に読んだヒントが全然ないのです。

“なぜなら、アダムが先に造られ、それからエバが造られたからである。またアダムは惑わされなかったが、女は惑わされた”(テモ前.2:13-14)とパウロも文字通りに創世記を解釈しています。それより以前には“エバが蛇の悪巧みで誘惑された”(コリ后.11:3)とパウロは“悪魔がエバを誘惑した”と言わないのに注目しなさい。

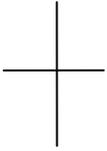
宇宙創造と人間の墮落の記録を比喩的に読まねばならないある証拠がありますか。創世記1章の記録の通りすべての物が6日間に創造されました。その一日は24時間の一日であることが他の日々にいろいろな物が創造された事実で立証されます。その日々は実に100年とか1000年づつでないのです。アダムは6日めに創造されましたが、その7日めの後930年間生きて死にました(創.5:5)。その7日めの一日が1000年であるとすれば、アダムは930才に1000年をもっと生きました。

創世記にある日々が実際の通りの日々であることを確かめる証拠が出.20:10、11の安息日の法で見つかります。神が6日間働き、7日めに安息したとなっているから、安息日(イスラエルが安息の法をまもる前)の安息は24時間の一日です。その2日芽に創造された草木は6日めに創造された蜂らに依存していたでしょう。従ってそれらの創造に永いギャップがあったと言うのは不適當な想像です。

3.その蛇は腹で這うように呪われているのは(創.3:14)、彼が以前は足を持っていたのを暗示しています。彼の推理力が連想されているのを考えて見ると、例え彼が獣であったけれども、“主なる神が造られた野の生き物のうちでもっとも知能がある獣であったから”(創.3:1、14)、だぶん人たちに近い生活をしたと思われる。

4.その蛇は彼を知能的にしたその善悪を知る木の実をだぶん食べたでしょう。エバは“その木を見ると...

賢くなるには好ましいと思われました”(創.3:6)。彼女が生命の木の実を食べた結果を見たことがなければ、いかにこれを知る事が出来たでしょう。エバは創世紀3章の記録の前に何度か蛇と対話を持っていたでしょう。エバに話した



始めの言葉は“本当に神が言われたのですか”(創.3:1)と仰うことでした。その言葉“本当に”は、聖書には記録されていないけれども、彼らがすでに前から交わりがあった可能性を示しています。

間違った解釈19:魔王ルシフェル

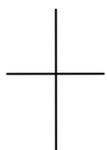
イザ.14:12-14には、“黎明の子、明けの明星よ、あなたは天から落ちてしまった。もろもろの国を倒した者よ、あなたは切れて地に倒れてしまった。あなたはさきに、心の内に言った、「私は天に上り、私の王座を高く神の星の上におき、北の果てなる集会の山に座し、雲のいた頂に上り、いと高き者のようにならん」”。

通俗的解釈

この明星、ルシフェルはアダムの時に罪を犯して地に落とされた勢力ある天使であって、この地で神の民に問題を起こしている者と推測しています。

解釈

- 1.この章には“悪魔”とか“サタン”とか“天使”と仰う言葉が決して出していないのです。またここが聖書で“ルシフェル”の単語がある唯一な所です。
- 2.イザヤ書14章にはエデンの園で起こった事を記録した証拠が全然ないのです。もし、そうであるとすれば、なぜ創世記から3000年も経て、その前にいた事を話しているのでしょうか。
- 3.ルシフェルが天から落ちて勢力がなくなり(5-8節)、みみずくに覆われて(11節)おり、人たちに嘲られている(16節)と描写しています。それでルシフェルがこの地で信者たちを墮落させるという考えは正しくないのです。



4. もしルシフェルが天にいたのなら、なぜ“彼は天に上ろう”(13節)として、刑罰を受けたのでしょうか。
5. ルシフェルは墓で腐っていました。“あなたの栄華は陰府に落ちてしまった。…みみずはあなたの覆っている”(11節)と。天使たちは死ぬことが出来ないから、ルシフェルは天使でないのです。その言葉は人に話しているのです。
6. 13と14節はテサ后.2:3-4と連結されています。それは“不法の者”に対して話しているのです。このようにルシフェルは天使でなく、将来現れる他の人を指示しているのです。

提示している説明

1. イザヤ書13章がその23章まではいろいろな国、バビロン、ツロ、エジプトに対して話している一連の予言です。イザ.14:4からその文脈を始める句節です。“あなたはこのあざけりの歌をとなえ、バビロン王をののしって言う”、従ってこの予言はバビロンの国の王に対することです。彼を“ルシフェル”と描写しています。彼の下がりに対して、“あなたを見る者はつくづくあなたを見、あなたに目をとめて言う、「この人は地を震わせ、国々を動かした」”(16節)と、ルシフェルは明らかに人を示しているのです。
2. ルシフェルは人間の王でしたから、“墓にある他の国の王たちが、「あなたもまた私たちのように弱くなった、あなたも私たちのようになったのかと話しているのです”(9-10節)。従ってルシフェルは他の王の如く、一人の王です。
3. 20節にはルシフェルの子孫が滅亡するであろうと話し、また22節ではバビロンの子孫たちが滅ぼされるであろうと話しています。従ってルシフェルは一人の人であります。
4. これは“バビロンの王に対することわざであるのを”(4節)記憶しておきなさい。“ルシフェル”はとても明るい星、“明星”を意味します。そのことわざに、その星が高慢になって“天に上り、王座を高く神の星の上におく”(13節)と決心しました。ダニエル書4章に説明しています。バビロンの王ネブカデネザルが高慢になって彼が建てた偉大なる帝国を眺めながら、神が彼に成功するようにしたと

認識しないで、むしろ彼が自身の力で諸国を占領したと考えていました。“あなたは成長して強くなり、天に達するほど大きくなった”(22節)。この考えのために“彼は追われて世の人を離れ、牛のように草を食い、その身は天から降る露に濡れ、ついにその毛は、わしの羽のようになり、その爪は鳥の爪のようになった”(33節)。世界で最も権力ある一人の者が突然発狂して下賤な気狂いになったことは

天の明星が地に落ちたことにたとえるべき一大劇的事件です。星は権力を象徴するのです。实例、創.37:9; イザ.13:10(バビロンの統治者);

出.32:7(エジプトの統治者);

ダニ.8:10、24と比較。人が天に上り、地に落ちると言うのは聖書の慣用句であって、権力の座に上がり、その座から追い出されることを意味します。ヨブ.20:6;

エレ.51:53(バビロンに対して); 哀.2:1;

マタ.11:23(カペナウムに対して)。“ああ、カペナウムよ、おまえは天にまで上げられるとでも言うのか。陰府にまで落とされるであろう”。

5.17節は“世界を荒れ野のようにし、その都市をこわし、捕らえた者をその家に解き帰さなかった者であるか”とルシフェルをとがめています。占領してすべての地域を荒れ野にし(彼らはエルサレムにそのようにした)、捕らえた人たちを他の地方に送って、彼らを家に帰さず(彼らはユダヤ人たちにそんなにした)、新都市を建築させ、彼らが圧制下にあるすべての国から貢ぎの金を奪取しました。これは皆バビロンの軍政策を描写するのであります。ルシフェルは他の国の帝王と一緒に墓に葬られることも出来なかった事実を強調しています(18-19節)。彼の死体が葬られるべきであることを話しているのは、彼が確かに人間の王であることを暗示しています。

6.12節はルシフェルが“切られて地に倒れてしまった”と話しています。これはまだダニ.4:8-16と連結されています。そこでネブカデネザルとバビロンが切り倒された木と連結されています。

7.バビロンとアッシリアは度々予言者たちの言葉に交替的に話されています。バビロン王の死去を話すに、“私はアッシリア人を私の地に打ち破る”(25節)と話しています。イザヤ47章にあるバビロンに対する予言は、ナホ.3:5、4、18; ゼパ.2:13、15ではアッシリアに対して繰り返して話していますが、代下.33:11ではその二つの言葉を交替的に使用して、アッシリアの王がマナセを捕虜としてバビロンに連れて行ったと話しています。アモ.5:27ではイスラエルが、ダマスカスのかなたに

、すなわちアッシリアに捕らえ移ったと話していますが、ステパノはこれを“バビロンのかなた”と引用しています(使.7:43)。エズ.6:1はバビロンの王、ダリヨスが聖殿の再建に関して勅令を布告したと描写しています。ユダヤ人たちは“アッシリアの王の心を彼らに向かせた”のに対して神を誉め称えました(エズ.6:22)と、またその言葉を交替的に使用しているの示しています。イザヤ書にある他の予言と一緒にイザヤ14章の予言は文脈上、ヒゼキヤの時にセナケリブによるアッシリアの侵攻を話すのであるから、その25節ではアッシリアの人を我が地で破ったと描写しています。その13節はエルサレムを囲んでいる不敬なアッシリア人たちが、エルサレムに入り、彼らの神のために聖殿の器具を略奪しようとする事であると見たら理解しやすいのです。早くからアッシリアの王、テルガデ・ピルネセルはそのようにしようとしていました(代下.28:20, 21)。イザ.14:13は“あなたは先に心の内に言った、「私は天に(聖殿と約櫃の象徴、王上.8:30; 代下.30:27; 詩.20:2, 6; 11:4; ヘブ.7:26)上り、私の王座を高く神の星の上におき、北(エルサレム一詩.48:1, 7)の果てなる集会の山(シオン山一聖殿がいた所)に座する”。

間違った解釈20: イエスが受けた試練

“さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるためである。そして、四十日四十夜、断食をし、その後空腹になられた。すると試みる者が来て言った。「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください」。イエスは答えて言われた、「人はパンだけで生きるものでなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と書いてある。それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて、言った、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんください。神はあなたのために御使いたちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手で支えるであろうと書いてありますから」。イエスは彼に言われた、「ヤウエなるあなたの神を試みてはならないとまた書いてある」。次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて、言った、「もしあなたが、ひれ伏して私を拝むなら、これらの者を皆あなたにあげましょう」。するとイエスは彼に言われた、「サタンよ、退け。ヤウエなるあなたの神を拝し、ただ神への仕

えよと書いてある」。そこで、悪魔はイエスを離れ去り、そして、御使いたちがみもとに来て仕えた” (マタ.4:1-11; ルカ.4:1-13)。

通俗的解釈

この句節らは“悪魔”と呼ばれる者がイエスに罪を犯すようにある条件を提示して彼が誘惑に落ちるように誘惑したと言う意味で読んでいます。

解釈

1. イエスは“すべてのことについて私たちと同じように試練に会われたのであり” (ヘブ.4:15)、“人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである” (ヤコ.1:14)。私たちはイエスのように、私たち自身の欲情の悪魔、あるいは悪の欲によって誘惑されるのです。私たちは私たちのそばに立っている悪魔によって突然罪を犯すように誘惑されるのではなく、罪と誘惑は“私たちの内部から、人の心の中から”来るのです(マコ.7:21)。

2. 彼の試練はその文字通りに解釈することが出来ないのです。

マタ.4:8は悪魔がイエスを非常に高い山に連れて行って“瞬く間に”世界のすべての国々の将来の栄華を見せた(ルカ.4:5)。そこには世界のすべてを眺めるほど高い山がないのです。なぜその高い山の頂上でイエスをして栄光な将来の世界を眺めさせたのでしょうか。地は球体であるから、世界のすべてを瞬く間に見ることが出来る所はないのです。

マタイ4章とルカ4章を比較して見れば、その誘惑が違う順序で書かれています。マコ.1:13は“イエスは四十日の間荒れ野にて、サタンの試みに会われた”と言うているのに、マタ.4:2-3には“彼が四十日四十夜、断食した後、試みる者が来た”と話しています。聖書それ自体矛盾していないから、これらの同じ誘惑が継続的に反復されたと結論されるのです。石がパンになるようにせと云うた誘惑が明らかなその例です。この誘惑がイエスの心に起こったとすればとても適当な解釈です。人間の本性によって、彼の欠食は彼に肉体的に、また精神的に苦痛を与え、そこで彼の心は自

然食べる物を想像するになったでしょう。ただ数日間の欠食で精神錯乱になった者もあります(サム上.30:12,比較)。これと同じように、イエスは石とパンの関係を話しています(マタ.7:9)。彼がいつも神の言葉を速やかに思い出して心を鎮めたけれども、疑いなく、その想像は酷く彼の心苦しめたでしょう。

イエスは福音筆記者に彼が経験した誘惑を話して、その経験を私たちが切実に心に刻み付けるように、弟子たちに教えたでしょう。

ユダヤ人たちは物見高い人たちであることを考えると、悪魔がイエスを連れて荒れ野を巡り、一緒にエルサレムの町を歩き、聖殿のてっぺんに上がることはしなかったでしょう。有名なユダヤの歴史家ヨセプス(Josephus)はこれに関するのはなにも書いていないのですが、それが文字通りそうであったとすれば、だぶん大きな騒ぎを起させたでしょう。もしその誘惑が四十日の間に数回起こったとすれば(マタイとルカの記録が違う順序で書かれている観点から、少なくとも二回以上あったと思いますが)、その期間の末に、いかにイエスが悪魔の導きで近い山(イスラエルの北のヘルモン山)の頂上に上がり、また下って、再び荒れ野に帰ってその誘惑が繰返されたでしょう。彼の誘惑は皆荒れ野で起こったのです。彼は四十日間そこにいながら、いつも悪魔によって誘惑され、その末に悪魔は彼を離れたのでした(マタ.4:11)。もしイエスが毎日悪魔に誘惑され、その誘惑がただ荒れ野で起こったとすれば、イエスは荒れ野を離れてエルサレムに行くことが出来ないし、あるいはその高い山にも上がる事が出来なかつたでしょう。従ってこのことは文字通りに起こったと考えることが出来ないのです。

もし悪魔が神の言葉を尊重しない、人たちに罪を犯させるのに関心を持つ、実際の人であったなら、なぜイエスは彼に聖句を引用して彼を克服しようとしたでしょう。一般的観点によると、これはその悪魔を追い払うことが出来なかつたでしょう。イエスが毎度聖書を引用したのに注目しなさい。もしその悪魔がイエスの心にある悪の情欲であったなら、彼は彼の心にある神の言葉を思い出してその情欲を克服することが出来たと理解出来るのです。詩.119:11にはその荒れ野でキリストが経験する事に関する予言があります“私はあなたに向かって罪を犯すことのないように、心の内にみ言葉を貯えました”。

マタ.4:1にはイエスが“御霊によって荒れ野に導かれた”と話しています。これは数日の前彼に降りた神の霊でした(マタ.3:16)。神の霊がイエスを連れて荒れ野に

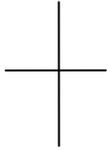
行って、神に対抗しながら存在しているする超人に誘惑されるようにしたと言うことは異常なことだと言うでしょう。

提示している説明

1. イエスがヨルダン川でヨハネによってバプテスマを受ける時、聖霊の力を受けました(マタ.3:16)。彼が水から上がるやいなや、彼は試みられるために荒れ野に追い出されました。イエスが石をパンに変えさせ、建物の上から飛び降りても害わないのを知っていたから、この誘惑は彼の心の内で荒れ狂ったのに違いないのです。もしある罪深い人がこれらの誘惑をイエスに提示したとすれば、その誘惑はイエスの心の内にあるものが提示するよりは狡猾性が少なかったでしょう。
2. 彼自身はその国を捕らえると言う誘惑がキリストの心の内から起こったなら、それはもっと力が強かったでしょう。イエスは心は聖霊に満ちていたけれども、断食によって苦しい状態であったので、その聖句を誤った解釈に使用せられる誘惑が大きかったでしょう。

彼がその高い山の上に立っていた時、彼はエゼキエルが非常に高い山の上で見た神の国(エゼ.40:2)と、ヨハネが“大きい高い山に連れて行かれて、聖都エルサレムを見た”(啓.21:10)ことも思い出したでしょう。イエスは世界の国々を見ましたが(ルカ.4:5)、その“国々は将来、私たちの主とキリストの国になるでしょう”(啓.11:15)。彼は四十年間(彼の四十日間と比較)の荒れ野のをさまよった後、ネボ山でその約束の地(その国)を眺めたモーセも思い出したでしょう。ダニエル書では“いと高き者が、人間の国を治め、自分の意のままにこれを人に与える”(ダニ.4:17、25、32;

5:21)と力説しています。イエスは神が彼にその国を与えることを知っていたでしょう。従ってもし一人の悪の怪物がイエスにその国を与えることが出来ると主張したなら、イエスは神のみ彼にそれを与える権力があるのを知っているから、その誘惑はそんなに強いではなかったでしょう。イエスは彼にその国を与えるのが父の喜びであることを知っていました。それでその誘惑はイエスが直ちにその国を捕らえると彼の内にある“悪魔”によって提示していたのに違いないのです。結局、彼は死から復活した後天と地においてすべての権威が授けられたけれども(マタ.28:18)、彼は神が彼にすべての権威(ヨハ.5:26、27)、生命を受ける



力と捨てる力までも皆委託していたので(ヨハ.10:18)その提議を推論することが出来たでしょう。

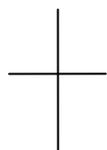
3. イエスは聖書に通暁していたために、荒れ野で四十日の後士気が挫折したエリヤ(王上.19:8)、また荒れ野で四十年の末にその約束の地を直ちに受け継ぐことを喪失したモーセを良く知っていました。四十日の後イエスは彼らと同じ立場に置かれ、失敗の可能性が充分ありました。モーセとエリヤは、彼らの弱い人間性のために失敗しました。イエスを誘惑した者も彼らと同じ彼の内にある弱い人間性、すなわち彼の“サタン”あるいは対抗者でした。
4. “そこで悪魔が言った、「もしあなたが神の子であるなら、」”(ルカ.4:3)。すべての人がキリストをヨセフの子(ルカ.3:23; ヨハ.6:42)、あるいは私生児(ヨハ.9:29)と思っているし、聖殿の記録簿にはヨセフの子と記録されているので(マタ.1:1; ルカ.3:23、法律で認定していることを意味する)、彼の心の内には私は本当に神の子であるかと言うことが継続的誘惑であったことに違いないのです。彼は人間の父を持って居ない唯一の人でした。ピリ2:8はイエスが神の子であったことを不信し、あるいは彼自身の本性を誤解して誘惑されたことと推定できるので、彼は私たちのような人であったことを認めることが出来るのです。

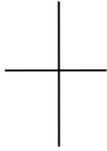
申命記 8 章

マタ 4 章 / ルカ 4 章

2 節

“あなたの神主が、この四十年の間、 荒れ野であなたを導かれたそのすべての道を覚えなければならない。それはあなたを苦しめて、あなたを試み あなたの心のうちを知り、あなたがその命令を守るか、どうかを知るため であった。	“イエスは御霊によって荒れ野に導かれ、そこで四十日の間彼に引き回された”。イエスはいろいろな試練を受けたが、彼の心にある神の言葉を引用してその試練を克服することが出来た。
--	---





3節

“それで主はあなたを苦しめ、あなたを
飢えさせ、あなたも知らず、あなたの祖
先たちも知らなかったマナを持って、あ
なたを養われた”。

彼は四十日の断食で空腹になった”。

彼は昔荒れ野でイスラエルに与えたマ
ナは神の言葉を現わすこと解釈して(ヨ
ハネ6章)、彼はその荒れ野で言葉で生
きるのを学び、霊的に成長した。“人は
パンだけで生きるものでなく、神から出
る言葉で生きるものである”と、聖書を
引用して答えました。

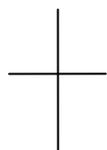
5節

“あなたはまた人がその子を訓練する
ように、あなたの神、主もあなたを訓
練された事を心にとめなければなら
ない”。

イエスは神が愛する彼の子を懲らし
めることを悟り、その経験を彼の生活
に現わした。サム.下.7:14;詩.89:32。

5.その誘惑はキリストの霊的教育のために神によって管理されました。イエスが悪
の情欲(悪魔)に対抗して彼自信を強くするために引用した句節は荒れ野でイスラ
エルが経験したのであって、皆申命記に書かれています。イエスは彼の経験
とイスラエルの経験を等しことに認めました。

このようにイエスは私たちに神の言葉を読んで学ぶことを示しています。彼は
荒れ野にいたイスラエルの位置に入って、彼の荒れ野の試練で、彼らの経験を学ぶこ
とが出来ました。



間違った解釈21:天での戦い

啓.12:7-9: “さて、天では戦いが起こった。ミカエルとその御使いたちとが、龍と戦ったのである。龍もその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなった。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経た蛇は、地に投げ落とされ、その使いたちも、もろともに投げ落とされた”。

通俗的解釈

これは天使たちの中の一人が天で神に反乱を起こした結果、悪魔となり、彼の使いと共に地に投げ落とされ、蛇の形で、今この地の空中に居りながら世に紛争を起こしていると提示するに最も広く使用されている句節であります。だから、この句節を確かに認識しなければならないとても重要な事件であります。

解釈

1. 私たちが今までこの学習で学んだことすべてがこの句節を明らかに説明するでしょう。天使たちは罪を犯すことが出来ないから神に反乱を起こすことが出来ないのです。人に罪を犯せるその罪は私たちの外にあるのではなく、内にあるのだから(マコ.7:20-23)、そのような句節は、天使が罪を犯したとか、またこの地で人に罪を犯せる天使はいないと言う観点から解釈しなければならないのです。
2. その蛇が天から投げ落とされたとすれば、彼は本来天にいたのを暗示しているのになります。しかしその蛇は神によって地の土から創造されてエデンの園におりました(創.1:24-25)。その悪魔が天から地に落ちて来て蛇の内に入ったと言う暗示は聖書に全然ありません。

3. ここには天使たちが罪を犯したとか、神に反抗したとかと言うのが全然話されていないのに注目しなさい。天で神に対抗して戦う事は不可能です。“誰も私に対敵することが出来ない” (申.32:39)。
4. その7-9節のドラマの後、その10節には“その時私は、大きな声が天でこう言うのを聞いた、「今や、私たちの神の救いと力と国と、神のキリストの権威とは、現れた。私たちの兄弟らを訴える者、夜昼私たちの神のみ前で彼らを訴える者は、投げ落とされた」”と話しています。もしその7-9節のことがアダムとエバの時の前、この世の始めに起こったとすれば、如何にサタンが地に落とされた後に救いと神の国が来ると言われるのでしょうか。アダムが罪を犯した後、人類は罪の奴隷になる彼らの悲しい歴史が始まりました。“救い”と神の国が来たと描写することが出来ないのです。その悪魔、訴える者がこの地に投げ落とされたのに、人たちはなぜ喜んでいるのでしょうか。彼がこの地に来たら、人に対して罪を犯し災いをもたらすのに、なぜ人たちが喜ばなければならないのですか。この天から地に落とされる言う表現は文字通りでなく、権座から落とされたのを現わしので、比喩的に解釈しなければならないのです(イザ.14:12; エレ.51:53; 哀.2:1; マタ.11:23)。もしこれが皆アダムの時、あるいは人間の墮落以前に起こったとすれば、その時私たちの兄弟が存在していないのに、その悪魔はいかに彼らを訴えることが出来るのでしょうか。
5. これがエデンの園で起こったと指示するものが全然ないのです。一つの重要な点は啓.1:1と4:1に話しているように、啓示録は“これから後に起こるべきこと”を予言しているのです。従ってそれはエデンで起こったことを話すのでなく、イエスによって啓示録が与えられる時、その1世紀の後に起こるべきことを予言しているのです。神の言葉に本当に謙遜な者は誰でも、この論議自体が啓.12章をエデンの園のことに引用するすべての試みを予め除外しているのを知っているでしょう。その問題はまた、その悪魔の本体と、なぜエデンで起こったことを聖書の終わりまで啓示しないで保存して置かなければならなかったかに対して答えることです。
6. “その巨大な龍、...年経た蛇” (啓.12:9)。その龍は“七つの頭十の角” (3節)を持っていました。従ってそれは実際の蛇ではなかったのです。それが“年経た蛇”と呼ばれているのは、その蛇が偽り者であった意味で、エデンにいた蛇の特徴を持っているのを示しています。それと同じく、“死のとげは罪である” (コリ前

- .15:56)とあるので、死が実際とげを持っているという意味ではないのです。死が罪と関係しているのです、そのとげの特徴を持っているのです。
- 7.悪魔は地に落とされて“自分の時が短いを知り”(12節)、とても攻撃的になりました。もし悪魔がエデンの時に落とされたとすれば、“時が短いので激しく怒る必要が”ないのです。なぜなら、彼は永い歴史の間人たちを苦しめる機会が充分あったからです。
- 8.悪魔は、彼が天から落とされる前、アダムの以前は世界に誰もいなかったのに、如何に“全世界を惑わすこと”(9節)が出来たのでしょうか。
- 9.その4節ではその龍の尾で天の星の3分の1を掃き寄せ、それらを地に投げ落としたと話しています。これが文字通りに解釈し、そして啓.12章の記録を文字通りに解釈すれば、その龍は巨大なものであって、宇宙(あるいは太陽系)の3分の1が彼の尾の内に含まれることが出来るのです。恒星の一つである地球にこの巨大な被造物をぶざまに広がせる事は出来ないでしょう。大部分の星が地球より大きいのです。どのようにその3分の1が地球に入れるのでしょうか。宇宙の星の3分の1は約5百万兆の10の18乗マイルになると推測しています。その龍の尾がとても長いのです。この予言が言われた、1世紀の後半であるから、これが文字通りに起こった、あるいは起こると考えて見なさい。
- 10.啓.12章にあるこれとその他のこと等の観点で、それらはただ文字通りには成就出来ないことです。私たちが始めに啓.1:1で話したように、このメッセージは“サインで話したことで(signified)”あるので、“サイン”と“象徴的に”解釈しなければならぬ言葉であるのです。啓.12章の文脈上、これは啓.12:1の“大なるしるし”の後続行動を描写しているのです。
- 11.その悪魔がこの地にいる時彼がなしたことを読んで見ると、彼が人たちに罪を犯させると言う記録がないのです。その12-16節はその悪魔が降りた地で紛争を起そうとしたが失敗したのを示しています。これはその通俗的解釈に矛盾しています。
- 12.この句節にある天での戦いが文字通り天であったのか、否かを認識するキーは、その“天”を文字通りに解釈するか、あるいは比喩的言葉で解釈するのかを理解することによるのです。私たちはその“天”が政権の当局を比喩的に話すことであると既に説明しています。このように啓示録は象徴的に書かれた本であるから、その通りに解釈するのが当然です。

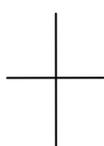
その1節の女は“太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっています”。その女である、この天体らが天につるされていると言う事は文字通りに解釈出来ないのです。彼女は太陽を文字通りに着るとか、地球のように大きい星を彼女の頭にかぶることが出来ないのです。

その3節にはもう一つのしるし、“大きな赤い龍”が天に現れます。これは一般に文字通りの天と取り扱うのですが、なぜそうしなければならないのでしょうか。その1節に言及されたのと同じ天であるからこれも比喩的言葉ではないのでしょうか。4節にはその龍が天の星の3分の1を地に投げ落としています。その星らと地のサイズを考えて見れば、これは到底文字通りの星と天を話すのではないのです。神の国はこの地に立てられます(ダニ.2:44; マタ.5:5)。もしこの地に巨大な星らが落ちて破壊されると(決してそんな事はないですが)すれば、神の国は建てられないでしょう。

それから“天”にいるその女が男の子を産み、そして彼は“神のみもとに、その御座の所に引き上げられました”(5節)。神の御座は天にあります。もしその女が既に天にいたなら、なぜその子を天に“引き上げた”のでしょうか。彼女が比喩的“天”にいるけれども、彼女はこの地にある何か象徴であるに違いないのです。彼女は“荒れ野へ”逃げて行きました(6節)。もし彼女が文字通りの天にいたなら、これは天に荒れ野があると言うことです。彼女が比喩的天の所にいたと言うことが最も適当であります。それで彼女が文字通りにあるいは比喩的に荒れ野に逃げ行くことが出来るのです。

その7節に、“天では戦いが起こった”と話しています。啓.12章に言及された“天”のすべてが比喩的であるから、それと一貫的にこれも比喩的天にある戦いでした。文字通りの天には反逆とか罪がないから(マタ.6:10; 詩.5:4、5; ハバ.1:13)、これは比喩的天でなければならないのです。一般的観点は悪の天使たちを地獄に入れ錠をおろしていると主張しています。しかしここは天です。だから彼らは文字通りの天使たちではないのです。

本著者は時々いわゆる正統派の教会信者たちに次のような質問をあげます。“あなたの悪魔に関する解釈を聖書の句節と一致させて、簡単に悪魔の歴史を私に話すことが出来ますか”。彼らの答は大部分矛盾だらけです。彼らの答はこのようです。



a)

悪魔はエデンの園に投げ落とされるまでは天にいました。彼は創.1章の時この地に落とされたのでした。

b) 彼は地に降りて人たちと結婚した(創.6章)と思っています。

c) ヨブの時彼は天と地に行くことが出来たと話しています。

d) イザヤ14章によると彼は天から地に落とされたのです。

e) ゼカ.3章には彼が再び天にいたと話しています。

f)

彼はマタ.4章の時地にいました。“この世の君が追い出される”と言うことを一般的観点によると彼はイエスが死ぬ時この地に“追い出され”と言うのです。

g) 啓.12章には悪魔が‘追い出される’と言う予言があります。

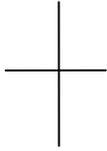
h)

その悪魔は“つなぎおく”のです(啓.20章)。しかしユダ書6節に対する一般的観点によると、彼と彼の天使たちは創世記につなぎおかれています。もし彼がその時‘永遠な鎖でつながれたなら’、なぜ彼が再びつながれるのですか(啓.20章)。このように調べてみれば、彼らの教えは矛盾だらけであります。神の言葉である聖書は決してそのように解釈するのではありません。

悪魔が度々の‘追放’の後も、継続的に天にいと描写されているこの観点から、彼が罪を犯して天から追放されたと言う一般的観点は事実でないことが明らかになりました。聖書の‘天’と‘悪魔’を比喩的意味で理解するのはとても重要なことです。

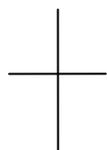
提示している説明

- 1.この章を完全に説明するのは私たちが提示する注釈の範囲外にあることです。この句節らの完全な説明には文脈によって調べる必要があるので、啓示録全体を勉強しなければならぬのです。



神と罪悪 227

2. 天の戦いを比喩的に見れば、権力の紛争を話していることであって、二つのグループの勢力の相互の追従者たち、また使者たちが彼らの間にあったのです。その悪魔とサタンは度々ローマの政権あるいはユダヤ人の制度と結合しているのを記憶しなさい。
3. その悪魔-龍はある政治権力を現わしていると、“その頭に冠をかぶっている”(3節)と言う句節ですすでに指摘しました。啓.17:9、10はまたこの龍に対して説明しています。“ここに知恵のある心が必要である”、この獣を文字通りに解釈しなさい。 “七つの頭は、... 七人の王のことである”。その内の一人の王が“暫くの間だけおることになっている” その悪魔-龍と連結されています(啓.12:12)。



学習 6: 問題と解答

1.この世で誰が人間に問題を起し、試練を与えていますか？

- a) 神
- b) 偶然に起こる
- c) 罪深いサタン
- d) 悪霊と呼ばれる者

2.罪を犯せる誘惑に対して何が責任を持っていますか？

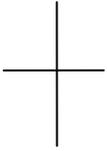
- a) 人間の肉情
- b) 神
- c) 悪霊
- d) 罪深いサタンと呼ばれる者

3.悪魔と言う聖書の言葉は何を意味しますか？

- a) 罪
- b) 蛇
- c) 中傷者
- d) ルシフェル

4.サタンと言う言葉は何を意味しますか？

- a) 罪人
- b) 対敵者



- c) 獣
- d) 悪霊の王

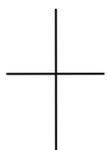
5. サタンと言う言葉を良い人にも使用しますか？

6. サタンと悪魔は比喩的に何と話していますか？

7. 新約聖書の‘悪霊’は何を意味していますか？

- a) 墮落した天使
- b) 疾病
- c) 当時疾病を起こしていると思った悪霊
- d) 霊的存在物

8. エデンの園にいた蛇は何とっていますか？



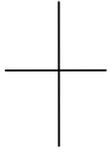
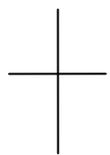
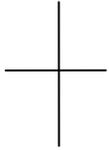


写真 7





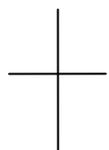
2部

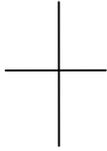
“イエスキリストの名に
関すること”

(使徒行伝8:12)

学習 7

イエスの起源





7.1 イエスに関する旧約の予言

学習3は人間の救いに関する神の目的がイエスを中心として立てられたと説明しています。神がエバ、アブラハムそしてダビデになしたその約束は皆彼らの子孫であるイエスに関して話したことです。旧約聖書全体はキリストを指し示し、彼に対して予言しているのです。キリストの時代前にイスラエルが服従しなければならなかったモーセの律法は絶えまなくイエスを指し示しています。“このようにして律法は、信仰によって義とされるために、私たちがキリストに連れて行く養育掛となったのである”(ガラ.3:24)。過ぎ越し節に完全な状態の一匹の小羊が殺されなければならなかったのです(出.12:3-6)。これは“世の罪を取り除く神の小羊である”(ヨハ.1:29);

コリ前.5:7)イエスの犠牲を現わしているのです。その犠牲の動物が傷のないものでなければならなかったのはイエスの完全な品行を示しているのです(出.12:5、ペテ前.1:19と比較)。

旧約聖書の詩篇には、メシヤに対する予言が多くあります。それらは特別に彼の死に対して描写しています。メシヤを受け入れないユダヤ人の拒絶は、彼らがその予言に心を傾けて聞かないせいでした。次はその実例であります。

旧約聖書の予言

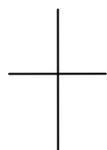
新約聖書の成就

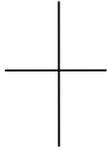
“私の神よ、私の神よ、なぜ私をお見捨てになるのですか”(詩.22:1)。

これらはイエスが十字架で話したその言葉です(マタ.27:46)。

“私は民に侮られる。すべて私を見る者は、私をあざ笑い、頭を振り動かして言う、「彼は主に身を委ねた、主に彼を助けさせよ。主に彼を救わせ

イスラエル人たちがイエスを軽蔑し、からかいました(ルカ.23:35; 8:53)。
彼らは頭を振り動き(マタ.27:39)、
彼が十字架につかれた時そのように話しました(マタ.27:43)。





よ」と”(詩.22:6-8)。

“私の舌はあごにつく。まことに、犬
は私をめぐり、悪を行う者の群が私の
手と足を刺し貫いた”(詩.22:15、16)。

これは十字架につかれたイエスが渴
くと言われて果された(ヨハ.19:28)。
また十字架で彼の手と足が刺し貫か
れて、果された。

“彼らは互いに私の衣服を分け、私の
着物をくじ引きに”(詩.22:18)。

これの正確な成就がマタ.27:35に描
写しています。

詩.22:22は特別にヘブ.2:12に当てはまるイエスを引用したのに注目すべきです。

“私は私の兄弟には、知らぬ者となり、
私の母の子らには、のけ者となりました
。あなたの家を思う私の熱心が私
を食いつくしました”(詩.69:8、9)。

キリストが彼のユダヤ人同胞と家族
から疎遠になった感情を描写してい
ます(ヨハ.7:3-5; マタ.12:47-49)。

これはヨハ.2:17で引用しています。

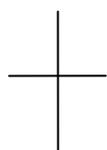
“彼らは私の食物ににがい物を入れ
私が渴いた時に酢を飲ませました”(詩.
69:21)。

これはキリストが十字架につかれ
る間起りました(マタ.27:34)。

イザヤ書53章全体が注目すべきキリストの死と復活に関する予言です。その句
節毎に間違いなく果されています。その二つの例を上げて見ましょう。

“彼はほふり場に引かれて行く小羊
のように、彼の口を開かなかった”

神の小羊、キリストは彼の審問のあ
いだ黙っていました(マタ.27:12、14)。



(イザ.53:7)。

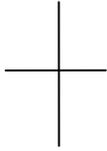
“彼の墓は悪しき者と共に設けられ、 イエスは犯罪者たちと共に十字架に
その塚は富める者と共にあったので つかれ(マタ.27:38)、富める者の墓に
ある” (イザ.53:9)。 葬られました(マタ.27:57-60)。

新約聖書は旧約聖書の“律法と予言者”がキリストに関する知識の基礎である
こと私たちに思い出させるのです(使.26:22; 28:23; ロマ.1:2, 3;
16:25, 26)。イエスはもし私たちが“モーセと予言者”を正確に理解していないと彼
を理解することが出来ないと警告しました(ルカ.16:31; ヨハ.5:46, 47)。

モーセの律法がキリストを指し示し、予言者たちが彼に関して予言しているこ
とはイエスが彼の出生以前は存在していなかったことを立証しているのです。キリ
ストが出生以前体を持って存在していたと言う偽りの教理は彼がエバ、アブラハム
、ダビデの子孫であろうと繰り返して話したその約束をナンセンスにするのです。も
しその約束をする時既に彼が天に存在していたとすれば、神は彼らの子孫としてメ
シヤが生まれると彼の民に約束出来なかったでしょう。マタ書1章とルカ書3章に書
かれたイエスの家系をさかのぼればイエスが彼らの血統から出て来たことを示して
います。

キリストに関してダビデにした約束は彼がその約束の時すでに存在していたこ
とを承認しないのです。“私はあなたの身から出る子を、あなたの後に立てて、...私
は彼の父となり、彼は私の子となるであろう” (サム下.7:12, 14)。この文章は未来時
制を使用しているのに注目しなさい。神がキリストの父となるであろうと言われた
ので、その約束をなしたその時点で神の子が存在したとは到底言えないのです。こ
の子孫が“あなたの身からでるであろう”と言うことは彼が実際ダビデの子孫とし
て生まれることを示しているのです。“ヤウエは真を持ってダビデに誓って、...
あなたの身から出た子の一人をあなたの位につかせる” (詩.132:11)と告げました。

ソロモンはその約束の一部を成就したけれども、彼はその約束の時既に存在して
いたので(サム下.5:14)、その神の子であるダビデの子孫に対する約束の主な成就是キ
リストによって成就することでした(ルカ.1:32-33)。“見よ、私がダビデのために一
つの正しい枝を起こす日が来る” (エレ.23:5)。



イエスの起源 235

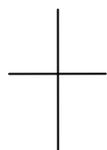
キリストに関する他の予言も皆未来時制を使っています。“私は彼ら(イスラエルの同胞の内から、お前(モーセ)のような一人の予言者を彼らのために起こす”(申.18:18)。これは使.3:22、23で引用されていますが、イエスがその“予言者”です。“見よ、乙女が(マリヤ)みごもって男の子を産む。その名はイマヌエルと称えられる”(イザ.7:14)。これは確かにキリストの出生にて成就されました(マタ.1:23)。

7.2 イエスの出生

キリストの受胎と出生に関する記録は彼が出生する前既に体を持って存在したと言う考えを承認しないのです。いわゆる‘三位一体説’の偽りの教理を持っている者たちは、いつか天に三人の神がいたが、その内の一人がその二人の神を離れて、胎児形に変わってマリヤの子宮に入ったと言う結論に追いやられるのです。私たちは、神を始めに、すべて存在する物は皆形体があると聖書が示しているの信じます。それゆえに、私たちは天に一つの形体的存在であったキリストが地に降りてマリヤの子宮に入ったと言うキリストの‘先在説’を信仰することが出来ないのです。この複雑な神学説は皆聖書以外の教えであります。キリストの起源に関する記録は形体的存在の彼が天を離れて来てマリヤに入ったと言う概念が全然ないのです。これに対する証拠を三位一体主義者たちが聖書で到底見出すことが出来ないのです。

御使いガブリエルがメッセージを持ってマリヤに現れ、“見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。彼は大なる者となり、いと高き者の子と、称えられるでしょう。...そこでマリヤは御使いに言った、「どうして、そんなことがあり得ましょうか。私はまた夫がありません(すなわち、処女です)」。御使いが答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたを覆うでしょう。それゆえに、生まれ出る子は聖なる者であり、神の子と、称えられるでしょう」”(ルカ.1:32-35)。

イエスが彼の出生において神の子になるであろうと二度も強調されています。彼が出生するまで確かに神の子は存在していなかったのです。また多くの未来時制が必要であったのに注目しなさい、例を上げれば、“彼は大なる者になるであろう”と。もし天使がマリヤにその言葉を話す前にイエスが既に形体的に存在していた



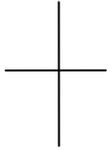
とすれば、彼は既に大なる者になっていたでしょう。イエスは“ダビデの子孫”(啓. 22:16)でした。ギリシャ語の‘genos’はイエスが‘ダビデから出て来た’のを暗示しています。

イエスの受胎

聖霊(神の息/力)がマリヤに作用して、彼女は男と関係がなくてもイエスを妊娠することが出来ました。これで、ヨセフはイエスの真の父ではありませんでした。聖霊はある人格者でないことを知っていなければならないのです(学習2を見なさい)。イエスは聖霊の子でなく、神の子でした。神は彼の霊をマリヤに使用したのですから、彼女から生まれ出る者は“それゆえに、聖なる者”、“神の子と、称えられる”のでした(ルカ.1:35)。ここに使用した言葉、“それゆえに”は、マリヤの子宮に聖霊の作用なしには、イエスが神の子として生まれることが出来なかったのを暗示しています。

イエスはマリヤの子宮に受胎されのは(ルカ.1:31)また彼がこの時前に形体的に存在していなかったのを立証するのです。もし私たちがある考えを‘心に抱く’なら、それは私たちの内で始まるのです。それと同じく、イエスはマリヤの子宮に受胎され、そこで彼はちょうど他のすべての人と同じく、胎児として始まりました。ヨハ.3:16の聖句は有名な句節ですが、イエスが“神の独生子(begotten son)”であったと書かれています。この句節を暗記している人は数知れないほど多くありますが、それが暗示している意味は全然分からないのです。イエスが“独生子(begotten son)”と言われたのは彼がマリヤの子宮に受胎された時彼が始まったと言うことです。もしイエスが彼の父、神によって始まったとすれば、神は始めや終わりが無いから(詩.90:2)、これは明らかに彼の父なる神が彼より老いたのを立証しているのです。それゆえにイエスは神のに子になることが出来ないのです(この点に関しては学習8で説明しています)。

イエスが、アダムのように創造されたのではなく、神によって“始められた”と言うのはとても意義があります。これはイエスが神と親密であることを説明しているのです。“神はこの世を彼自身に和解させるために、キリストの内におられた”(コ



イエスの起源 237

リ后.5:19)。キリストは土から創造されたのではなく、神によって始まったために、彼は彼の父神の道を行うに適切な神の素質を持っていたと説明出来るのです。

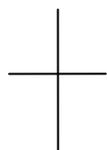
イザ.49:5、6にはイエス、キリストがこの世の光であることが予言されていますが、彼はそれを成就しました(ヨハ.8:12)。彼は“ヤコブおのれに帰らせ、イスラエルをおのれのもとに集めるために、私を腹の中から造って、その僕とされた主は言われる”と自身に対して瞑想していました。従ってキリストはマリヤの子宮で神が聖霊の力を通して造られた者であります。マリヤの子宮は確かにキリストの形体的存在が始まった所でした。

私たちは詩.22篇で十字架の上のキリストの考えに関する予言を学習7.1で調べて見ました。彼は“主は私を生まれさせ、私は母の胎から取り出され、その乳房にゆだねてくださったのはあなたです”(詩.22:9、10)と熟考しました。彼が死ぬ時、キリストは彼の起源に対して、彼の母マリヤの子宮で、神の力によって造られていたことを回顧して見ました。キリストの“母”として福音書に書かれているその描写自体が彼をマリヤから生まれる前に存在したと言う考えを打ち破っています。

マリヤは正常的親を持っていた一人の普通の女でした。これは一人の普通の人、バプテストのヨハネを産んだ、彼女の従姉妹がいた事実から良く立証されます(ルカ.1:36)。マリヤが普通の人間の本性を持っていなかった女であったと言うローマ・カトリック教の考えはキリストが“人の子”と“神の子”共になることが出来ないのを意味しています。これは新約聖書に彼の名として度々現れています。彼は人間の母を持っていたから、“人の子”であり、神の聖霊の作業によってマリヤから生まれたから、“神の子”であり、また神が彼の父であることを意味します(ルカ.1:35)。もしマリヤが普通の婦人でなかったら、この美しい神の計画は果されなかったでしょう。

“誰が汚れたものの中から清いものを出すことが出来ようか、一人もない。...人はいかなる者か、どうしてこれは清くありえよう。女から生まれた者は、どうして正しくありえよう”(ヨブ.14:4; 15:14; 25:4)。これはマリヤやあるいはイエスが無垢の状態であり得ない概念を示しているのです。

マリヤは普通の親から“生まれて”、私たちの汚れた人間性を持っていたし、イエスも“その女から生まれたから”、その人間性を伝授していました(ガラ.4:4)。マリヤを母として、彼女から生まれたと言うことは、彼が出生以前には形体的に存在し



ていなかったことを立証するのです。Diaglott訳本はガラ.4:4を次のように、翻訳しています、— “Having been produced from a woman”。

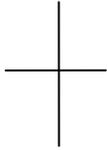
福音書には度々マリヤの人間性が指摘されています。キリストは彼女の霊的考えがないのを少なくとも三回以上叱責しました(ルカ.2:49; ヨハ.2:4)。彼女は彼が話すのを理解することが出来ませんでした(ルカ.2:50)。これは彼女の子が神の子であったけれども、彼女はやはり普通の女のように人間性をもっていたことを確証しています。従ってイエスは彼女の子であり、その肉の人間性を持っていたけれども、彼女よりはもっと霊的でした。ヨセフはイエスが生まれた後マリヤと正常的夫婦関係を持ち、多くの子を生産し、彼女も正常的主婦の生活をしたのでした(マタ.1:25)。それで彼らが正常的夫婦関係がなかったと言う証拠がないのです。

従ってマタ.12:46、47のキリストの“母と彼の兄弟”に関する話は、マリヤがイエス以外の子らを持っていたのを暗示しています。イエスは“彼女の長子”でした。マリヤが処女に留まり、天に上げられたと言われたカトリック教の教えは聖書にはない言葉です。死ぬべき人間性を持っていたマリヤは年をとり、死んでしまったでしょう。これとは別に、ヨハ.3:13に、“誰も天に上った者はない”と言われました。キリストが人間性を持っていた事実は(ヘブ.2:14-18; ロマ.8:3)彼の母もやはりそれを持っていたことを意味するのです。

7.3 神の計画にあるキリスト

神は人間の歴史に広げて見せている彼の目的の特別な部分を計画するに、前後も考えなく突然決定したのではないのです。彼は創造の始めから完全な計画が明確に策定されていたのでした(ヨハ.1:1)。従って彼の子を持ちたい願望は始めから彼の計画でありました。旧約聖書全体はキリストによる人間救いの神の計画をいろいろな違う局面で啓示しています。

私たちは度々その約束と予言者たちの予言を通してそれを確証しましたが、モーセの律法の予表など、旧約聖書は一貫してキリストによる神の計画を現わしているのです。神がすべての創造物が存在するようにしたのは彼が一人の子を持ちたい彼の目的のためであります(ヘブ.1:1、2)。人間の歴史が数千年間許容されているのは



イエスの起源 239

キリストのためでした(ヘブ.1:2)。旧約聖書に書かれているように、数千年の間人間に対する神の啓示はキリストに関する予言に満ちています。

神に対するキリストの至上権や彼の根本的な重要性を私たちが完全に理解することはとても難しいです。従って、たとえイエスがマリヤを通じた出生によって形体的に存在するになっても、始めからキリストが神の心と目的に存在していました。ヘブ.1:4-7、13、14はキリストが一人の天使でなかったのを力説しています。それに反して、彼の人間の生命は天使より劣っていたけれども(ヘブ.2:7)、彼は“神の独生子(only begotten Son)”(ヨハ.3:16)であったので、天使たちよりいっそう優っていました。私たちは既に聖書で学んだその独生子の形の存在が彼の形体的存在であるから、キリストは彼の出生以前に一人の‘霊的な者’として存在しなかったのです。ペテ前.1:20は彼の位置を概括に話しています。“キリストは、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのであるが、その終わりの時に至って、あなたがたのために現れたのである”。

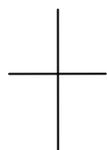
イエスは福音の中心軸でした。“この福音は、神が、予言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束された者であって、御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死人から復活により、御力を持って神の御子と定められたこれが私たちの主イエス・キリストである”(ロマ.1:1-4)。

これはキリストの歴史を要約したのです。

1. 旧約聖書にある約束、すなわち、神の計画にあった;
2. ダビデの子孫として、処女の身を通して形態的人に生まれた;
3. 彼は人間の生活をする間、完全な品性(清潔な霊)で生きた;
- 4.

彼は死者の中から復活して、神の子であることを公示し、使徒たちは霊の賜物によってそのことを人たちに述べ伝えた。

神の予知

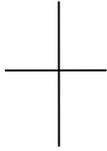


私たちが神は‘将来’に起こるすべてのことを知っている事実を承認するになれば、キリストが形体的存在でなくとも、神の心に始めからあったことを完全に納得出来るでしょう。従って神は存在しない事に対して、存在しているように話し考えることが出来るのです。こう言うことが将来に関する神の予知です。神は“存在しない者を存在しているように呼び出すのです” (ロマ.4:17)。従って神は“終わりのことを始めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う、「私の計りごとは必ず成り、私の目的はことごとく成し遂げる」と” (イザ.46:10) 声明出来るのです。子のために、神は死んだ者を生きた者のように話すことが出来るし、また生まれていない者を生きている人ように話すことが出来るのです。

神の“計画”、あるいは“言葉”は始めからキリストに対して予言しました。彼はいつも神の目的、あるいは“喜び”でした。従っていつかはキリストが形体的に生まれるのが確実なことでした。神はキリストによる彼の目的を成就させるのでした。それゆえに神の予知の確実性は彼の言葉が確証しています。聖書のヘブル語には‘予言的完全時制’があつて、それが神が約束された将来の事を描写するのに過去の時制を使用しています。ダビデは、神の家である聖殿が約束された時、“ヤウエなる神の家はこれである” (代上.22:1)と、既に建てられたように話しています。ダビデが将来の事を描写するに現在時制を使用して話したのは神の約束を確信する彼の信仰でした。聖書には神の予知に関した実例が沢山あります。神はアブラハムに約束した事が成就される事を確実にして、彼にまだ子も生まれる前に、“私はこの地をあなたの子孫に与える” (創.15:18)とアブラハムに告げました。その子孫(イサク/キリスト)が生まれる前の時代に、神はいつそう多くの約束をしました。“あなたは多くの国民の父となるであろう” (創.17:5)。本当に、神は“存在しない者を存在している者のように呼び出すのです”。

このようにキリストは彼の使役の間、まだ彼がその立場になっていないのにもかかわらず、神が“御子を愛して、万物をその(キリストの)手にお与えになった” (ヨハ.3:35)と話しました。“万物を彼に(キリストに)服従させて下さったと言う以上、... 今なお万物が彼に服従している事実を、私たちは見ていない” (ヘブ.2:8)。

神はイエスを通して人間の救いの計画を“世界が始まって以来彼の聖なる予言者たちの口によって”話しました(ルカ.1:70)。彼らは神の計画と緊密に連合していたために、彼らは確かにその立場にいなかったけれども、実際始めから存在しているように話しました。その代りに、私たちはその予言者たちが始めから神の計画にあつたと話すことが出来るのです。エレミヤはその主な例になるのです。神は彼に告



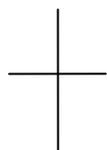
イエスの起源 241

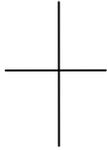
げました。“私はあなたをまだ母の胎に造らない先に、あなたを知り、あなたが生まれない先に、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の予言者とした”(エレ.1:5)。このように神はエレミヤのすべてを彼が生まれる前に知っていました。それと同じく、神はペルシャの王クロスに対して彼の生まれる前に、彼が存在していることを暗示する言葉で話すことが出来ました(イザ.45:1-5)。ヘブ.7:9、10にはまだ生まれていない者に対して彼が存在している言葉を使用したもう一つの例があります。

それと同じ方法で、エレミヤや他の予言者たちが神の計画の一部に含まれているので、彼らが世界創造の前に存在していたように話されています。そのように信者たちもその時存在していたように話されているのです。“神は私たちを救い、聖なる招きを持って召し下さったのであるが、...神ご自身の計画に基づき、また、世界の創造先にキリスト・イエスにあって私たちに賜った恵によるものであります”(テモ后.1:9)。神は“天地の造られる前から、キリストにあって私たちを選び、...神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである(エペ.1:4、5)。私たち各個人が神に始めからお知りなったことと、救われるに区分した、‘あらかじめ定められた’と言う考えは彼らが始めから神の心に存在していた事を指示するのです(ロマ.8:27; 9:23)。

このすべてを見たら、神の目的の軸となるキリストが、形体的には存在していなかったけれども、神の心と計画に始めから存在していたと言うことは驚くべきことでないのです。彼は“世界の創造から屠られた神の小羊でした”(啓.13:8)。イエスはその時実際は死んでいなかったです。彼は約4,000年の後十字架で“神の小羊”としていけにえになりました(ヨハ.1:29; コリ前.5:7)。それと同じ方法で、イエスが始めから選ばれている(ペテ前.1:20)ように、信者たちも始めから選ばれているのです(エペ.1:4)。神の作用が私たちの時間概念の外にあるので私たちがたやすく想像出来ないために、これを皆把握することは難しいのです。‘信仰’は時間の制限を受けずに、神の観点から事物を見ることが出来るようになります。

7.4 “始めに言葉があった”





“始めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は始めに神と共にあった。すべてのものは、これによって来た。出来たもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった” (ヨハ. 1:1-3)。

この句節を適切に理解すれば、その最後の部分に到達する結論を確認しふえんして解釈出来るのです。しかし、この句節はイエスが世に生まれる前に天に存在していたといわゆる教会が教えている最も聖書を曲解している一つです。この句節を正しく理解するにはその文章にある“言葉”の単語を正しく理解することです。一人の人が神の“内に”居りながら、同時に神であることが出来ないから、その単語は直接に人を示すとは言えないのです。言葉と翻訳されているギリシャ語、‘Logos’はそれ自体が‘イエス’を意味しているのではないのです。それは通常に“言葉”と翻訳されていますが、また下記のような意味もあります。

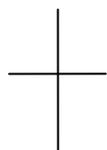
評価 原因 交信 教理

意図 伝道 理由 言葉 便り

その“言葉”が“彼”と言われるのは‘Logos’がギリシャ語で男性名詞であるためです。それゆえに、その言葉は人であるイエスを意味するのではないのです。ドイツ語聖書(Luther訳本)はそれが“das Wort”ですが、それは中性です。フランス語聖書(Segond訳本)はその単語が“la parole”で、これは女性です。だからその‘Logos’は男性の人を指示するのではないのです。

“始めに”

‘Logos’を正しく翻訳すれば、言葉と他の通報で外部に表現された内部の思想を意味するのです。始めに神がこの‘Logos’を持っていました。この驚くべき神の目的はキリストを中心としていました。私たちは既に神の霊が彼の内部の考えを作用して現わすのを示しました。ここで彼の霊と言葉が連合があったのでした(学習2.2を見よ)。神の霊が始めから彼の計画を人たちと靈感で書かされた彼の言葉に作用するによって、キリストの考えが作用するように言葉に伝達されたのです。キ



リストは神の‘Logos’でしたので、神の霊がリストに関する神の計画をすべて作用するになりました。これはなぜそんなに多くの旧約聖書の事件がリストの予表であるかを説明するのです。しかし、その言葉自体がリストでなかったと言うのは強調し過ぎるのではないです。‘Logos’ (言葉)は度々リストに対する福音、すなわち、“リストの言葉” (マタ.13:19; ヨハ.5:24; 使.19:10; テサ前.1:8, コロ.3:16比較)に関して使用しています。‘Logos’ はリスト自体でなく、彼に対することに使用していることに注目して下さい。リストが生まれた時、この“言葉”が肉と血の形に変わった、“その言葉が肉になった” (ヨハ.1:14)のでした。人間であるイエスはその“言葉”でなく、その“言葉”が肉になったのでした。彼は以前に存在いたのでなく、マリヤから出生するによって人として存在するになりました。

リストに対する計画、あるいはメッセージが始めから神と共にいましたが、それがリストと、1世紀に彼に対する福音の伝えによって公に現れました。神は彼の言葉を私たちにリストを通して話しました(ヘブ.1:1, 2)。繰り返してリストが神の言葉を話し、神を私たちに現わすために神の命令の言葉を奇蹟になしたと強調されています(ヨハ.2:22; 3:34; 7:16; 10:32, 38; 14:10, 24)。

パウロはリストに対する福音を“すべての人に伝えよ”と言われた彼の命令に服従しました。“私の福音とイエス・リストの宣教とにより、かつ、世界の始めから隠されていたが、今や現わされ、... もろもろの国人に告げられたのである” (ロマ.16:25, 26; コリ前.2:7)。永遠の命はただリストの使役によって人たちが得ることが出来るようにしました(ヨハ.3:16; 6:53)。しかし、イエスがいけにえとなるによって、人たちに永遠の命を与える神の計画は始めから持っていました。その完全な啓示はイエスが出生し、死んだ後になされました。“偽りのない神が世界が始まる前に約束された永遠の命の望みに基づくのである。神は、定められた時に及んで、御言葉の宣教にによって明らかにされたのである” (テト.1:2, 3)。私たちは神の予言者たちが既に存在している事を話しているような意味で(ルカ.1:70)、彼らが話した“その言葉”は始めから神と共に存在しているのです。

イエスの比喩の話はこの事を多く現わしています。それによって彼は彼自身に関して預言を成就しました。“私は口を開いて譬を語り、世の始めから隠されて

いる事を語りだそう”(マタ.13:35)。これは“始めから神と共にいた言葉”がキリストの出生によって“肉になった”と言う意味です。

“言葉は神であった”

私たちは今“言葉が神であった”と言う意味を考察しています。私たちの計画と考えは根本的に私たち自身であります。‘私がロンドンに行くのは私たちの目的を表現する言葉、あるいは通報であります。なぜならそれが私の目的であるためです。キリストにある神の計画はこのように理解出来るのです。“人は彼の心が考えを示す通りの人である”(箴.23:7)と同じく、神も彼が考えているのとおなじかたです。そのように、神の言葉あるいは彼の考えは神であるのです。このゆえに、神と彼の言葉の間にはとても緊密な関係があります。詩.29:8の如く、神と彼の言葉は平行になっています。“ヤウエの声は荒れ野を震わせ、ヤウエはカデシの荒野を震わせる”。“しかしあなたがたは私に聞かず、ヤウエが言われた”(エレ.25:7)と言うのが、普通預言者が言われた声明でした。実際には神が‘あなたがたは預言者たちを通して話された私の言葉を聞かなかった’と言う意味です。ダビデは神の言葉を彼に反映する彼のランプと光に取扱いました(詩.119:105)。“あなたのみ言葉は私の足の灯火、私の道の光です”。サム下.22:29も神と彼の言葉を平行に取扱っているのを示しています。従って神の言葉を神自身として擬人化したのが理解出来るのです。すなわち、人が話しているように話しているのです(間違った解釈5‘擬人法の原則’を見なさい)。

神は真理それ自体であるから(ヨハ.3:33; 8:26; ヨハ.1.5:10)、また神の言葉は真理です(ヨハ.17:17)。それと同じ方法で、イエスは彼の言葉を擬人化して彼自身と緊密に一致させました。“私を捨てて、私の言葉を受けない人には、その人を裁く者がある。私の語ったその言葉が、終わりの日にその人を裁くであろう”(ヨハ.12:48)。イエスは彼の言葉を実際の人、彼自身のように話しています。彼の言葉はそれらがイエスと緊密に連合しているために、擬人化されています。

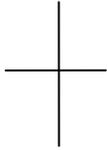
それと同じく、ヨハ.1:1-3は、神の言葉は人として擬人化され、すなわち神自身になっています。“すべてのものがそれによって造られた”(ヨハ.1:3)とその言葉に関して私たちに告げられました。しかし“神が彼の言葉ですべての物を造られました

” (創.1:1)。これゆえに、神の言葉は神自身のように話されています。これから私たちが注目すべきことは神の言葉が私たちに存在しているので、私たちは神と緊密な関係にあることです。

創世記1章は、キリストでなく、彼の言葉を通して創造したけれども、神が創造者であることを明らかにしています。すべての物を造ったと描写されているのは、キリストでなく、その言葉でした(ヨハ.1:1-3)。“もろもろの天はヤウエのみ言葉によって造られ、天の万軍(すなわち、星ら)はヤウエの口の息によって造られた。... ヤウエが仰せられると、そのようになった” (詩.33:6,9)。今もなお彼の言葉によって自然界のすべてが作用しているのです。“ヤウエはその戒めを地に下される。そのみ言葉は速やかに走る。ヤウエは雪を羊の毛のように降らせ、... ヤウエはみ言葉を下してこれを溶かし、その風を吹かせられると、もろもろの水は流れる” (詩.147:15-18)。

神の創造の力である彼の言葉は、マリヤの子宮でイエスを孕み生まれるに使用しました。神の計画である彼の言葉は彼の聖霊による働きによって(ルカ.1:35)、キリストの妊娠をもたらしました。マリヤは、そのニュースに応ずるによってキリストの妊娠されるのを認定しました。“私は主のはしためです。お言葉の通りこの身に成りますように” (ルカ.1:38)。

神の言葉/霊は彼の目的を反映しているのであります。それでそれは旧約聖書を通して話されています。これが真理であることは使.13:27で示しています。そこでイエスは旧約聖書の預言者の言葉に一致して話しています。“エルサレムに住む人々やその指導者たちは(ユダヤ人たち)、彼を知らず、また預言者たちの声を聞かなかった”と。キリストが生まれた時、神の言葉/霊のすべてはイエス、キリストと言う人に表現されました。靈感によって、使徒ヨハネは永遠に関する神の計画がキリストに表現されて、彼の弟子たちがそれを手で触り、見る事が出来たと話しました。彼らが神の言葉、キリストに現れた救いに関する神の計画全体を触って見たと今認定しています(ヨハ.1:1-3)。私たちは形体的にキリストを見る事が出来ない代りに、彼を本当に認識するのを通して喜ぶ事が出来るし、私たちに対する神の計画を緊密に知る事によって永遠の命を確認する事が出来るのです(ペテ前.1:8,9)。私たちは自分自身に尋ねて見なければならぬのです。果たして私はキリストを知っているのか。いつかこの世に存在していた一人の聖人と呼ばれるイエスを受け入れるのでは充分でないのです。継続的祈りと聖書研究によって彼をあなたの救い主と



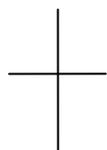
して適切に認識し、またバプテスマを受けることによって彼と緊密な関係を結ぶことが出来るのです。

脚注：“始めに言があった”とは創造以前にトラ(Torah、モーセの五経)が存在していたと言うユダヤ人たちの概念を解説しているのです。ヨハ.1:1-3はイエスに対して預言した神の言葉は認識しなければならない重要なことであると話しています。彼に対する神の計画は創造以前から存在していたと言うことです(ルカ.1:70)。

間違った解釈:22歴史的イエス

ある人たちが主張しているように、もしナザレのイエスがかって存在した証拠がないとすれば、キリスト教の存在自体を説明するのが難しくなるのです。それは過去の二千年間数千万の人が決して存在しなかった者を根拠として信じ、そしてその存在しなかった人を激烈に信仰したために、多くの人が酷い逼迫や死を賭して、その信仰を世界に広く述べ伝えたと言うことになるのです。クリスチャンとユダヤ人たちは大体モハメットの主張と彼の教えは拒否しますが、彼がこの世に生きたことはたやすく受け入れるのです。私たちは一般的に歴史的に有名な人物は彼らが存在した明白な証拠がなくとも彼らを良く受け入れるのです。私たちは度々広く世に知られている事件を分析して見ます。例えば、西紀1600年頃起こった関ヶ原の戦いはなぜ起こったか、その戦いの意義はなんであるか、などを正確に把握するためです。

ナザレのイエスの存在を強く否認する者たちの中には、彼のメシヤ権を受けることに対する論証に敢然と立ち向かわないで、便利な言いわけでそれを避ける傾向がありました。これは初期イスラエル人たちがイエスと呼ばれる人が1世紀に存在したのを受け入れる時に現れる事実でした。次のナザレのイエスの存在に対する歴史的証拠は神学の作り話によって彼を去らせることが出来ないことになっているのを示しています。この学習には助けになる多くの情報が、Gary Habermasの歴史書、‘Ancient Evidence For The Life Of Jesus’ 収集されています。



1)

Tacitusはローマの歴史家です。1世紀に対する彼の二つの作品(AnnalsとHistories)皆がイエスとキリスト教に関して話しています。彼は“Annals(約A.D.115年)”を著作しました。

“Tiberius皇帝の統治時代、彼の総督の中の一人であるPontius Pilateがユダヤを治める時、一般からクリスチャンと呼ばれる一団の憎まれた人たちが甚だしい迫害を受けた。彼ら一団の名称は彼らの創始者キリストによるのであった”。

Tiberius皇帝がA.D.14年-37年まで統治する間、キリストが処刑されたと記録しています。Tacitusもまたこのグループの信仰がユダヤばかりでなく、ローマに広がったと描写し、彼は続けてクリスチャンたちが多くの人に憎まれ、彼らの多くがローマで処刑されたと書いています。これは皆イエスに関した新約聖書の記録と一致しています。弟子たちと使徒たちが始めに彼らの教えをユダヤに伝え、それからローマ市とローマ帝国の全領土に伝えましたが、多くの妨害がありました。

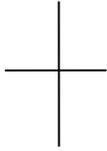
2) ローマの他の歴史家、SuctoniusはClaudius皇帝(A.D.41年-

54年)時代に書き始めました。“ローマにいたユダヤ人たちがChrestusの煽動によって続けて騒擾を起こすので、Claudius皇帝がローマ市から彼らを追放した”。“Chrestus”は“Christ”の他のつづり方でありました。そのゆえ、使.18:2にはアクラとプリスキラと呼ばれるユダヤ人のカップルがユダヤ人たちを迫害したためにローマを離れなければなかったのが書かれています。

Suctoniusは後ほどネロの時のクリスチャンの迫害に対して説明しています。“そのローマの大火事事件の後...一つの新しくそして有害な信仰を告白している宗教の信者たち、クリスチャンたちに刑罰が科された”。これは1世紀にクリスチャンと呼ばれる宗教団体が存在したのと、その世紀に“キリスト”と呼ばれる人が存在していたのを提示しています。

3) 聖書学者F.F.Bruceは彼の著書、“Christian

Origins” PP.29,30で、A.D.52年頃、Thallusが書いた東地中海の歴史に注目すべきことがあると話しています。Bruceは他の著書、“新約聖書の文書” P.113で、Julius Africanusと名をつける学者がThallusの著書を引用し、イエスが十字架につかれた時暗



くなっただのは日蝕のためであったと彼の描写をあざけています。これはイエスが十字架刑が彼がA.D.52年に書いたの彼の歴史書の前に起こったのを提示しています。

4)

ローマ政府行政官Plinyは末ごろいたクリスチャンと呼ばれる一団のとても活動的な人たちの存在を1世紀の詳細に話しています。使徒たちが記念礼拝を上げる状態に対して話しているのがあります。“彼らは決めた日の日没前に集まる習慣があつて、彼らはキリストに対する賛美歌の句節を交替して唄った” (Plinyの書信、W.Melmoth

Vol.2,X:96)。ローマの皇帝TrajanとHadrianはクリスチャンたちを取り扱うのが問題であると話しています。これに関してまた“Plinyの書信” Vol.2,X:97とEusebiusの教会史、IV:IXに書かれています。1世紀以来このグループの存在と逼迫を受ける中でも彼の驚く不屈の精神は、彼らが1世紀に実際存在していた歴史的人物に従っていたのを提示するのです。

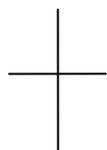
5)

ユダヤ人の聖典、タルムード、サンヘドリン43aはイエスの死に関して話しています。タルムードのこの部分はその本の編纂初期(A.D.70年-200年)からそれを認定しています。

“過ぎ越し節の夕方イエスは十字架につかれました。その処刑の前40日間彼に関する一つの伝聞が回されました。‘彼が魔術を使ってイスラエルを誘惑して墮落させているから彼を石で打たなければならない’ということでした。また誰でも彼に賛成する者は、彼の代りに出て来るように’。しかし誰も彼の代りに出て来る者がないから、彼は過ぎ越しの日の夕方十字架につかれました”。

“十字架につける”には当時の処刑法でした。それで彼は聖書に書かれている通り十字架につかれました(ガラ.3:13; ルカ.23:39)。ユダヤ人たちはイエスを石で打って(モーセの律法にしたがって)殺そうとしたが、実際彼は十字架につかれました。これに対しては、ユダヤ人たちはイエスを処刑するにローマの法を使用したのが新約聖書に良く描写しています。

サンヘドリン43aにはまたイエスの五人の弟子が裁かれ、処刑されたと描写しています。これはユダヤ人の伝統は歴史的イエスが存在した事を信じているのを示すのです。サンヘドリン106bにはイエスが死んだ時が33才であったと話しています。これは新約聖書の記録と全く同じです。Maierの著書、“First



Easter” PP.117, 118は、5世紀のユダヤの文献である “Toledoth Jesu” 引用していますが、それには弟子たちがイエスが死んだ後彼の死体を盗んで行こうとしたが、ユダと名つけた園の番人が彼らの計画を聞きイエスの死体を他の所に移し、後にそれをユダヤ人たちに渡したと主張しています。 Justin MartyrがA.D.150年ごろ書いた文書には、ユダヤ人たちが特別にメッセンジャーを遣わしてイエスの死体が盗まれたと主張するようにしたと記録しています(Dialogue with Trypho 108)。またTertullianもA.D.200年書いた文書にそれと同じ事を記録しています(On Spectacles、30)。

彼らの間にあるこの証拠の筋はA.D.の初期のユダヤ人たちが歴史的イエスの存在と彼の横死を信じていたのを示しています。

6)

ギリシャの戯曲作家Lucianは2世紀に書いた彼の戯曲で “十字架につかれて死んだ人を今日も礼拝している” とクリスチャンをあざけているのがあります(Lucian, The Death of Peregrine、11-13、in The Word of Lucian vol.4)。

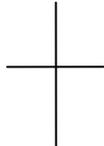
7) Josephusは西紀1世紀の最も有名な歴史家でした。彼が書いたA.D.90年-95年の著書 “Antiquities” で、彼は “キリストと呼ばれた、イエスの兄弟ヤコブ” に関して話しています。彼はまたその本の他の部分ではイエスに関する新約の描写を確証を与えています。 “その時イエスと言う賢者がいました。...彼は驚くべき目覚ましい行為をなした人であったために、...彼はキリストでありました。...彼は神の予言者たちが彼に関して予言した通り多くの驚くべきことを果し、...死んだ後三日めに死者から起き上がって彼らに現れました”。

この文書に対してある人たちはそれは一つの改竄であると主張しています。

1世紀に住んでいたナザレのイエスと呼ばれる人の存在を支持するにこの句節が使用される理由は次の考察によって与えられているのです。

Eusebiusは彼の著書、教会の歴史、I:XIで、Josephusのこの部分を引用しています。

尊敬を受けている学者たちがこの始めの部分が原文であると支持し、この部分がJosephusの他の作品と同じ文体で書かれていると示しています(Daniel Rops、 “The Silence of Jesus’ Contemporaries”、p.21)。 J.N.D.Andersonの “Christianity: The Witness of History” P.20,



F.F.Bruceの“The New Testament Documents” PP.108,109)

この改竄に対する文書的証拠がないのです。

Schlomo

Pines教授はJosephusのアラブ版の作品がほとんど原板であるのが確かであることが発見された主張しています。上記に引用された句節がそこで見出されるが、その抜き書きした文書にはイエスの復活とメシヤ権に関する確かな教理の声明はないのです。Josephusはユダヤ人でしたので、こんな理由があると思います。Pines教授は彼が見出したことに対する論文を始めに“The New York Times Feb.12.1972年”に記載されました。そこで彼はそのアラブ版からイエスに対するJosephusの論争点を引用しました。“その時イエスと呼ばれる賢者がいた。彼の行為は善良であり彼は道德者と人たちに知られていた。多くのユダヤ人と他の国と人が彼の弟子になった。総督Pilateが彼を十字架につけるように宣告した。彼の弟子になった者ちが彼の弟子であることを放棄しなかった。彼らは彼が十字架につけられて死んだ三日の後によみがえり彼らに現れたと公表した。従って、彼はその予言者たちが詳しく不思議なことを話したそのメシヤであると思うようになった”。

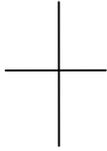
この記録は新約聖書の記録と見事に一致しています。

間違った解釈:23 “天から来た者”

“神のパンは、天から下って来て、この世に命を与えるものである。..
私が天から下って来たのである” (ヨハ. 6:33,38)。

この言葉とこれと同じ他の言葉らは、イエスがこの世に出生する前に天に形態的に存在していたと誤った考えを支持するのと曲解しています。しかし、次の論点に注目しなければならないのです。

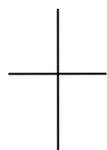
- 1.三位一体論者たちは彼らの論点を立証するためにこの言葉を文字通りに取り扱っています。しかし、私たちがそれらを文字通りに取り扱えば、イエスが文字通りに空を通して地に浮かび降りたと言う意味になります。聖書にはこれにはなにも記録されていないばかりなく、またイエスが胎児としてマリヤの子宮に妊娠されていたと言う言葉の意味がなくなるのです。ヨハ.6:60はマナに対



イエスの起源 251

する教えが“実に理解出来ない”言葉であると描写されています。私たちはそれが比喩的言葉であると理解しなければならないのです。

2. ヨハネ6章で、イエスはマナが彼自身を指し示す予表であると説明しています。そのマナは彼らの要求に応じて神がこの地で造って送って下さったのでした。それは実際天の神の御座から浮かび降りた物でなかったのです。これと同じく、キリストが天から来たのも理解しなければならないのです。彼は聖霊がマリヤの子宮で作用するによって、この地で創造された者でした(ルカ.1:35)。
3. イエスは“私が与えるパンとは、世を生きるための私の肉のことである”(ヨハ.6:51)と話しています。三位一体論者たちは神の一人であったイエスが天からこの地に降りて来たと言っています。しかし、イエスは天から降りて来たパンは彼の“肉”であると話しています。それと同じく、イエスは‘神である子’なく、“人の子”(ヨハ.6:62)として彼自身が天から降りてきたそのパンと結合しているのです。
4. ヨハネ6章にあるその句節にはイエスが神と等しくなかったのを現わす多くの証拠があります。“生きて居られる父が私をお遣わした”(ヨハ.6:57)と言うのはイエスと神が等しくないのを示しています。“私は父によって生きる”(ヨハ.6:57)と言った事実は三位一体論者たちが話しているイエスと神が‘同じく永遠である’と言う事は理解出来ないのです。
5. では、‘いつイエスが天から降りて来たのですか’と質問が起こるでしょう。三位一体論者たちはイエスが彼の出生に天から降りて来たと言証するにヨハネ6章にあるこの句節を利用するのです。しかしイエスは“天から降って来た”(33,50節)と、ちょうど進行中の過程のように、彼自身に関して話しています。イエスが神の賜物であると話すのに対して、キリストは“天から真のパンをあなたがたに与えたのは私の父である”(32節)と話しました。その時イエスがこの言葉をしたのは、彼が神によってこの世に遣わされて、既に天から降りて来たのを意味しているのです。これゆえに、彼はまた過去時制で話すことが出来たのです。“私は天から降ってきた生きたパンである”(51節)。しかし彼はまた十字架での彼の死の形を天から降ってきたパンとして“降って来た”と話します。“私が与えるパンは、世の命のために与える私の肉である”



(51節)。従って私たちはイエスは既に天から降って来たパンであり、また降りて来る過程にあることと、まだ十字架による彼の死で降って来なければならないパンであることを話しているのを分からなければならないのです。この事実は、キリストの出生に関するだけでなく、神自身の顕現で‘降りて来た’のを立証するのです。これは、神が降って来たと話したのがこれと同じく意味している旧約聖書のすべてを結論的に立証しています。このように神は彼の民がエジプトで苦しんでいるのを見て、モーセを通して彼らを救うために‘降りて来ました’。彼は私たちが罪の奴隷になって苦しんでいるのを見て、イエスを遣わすによって、モーセが彼らを束縛から離れ出したように、私たちが罪の束縛から離れ出るように、彼自身私たちに現れました。

間違った解釈: 24 イエスが地を創造した

“御子は、...

すべての造られたものに先だって生まれた方(イエス)である。万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、皆御子にあつて造れたからである。これら小さいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあつて成り立っている。彼は始めの者であり、死人の中から最初に生まれたかたである”(コロ. 1:15-18)。これはイエスが実際この地を創造したような印象を与える多くの句節の中の代表的句節です。

1. もしこれが事実なら、イエスが彼の出生以前には存在していなかったと教えている多くの句節が矛盾になるのです。創世記は神が創造者であることを確かに教えています。イエスあるいは神が創造者です。創世記に神が創造者であったと話しているにもかかわらず、もし私たちがイエスが創造者であったと話すと、イエスが直接に神と等しいと話しているのです。この場合、神とイエスが差異があるのを示している多くの句節を説明することが出来ないのです(学習8,2の説明を見なさい)。

2. イエスは始めから暗示しているように“長子”でした。イエスとその天地の創造の前に神の“長子”であった証拠がないのです。サム下.7:14と詩.89:27の句節はダビデの子孫が神の長子になると預言しています。彼は確かにその句節が書かれる時の前と、創世記の創造が書かれた時の前に存在していなかったのです。イエスは死者から復活して“御力を持って神の子と定められました”(ロマ.1:4)。“神は、イエスを蘇らせて、私たち子孫にこの約束を、お果しにさせた。それは詩篇の第二篇にも、「あなたこそは、私の子、今日、私はあなたを生んだ」と書いてある通りである”(使.13:32,33)。このようにイエスは彼の復活によって神の長子となりました。彼の父の右側に立っているその子はその長子と結合している(創.48:13-16)のであります。キリストが彼の復活の後神の右側に高く引き上げられたのに注目すべきです(使.2:32; ヘブ.1:3)。
3. イエスが死者から復活して長子と描写されている意味は(コロ.1:18)、これに匹敵している句節、“すべての造られたものに先だって生まれた者”(コロ.1:15)と言うことです。それゆえに彼は彼自身に対して“死人から最初に生まれた者、.. 神に造られた者の根源である者”と話しています(啓.1:5; 3:14)。イエスはインモータル(Immortal)に造られた最初の人であり、神の永遠の子らがイエスの死と復活によって、彼らの復活と彼らの出生を完全に成すようにしました(エペ.2:10; 4:23、24; コリ后.5:17)。“キリストにあってすべての人が生かされるのである。ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たちです”(コリ前.15:22、23)。これはコロ1章の考えと同じいです。イエスは死人から復活して永遠の命が与えられた最初の人であるから、彼は新創造の始めであります。信者たちは彼の再臨に於いて彼のパターンを継ぐでしょう。
4. それゆえにコロ1章にある創造は、創世記にある創造でなく、新しい創造に対して言及しているのです。イエスの使役によって、“すべてのもの、権威、権力、支配らが作られました。パウロはイエスがすべてのもの、例えば、山、川、鳥等、自然物のすべてを創造したと話していないのです。この新創造の要素は神の国で私たちに与えられる報償のすべてであります。“権威、権力、支配らは”復活された信者たちが“王と祭司になって、地上を支配する”(啓.5:10)ことについて話しているのです。これらは皆イエスの使役によって可能になりました

。“天にあるものも地にあるものも、位も主権も、支配も権威も、皆御子にあって造られたのです” (コロ.1:16)。エペ.2:6は私たちはキリストにある信者たちが“共に天上で座に”つかせて下さったと話しています。この句節はキリストが造って下さった霊的地位に私たちが高く引き上げられたのを教えています。それは今私たちが持っていますが、将来経験できるでしょう。その“天と地”は“十字架の(キリスト)血によって和解するに必要なすべてのものを”含んでいるのです(コロ.1:16,20)。その“天にあるすべてのものは”私たちの周囲にある物質的すべてのものでなく、今“キリスト・イエスにあって、共に天上で座につかせて下さった”信者たちに対して言及しているのです。

間違った解釈:25アブラハムの前にいた者

この言葉は度々イエスがアブラハムの以前に存在していたと適用を誤っています。しかし、詳しく調べて見るとその誤りを発見することが出来ます。

- 1.ヨハ.8:58でイエスが「アブラハムの生まれる前から私は、いるのである」と言ったのは、「私はアブラハムが生きていた時以前にこの世に生きていた」と話したのでないのです。彼はアブラハムの子孫となることを約束されていました。もしイエスがアブラハムの時以前に形体的に存在していたとすれば、私たちはアブラハムにしてくださった神の約束はナンセンスになることを良く分かるのです。
- 2.ヨハ.8:58の文脈はアブラハムに関するキリストとユダヤ人たちとの談話です。アブラハムはかつてこの世に生きた偉大なる人でした。イエスは“今ここに立っている私はアブラハムよりもっと重要な人である”と話していました。彼らがそこに立っている時、イエスはアブラハムよりもっと重要であると話しています。ヨハ.8:58に“アブラハムの生まれる前から私はいるのである”言うのは、キリストはこの世の始から神の計画にいたと言うことに理解出来るのです。イエスがアブラハムの“前に”いたと言うことは彼がアブラハムよりもっと重要であると言う意味です。

3. この証拠はヨハ.8:55,56で見つかります。“あなたがたはその神を知っていないが、私は知っている。あなたの父アブラハムは、私のこの日を見ようとして楽しんでいて、そしてそれを見て喜んだ”。アブラハムが喜んで笑った時はただ彼が子孫を持つようになると彼に約束された時でした。彼はその約束が究極までにはイエスに関することである事を悟りました(創.17:17)。アブラハムはキリストに関して彼に約束された事を通して彼の前にあるイエスを“見る”が出来ました。彼は将来に起こるイエスの犠牲に対して隠密に解説しました。“それでアブラハムはその所の名をヤウェ・イレと呼んだ。これにより、人々は今日もなお「ヤウェが山に備えあり」と言う”(創.22:14)。この意味はイエスがアブラハムに関して彼を見たと言うことでした。それはこの文脈でイエスが“アブラハムの前に、私がいた”と話すことが出来る約束に対して話すことです。彼は私たちが学習3.1で説明したように、アブラハムに対する神の約束が世の始めから神に知られていたイエスに対する計画が現れたことを理解したのです。“アブラハムの以前に”あったその計画がアブラハムにした約束に現れ、1世紀の“その言葉が肉になった”、イエスの周囲に立っているユダヤ人が見るように成就されたのでした。

4. イエスが“**I am**”と話した時、それは神の名である“**YAHWEH(ヤウェ)-I am that I am**”(出.3:14)を言及するものであり、彼が神であると度々主張する者があります。私たちは間違った解釈3で、この言葉は人格的神自身を意味するのではなく、イエスと普通の正常な人たちは実に伴うことが出来る神の名であると説明しました。しかし、これはイエスが単純に動詞“**to be**”を現在時制で使用したのでしょう。これとちょうど同じギリシャ語句がヨハ.9:9に起こっています。それは治癒を受けた盲人の隣人たちが“この人は、坐って乞食をしていた者でないか。ある人々はその人だと言い、他の人々は、いや、ただあの人に似ているだけだ”とお互い尋ね合せていました。あなたは“**彼である、He is**”と言うたことに注目して下さい。これは本来のギリシャ語にはないのですが、翻訳者が書き添えてたのです。その盲人は“**私である、I am**”と言いました。それと同じようにイエスも“**私である、I am**”と話したのです(ヨハ.8:58)。もしイエスが“**私である**”と話した事実が彼がその神である事を立証するなら、その盲人も“**私である**”と言ったので

、彼も神になるのです。しかし、それは、Yahwehの神の名、“I will be who I will be” (出.3:14)とは何の関係もないのです。

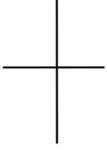
間違った解釈:26メルキゼデック

多くの聖書学者が使徒ペテロが書信を書く時説明している次の言葉に対して心から‘アメン’と話します。“このことは、私たちの愛する兄弟パウロが、彼に与えられた知恵によって、あなたがたに書き送った通りである。彼は、どの手紙にもこれらのことを述べている。その手紙の中には、所々、分かりにくい箇所もあって、無学でこころの定まら無いものたちは、他の聖書についてもしているように、無理な解釈を施して、自分の滅亡を招いている” (ペテ后.3:15、16)。これは確かにヘブル書に書かれているメルキゼデックに関するパウロの解説であります。彼自身もただ霊的に成長している信者たちがその意味を把握出来る難しいことであると話しました(ヘブ.5:10、11、14)。それゆえにこのような句節の教えに根本的教理を基礎するのではないのです。またメルキゼデックの句節は聖書の基本教理を学ばなければならない者にはその意味が曖昧でしょう。

“このメルキゼデックはサレム(エルサレム)の王であり、いと高き神の祭司であったが、王たちを撃破して帰るアブラハムを迎えて祝福し、それに対して、アブラハムは彼にすべての者の十分の一を分け与えたのである。...

彼には父がなく、母がなく、系図がなく、生涯の始めもなく、生命の終わりもなく、神のようであって、いつまでも祭司である” (ヘブ.7:1、3)。これからある人はイエスが彼の出生以前存在しており、また人間の親もなかったと推論しています。

イエスは父(神)と母(マリヤ)と家系(マタ1章とルカ3章、ヨハ.7:27と比較)を持っていました。それゆえに‘メルキゼデック’がイエスだとは言いが出来ないのです。しかしメルキゼデックが“神の子のようである” (ヘブ.7:3)と話しています。彼はイエス自身でないで、著者が教えの目的のために使用したイエスと類似したところがあります。“メルキゼデックと同様な、他の祭司(イエス)が建てられたことによって” (ヘブ.7:15)、キリストは“メルキゼデックに等しく祭司として”定められました(ヘブ.5:5、6)。



イエスの起源 257

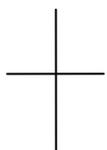
メルキゼデックに対するヘブル語はただ文字的に取扱うことが出来ないのです。もしメルキゼデックが文字通りに父もなく、母もないとすれば、彼は神自身になるのです。彼は始めもないのです(テモ前.6:16; 詩.90:2)。しかしこれはヘブ.7:4が否認しているのです。“この人がどんなに優れた人物であったか、あなたがたは分かる”。しかし彼は人たちに見られ、神に捧げ物を捧げた事実から人でした。彼が人であるならば、文字通りの両親があるのです。彼の人間的存在は“父もなく、母もなく、家系もなかった”と言うのは彼の家系と両親が記録されていない事実を言及しているのです。皇后エステルは記録されていないので、彼女の背景はそれと同様に描写されています。モルデカイが“彼の伯父の娘ハダッサ、すなわちエステルを養い育てた。彼女には父も母もなかったからである。... その父母の死後、モルデカイは彼女を引き取って自分の娘としたのである”(エス.2:7)。

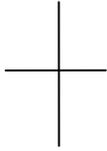
創世記はすべての人物を話すに於いて長く彼の家族の背景を紹介するのが普通です。しかしメルキゼデックが現れには彼の家系の記録もなく、彼に関するすべての記録を断ち切ってなにもなく、何の公表もなく突然現れています。しかし疑いなく、彼はとても尊敬すべき人物でした。アブラハムさえ彼に十分の一を与えて彼から祝福された方でした。メルキゼデックがアブラハムより優れた方である事を明らかに示しています(ヘブ.7:2,7)。

パウロは聖書に対してただ精神的運動をしているのではないのです。1世紀にはメルキゼデックのような解決すべきとても難しい問題がありました。ユダヤ人たちはいつも論争をしました。

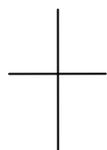
‘あなたたちクリスチャンはこのイエスが私たちの大祭司長であって、私たちの祈りが彼の働きによって神に上げられると話します。しかし、大祭司長になるには良く知られている、レビ部族の家系によるのをあなたがたも良く知っていると思います。あなたがたはその大祭司長のイエスがユダ部族から出たと言うのはどう言う意味ですか(ヘブ.7:14)。済まないことであるが、私たちはアブラハムだけが私たちの最高の指導者であり、模範であると思います(ヨハ.8:33,39)。それゆえに私たちはそのイエスを尊敬することが出来ません。

それに対するパウロは答え：





‘メルキゼデックを思い出して見なさい。王と祭司であるメシヤは、彼の祭司権はメルキセデックの模型に従っているのです(ヘブ.5:6、詩.110:4)。アブラハムはメルキゼデックより劣っているので、アブラハムがイエスより優れたと言う力説を変え、家系の重要性を論ずるのは止めてもらいたいのです(テモ前.1:4)。もしあなたたちがメルキゼデックがイエスの予表であることを瞑想するなら、あなたたちはキリストに関してより偉大な事を認識するでしょう。



学習7: 問題と解答

1. イエスに関する旧約聖書の予言二つを上げて見なさい。

2. イエスは彼が出生する前に形体的存在をしていたですか？

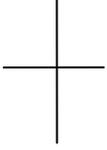
3. どんな意味で、イエスは彼の出生以前存在したと言えますか？

- a) 一人の天使として
- b) 三位一体の神の一人として
- c) 霊で
- d) 神の目的として彼の心にいた

4. 次のどちらがマリヤに対して正しいのですか？

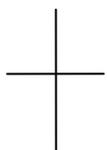
- a) 彼女は罪のない完全な女であった
- b) 彼女は普通の女であった
- c) 彼女は聖霊によってイエスを妊娠した
- d) 彼女は今私たちの祈りをイエスに上げる

5. イエスはこの地を創造したのですか？



6. “始めに言葉があった” (ヨハ.1:1-3)と言われたこの句節はどのように認識
していますか？ またどう言う意味ですか？

7.イエスが出生以前に形態的に存在していたかどうかを分るのがなぜ重要な
ことですか？



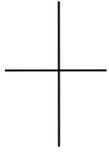
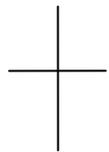
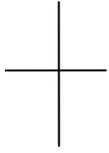


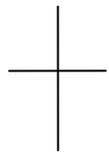
写真 8





学習 8

イエスの本性



8.1 イエスの本性:序文

主イエス・キリストが罪を克服して、完全な品性に発展するによって、尊敬を受け、高められたと考えないのがキリスト教界にある最も大きな悲劇の一つであります。世界に広く普及されている‘三位一体’の教理はイエスを神自身となしていません。神は悪の誘惑に陥ることが出来なく(ヤコ.1:13)、また罪を犯すことも出来ないのを考えるなら、キリストが実際罪に対して戦ったとは言えないのです。従って罪が彼になんの影響も与えなかったので、彼の生活は人間性から離れた経験であり、人間の霊と肉体の葛藤が全然なかった偽りの人間でした。

その他の極端的グループ、モルモン教とエホバの証人教はキリストが神の独生子である不思議な事が理解出来ないのです。彼は一人の天使でなく、またヨセフの子でもなかったでした。ある人たちはキリストの本性が罪を犯す前のアダムの本性と同じものであったと提示しています。聖書に根拠していないこのような見解は認定することが出来ないのです。‘アダムは神が地の塵で造り、イエスは神のマリヤの子宮で神の独生子として造られました’。イエスが人間の父を持っていないけれども、彼は他の方法であったけれども私たちにように女に孕まれました。多くの人が私たちにように罪深い本性が発展して完全者になった事を受け入れようとしないのです。これは実にキリストを信ずる信仰の障碍になっています。

イエスが私たちと同じの本性を持っていたけれども、いつも誘惑を克服したために、彼の品性が完全であった事を信ずるのはたやすいことではないでしょう。キリストの完全な生活は福音書に彼が神でなかったことを確かめ、また彼を確実に理解し信ずることに結び付ける多くの聖書の句節に良く映じています。彼が神自身であったとすれば、彼の生活は自動的に完全であったでしょう。しかしこの観点は罪と肉の本性に対するイエスの偉大なる勝利の価値を下げています。

彼は私たちすべてが持っている肉の本性に預かっていたけれども(ヘブ. 4:15)、神の道を行ない、彼の助けを求めて人間の肉性を完全に克服しました。これは“神がキリストにおいて”、彼の独生子を通して“この世をご自分に和解させ”(コリ后.5:19)ようとした、彼の人類救いの計画を成就したのです。

8.2 神とイエスの差異点

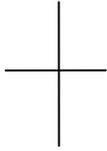
“神がキリストの内におられた”と言われる程力説している句節と、彼が肉の本性を持っていたと強調している句節が良く対照をなしています。上記の後のグループの句節は三位一体論の教理、すなわちイエスが神自身であると言う考えを聖書で正当化させることが出来ないのです。(この三位一体論の教理はA.D.325年、Nicaea会議で決定されて公表するになったのですが、初期クリスチャンには知られていなかったのです)。この三位一体と言う言葉が聖書には全然書かれていないのです。学習9で罪に対するキリストの完全な勝利と、それにある神の部分を探求して見るようにしましょう。この学習をする前に、私たちの救いは実際イエス・キリストを正しく認識することによるのである事を記憶していなければならないのです(ヨハ.3:36; 6:53; 17:3)。いつか罪と死に対する彼の克服を完全に認識すると、私たちは彼の救いに預かるバプテスマを受けることが出来るのです。

神とイエスの関係に関する明白な要約はテモ前.2:5にあります。“神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただ一人であって、それはキリスト・イエスである”。この言葉を熟考すると、次の結論になります。

神は唯一な方であるから、イエスが神であると言うことは出来ないのです。もし父とイエスが共に神であるとすれば、二人の神がいることとなります。“私たちには、父なる唯一の神のみがいるのであります”(コリ前.8:6)。従って‘神である父’は唯一の神です。それゆえに三位一体説の偽りの教理のように、神とは別に神である子があることは出来ないのです。旧約聖書は父である唯一の神である‘ヤウエ’を良く描写しています(実例、イザ.63:16; 64:8)。

この一人の神に付け加えて、神と人間の間一人の、人であるキリスト・イエスがいます。この文章で“神と”の、その助詞、“と”はキリストと神に差異があるのを示しています。

キリストが“仲保者”であると言うのは“媒介者”である事を意味するのです。罪深い人間と罪のない神との間の仲保者は罪のない神自身が出来ないのです。それは罪が深い人間の中の罪のない人でなければなかったから、‘人であるキリスト・イエスである’と言うのはとても



イエスの本性 265

正しい説明です。イエスが天に上げられた後に書いているけれども、パウロは神であるキリスト・イエスとは話していないのです。

旧訳聖書には“神は人でない”(民.23:19; ホセ.11:9)と度々私たちに思い出させています。なお新約聖書でもキリストは“人であるキリスト・イエス”であったと度々呼ばれ、彼は“人の子”であると確かにしています。彼は“いと高き者の子”でした(ルカ.1:32)。神が“いと高き者”であるので彼だけが神自身であるのです。神とイエスに対して使用されている言葉父と子は彼らが等しくないのを確かにしています。子が彼の父とある程度同じだけれども、彼らは一人に、同じ人に、また同じく老いた人になることは出来ないのです。

これと共に、神とイエスの間には多くの差異点が見つかります。それらは確かにイエスが神自身でなかった事を示しています。

神

イエス

“神は悪の誘惑に陥るような方ではない”(ヤコ.1:13)。

キリストは“すべてのことについて私たちのように試練に会われた”(ヘブ.4:15)。

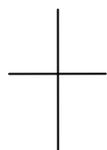
神は死ぬことが出来ないのです
彼は本来不死です(詩.90:2; テモ前.6:16)。

キリストは三日間死にました(マタ.12:40; 16:21)。

神は人が見ることが出来ないのです(テモ前.6:16; 出.33:20)。

人たちがイエスを見触ることが出来ました(ヨハ1.1:1)。

私たちが誘惑される時、私たちは罪を犯すか、あるいは神に服従すべきかの選択が強制されます。度々私たちは神に服従します。キリストもその同じ選択がありま



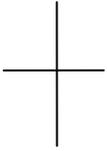
したが、彼はいつも神に服従を選択しました。従って、彼は罪を犯す可能性がありましたけれども、決して罪を犯したことがないのです。ダビデに約束されたその子孫は決定的にキリストであると示しました(サム下.7:12-16)。その14節は“もし彼が罪を犯すことになれば、私は人の杖と人の子の鞭を持って彼を懲らす”と、キリストが罪を犯す可能性を話しています。

8.3 イエスの本性

‘本性’と言う言葉は本来から根本的に持っている性質を意味するのです。学習1で、聖書はただ二つの本性、神性と人性を示していると学びました。神は本来死ぬことや誘惑されることが出来ないのです。キリストが神の本性をもっていなかったことは確かです。従って彼は全く人間であったのでした。本性に対するその定義のように、キリストは確かにその二つの本性を同時に持っていなかったのでした。キリストが私たちのように誘惑されたけれど(ヘブ.4:15)、その誘惑に対する彼の完全な克服によって、私たちの罪を宥赦することが出来る権利を得たのはとても重要なことでした。私たちの誘惑の根拠になる悪の欲望は、私たちの内にあるもの(マコ.7:15-23)、私たちの肉性(ヤコ.1:13-15)から来るのです。それゆえに、キリストは人間の肉性を持って、それを経験し、その誘惑を克服するためにその肉性を必ず持たなければならなかったのです。

ヘブル書2:14-18には多くの言葉でこれを皆説明しています。

“このように、子たちは血と肉と共に預かっているので、彼(キリスト)もまた同様に、それら(肉性)を備えておられる。それは、死に力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、...確かに、彼は天使たちの本性に預かっているのではなく、アブラハムの子孫の本性に預かっていたのである。そこで、彼は神のみ前に憐れみ深い忠実な大祭司となって、民の罪を贖うために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることが出来るのである”。



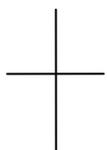
イエスの本性 267

イエスが人間の肉性を持っていた事実を特別に強調している句節があります。“このように、子たちは血と肉と共に預かっているので、イエスもまた同様にそれを備えておられた”（ヘブ.2:14）。この句節はその点を強調するために、二つの言葉が使用されました。“同様に”とは彼が預かった‘同じ本性’を意味し、“備えて”は彼が預かっていたのを力説しています。ヘブ.2:16はキリストが天使の本性を持たずに、アブラハムの子孫であったのは、アブラハムの子孫になるように信者たちを救うためでした。このために、キリストは必ず人間の肉性を持たなければならなかったのです。すべてにおいて、彼は“彼の兄弟たちと同じようにならねばならなかった”（ヘブ.2:17）のは、神がキリストの犠牲を通して私たちに贖罪を施すためでありました。従ってイエスが人間の肉性を全然持っていなかったの言うのは、キリストの良い便りの基本にたいして無知である事を示しているのです。

バプテスマを受けた信者が罪を犯した時は何時も、神に来て、キリストを通した彼の祈りで彼の罪を告白して神の赦しを得ることが出来るのです(ヨハ1.1:9)。神はキリストが私たちとちょうど同じく罪の誘惑を受け、私たちは失敗しても、彼はその誘惑を完全に克服したのを知っているのです。このために、“神はキリストのゆえに” 私たちを赦すことが出来るのです(エペ.4:32)。それゆえに、キリストが私たちのように罪の誘惑を受けるために、私たちの肉性を持たねばならなかった事を認識するのがとても重要です。ヘブ.2:14はキリストが“肉と血を”の本性を持っていたと明らかに話しているのです。本来から“神は霊です”(ヨハ.4:24)。神が形態的身体をもっているけれども、それは肉と血によるのではなく、“霊”による身体です。キリストが肉性を持っていたのは彼が神の本性を持っていなかったのを示しています。

以前に神の言葉をおさめていた人たちが罪の誘惑を克服するに皆失敗したので、“神が御子を罪の肉の様で罪のために遣わし、罪において罪を罰せられたのであります”(ロマ.8:3)。

“罪”は私たちが生まれながら持っている罪を犯す性向を話しているのです。私たちはすでにそれが作用するようにしており、それを継続して、ついには“罪の報酬の死”に至るのです。私たちがこの状況から逃れ出るには私たちの他の者の助けが必要です。私たち自身はいくら努力しても完全になることができません。私たちが贖うものが私たちの内にはいないのです。従って神がそれに介入して、私たちに罪に対して敏感に作用する私たちの罪深い肉性を持っている彼の子を遣わしたので、彼は私たちのように罪の克服に失敗する可能性があったけれども、すべての誘

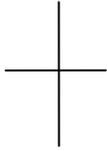


惑を完全に克服することが出来ました。キリストの肉性は“罪深い”のであったと描写されています(ロマ.8:3)。この句節の少し前には、パウロが“私の肉の内には善なるものが宿ってない”、その肉性が私を神に服従出来ないように働いていると話しています(ロマ.7:18-23)。この文脈でキリストが“罪深い”肉性を持っていた(ロマ.8:3)と言うのは驚くべきことです。これは彼がその肉性を克服するためであり、それによって私たちは私たちの肉性から逃れることが出来るのです。イエスは彼の罪深い肉性の刺激を激烈に受けました。イエスは一度彼が善であり完全であると言う意味の“良き師よ”と挨拶を受けたことがあります。彼は“私を良き者と言うのか、神一人の他に良い者はない”(マコ.10:17,18)と答えて話しました。また他の時、彼がなした目立つ一連の奇蹟によって人たちがキリストの偉大さを試そうとしました。“イエスはすべての人を知っておられたので、これに乗じないで、彼らに自分をお任せにならなかった”(ヨハ.2:23-25)のでした。人間の肉性に関する彼の偉大なる知識のゆえに、キリストは人たちが彼を誉めたたえることを欲しなかったのでした。

8.4 イエスの肉性

聖書の福音の記録はイエスが完全に人間の肉性を持っていた多くの事例を提示しています。彼が疲れて水を飲もうとして井戸の側に坐っていたのが書かれています(ヨハ.4:6)。ラザロが死んだので“イエスが泣きました”(ヨハ.11:35)。最高の事例である、彼の最後の苦痛の記録は彼の人間性を充分立証しています。“今私は心が騒いでいる”。彼は十字架で死ななければならないことから救われるように神に祈りました(ヨハ.12:27)。“私の父よ、もし出来る事でしたらどうか、この杯を私から過ぎ去らせて下さい”(マタ.26:39)。これはキリストの考え、あるいは彼の意志が神のものとは違うのを示しています。

キリストは彼の生涯その十字架の最後の試練を準備するためにいつも自分の意志を神の意志に服従させました。“私は、自分からは何事もすることが出来ない。ただ聞くままに裁くのである。そして、私のこの裁きは正しい。それは、私自身の考えではなく、私を遣わされた父の、み旨を求めているからである”(ヨハ.5:30)。このキリストの意志と神の意志の差異はイエスが神でなかったのを立証するのです。

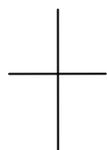


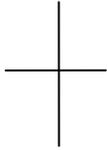
イエスの本性 269

私たちは生涯の間生活で経験する試練から学んで、神に関する知識が成長するのを期待しています。これに対して、イエスは私たちの大きい模範になっています。彼は私たちより多くの光を受けて神に関する知識を完全に持っていなかったでした。“イエスはますます知恵が加わり、背だけでも伸び(すなわち、霊的に成長した、エペ.4:13と比較せよ)、そして神と人から愛された”(ルカ.2:52)。“幼子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがある上にあつた”(ルカ.2:40)。この二つの句節はキリストの霊的発展と彼の身体的成長を描写しているのです。“三位一体節’で話しているアタナシウス信条のように、もし“その子が神である”なら、これが起こることは出来なかったでしょう。彼の生涯の末までも、キリストは彼の再臨の確かな時を、父なる神は知っていても、彼は知っていない事を承認していました(マコ.13:32)。

神の意志に服従することは私たちが生涯の間いつも学ばなければならない宿題です。キリストもまたすべての子らと同じく父に服従する過程を経なければならなかったのです。“彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまな苦しみによって従順を学び、そして、全き者とされたので(彼の完全な霊的成長の結果として)、彼は従順であるすべての人に対して、永遠の救いの源となったのである”(ヘブ.5:8、9)。ピリ.2:7、8は(間違った解釈27)、イエスの霊的成長の過程が、十字架で頂上に達しているのが同じく記録されています。彼は“神の形であられたが、神と等しくある事を固守すべきこととは思わず、かえって、おのれをむなうして僕の形を取り、人間の姿になられた。...おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた”。ここに使用された言葉はイエスが意識的に彼の霊的発展を皆記憶しないで、もっと謙遜になり、十字架で死ぬばならなかった神の意志に“従順で”あつた事を説明しています。このように彼は彼の苦痛を通して完全になったのです。

これからイエスが義にならねばならないのを意識して、努力したのが明白になります。その義になるようにイエスが神に強いられたとすれば、それは彼を一つのあやつり人形に作る結果になるでしょう。イエスは私たちを本当に愛し、またこの動機によって十字架で彼の命を捧げたのです。もし神の強要によってキリストが十字架で死んだとすれば、私たちに対する彼の献身的愛とは偽りになるのです(エペ.5:2、25; 啓.1:5; ガラ.2:20)。もしイエスが神であつたなら、彼は完全であるので十字架で死ぬことが





出来なかったでしょう。イエスがそれを選択したのは、私たちに彼の愛を認識させ、彼と関係を結ばせるためでした。

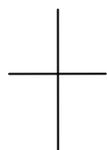
キリストの自発的十字架の死は神を喜ばしめることでした。“父は、私が自分の命を捨てるから、私を愛して下さるのである。... 誰かが、私からそれを取り去るのではない。私が、自分からそれを捨てるのである” (ヨハ.10:17, 18)。キリストの自発的服従が神の喜びであるとは(マタ.3:17; 12:18; 17:5)、もしイエスが神であったなら、それは、神が罪ある人とただ名目上の連合であって、人間の形態で生活したのに過ぎないから、私たちは到底それを理解することが出来ないでしょう。子の服従が父の喜びであったと記録されているのは、キリストが不服従の可能性があったのを充分立証しています。しかし彼は意識的に服従を選んで父を喜ばしめました。

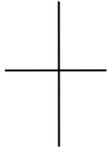
キリストは救いが必須であった

イエスは彼の人間の肉性のために、彼は私たちのように、病、疲労、などを経験しました。従ってもし彼が十字架で死ななかつたら、彼は年老いて死ぬか、とにかく死んだでしょう。この観点から、イエスは神によって死から救いが必要でした。これを認識していたイエスは“激しい叫びと涙徒を持って、ご時分を死から救う力の有る方に、祈りと願とをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞き入れられたのである” (ヘブ.5:7)。キリストが彼を死から救うように神に訴えた事実は、彼が人格的に神であったと言う如何なる可能性も排除するのであります。キリストの復活の後、“死はもはや彼を支配することが出来なくあった” (ロマ.6:9)と言うことは、復活以前には死が彼を支配していた事を暗示しているのです。

詩篇の多くがイエスに関する予言です。詩篇のある句節は新約聖書にあるキリストに対して引用されています。詩篇の他の多くの句節も彼に対して予言しているのを推測出来るのです。それらにはキリストの救いの必要性を強調しているものが多くあります。

詩. 91:11, 12はイエスがマタ.4:6で引用しました。詩.91:16は神がイエスに与える救いを予言しているのです。“私は長寿を持って彼を満ち足らせ、私の救いを彼に締めすであらう”。詩.69:21はキリストの十字





イエスの本性 271

架の処刑を話しているのです(マタ.27:34)。詩篇全体が十字架上のキリストの考えを描写しています。“神よ、わたしをお救い下さい。私に近くよって、私を贖い、神よ、あなたの救いが私を高い所に置かれますように”(詩.91:1、18、29)。

詩. 89篇はキリストに関するダビデの約束を解説しています。イエスに関して詩.89:29は予言しています。“彼は私に向かい、「あなたは私の父、私の神、私の救いの岩」と呼ぶであろう”。

キリストは“ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞き入れられた”(ヘブ.5:7)。この祈りが神に聞き入れられたのは、彼が三位一体の一人の神であったからでなく、彼の完全な霊的生活のためでした。神がイエスを復活させ、彼に不死の身体で栄光を授けたのが新約聖書の主題であります。

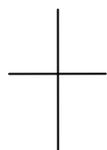
“神はイエスを蘇らせ、...
ご自分の右に上げられたのである”使.5:30,31)。

“神はその僕イエスに栄光を賜り、...
死人から蘇らせた”(使.3:13、15)。

“神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、蘇らせたのである”使.2:24,32,33)。

イエスは神に自分に栄光を賜る事を要求する時このすべてを彼自身認定していました(ヨハ.17:5、13:32; 8:54と比較)。

神は死ぬことが出来ないのであるから、もしイエスが神自身であったなら、力説しているこの句節は皆不適切であります。もしイエスが神であったなら、彼は救いを求める必要がなかったでしょう。イエスを高めた方は神であるから、彼に対する神の至上権と共に、神とイエスが別々であることが確証されます。キリストは英国の教会の信条39条のように、“神性と人性、二つの本性を持つ、その永遠な神”になることは絶対出来ないのです。本性、この言葉の意味通り、誰も一つの本性しか持つことが出来ないのです。キリストが私たちの本性であったと立証する多くの証拠を私たちは承認しています。



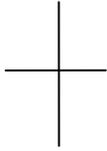
8.5 神とイエスの関係

神がイエスを復活させたことを考察することによって、私たちは神とイエスの関係を考えて見るになります。もし彼らが‘三位一体論者’の教理のように‘共に等しく、また共に永遠で’あるなら、私たちは彼らの関係が共に等しいと期待するでしょう。私たちはそうでないのを立証する多くの証拠を既に見つけました。神とキリストの関係は夫と妻の関係と同じです。“すべての男の頭はキリストであり、女の頭は男であり、キリストの頭は神である”(コリ前.11:3)。彼らが夫と妻が共に持っている、同じ目的をもっているけれども、男が妻の頭であるように、神はキリストの頭であります。妻が夫に属するように、“キリストが神の者であります”(コリ前.3:23)。

キリストの神は父である神と度々話されています。キリストが天に上げられた後も、神を“私たちの主イエス・キリストの父なる神”(ペテ前.1:3; エペ.1:17)と描写している事実は、今も彼らの関係は、キリストが世にいた時と同じことを示しているのです。キリストがこの世にいた時は神より劣っていたと三位一体論者たちは論じます。新約聖書はキリストが天に上げられた数年の後に書かれたのですが、なお神はキリストの父なる神と話されています。イエスは今も彼の父なる神の子です。

新約聖書の最後の本、啓示録は少なくともキリストが栄光を受けて天に上げられてから30年の後書かれています。なお神を彼(キリストの)の父なる神と話していません(啓.1:6)。この本には、復活され栄光を与えられたキリストが信者たちに送ったメッセージを載せています。彼は“私の神、... 私の神の聖殿、... 私の神の名、... 私の神の城”(啓.3:12)と話しています。これはイエスが今もなお彼の父なる神と考えている証拠です。従って彼(イエス)は神でないのです。

イエスがこの世にいた時も、彼と神の関係は同じだったのです。彼は天に上げられる事に関して、“私は、私の父またあなたがたの父であって、私の神又あなたがたの神であられるかたのみ元へ行く”(ヨハ.20:17)と話しています。十字架で、イエスは彼の人間性を完全に現わしました。“私の神、私の神、どうして私をお見捨てになったのですか”(マタ.27:46)。このような言葉をな話した彼を神自身であったとは到底理解出来ないのです。イエスが“激しい叫びと涙を持って”(ヘブ.5:7;



イエスの本性 273

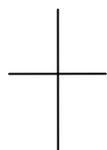
ルカ.6:12)、神に祈りを上げた事実それ自体が、彼らの関係の本質を示しています。神は確かに彼自身に祈ることはないでしょう。今もキリストは私たちのために神に祈っています(ロマ.8:26; コリ前.3:18)。

私たちはキリストがこの世にいた時と、今天にいます時も、神との関係が違っていないのを確証しました。キリストは神に対して彼の父なる神として関係を持ち、彼に祈りました。キリストが復活して天に上げられた後の今も昔と同じ関係であります。彼がこの世にいた時、キリストは神の僕賭して働きました(使.3:13、26; イザ.42:1; 53:11)。僕は彼の主人の意志に従うのであり、彼の主人と同等ではないのです(ヨハ.13:16)。キリストは彼が持っている権力と權威は、彼自身のものでなく、神から来たのであると強調しました。“私は、自分からは何事もすることが出来ない。... 神を遣わされた方の、み旨を求めているからである。... 自分からは何事もすることが出来ない” (ヨハ.5:30、19)。

間違った解釈27: イエスは神の形で現れた

“キリストは、神の形で現れたが、神と等しくある事を固守すべき事と思わず、かえって、おのれをむなしうして僕の形を取り、人間の姿にされた” (ピリ. 2:5-11)。これをイエスが神であったことを意味すると取り扱いますが、彼はこの世に出生して人となりました。もし彼が神であったなら、学習7と8の説明は皆その意味が外れているのです。この句節を持って聖書全体の教えを矛盾にさせることは出来ないのです。この句節はすべての三位一体論者が彼らの教理に組み合わせて説明しているととても意義ある句節です。イエスが天で神である自身をいかに変化してマリヤの子宮に入ることが出来たのですか。それに対する次の分析はこの句節が意味しているのを確証しています。

1. この句節の中には三位一体論の説明とは全く矛盾する点があります。a) “神がイエスを高く引き上げて、すべての名に勝る名を彼にたまわりました” (9節)ことは、イエスが彼自身高めていないのを示します。しかし神はこれをなしました。彼が復活され後、神がこれをなす前にはイエスが高められていない状態でした。b) キリスト自身が謙遜になった全過程の結果は“父なる神に栄光を帰した” (11節)た



めに、神は彼を高めるになりました。従ってこれは彼が神と同等でないの意
味しているのです。

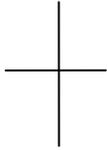
- 2.この句節の文脈は注意して考察せねばならないのです。パウロはイエスに対して
‘出しぬけに’話しを始めたのでないのです。ペリ.1:8で、彼はイエスの心に対し
て言及しました。またペリ.1:27では、パウロが私たちの心の状態の重要性に関し
て話しています。これが2章の始めの句節らに展開されました。“どうか同じ思
いとなり、...

へりくだった心を持って互いに人を自分よりすぐれた者としなさい。各々、自分
のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリスト・イエスにあって抱いて
いるのと同じ思いを、あなたがたの間でも互いに生かしなさい” (ペリ.2:2-
5)。従ってパウロは他の人たちに謙遜に奉仕する、イエスが持っている心を持た
なければならないと話しているのです。それゆえに、その句節に続く句節は、何
か本性の変化に関して話しているのではなく、イエスが確証している謙遜な心に対
して解説しているのです。

- 3.イエスは“神の形でした”。私たちは学習8.3でイエスは人間の肉性を持っていた
ので、キリストが神性を持っていたとは話すことが出来ないと示したのです。現
代訳本はギリシャ語原文を説明的に言換えて意味を分かりやすくしています。特
にペリ2:5-8など、解釈し難い有名な句節はそのような他の訳本を読んだら意
味を正しく分かることが出来るのです。

その“形”と言う言葉、ギリシャ語-

Morpheは根本的本性を話していないのがペリ2:7のキリストが“僕の形”を取っ
たと言う事によって立証されました。彼は神の形を持っていましたが、しかし彼
は僕の形を取りました。僕に根本的本性は他のどの人とも差異がないのです。こ
の文脈に一致して、私たちはこれはイエスが完全であり、彼は全く神の心であつた
けれども、彼は自ら僕の態度を取って振り舞ったと言う意味であると確かに解釈
出来るのです。その数節の後、パウロは私たちに“その(キリストの)死のさまと
等しくなれ” (ペリ.3:10)と激励しています。私たちはキリストの死で見せたキリ
ストの形、その‘**Morphe**’に預かっているのです。これは私たちが彼が持って
いた本性に預かっていると言う意味するのではないのです。なぜなら私たちは既に
その本性をもっているからです。私たちは自身の人間本性を変えようとするので
なく、私たちの考えを変えなければならないのです。それで私たちはキリストが

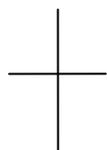


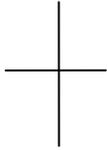
イエスの本性 275

彼の死に持っていた‘Morphe’、あるいは精神的印象を持つことが出来るのです。

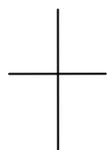
ギリシャ語、Morpheは印象、感銘、彫像を意味します。人たちが“信心深い形(Morphe)をする”(テモ后.3:5)と話しています。ガラ.4:19では、“あなたがたの内にキリストの形‘Morphe’が出来るようにせよ”話しました。なぜならイエスは完全な品性であり、完全に神の考えを持っていたためです。イエスは“神の形”でした。彼が“神と等しい者となろう”と考えそ自身が彼が神でなかったのを意味しています。ほかの訳本(N.I.V.)はイエスが神と等しくなろうと、一“つかも(機会など)”としたことがないと翻訳しています。この翻訳によるとイエスは神でなかったのを充分立証するのです。これはイエスが神と等しくなることを一瞬も抱いていなかったのを意味します。彼はいつも神に服従し、彼と等しくなろうとは考えたことがないのです。

- 4.キリストが“彼自身をむなすうした”と言うのは、イザ.3:12の“彼が死に至るまで自分の魂を注ぐ”と予言している彼の十字架の死を話しているのです。“彼が僕の形を取った”と言うのは彼の従者たちに彼が僕のような態度で奉仕し(ヨハ.13:14)、十字架の死によってそれを最高に立証したことを話しているのです(マタ.20:28)。イザ.52:14の“彼の顔だちはそこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていたからである”と話したのは、はキリストの受難に関して予言していたのでした。“自分自身を低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順された”彼の謙遜の過程は彼の出生の時起こったのではなく、彼の生涯起こったことでした。この文脈で意味している彼の謙遜な心構えは、私たちが模範とすべき心構えであります。従ってこの句節は私たちの肉性を持ってこ世を生きたイエスの生涯に関して話したのであって、彼自身謙遜にして、心を神と完全に調和させたことに私たちは従わねばならないのです。
- 5.この句節の解釈を三位一体論者たちのように、もし本性が神であるキリストが天を離れて人間性を取った一人の人であったとすれば、イエスはこの地におられるあいだは“その神”ではなかったでしょう。しかし三位一体論者たちはそれを信じるのです。このように人間が造ったが三位一体論でヤウエの神を定義するのは全く矛盾に落ちるのです。
- 6.最後に、その“神の形であった”と言われた句節に関した一つの論点を話して置きたいのです。翻訳されたその句節のギリシャ語の“あった(Being)”の語法が使





7:55のステパノの演説で使用されています。その時“彼が聖霊に満たされていた”のはそれ以前は満たされていないのを意味するから、彼はいつも満たされていなかったのです。ほかの例が次の句節でも見つかります(ルカ.16:23; 使.2:30; ガラ.2:14)。従ってキリストが“神の形であった”と言うことは彼がただ精神的に神の形であったのを意味しているのです。彼が始めからその形でいたことを暗示しているのではないのです。



学習8: 問題と解答

1. 聖書は神が三位一体であると教えていますか？

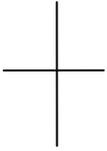
2. 神とイエスの差異点を三つ書きなさい。

3. 次のどちらがイエスと私たちとの差異点を現わしていますか？

- a) 彼は決して罪を犯さなかった
- b) 彼は神の独生子であった
- c) 彼は決して罪を犯すことが出来なかった
- d) 彼は義となるように神から強制されていた

4. 次のどちらがイエスが神と同じことですか？

- a) 彼は生涯神の性格を持っていた
- b) 彼は神の如く完全な本性を持っていた
- c) 彼は神の如くすべてを知っていた
- d) 彼は神と等しかった



278

イエスの本性

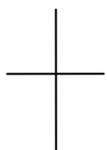
5. 次のどちらがイエスが私たちと同じですか？

- a) 彼は人間のすべての誘惑を受けた
- b) 彼は小さい子供のとき罪を犯した
- c) 彼は救いを受ける必要があった
- d) 彼は肉性を持っていた

6. 次のどの言葉が真実ですか？

- a) イエスは完全な本性であった
- b) イエスは罪深い本性であったが完全であった
- c) イエスは神と人の両性を持っていた
- d) イエスは罪を犯す前のアダムの本性を持っていた

7. イエスは罪を犯す可能性がありましたか？



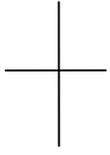
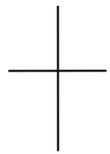
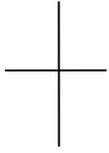


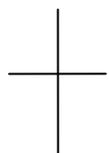
写真 9





学習 9

イエスの使役



9.1 イエスの勝利

前の学習ではイエスが私たちの肉性を持ち私たちと同じくすべての試練に会われたのを確証しています。彼と私たちの差異点は、私たちは失敗しますが、彼が完全に罪を克服したのです。彼は罪の肉性を持っていたけれども、いつも完全な品性を現わしました。私たちはこの奇異なことの認識が深くなるほどもっと深く感動されるのです。新約聖書にはキリストの完全な品性をくり返し力説しています。

彼は“すべての事について、私たちと同じように試練に会われたが、罪は犯されなかった”(ヘブ.4:15)。

彼は“罪を知らなかった”、“彼にはなんらの罪がない”(コリ后.5:21; ヨハ1.3:5)。

“キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった”(ペテ前.2:22)。

“聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別された”(ヘブ.7:26)。

福音書は彼の同僚が彼の言葉と行動から出て来る完全な品性を立証しています。ピラトの妻は、彼が刑罰に値しない“正しい人”であると認定しました(マタ.27:19)。キリストが十字架につかれている間彼の謙遜な態度を見つめたローマの兵士は“本当に、この人は正しい人であった”(ルカ.23:47)と批評しました。イエスの生涯の初期、彼は“あなたがたのうち、誰が私に罪があると責めうるのか”(ヨハ.8:46)とユダヤ人に挑戦しましたが、誰もこれに答える者がいませんでした。

イエスは完全な品性によって、彼の肉において神を現わしました(テモ前.3:16)。彼は神の如く話し行動した人でした。従って彼は完全な神の反映、“神の形でありました”(コロ.1:15)。これゆえに、人たちは神を実際見る必要がなかったのです。それでイエスは“私を見た者は、父を見たのである”(ヨハ.14:9)と説明しました。

罪深いこの世で生きる私たち、罪の疫病に罹っている人間はキリストの完全な最高の霊的生活を理解することが出来ないのです。私たちの肉性をもっていた一人の人イエスが彼の品性に神の義を現わしたのでした。キリストが神自身であったと言ういわゆる神学の思想を受け入れるべきでなく、これを信じるのが本当の仰すことが、キリスト教の信仰です。人たちがその偽りの教理である三位一体論とか‘キ

リストの神性論’を良く受け入れるのを見ると、それらが一般化されているのが理解出来ます。

キリストは私たちの本性を持っていたので、彼は死なねばならぬではありません。彼はマリヤから生まれたアダムの子孫であり、アダムの子孫はすべて死なねばならぬです(コリ前.15:22)。アダムの子孫はすべて、彼らの個人的義にかかわらず、彼の罪のために死なねばならぬです。「アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者も、死の支配を免れなかった。...裁きの場合、一人(アダム)の罪過から、罪に(死に)定めることになった。...一人の人の不従順によって、多くの人が罪人とされるのである」(ロマ.5:14-19、6:23と比較)、従って死なねばならぬだったのでした。アダムの子孫すべてが彼の罪のために死なねばならぬ部類に分類されていたので、キリストもアダムの子孫であったので、罪人になり、死なねばならぬだったのでした。神はこの原則を絶対変えなかったから、この効力はキリストにも働き、彼は死なねばならぬだったのでした。“神は私たちの罪のために、罪を知らない方を罪とされた”(コリ后.5:21)。

イエスの他、すべてのアダムの子孫は、個人的に罪を犯したので、その刑罰を受けるに値します。イエスは、アダムの子孫に來たその呪いに預かっている、私たちの本性を持っていたために死なねばならぬだったのでした。しかし彼は個人的には死に値する罪がないために“神はイエスを死者から蘇らせて、死の苦しみから解き放ったのである。彼は死に支配されておるはずはなかったからでした”(使.2:24)。キリストは“聖なる靈によれば、死人からの復活により、御力をもって神の子と定められた”(ロマ.1:4)のでした。キリストが栄光的復活に至ったのは彼の完全な品性、彼の“聖なる靈”によるのでした。

キリストはただ人間性を持っていたために死んだのではないのです。彼は私たちの恵を施すために自ら進んで彼の完全な命を与えたのでした。彼の死によって私たちが罪と死から救いを得ることを知ったので(エペ.5:2、25; 啓. 1:5; ガラ.2:20)、彼は“私たちの罪のために”死んで私たちに対する彼の愛を示しました(コリ前.15:3)。イエスは品性において完全であったために、死を克服して死者の中から復活し、永遠の命を得た始めの人になりました。キリストの死に預かるバプテスマを受け、キリストと一致させ、彼のような靈的生活をする者は皆その復活と永遠の命の補償の望みと持つことが出来るのです。

キリストの復活には栄光的意義があります。私たちは復活して裁きを受け(使.17:31)、そして彼のようになり、彼の永遠な命の補償を共にする“確信”を示しています。“主イエスを蘇らせたかたが、私たちをもイエスと共に蘇らせ、そして、あなたがたと共にみ前に立たせて下さることを、知っているからである”(コリ后.4:14; コリ前.6:14; ロマ.6:3-5)。罪人である私たちは永遠の死に値するのです(ロマ.6:23)。しかし、キリストの完全な生活、死ぬまで従順と彼の復活によって、神は彼の原則に完全に一致して、彼の賜物として私たちに永遠の命を与えることが出来ました。

私たちの罪を置き換えた効果は、救いの約束を信ずる私たちの信仰によって、私たちが“神に義と認められた”(ロマ.4:6)のです。私たちは罪が死をもたらすことを良く知っているから、神がそれから救うであろうともし私たちが信ずるなら、また私たちは何の義もないですけれども、彼は私たちが義人として受け入れることを信ずるのです。キリストは完全な人でした。それによって、神はキリストにある私たちを、私自身は完全な者でないですが、完全な者と認めるのです。“神は私たちの罪のために、罪を知らないキリストを罪とされ、私たちは彼にあって、すなわち、キリストに預かるバプテスマとキリストのような霊的生活によって、神の義となしました”(コリ后.5:21)。このように、“キリスト、イエスにある者たちは”、キリストが“私たちの知恵となり、義と聖と贖いとなるのです”(コリ前.1:30,31)。それゆえに、次の句節は偉大なる業を果したキリストを誉めたたえているのです。“神の義が、その福音の中に啓示され、...「信仰による義人は生きる」”(ロマ.1:17)。従ってこれは認識せねばならない福音の重要な部分です。

これは皆キリストの復活を通してなすことが出来ました。彼は彼の成就によって永遠の命を得るようにした人間の中の“初穂”でした(コリ前.15:20)。彼は神の本性が与えられる新しい霊的家族の“初穂”でした(コロ.1:18、エペ.3:15と比較)。従ってキリストの復活はキリストにある信者たちを神が義と認めることが出来るようにしました。キリストは“私たちの罪過のために死に渡され、私たちが義とされるために、蘇らせたのです”(ロマ.4:25)。この言葉は私たちが“義とされる”にしたと言う意味です。私たちが完全な者のように神が認めることが出来るとしたのを確信するには、このことばを深く瞑想して見なければなりません。キリストが裁きの座で私たちに“その栄光の前に傷なき者として、喜びのうちに立たせ”、“私たちが聖なる、傷のない、責められるところのない者として、み前に立たせて下さる”(ユダ.24; コロ.1:22、

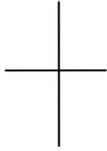
エペ.5:27と比較)のです。罪深い肉性を持って、霊的生活に継続的に失敗する私たちは実にこれを確信しなければならないのです。キリストの復活を正しく認識するのは私たちの信仰の動機になるのです。“あなたがあたは彼を死人の中から蘇らせて、栄光をお与えになった神を信じる者となったのであり、従って、あなたがたの信仰と望みとは、神にかかっているのである”(ペテ前.1:21)。

私たちが“キリストにある”ことが出来るのはただ正しいバプテスマ受けて神の義に覆われるのであります。バプテスマによって私たちはキリストの死と復活に連合されてロマ.6:3-5)、私たちは罪から救われ、“義人”と認められるのです(ロマ.4:25)。

この学習で考察した驚異的なことを全く把握するまではバプテスマを受けることが出来ないのです。バプテスマにおいて、私たちは十字架で流したキリストの血に預かるのです。信者たちは“彼らの衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである”(啓.7:14)。比喩的に、彼らは義と認めるキリストの義を現わす白い衣を着ているのです(啓.19:8)。しかしこの白い衣は罪と結果汚くすることが出来るのです(ユダ.23)。バプテスマを受けた後私たちがそれを汚くしたら、キリストを通して赦しを神に祈ることによって、またキリストの血を使用して清くすることが出来るのです。

バプテスマを受けた後も私たちは既に入っているその祝福の地位に留まるように努力する必要があります。私たちは日ごとに自分自身を省察して、祈りと赦罪を求めする必要があります。このようにすることによって、私たちはいつも謙遜になって、キリストの義の覆いを確信し、神の国に入ることが出来るのです。私たちは私たちが死ぬ時、あるいはキリストの帰りの時に、キリストの内にある者と見つけられるように求めねばならないのです。“律法による自分の義ではなく、キリストを信ずる信仰の義、すなわち、信仰に基づく神からの義を受けて、彼のうちに自分を見出すようになるためである”(ペリ.3:9)。

義とされる信仰に対する継続的強調は、私たちの救いは私たちの行ないでは決して出来なく、ただ恵によることを示しています。“あなたがたの救われたのは、実に、恵により、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行ないによるのではない”(エペ.2:8、9)。その義は‘賜物’で(ロマ.5:17)あるために、救いも神の恵によるのです。従ってクリスチャンの奉仕の動機は、私たちが救われる方法を与えている、キリストを通して神が義と認めることを私たちに成して下さったことに対する感謝の念から起こるのです。私たちはただ



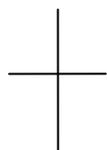
これを考えるだけでは、救いを受けることが出来ません。私たちの行ないで決して得ることが出来ない賜物です。深い感謝の念で応ずるのであって、それが私たちの行動に反映するのです。真の信仰はやむを得なく行動が従うのです(ヤコ.2:17)。

9.2 イエスの宝血

私たちの義と救いはイエスの宝血によるのであると新約聖書にくり返し話されています(実例、ヨハ1.1:7; 啓.5:9; 12:11; ロマ.5:9)。キリストの血の意義を認識するには、“すべて肉の命はその血である”(レビ.17:14)、聖書の原則を認識せねばならないのです。血がなくては身体が生きていくことが出来ないのです。従って血は声明の象徴です。これは“人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたのがたの内に命はない”(ヨハ.6:53)と話したキリストの言葉の適切さを良く説明しています。

罪は死をもたらします(ロマ.6:23)、すなわち、血の注ぎが命を保つのです。このためにイスラエルは彼らが罪を犯す度毎に血を注いで、罪が死に至るのを思い出すようにしました。“こうして、殆どすべてのものが(モーセの)律法に従い、血によって清められたのである。血を流すことなしには、罪の赦しはあり得ない”(ヘブ.9:22)。これゆえに、アダムとエバが無花果の葉を綴り合せて彼ら自身を覆うたのは受け入れないのです。その代わりに、神は彼らの罪を覆うために羊を殺してその皮を与えました(創.3:7, 21)。これと同じように、カインの供えの地の産物は受け入れず、血を流すことなしには罪の赦しがあり得なく、神に近づくことが出来ないこの原則を認識して、動物の犠牲を供えたアベルは受け入れたのでした(創.4:3-5)。

この事件はキリストの血の最上の重要性を予示しているのです。これは特別に神の民が死から救いを得るために羊の血を彼らの家の柱とかもい塗った過ぎ越しの事件を予表しているのです。この血は私たちの罪を覆うイエスの血を予表しているのです。キリストの時以前ユダヤ人たちは、モーセによる神の律法に従って、彼らの罪のために動物のいけにえを供えました。しかし、この動物の血を流すのはその目的を教えることだけでした。罪は死で刑罰されます(ロマ.6:23)。人間は彼自身の死の代わりにあるいは彼自身の代表として動物を殺すのは彼自身の死を代わりにすることが出来ないのです。かれが供える動物は善と悪を判断することが出来ないの



です。“雄牛や山羊などの血は、罪を除き去ることが出来ないからである”(ヘブ.10:4)。

従ってなぜユダヤ人たちは彼らが罪を犯した時動物の犠牲を供えたか問題が提起されます。パウロはこれに対していろいろな答をガラ.3:24に要約しています。“この律法は私達をキリストに連れて行く養育掛りであった”。彼らが罪のために供える動物は傷のない、全きものでなければならなかったのです(出.12:5; レビ.1:3,10)。これらは“しみもない小羊”、キリストを予示していました(ペテ前.1:19)。従って動物の血はキリストの血を予示するのです。それらは神が準備するキリストの完全な供え物をを予表するので、罪のための供えとして受け入れるのです。このために、神はキリストの時以前生きた彼の民の罪を赦すことが出来たのです。彼の死は“始めの契約のもとで犯した罪過を贖うためでした”(ヘブ.9:15)、すなわち、モーセの律法によるのです(ヘブ.8:5-9)。その律法のもとで供えた犠牲は、“ご自身をいけにえとして捧げて罪を取り除く”キリストを予示するのです(ヘブ.9:26; 13:11,12; ロマ.8:3; コリ后.5:21)。

学習7.3で旧約の全部、特別にモーセの律法はキリストを予示しているのを説明しました。その律法のもとで神に近づく方法は、大祭司長を経るのです。彼は新約のもとでキリストが仲保者であるように、旧約のもとで神と人の間の仲保者でした(ヘブ.9:15)。“律法は、弱さを身に負う人間を立てて大祭司とするが、律法の後に来た誓いの御言葉は、永遠に全うされた御子を立てて、大祭司としたのである”(ヘブ.7:28)。大祭司たち、彼らが罪人であったために、人たちに罪の赦しを得させる位置におられなかったのです。彼らが罪のために捧げた動物は罪人を真に代表することが出来なかったのです。すべてにおいて罪深い人を代表する、一人の完全な人が要求されたのは、神が罪を赦すことが出来る一つのいけにえをつくり、人たちがそのいけにえに連合するによって恩典を得ることが出来るようにするためでした。これと同じ方法で、罪深い人たちの仲保者になるために、彼らと同じくあらゆる試練を受けて苦しまれた、一人の完全な大祭司長が要求されたのです(ヘブ.2:14-18)。

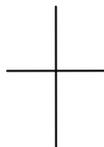
イエスはこの要求に完全に適う者でした。“このように、聖にして、悪も汚れもなく、...大祭司こそ、私たちにとって相応しいかたである”(ヘブ.7:26)。彼は彼自身罪がなく、また永遠にいます方であるので、罪のために繰り返していけにえを捧げる必要がなかったでした(ヘブ.7:23,27)。この意味で、聖書は私たちの大祭司キリストに対して良く解説しています。“そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神にくる人々を、いつも救うことが出来るので

ある” (ヘブ.7:25)。彼は人間の本性を持っていた、私たちの理想的大祭司、キリストは、“自分自身弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を、思いやる事が出来る” (ヘブ.5:2)。これはキリストに関して話していることを思い出させます。“彼もまた同様に”、私たちの肉性に預かっています(ヘブ.2:14)。

ユダヤ人の大祭司はただ神の民、イスラエル人のために仲保であったように、キリストは福音を認識してバプテスマを受け、キリストにある者たち、ただ霊的イスラエルの仲保者です。彼は、バプテスマを受けることによって新たに生まれ、福音の望みを持っている(ヘブ.3:6)、者たちで構成されている(ペテ前.2:2-5) “神の家を治める大祭司である” (ヘブ.10:21)のです。従ってキリストの大祭司長職分の驚異的恩典を認識する者はバプテスマを受けて彼の内に入ることになります。これがない者には、彼が仲保になることが出来ないのです。

バプテスマを受けてキリストの内に入ると、私たちはキリストの祭司の職権を充分に使用することが出来るのです。実に私たちはこれで生活すべき責任があるので。 “だから、私たちはイエスによって、賛美のいけにえを、すなわち、彼の御名をたたえる口の実を絶えず神に捧げるようではないか” (ヘブ. 13:15)。私たちの祭司としてキリストを与えた神の計画は私たちが彼に栄光を上げるようにするためです。従って私たちは継続的にキリストを通して神に近づくことによって、彼を誉めたたえなければならないのです。ヘブ.10:21-25には、キリストが私たちの大祭司であるために、私たちがせねばならない責任のリストが書いています。 “神の家を治める大祭司かあるから” :

1. “心はすすがれて良心のとがめを去り、身体は清い水で洗われ、真心を持って信仰の確信に満たされつつ、御前に近づこうではないか” 。キリストの祭司職権を認識することによって私たちは彼と連合するバプテスマを受け、私たちの心の良心が悪が発展しないようにするのです。私たちがキリストの贖罪を信するなら、彼の犠牲によって私たちは神と一つになる(AT-ONE-MENT)のです。
2. “私たちの告白する望みを、動くことなく、しっかりと持ちつづけようではないか” 。私たちはキリストの祭司職権を認識しているその真理から逸脱してはならないのです。
3. “愛と善行徒をはげむように互いに努め、... 集会を止めることはしないで互いに、かの日が近づいているのを見



て、ますます、そうしようではないか”。私たちはキリストの祭司権を認識してその恩典を受けている他の者たちと愛で結ばれているのです。これは特別にキリストの犠牲を記念する霊的交渉の集會に集まることによってその結びを堅くするのです(学習11.3,5)。

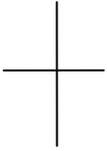
私たちがバプテスマを受けてキリストの内にある者であるなら、これを認識するのは、私たちが本当に救いに至らせる謙遜な確信に満ちらせるのです。“だから、私たちは、哀れみを受け、また、恵に預かって時期を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか” (ヘブ.4:16)。

9.3 イエス自身と人類の祭物

ユダヤ人の大祭司はまず彼自身の罪のために供え物をささげ、その後民のためにささげたのでした(ヘブ.5:1-3)。キリストのいけにえにもこれと同じく二重的構成になっています。イエス自身は個人的に何の罪がないけれども、彼はやはり人間性を持っていたために、死からの救いが必要でした。この救いはキリスト自身の供えによって神が与えました。このように、イエスは彼自身の救いと、また私たちの救いのために死にました。聖書の多くのページがこれについて書かれています。

この学習はキリストの供えが彼自身と共に私たちのためであったことを立証する句節の目録でなっています。その点を立証するには多くの説明が必要です。主の謙遜が十分に理解するなら、この主題が重大なことであることを認識するのです。本書の結末の段階にこの問題を深く考えることによってこれに含まれているすべてを考察することにしましょう。

その大祭司は“その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪に捧げ物をしなければならないのである。...同様に、キリストもまた”、この点に關した、モーセの大祭司の予表を果しました(ヘブ5:3,5)。“しなければならない”と翻訳された“Ought”のギリシャ語は負債を必ず返済するのを意味する言葉です。それで主は彼自身の贖いと共に私たちの贖いを買うたと話しています。彼がそのようなしなかったのは“彼自身の人間性のため”でした(ヘブ.5:3)。これは彼自身になにか罪があって、それを贖うために必要であったのを意味しているので



イエスの使役 289

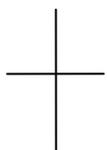
はないのです。この点はいくら強調しても度が過ぎるとは言えないのです。私たちは彼の血で贖いを受け、彼もまたそれで贖いを受けたのです。

キリストは“他の大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえを捧げる必要はない。なぜなら、自分をささげて、一度だけ、それをされたからである”(ヘブ.7:27)。パウロは疑いなく、その祭司たちの二重的供えとキリストの二重的供えが同じと力説しているのです。彼はまたヘブ.9:7でそれを強調しているのです(12、13節と比較せよ)。ただキリストは一度しているのに対して、その大祭司たちは毎年しているのが対照的です。この対照で、キリストがただ民のために捧げたとすれば、これは最も大きな問題になるでしょう。キリストのいけにえには、彼が取り除くべき私たちの罪、その民の罪とは別に、彼自身の“罪”があったのを注目しなさい。なぜならその予表には、彼が私たちのためには別に捧げるようになっているからです。イエスは罪がない完全な品性の人であったことを考えるなら、ここに話している“罪”は彼の罪深い肉性を描写している他の表現であることが理解出来るのです。比喩的表現で、その原因(罪深い肉性)を効果(罪)として話したのです。しかし、主は完全な人であって、罪を犯したことがないと強調する必要はやはりあるのです。

神は、“永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主エスを、死人の中から引き上げられた”(ヘブ.13:20)、すなわち、彼自身の血によって引き上げられたのです。このように、主は牧者であり、屠り場に彼自身導かれて、屠られた羊でした。しかし彼の血によって神が彼を蘇らせたのでした。これと同じ方法で、彼は捧げる供え物と祭司であったのでした。

ゼカ.9:9はこれに完全に適うことばです。“見よ、あなたの王(イエス)はあなたの所に来る。彼は義なる者であって、彼自信を救う”。この翻訳は彼自身を救うた主が私たちに救いをもたらすと言う意味です。十字架のいけにえによって、イエスは彼自身の肉性を贖い、私たちの贖いも成就しました。この文脈を離れて、彼の死が私たちだけを救う目的であったと考えるのは正しくないのです。

その律法のもとで捧げるいけにえの動物が流した血に関して話したのはみなキリストのいけにえに関する認識しなければならないのです。キリストの象徴である、祭壇が年に一度血で贖われたのは(出.30:10)、キリストが彼自身の血によって清められるのを示しています。実にキリストを現わしている幕屋のすべては血によって清めねばならなかったのでした(ヘブ.9:23)。幕屋の器具は罪を犯していな



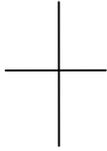
いけれども、罪と結合しているために、清くする必要がありました。主もそのようでした。大祭司たちは血を塗るによって彼の任務を始めたように、キリストもまた私たちのために天の使役を始めるに彼のいけにえが必要でした(レビ:8:23)。

イエスが彼自身のための贖いは彼に罪があったのを意味するのではないのです。贖罪の供えはいつもその祭司が罪を犯したのを意味していないのです(実例、レビ12章にあるように、女が出産の後にすること等)。

9.4 人間の代表者イエス

私たちは動物のいけにえが完全に罪深い人たちを代表することが出来ないのを分かりました。イエスは“あらゆる点において兄弟たちと同じだった”(ヘブ:2:27)のために、私たちの代表でした。“彼はすべての人のために死を味わわれました”(ヘブ:2:9)。私たちが罪を犯す時、神は“キリストにあって”(エペ:4:32)、私たちを赦してくれます。これは神が私たちのように罪に誘惑されたが、罪を犯していないキリストと、私たちを比較するからです。従って神はキリストにある私たちは、彼の義に覆われているから、私たちの罪を赦すことが出来るのです。キリストが私たちの代表であるのは、彼が、神が彼の義を維持しながら、恵みを私たちに施す手段となっているのを意味します。

もしイエスが人間でなく、神であったなら、彼は私たちの代表になることが出来なかったでしょう。これは聖書の真理を誤っているもう一つの例です。これのために、神学者たちがキリストの死に対して多くの理解出来ない方法で説明しているのです。キリスト教界の一般的考えは人間の罪は神に支払うべき負債であり、この負債をキリストが彼の死によって、人間の代りに支払ったと言うのです。キリストは十字架で流したその血によって信者すべての罪の代価、負債を神に支払ったと言うのです。多くのいわゆる福音伝播会館でその福音伝播者がこのように話しているのです。“私たちはみな壁に並んで、悪魔に撃たれる刹那に、イエスが突然そこに現れ、私たちの代りにその悪魔に撃たれることによって、今私たちは自由になったのです”。



イエスの使役 291

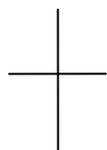
この骨折って作り出した話しは全然聖書の根拠がないのです。キリストが私たちの代りに死んだとすれば、私たちは死んではならない矛盾が起こるのです。私たちはまだ肉性を持っているので、まだ死ななければなりません。罪と死からの救いは最後の裁きの時に現れるのです。私たちは此れをキリストが死んだ時に受けていないのです。キリストの死は、悪魔がキリストを滅ぼしたのでなく、彼が悪魔を滅ぼしたのでした(ヘブ.2:14)。

聖書は救いがただキリストの死によるのではなく、彼の死と復活によるのだと教えています。キリストは私たちのために一度死にました。私たちの代りに死なれたと言う理論は彼が私たち信者各個人のために一々死なれたことを意味します。

キリストが彼の血で私たちの負債を返済したとすれば、私たちの救いには当然の権利が生ずるのです。もしイエスの犠牲がその負債を返済したのでであると認めるなら、その救いが神の慈悲と罪の赦しから来る一つの賜物である事実は、その意義を失うのです。それはまた怒っていた神が一度イエスの血を見てなだめられたと言う意味になります。しかし神が見ているのは、お守りのマスコットとしてキリストの血に連結されている私たち自身でなく、私たちが悔い改めて彼に似た者になろうと努力している、私たち代表者である彼の子であります。多くの‘クリスチャン’の賛美歌と福音の唄がこの分野で多くの偽りの教理を含めているのです。彼らは人たちに聖書を理性的に教えるのではなく、大部分の偽りの教理を音楽によって人たちの心に教え込んでいるのです。このような洗脳をいつも警戒しなければならないのです。

悲劇的にも、“キリストが私たちのために死んで下さった”(ロマ.5:8)と言われたのを、‘キリストが私たちの代りに死なれた’とその意味を間違っているのです。ローマ書5章とコリント前書15章の間には多くの連結があるので(実例、12節=コリ前.5:21;

17節=コリ前.15:22)。“キリストが私たちのために死んで下さった”(ロマ.5:8)は“キリストが聖書に書かれてある通り、私たちのために死んだ”(コリ前.15:3)と釣り合っているのです。彼の死は私たちの罪が赦される方法を作るためでした。“キリストが私たちのために死んで下さった”とはこの意味です。その“ために(For)”と言う言葉は必ず‘代わりに’と言う意味になるのではないです。キリストが‘私たちの代りに死んで下さった’のではなく、“私たちのために死んで下さった”のです。これゆえに、キリストが‘私たちの代わりでなく’、“私たちのためにとりなしを”



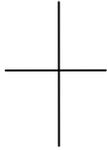
することが出来るのです(ヘブ.7:25)。その言葉“ために(For)”は‘代わりに’を意味しないのがヘブ.10:1とガラ1:4に示しています。

9.5 イエスとモーセの律法

イエスは私たちの罪が赦しを得ることが出来る完全ないけにえと、また理想的大祭司であるので、彼の死後動物のいけにえと祭司たちの旧制度は廃止されてしまいました(ヘブ.10:5-14)。“祭司制に変更があれば(レビ人からキリストに)、律法にも必ず変更があるはずである”(ヘブ.7:12)。キリストは“肉につける戒めの律法によらないで(レビの子孫であるから祭司になる)、朽ちることのない命の力によって立てられたのである”(ヘブ.7:16)とは、彼の祭司職が完全ないけにえのために彼に与えられたのを意味します。“このようにして、一方では、前の戒め(モーセの律法)が弱くかつ無益であったために無効になると共に、(律法は、何事も全うし得なかったからである)、他方ではさらにすぐれた望みが(キリストによって)現れた”(ヘブ.7:18、19)のであります。

これからモーセの律法はキリストのいけにえによって廃止されたのが明らかになりました。人間の祭司たちやまた動物のいけにえを信頼するのは私たちがキリストの勝利を完全に受け入れないのを意味するのです。このような信仰はキリストのいけにえが完全に成功であると受け入れないのを意味し、私たちが義を得るには、キリストばかりでなく、私たちの業も必要であると考えているのです。“律法によって、神のみ前に義とされる者は一人もない、...義人はその信仰によって生きる”(ガラ.3:11; ハバ.2:4)。私たちは堅い決意をもって神の律法を服従してもそれは私たちに義をもたらすことが出来ないのです。読者はみな既にこの掟を犯したでしょう。

もし私たちがモーセの律法を服従しようとするなら、私たちはそのすべてを守らねばならないのです。ただその一つでも守らないと呪われた者になるのです。“一体、律法の行ないによる者は、皆呪いの下にある。「律法の書に書いてあるいっさいのことを守らず、これを行わない者は、皆呪われる」とかいてあるからである”(ガラ.3:10)。私たちは弱い人間性をもっているので、モーセの律法を完全に守ることが出来ないのです。しかしキリストの完全な服従にによって、私たちはその律法を守



イエスの使役 293

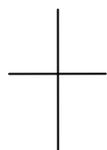
る必要がなくなりました。私たちの救いは、私たち個人の業によるのではなく、キリストによる神の賜物です。“律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪深い肉の様で罪のために遣わし、肉において罪を罰せられたのである” (ロマ.8:3)。このように、“キリストは、私たちのために呪いとなって、私たちを律法の呪いから贖い出して下さった” (ガラ.3:13)。

これゆえに、私たちは既にモーセの律法を守る事を要求されていないのです。私たちは学習3と4でキリストにある新しい契約がモーセの律法に代った事を学んでいます(へブ.8:13)。彼の死によって、キリストは、“私達を責めて不利に落とし入れる証書を、その規定もろともぬり消し、これを除いて、十字架につけてしまわれた。...だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭りや新月や安息日などについて、誰にも批評されてはならない。これらは、来るべきものの影であって、その本体はキリストである” (コロ.2:14-17)。これは全く明白に、十字架によるキリストの死によって、その律法が取り除かれて、私たちはその律法、例えば、“祭りや安息日など”を守るように、強要されていないのを話しています。その律法の目的はキリストを予示するのでした。彼の死後、その予表らが成就されたので、それらを守る必要がなくなりました。

1世紀の初期教会はモーセの律法を守らなければならないと伝統的ユダヤ人たちから継続的に圧力を受けていました。新約聖書全体を通してその提示を撃退することをくり返し警告しています。これにもかかわらず、幾つかの教派が今日もその律法の一部を守らなければならないと主張しているのはとても意外なことです。私たちは既に律法によって救いを得ようとする者はその全部を守らなければならないと示しています。そうでなければ不服従になるので呪われるのです(ガラ.3:10)。

人の肉性には自分の行ないで義になろうとする要素があります。従って私たちはその救いのために何かしようと考えているのです。これゆえに、多くの‘クリスチャン’が十分の一税、十字架の運び、祈祷文の暗記、特別な祈祷の姿勢を義務的にしているのです。救いはただキリストを信ずるによると聖書に根拠したキリスト教の教理は唯一であります。

救いを得るためにモーセの律法のどの部分も守ってはならないと言われた警告は、新約聖書の至る所に点在しています。ある者たちがクリスチャンはモーセの律法に従って割礼を受けうけなければならないと教えていました。ヤコブは真の信者



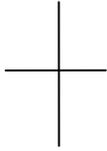
のために、“私たちはそのような事を指示していない”(使.15:24)とこの考えをきっぱりと咎めました。ペテロはその律法に服従する必要があると教えているものたちに、“しかるに、諸君はなぜ、今私たちの先祖も私たち自身も、負い切れなかつたくびきをあの弟子たちの首にかけてるのか、確かに、主イエス、キリストの恵によって、私たちは救われるのだと信じるが、彼らとても同様である”(使.15:10, 11)と描写しています。靈感によって、パウロは彼と同様にその点を強調しています。“人の義とされるのは律法の行ないによるのではなく、ただイエス、キリストを信じる信仰によることを認めて、...それは、律法の行ないによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行ないによって、誰一人義とされることが出来ないからである。...モーセの律法では義とされる事が出来なかつたすべての事についても、信じる者はもれなく、イエスによって義とされるのである”(ガラ.2:16; 3:11; 使.13:39)。

モーセの律法はキリストにおいて廃止されたのであるから、クリスチャンはこの律法を守ってはならないと明白に教えているにもかかわらず、彼らの多くの教理がモーセの律法の要素に根拠しているは、一般的キリスト教界が確かに聖書から遠く外れている証拠です。今もモーセの律法を根拠として‘クリスチャン’の‘実践事項’としていることをもっと深く考察して見ましょう。

祭司長

カトリック教と英国教会は人間の祭司制度を騒々しく使用しています。ローマ・カトリック教は彼の教皇をユダヤ人の大祭司のように思っています。“神と人との間の仲保者もただ一人であつて、それは人なるイエス・キリストです”(テモ前.2:5)。従つて教皇、あるいは人間の祭司が旧約のもとにあつた祭司のように、私たちの仲保者になることは不可能です。キリストだけが私たちの大祭司であり、私たちの祈りを神に上げることが出来るのです。

1世紀の霊の賜物を持っていた長老たちによって認定された、ペテロの権威が自動的にその教皇らに代々授けられて来たと言うのは聖書の証拠によるのではないの



イエスの使役 295

です。例え、この可能性を認定するにしても、死んでしまったその1世紀の長老たちが彼らに霊的マントを着せたと立証することが出来ないのです。

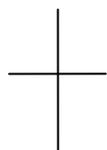
その霊の賜物はもう撤収して、すべての信者が等しく聖書にある霊の言葉によって神に近づくことが出来るのです(学習2.2と2.4を見よ)。従って彼らは皆兄弟であり、誰一人他の者より霊的に高い位置にいる者はないのです。実に、すべて真の信者はキリストと連合したバプテスマを受けることによって、暗闇の世に神の光を照らすために、新しい祭司職権を持つ者になっているのです(ペテ前.2:9)。彼らはキリストの帰りにその国の祭司になるでしょう(啓.5:10)。

カトリック教信者が彼らの祭司を‘神父’と呼んでいるのは、“地上の誰をも、父と呼んではならない”と言われたキリストの教えに矛盾するのです(マタ.23:9)。実に、イエスは現代の祭司たちが彼らの同僚に要求している霊的尊敬を与えるのに対して警告しました。“あなたがたはラビーと呼ばれてはならない。あなたがたの先生は、ただ一人であって、あなたがたは皆兄弟なのだ”(マタ.23:8)。

宝石らで飾っている法服を着ている祭司、監督、牧師たちはモーセの律法による祭司や大祭司が着ていた特別な着物に根拠しているのです。この着物はキリストの完全な品性と予示したのであって、その律法と、その目的は皆成就したのです。キリストの栄光を誉めたたえるつもりで着ている着物が、人たちの栄光をはかどるに使用されているのを見ると実に心を痛ましめるのです。彼らの中には、キリストの復活あるいは神の存在さえ受け入れない者があるのです。

マリヤが一人の祭司と認定しているカトリック教の教理は総体的に間違っているのです。私たちはマリヤの名でなく、**キリストの名**で赦しを神に祈るのです(ヨハ.14:13、14; 15:16; 16:23-26)。マリヤでなく、キリストが私たちの唯一の大祭司であるのです。マリヤが他の人たちのためになにかするようにイエスに要求した時、イエスはマリヤを叱責しました(ヨハ.2:2-4)。キリストをこの世にもたらしたがたは、マリヤでなく、神です(ヨハ.6:44)。

十分の一の税

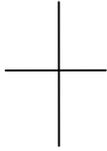


この十分の一の税もモーセの律法の一つです(民.18:21)。それによってユダヤ人たちは彼らの財産の十分の一を祭司の職にあるレビ人たちに献納しました。現在は人間の祭司がないから、教会の長老たちに十分の一を献納すべき義務がないのです。祭司制度の偽りの教理がもう一つの偽りの教理を作ったのです。神はこの地のすべてが彼に属しているから、私たちの献金が必要でないのです(詩.50:8-13)。私たち彼からもらった物をただ彼にもどすのです(代上.29:14)。私たちは財物の献納でその救いを得ることが出来ないのです。私たちに与えた神の偉大なる賜物に対する感謝の念で、十分の一を献納するのではなく、私たちのすべて、いや命までも献納するに成るのです。パウロはこれに対しても模範を示して、彼が伝播したことを実践しました。彼は私たちが神に捧げるべき供え物に対して次のように勧告しています。“あなたがたの体を、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である”(ロマ.12:1)。

肉物

ユダヤ人の律法には食物を清潔な物と不潔な物を分類して、不潔な物は食べないように禁止していますが、今もある教派ではそれを採択して実践しています。特に豚肉は食べないようにしています。キリストが十字架でその律法を取り除いたので、“だから、あなたがたは、食物と飲み物についてだれにも批評されてはならない”(コロ.2:14-16)とされています。キリストがこの世に既に来ているから、この事に関するモーセの命令は廃止されているのです。

イエスが人は食物によって霊的に汚されるのではなく、人の心から出るのだと確かに説明しています(マコ.7:15-23)。そして彼は“どんな食物でも清い物である”(マコ.7:19)と宣言しました。それについてパウロが、“わたくしは主イエスにあって知りかつ確信している。それ自体、汚れている物一つもない。ただ、それが汚れていると考える人にだけ、汚れているのである”(ロマ.14:14)と教えているように、またペテロも教えています(使.10:14, 15)。パウロはどんな食物も食べられない者は霊的に弱い者であると話しました。“ある人は、何を食べてもさいつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる(ロマ.14:2)。“食物は私たちを神に導くものでない。食べなくても損はない死、食べても益はない”(コリ前.8:8)と言うのが食物に対する私たちの態度です。最も罪であるのは真理から離れたクリスチャンたちが

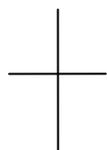


教える警告であると予言しています。“食物を断つ事を命じたりする。しかし食物は、信仰があり真理を認める者が、感謝して受けるようにと、神の造られた物である” (テモ前.4:3)。

9.6 安息日

今の‘クリスチャン’とモーセの律法の中に最も広く普及されて継続している律法の一つは安息日を守らなければならないと言う考えです。あるグループの人はダヤ人の安息日を彼らと同じく守らなければならないと主張しています。また多くのクリスチャンは一週の特別な日である日曜日に神を礼拝しなければならないと考えています。先ず明らかにすべきことは安息日が、神が六日間の創造の後安息した日、週の末の日であることです(出.20:10、11)。日曜日は週の始めの日であるから、その日を安息日として守るのは正しくないのです。安息日は特別な徴でした。“私はまた彼ら(イスラエル)に(ユダヤ人でない)を与えて、私と彼らとの間の徴とした。これは主なる私が彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである”(エゼ.20:12)。だから、それは決して異邦人(ユダヤ人でない人)を束縛するつもりではなかったでした。

キリストが十字架の死を通して、モーセの律法を廃止したので、今は安息日とか祭り日、キリストが死なれた日、などを守る必要がなくなりました(コロ. 2:14-17)。モーセの律法の部分を守ることにもどっている初期クリスチャンたちに対して、パウロは“どうして、あの無力で貧弱な、もろもろの靈力に逆戻りして、またもや、あらたにその奴隷になろうとするのか。あなたがたは、日や月や季節や年などを守っている。私は、あなたがたのために努力してきたのが、あるいは、無駄になったのではないかと、あなたがたのことが心配でならない”(ガラ.4:9-11)と描写しています。救いの方として‘クリスチャン’がその日を守ることは深刻な問題であります。安息日を守るのは救いに何の価値もないことを明らかに示しています。“また、ある人は、この日がかの日よりも大事であると考え、ほかの人はどの日も同じだと考える。各自はそれぞれ心の中で、確信を持っておるべきである。日を重んじる者は、主のために重んじる。また食べる者も主のために食べる...食べない者も主のために食べない”(ロマ.14:5、6)。



これゆえに、初期のクリスチャンは安息日を守っていなかった事を知っています。彼らは週の始めの日、日曜日に集まったのが書かれています。週の始めの日、私たちがパンをさくために集まった時” (使.20:7)と。パウロがコリント教会に“一週の始めの日ごとに” (コリ前.16:2)献金を集める事を勧告したのを見ても、彼らは定期的にその日、日曜日に集まった事が分かります。信者皆が祭司であると描写していますから(ペテ前.2:9)、彼らは安息日の固守から例外になっているのです(マタ.12:5)。

もし私たちが安息日を固守しようとするれば、それに正しくしならねばならないのです。モーセの律法を部分的に守るのは破滅的であることを既に示しました。なぜならこれは私たちの有罪を宣告しているからです(ガラ.3:10; ヤコ.2:10)。救いはモーセの律法でなく、キリストの律法を守ることによるのです。イスラエルは安息日に何事も出来ないようになっていました。“六日の間は仕事をなさい。七日目はあなたがたの聖日で、主の全き休みの安息日であるから、この日に仕事をする者は誰でも殺さなければならない。安息日はあなたがたの住まいのどこでも火をたいてはならない”(出.35:2、3; 16:23)。彼らはその日食物を準備するのさえ禁止されていました。安息日に枯れ木を集めた一人が、多分火を炊くためだったと思いますが、死の刑罰で殺されました(民. 15:32-36)。

この安息日の固守を教えている教派は彼らの信者が安息日を犯すと死の刑罰で殺されるのも教えなければならないのです。食物を料理することが出来なく、また火も炊くことが出来ないし、自動車を運転することも、いかなるヒーティング器具を使用することも出来ないのです。伝統的ユダヤ人たちは今もそんな風で安息日を固守しています。彼らは信じている宗教のために一日中家の内に留まり、食物を運ぶのさえしないのです。いかに安息日の固守を主張している‘クリスチャン’も彼らのように守れないでしょう。

安息日の固守を主張している者たちはそれはモーセの十戒の一つであり、ほかの法律は皆廃止されていても、その十戒は守るように残っていると主張しています。その中第七日安息日再臨教はキリストによって信者には廃止されている、その十戒の‘道徳的法’と他のいわゆる‘行政的法’を区別しています。この区分は聖書に教えていないのです。私たちは既に旧約はモーセの律法を話しているのであり、それか十字架のキリストによって取り代えられたと確証しています。安息日を含めている十戒はキリストによって廃止された旧約であります。

神は“その契約を述べて、それを行うように、あなたがたに(イスラエルに)命じられた。それはすなわち十戒であって、主は外れを二枚の石の板に書きしるされた”(申.4:13)。十戒に根拠しているその契約は神とイスラエルの間に結ばれたことであるのに注目すべきです。

モーセは神が書いた十戒の二つの石の板を受けるためにホレブの山に上がりました。モーセは後にこれに関して話しました。“私たちの神、主はホレブで、私たちと契約を結ばれた”(申.5:2)、すなわち、十戒を通して。

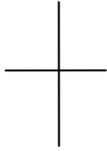
この時、“神は契約の言葉、十戒をその石の板に書きました”(出.34:28)。この同じ契約の中にはいわゆる‘儀式の法’の細目が含まれていました(出.34:27)。もし十戒の契約を守る必要があるとすれば、それはその契約の一分であるので、その細目も守らなければならないということになります。それをなすことは明らかに不可能です。

へブ.9:4は“契約の石板”と話されています。十戒は石板に書かれていて、それが旧約を構成しているのです。

パウロこの契約に関して“石に彫りつけた文字”、すなわち十戒を話しています。彼はそれを消え去るべき...死の務め、...罪を宣告する務め”と呼んでいます(コリ后.3:7-11)。十戒と連合されたその契約は救いの望みを与えることが全然出来ないのです。

キリストは“私たちを責めて不利に落とし入れる証書を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれました”(コロ.2:14)。これは石板の上に書かれていた十戒の神の詔書と話しているのです。これと同じく、パウロはその石に板に書かれていた十戒に対して、“私たちをつないでいたもの...律法...古い文字”(ロマ.7:6)と話しています。

その十戒のただ一つをロマ.7:8では律法と呼んでいます。“その律法が「むさぼるな」と言われた”。その前の句節は“その律法が”キリストの死によって廃止されてと力説しています(ロマ.7:1-7)。従って“その律法は”十戒を含んでいるのです。



これは皆旧約と“その律法”が十戒に含まれているのがはっきりしています。それらが新約によって廃止されたので、十戒も取り除かれました。しかし、その十戒の九つの掟は新約聖書で少なくとも霊的に再び肯定されています。そのナンバー3, 5, 6, 7, 8と9はテモテ前書1章で見つかり、ナンバー1, 2と10はコリント前書5章にあります。しかし安息日に関するそのナンバー4は私たち守るべき掟として新約聖書で全然論議していないのです。

次のリストは新約聖書に旧約聖書の十戒のうち九つの掟を再び肯定している句節です。

第1ー エペ.4:6; ヨハ1.5:21; マタ.4:10

第2ー コリ前.10:14; ロマ.1:25

第3ー ヤコ.5:12; マタ.5:34,35

第5ー エペ.6:1,2; コロ.3:20

第6ー ヨハ1.3:15; マタ.5:21

第7ー ヘブ.13:4; マタ.5:27,28

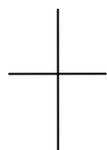
第8ー ロマ.2:21; エペ.4:28

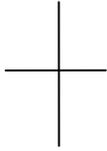
第9ー コロ.3:9; エペ.4:25; テモ后.3:3

第10ー エペ.5:3; コロ.3:5

間違った解釈28: 十字架の刑

イエス・キリストが十字架の刑で殺されたと一般キリスト教界が信じています。しかし、その‘十字架’と翻訳されているギリシャ語‘Stauros’は実際は杭あるいは柱を意味するのです。実は、本来十字架は異教の象徴でした。両手を上げるのが激しい祈りを神に上げる時つくる神の約束の象徴をつくる形である事を考えたら(哀.2:19; テモ前.2:8; 代下.6:12, 13;





イエスの使役 301

詩.28:2)、キリストは十字架につけられたのではなく、一つの柱に彼の両手が頭の上に上げられて釘つけられたのであり(エゼ.20:5,6,15; 36:7; 47:14)、キリストはその柱につけられることになっていました(ヘブ.5:7)。彼は、イスラエルが荒れ野で青銅の蛇を柱の末につけたように、彼は死ぬ時自分も公に柱につけられると話しました。そのように彼は‘柱’に付けられたのです(ヨハ.3:14)。

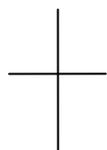
ローマ.カトリック教会はその十字架に多くの迷信適意義を付け加えています。それらはなにも聖書の根拠がないのです。十字架の装飾物は神が自分と一緒にいると言う表示のお守りの符号になっています。人たちは十字架を首にぶら下げ、あるいは規則的に十字を描くことによって神が彼らと一緒にいると信じます。これは一つの象徴に過ぎないのです。本当に十字架の力は、十字架の形を思い出すのではなく、私たちがキリストを信じバプテスマを受けて彼の死に連合することにあるのです。勿論、その後より前者の方をするのがたやすいのです。

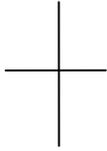
間違った解釈29:12月25日、

主の誕生日であるか

今日もう一つの一般キリスト教界の主な誤りはイエスの誕生日に関することです。聖書にはキリストが生まれる時頃羊飼いたちが草原で彼らの羊を飼っていたと書かれています(ルカ.2:8)。彼らは冬の間のクリスマスの時期にはそのような羊飼いをしないでしょ。キリストは33年と半年間世に生きて、今のイースタ節(復活祭)の時、過ぎ越し節に死にました。従って彼はその復活祭から約6ヶ月後、すなわち9、10月の頃生まれたのです。

本来12月25日ははヨーロッパでキリスト教の前にあった異教の祝祭日でした。使徒たちの使徒行伝にはクリスチャンたちが彼らの信仰のために異教から迫害されたのが書かれています。このために、使徒たちは、クリスチャンの中ある者が異教徒たちに神の福音を伝播するために、異教たちの心に適う教理に彼らの信仰を造り変え、繰り返し警告しました(使.20:30; ヨハ.1:2:18; テサ后.2:3; ペテ后.2:1-3)。12月25日をクリスチャンの祝日として採用したのもその主な一例で





302

イエスの使役

す。クリスマスツリー、ヤドリギ、など皆が12月25日の異教儀式から由来したものです。

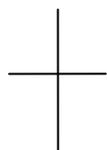
真のクリスチャンは12月25日をキリストの誕生日として、クリスマスと祝わないのです。クリスマスは一般に休日となっているので、出来る限りその日を信仰の兄弟たちと交わり過ごすのが良いでしょう。

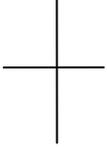
学習9： 問題と解答

1. 私たちの救いに、他の誰よりも、なぜイエスの死が要求されたのですか？

2. 人の罪を取り除くに、なぜモーセの律法による動物の犠牲が十分でなかったのですか？

3. イエスは私たちの代表として、あるいは私たちの代りに死なれたのですか？





4. 次のどちらが事実ですか？

- a) キリストは私たちの代りに死なれた
- b) キリストは私たちの代表として死なれた
- c) キリストは私たちと同じなので私たちの代表になれない
- d) キリストの死はすべての人が罪が赦される事になるのを意味する

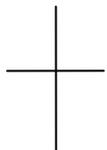
5. イエスは彼自身の死から何の恩典を得たのですか？

6. キリスト十字架の死で、彼がなしたことは何ですか？

- a) モーセの十戒の以外のすべての戒律が終わった
- b) モーセの十戒と共にすべての戒律が終わった
- c) ユダヤ人の祭り以外のモーセの律法が皆終わった
- d) モーセの律法は皆効力がなくなった

7. 私たちは安息日を守らねばならないですか？

8. 上記の問題に対するあなたの答の理由を与えて見なさい。



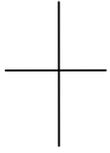
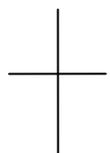
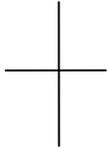


写真10

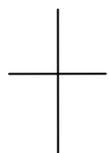




学習 10

キリストに預かる

バプテスマ



10.1 バプテスマの重要性

以前の学習で私たちはたびたびバプテスマの重要性に関して言及しました。福音のメッセージに従うのが信仰の第一歩です。ヘブ.6:2にバプテスマは最も重要な基礎的教理の一つであると話しています。バプテスマは福音を構成しているその基本教理を正しく認識した後に受けるのであるから、私たちはそれに対する考察を今の段階までそのままにしておきました。今私たちその学習を終えたので、読者たちがイエス・キリストを通して与えている偉大なるその望みに連合したいと欲っていると考えています。しかしそれにはバプテスマを受けるのが絶対必要です。

“救いはユダヤ人から来る”(ヨハ.4:22)から、その救いに関する約束は神がアブラハムの彼の子孫にして下さったものです。私たちはただ“キリストの合うバプテスマを受ける”によって彼の子孫になってその約束を得ることが出来るのです(ガラ.3:22-29)。

従ってイエスは明白に彼の弟子たちに命令しました。“全世界に出て行って、すべての造られたものに福音(アブラハムに約束したもの、ガラ.3:8)を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受けるものは救われる”(マコ.16:15,16)。この言葉と福音の信仰の反映だけで自分を救うことが出来ないのです。バプテスマはクリスチャンの生活に任意の選択でなく、救いに重要な必須条件であります。これはまたバプテスマを受ける行動だけで救いを得ると話しているではありません。勿論神の言葉に生涯の間従わなければならないのです。イエスはこれを強調しています。“よくよくあなたに言うておく。誰でも水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることは出来ない”(ヨハ.3:5)。

“水からの出生”は人がバプテスマを受けてその自ら上がるのを話しているのです。この後、彼は霊で新たに出生しなければならないのです。この出生は継続的過程であります。“あなたがたが新たに生まれたのは、神の変わる事のない生ける御言葉によったのである”(ペテ前.1:23、学習2.2を見よ)。

私たちは“キリストに合うバプテスマを受ける”(ガラ.3:27)こと、彼の名に入る(使.19:5; 8:16; マタ.18:19)ことです。私たちはある教会や人間の団体に合ってでなく、ただキリストに合うバプテスマを受けたことに注目しなさい。バプテスマを受けなくては、私

キリストに預かるバプテスマ 307

たちが“キリストに入る”ことが出来ないのです、彼の救いの名で覆われることが出来ないのです(使.4:12)。ペテロはこの事実を力強い比喻の話して織り込んでいます。彼はノアの箱船をキリストに例えて、その箱船がノアと彼の家族を水の裁きから救ったように、キリストに合うバプテスマをうける信者は永遠な死から救われるであろうと話しています(ペテ前.3:21)。ノアがその箱船に入ったのはバプテスマを通してキリストに入ると例えて話しました。その箱船の外にいた者や、箱船の近くにいた者、ノアの友人さえも関係なく、みな滅亡されてしまいました。救いの唯一の方法はキリスト/箱船の中に入ることです。確かに主の再臨が間近になって、その洪水の予表の裁きも間近になっています(ルカ.17:26、27、付録3を見なさい)。キリスト/箱船の中に入るのが迫っています。ノアの時その箱船に入ったと言われた聖書の予表がもっと強く実感されます。

初期のクリスチャンたちはキリストの命令に従って世界中を旅しながら福音を伝えバプテスマを施しました。使徒行伝はその記録でいっぱいです。彼らは人たちが福音を受けるやいなや直バプテスマを施したと書かれている記録で、バプテスマの重要性を強調していた証拠が見つかります(使.8:12、36-39; 9:18; 10:47; 16:15)。この強調にはバプテスマを受けないなら福音を学んだ知識が無益であることを示しているのです。バプテスマは救いの過程において過ぎなければならないもっとも必要な段階です。聖書の記録にある幾つかの場面は、バプテスマを延期する多くの人間的理由、その施行におけるいろいろな難点があるにもかかわらず、これを皆克服すべきすべての努力を尽くしたほど重要であることがハイライトになっています。

ピリピの獄吏は突然とても安全であった彼の獄屋が完全に破壊される大地震が起こって絶対絶命の危機に降りました。囚人たちが逃げ出してしまったら、彼は命を失うようになっていました。その時福音を信じる彼の信仰が実際となって、“その場で自分も家族も、一人残らずバプテスマを受けました”(使.16:33)。彼には誰もバプテスマを延期しようとする弁明がなかったでした。約3000年前にギリシャには最悪の地震が起こって、囚人の一団が獄屋を破壊して逃げ出した大事件で、責任を怠ったと言う罪で獄吏たちが死刑に処せられたことがありました。その獄吏はその事件を良く知っていたので、彼はその時彼の生涯彼の永遠な命と運命に対して実行すべき重要なことは何であるかを意識していました。それで彼は、彼を巡っている職場で毎日起こるべき問題、その地震による心のショック、すべてを克服してバプテスマを受けたのでした。バプテスマを受けるのをためらって

いる多くの人はこの獄吏から靈感を受けると思います。そのような信仰はただ神の言葉を聞くによって来る野を勘案すれば(ロマ.10:17、使.17:11と比較)、彼がこの信仰の行動をするようになったのは、すでに彼が福音に関する知識を詳細に知っていたためです。

使.8:26-40にはエチオピヤ人の宦官が馬車に乗って砂漠を横切って行く間その馬車の上で聖書を勉強していたのが書かれています。彼はそこで伝道者ピリピに会って、福音の説明を聞くようになり、バプテスマを受けました。人間的に言えば、水がない砂漠でバプテスマを施行することは不可能なことに思われます。しかし神は人たちが服従出来ない命令を与えることはないのです。“道を進んで行くうちに、水のある所に来たので”(使.8:36)、例えば、オアシスであったでしょう、そこでバプテスマを受けることが出来たのでした。この事件は、水に浸するバプテスマがたやすく水に接近出来る、水が多い所で施行していたと提示するのは根拠のないことではないと答えているのです。神はいつも人たちが彼の命令に服従出来る実際の方法を与えているのです。

使徒パウロはキリストから受けたその劇的なヴィジョンは、“彼が立ってすぐバプテスマを受ける”(使.9:18)ほど、彼の良心を突くのでした。また彼の卓越した社会的地位とユダヤ主義たちが彼のために計画している彼の飛び出だした経歴を勘案する時、彼にはバプテスマを延期させる誘惑があったかも知れないのです。しかしユダヤ人の世界に浮かび上がる星であった彼は正しく決心して直ちにバプテスマを受け、以前の生活方法を放棄することを公に宣言しました。彼は後ほど彼がバプテスマを受けたことを回想しながら、“私にとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。...キリストのゆえに、私はすべてを失ったが、それらのものを、ふん土のように思っている。それは、私がキリストを得るためである。...後ろのものを忘れ、前のものに向かって体を伸ばしつつ、目標を目指して走り、...神の賞与を得ようと努めているのである”(ピリ.3:7、8、13、14)。

これは競技者が走って最終点のテープを切ろうとして奮闘している様子を描写しています。私たち信者もバプテスマを受けた後にはその競技者のように信仰の終点に向かって心を集中し体を鍛練しながら走って行く生活でなければならないのです。そのバプテスマは神の国に向かって走る競技の出発点であることを銘記すべきです。それは教会とか信条を変えたのでなく、また漠然に告白したキリスト教の原理を信奉してたやすく生きる生活ではないのです。バプテスマはイエスの十字架の死

う。ヨハネが一つの水瓶をもって人たちに行き回ったのではなく、彼らがバプテスマを受けるためにヨルダン川の岸のこの地点に来たのでした。

イエスもヨルダン川に行ってヨハネにバプテスマを受けました。“イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられました”(マタ.3:13-16)。“水から上がった”、彼のバプテスマの形式は確かに水の中に浸したのでした。イエスがバプテスマを受けた理由の一つは模範を示すためであったから、私たちは彼に習って、水の中に浸すバプテスマを受けるのが当然であります。

ピリピの獄吏とエチオピヤの宦官も、これと同じ形式で、“これに対して、ピリピは、「あなたが真心から信じるなら、受けてさしつかえはありません」といった。すると、彼は「私は、イエス・キリストを神の子と信じます」と答えた。そこで車をとめさせ、ピリピと宦官と、二人とも、水の中に降りて行き、ピリピが宦官にバプテスマを授けた。二人が水から上がると、...”(使.8:37-

39)。その宦官がオアシスを見た時、“ここに水があります。私がバプテスマを受けるのに、なんのさしつかえがありますか”(使.8:36)と、バプテスマを受けたいと要請したのを記憶しなさい。そのように水のない砂漠を貫いて旅をしていたその宦官は多分少なくとも一瓶くらいの水は持っていたでしょう。もしバプテスマを施行するのが幾つかの水玉を注ぐのなら、そのオアシスまで行くはずがなかったでしょう。

バプテスマは葬られるのであるから(コロ.2:12)、水に完全に覆われる意味が含まれています。

バプテスマを‘罪の洗い落とし’(使.22:16)と呼んでいます。改宗は‘完全な洗い’と同じのです、啓.1:5; テト.3:5; ペテ后. 2:22;

ヘブ.10:22。バプテスマに対してこの洗うという言葉は水を注ぐと言うよりもっと適切な表現です。

人たちが神に近づくには水で体を洗わなければならないいくつかの形式が旧約聖書に指示されています。

祭司たちは彼らが神の奉仕に来る前に‘洗盤’で体を完全に洗わなければならないのでした(レビ.8:6;



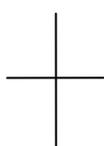
キリストに預かるバプテスマ 311

出.40:32)。またイスラエル人たちは彼ら自身汚れたのを清くするために、水で身を洗わなければならなかったのです(申.23:11)。

イスラエルの神の治癒を求めていたナアマンと呼ばれる異邦人の癩病患者がいました。彼のような人は罪の病気に襲われて、生きていても死者となっているのを現わしているのです。彼の治癒は体をヨルダン川に浸すことでした。彼は神のある劇的行動とか、あるいは広く知られているアバナ川(アッシリアの川)の水に浸すようなことを期待していたので、あまりにも単純なこの治癒法を彼は受け入れことが出来なかったでした。彼と同じく、私たちも、究極的に救いをもたらすことが出来るこの単純な行動であるそのバプテスマを信じ難いのです。私たちを救うことが出来ることは、イスラエルの望みにつながるこの単純な小さい行動でないと思ひ、私たちの業や多く知られている教会に連合するのであることにもっと心が引かれるのです。ナアマンはヨルダン川に体を七度浸しました。それで“彼の肉がもとにかえて幼な子の肉のようになり、清くなりました”(王下.5:9-14)。

読者は今‘バプテスマ’が福音の基本メッセージを認識し、それを受け入れた後、水の中に身を完全に浸す儀式であることが少しも疑いのないことになったと思ひます。バプテスマに対するこの聖書に基礎した定義は人の身分にかかわらず誰でも福音を信ずる者は実際バプテスマを受けることが出来るのです。福音を認識し、それを信じてバプテスマを受けるならば、聖書的欠点のないバプテスマを受けたと認定するのです。しかし、バプテスマを受ける者は福音の教理を正しく認識していなければならぬので、そのバプテスマを受けるまえに、また教理を正しく認識している他の信者の審査を必ず受けなければならないのです。その審査者は彼を充分審査出来る教理の知識を持っているのが当然であります。

それゆえにChristadelphianたちはバプテスマを受ける者が、水に入る前にバプテスマを受ける資格があるかを確認するバプテスマインタビューの討議を持つのです。その討議の問題は各学習の終わりにある学習問題を基本としています。バプテスマを受けたい者があれば、私たちは如何に遠い地方にある人でも必ず訪問して世話をあげるのであります。たった一人の人でも、将来この地に設立される神の国と永遠の命に関心を持つ人が現れるのは奇蹟的こととあります。神の国の計算法は量より質であるのがその特徴です。



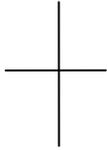
10.3 バプテスマの意義

バプテスマの形式が水の中に身を浸すのである根拠は、私たちがキリストの死に連合して墓に葬られるのを象徴しているのです。また私たちの死は以前の罪と無知の生活の死を示しているのです。そして水から上がるのはキリストの復活に連合されて、キリストの帰りにおいて永遠の命に復活される望みと共に新し命の生活、キリストの死と復活によって成就された彼の勝利に従って罪に勝利を得るのと関係があるのです。

“それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスに預かるバプテスマを受けた私たちは、彼の死に預かるバプテスマを受けたのである。すなわち、私たちは、その死に預かるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、私たちもまた、新しい命に生きるためである。もし私たちが、彼に結びついてその死の様に等しくなるなら、さらに、彼の復活の様にも等しくなるであろう” (ロマ.6:3-5)。

救いがキリストの死と復活を通して可能になっているから、私たちが救われるにはこのことと連合するのが重要です。バプテスマが与えている、キリストの死と復活に連合する象徴的死は、ただ水に身を浸す形式のバプテスマで現わすことが出来るのです。幾つかの水玉を注ぐ形式のバプテスマではその象徴を成就することが出来ないのです。バプテスマを受けた後“私たちの内の古き人はキリストと共に十字架につけられ” (ロマ.6:6)、神はバプテスマで“私たちをキリストと共に生かしてくれるのです” (エペ.2:5)。しかし、私たちにはバプテスマを受けた後もなお人間の本性があり、従って肉性が私たちの生活で頭を上げるのです。従って私たちの肉を‘十字架につける’のは一つの過程であり、バプテスマを受けるのはその出発に過ぎないのです。それでイエスは、彼がカルバリーに向かって進行していた過程の時、信者たちに“日々自分の十字かを負うて私にしたがって来なさい” (ルカ.9:23; 14:27)と告げました。キリストの十字架につかれる生活は難しい一方、キリストの復活に連合するによって、言葉に絶する慰安と喜びがあるのです。

キリストは“彼の十字架の血によって平和を作りました” (コロ.1:20)。それは“人知ではどうてい測り知ることの出来ない神の平安” (ピリ.4:7)であります。これに



キリストに預かるバプテスマ 313

関して、イエスは次のように約束しました。“私は平安をあなたがたに残して行く。私の平安をあなたがたに与える。私の与えるのは、世が与えるようなものとは異なる”(ヨハ.14:27)。この平安と霊的喜びは十字架につかれたキリストと連合によって起こる私たちの苦痛と苦難よりもっと満ちあふれるのです。“キリストの苦難が私たちに満ちあふれるれているように、私たちの受ける慰めもまた、キリストによって満ちあふれているからである”(コリ后.1:5)。

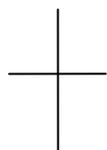
そこにはまた私たちの肉性それ自体が実際死んだのと、従ってイエスが私たちのすべての試練において私たちと共にとても積極的に生きると思っているから自由があるのです。偉大なる使徒パウロは彼の波乱万丈な生涯の多くの経験からこのように話すことが出来ました。“私はキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、私ではない。キリストが、私のうちに生きておられるのである。しかし、私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のためにご自分をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きている”(ガラ.2:20)。

永遠の命のキリストの復活に連合している私たちは彼の帰りに彼と同じくなるから、“この水はバプテスマを象徴するものであって、今やあなたがたをも救うのである。それは、イエス・キリストの復活によるのである”(ペテ前.3:21)と話しています。この復活に預かるので私たちは結局救われるのでしょう。イエスはこれをとっても簡単に話しました。“私が生きるのも、あなたがたは生きるからである”(ヨハ.14:19)。パウロもそのように、“和解を受けている今は、なおさら、彼の命によって救われるであろう”(ロマ.5:10)と話しています。

バプテスマで私たちがキリストの死と受難に連合されているのと、その後の生活方法が、くり返し強調されているのは、私たちが確実に彼の栄光的復活に預かっているからです。

“もし私たちが、彼(キリスト)と共に死んだら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう”(テモ后.2:11、12)。

“いつも主イエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスの命が、この身に現れるためである。それは、主イエスをよみがえらせたかたが、私たちをもイエスと共によみがえらせる事を、...知っているからである”(コリ后.4:10、11、14)。



パウロは信仰の難しい生活によってキリストの苦難にあずかりました。“その苦難に預かって、その死の様と等しくなり、なんとかして死人のうちからの復活(キリストが経験した永遠の命の)に達したいのである”(ピリ.3:10、11、ガラ.6:14と比較)。

10.4 バプテスマと救い

バプテスマがキリストの死と連合であるということには、バプテスマによってのみ私たちの罪が赦されるのを意味しています。“私たちはバプテスマを受けて(キリスト)と共に葬られ、同時に、彼を死人の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、彼と共に蘇らされたのである。先には罪の中にあり、...死んでいた者であるが、神は、私たちキリストと共に生かし、私たちの一切の罪を赦してくださった”(コロ.2:12、13)。私たちは“イエス・キリストの名によって洗われ、清められ、義とされたのであります”(コリ前.6:11)。すなわち、イエス・キリストの名に入らせるバプテスマは私たちの罪を洗い除けることを意味しています。これは民.19:13に、水で汚れが清められていない者は死ぬと予表していました。これは学習10.2でバプテスマが罪を洗い除けると確証しているのです(使.22:16と比較)。従って信者たちの罪がキリストの血によって洗われたと記録されたのはバプテスマでなされたのを意味しています(啓.1:5; 7:14、バプテスマによって、“再生の洗いを受け”「テト.3:5」、「水と霊とから生まれる」「ヨハ.3:5」)。

このすべてが明らかになると、人々が“私たちは、どうしたらよいでしょう”と質問したのに対してペテロが答えた“悔い改めなさい。そして、あなたがた一人一人が罪の赦しを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい”(使.2:37、38)と言われたことが理解出来るのです。キリストの名によってバプテスマを受けるのは罪の赦しのためです。それがなくては罪の赦しを得ることが出来ないから、バプテスマを受けない者は罪の報酬の受けて死ななければならないのです(ロマ.6:23)。イエスの名以外には救いがなく(使.4:12)、また私たちはバプテスマを受けるによってその名に預かるのです。この行動はキリスト教以外には救いがないのを意味しています。聖書を信じない者たちがそれを拒絶しています。カトリック

キリストに預かるバプテスマ 315

教とエキュメニカル運動者たちがそうしている事実は、聖書に対する彼の誤った態度を反映しているのです。

永遠の命のキリストの復活は罪に対する彼個人の勝利の象徴でした。バプテスマによって私たちがこれに連合するによって、キリストと共に復活されて、彼のよ
うに罪の力が私たちを支配することが出来ないのです。バプテスマによって、私
たちは“罪から解放され、...
罪に支配されることがなくなる”(ロマ.6:14, 18)のです。しかし私たちはバプテスマ
を受けたあともまだ罪があるのです(ヨハ1.1:8, 9)。もし私たちがキリストから離れ
ると罪が私たちの生活で働くのです。例えバプテスマによって私たちがキリストの
復活に連合しているのを確認していても、それはあくまでキリストの帰りに彼と預
かる望みであるので、私たちは今もキリストの死と苦難に預かるのです。

私たちは罪からの解放を期待しているだけであります。“信じてバプテスマを
受ける者は、(キリストの帰りの時)救われる”(マコ.16:16)。究極的救いはバプテスマ
を受けた後すぐ起こるのでなく、裁きの後にあるのです(コリ前.
3:15)。もしそのバプテスマを受けるによってすぐ救われるとその裁きの教理は必要
がなく、私たちは死ぬこともないのです。“しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる
”(マタ.10:22)。

パウロ(すべてのクリスチャン)は彼がバプテスマをうけた後も、救いを求めて努
力せねばならなかったのです(ピリ.3:10-13;
コリ前.9:27)。彼は永生の望みに関して(テト.1:2; 3:7; テサ前.5:8;
ロマ.8:24)、また“救いを継ぐべき者”に関して(ヘブ.1:14)話しました。裁きの座で
、“義人たちは永遠の命に入るだろ”(マタ.25:46)。靈感に満ちた驚異的パウロの論
議がロマ.13:11でよく光っています。バプテスマの後私たちが日ごとに生きるのと
耐え忍ぶのは毎日キリストの再臨が間近になったのを知ることが出来るので、“私
たちの救いが、始め信じた時よりも、もっと近づいている”と喜ぶことが出来る
と彼は論じています。従って私たちの救いは今持っているのではないのです。その救
いは条件的です。もし私たちがその信仰を堅くたもつなら(ヘブ.3:12-14)、もし私
たちが福音を構成しているその基本教理を記憶しているなら(テモ前.4:16;
コリ前.15:1, 2)、もし私たちがこのような偉大なる望みに関するすべての事をする
なら(ペテ后.1:10)、私たちは救われるのでしよう。

“救われた”と翻訳されたギリシャ語は度々継続時制で使用されています。それは私たちの内に起こった救いが福音に対する私たちの継続的服従によって進行している過程を示しているのです。このように信者たちは福音に対する彼らの応答によって“救われる”と話しています(コリ前.1:18; 使.2:47; コリ后.2:15)。このギリシャ語の言葉、“救われた”はキリストが十字架で可能にしたその偉大なる救いに関しては過去時制を使用しています(テモ后.1:9; テト.3:5)。私たちはそれにただバプテスマを受けることによって連合されるのです。

これは皆神と肉のイスラエルの関係に例証されているのであって、それは彼が霊的イスラエル、信者たちとの関係を形成するのです。イスラエルがエジプトを離れたのは、私たちがバプテスマを受ける前に連合していた肉の世と偽りの宗教を現わしているのです。彼らは紅海を渡り、シナイの荒れ野を通して約束の地に入りました。そこで彼らは神の国を設立しました。彼らの紅海の渡りは私たちのバプテスマを予表しているのです(コリ前.10:1、2)。そしてその荒れ野の旅は私たちの現在の生活、カナンの地は神の国を現わすのです。ユダ書5節は彼らの多数がその荒れ野の旅の間滅びたのを描写しています。“主が民をエジプトの地から救い出した後、不信仰な者を滅ぼされたことを、思い起こしてもらいたい”。従ってイスラエルは、バプテスマを受けた者たちが罪から“救われた”ように、エジプトから“救われました”。もしそのイスラエルの一人に“あなたは救われましたか”と質問したら、彼はの答は、“そうです”と話したでしょう。しかしこれは彼が究極的に救われたのを意味するのではないのです。

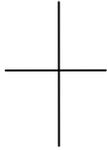
イスラエルが彼らの心をエジプトにむき変えて(使.7:39)、肉を喜ばせる生活と偽りの教理にもどったように、バプテスマを受け罪から“救われた”者たちが彼らと同じく自分たちが立っている祝福の位置から離れ去ることが出来るのです。私たちも荒れ野で肉のイスラエルがしたことをする可能性があるかと警告しています(コリ前.10:1-12; ヘブ.4:1、2; ロマ.11:17-21)。バプテスマによって一度罪から“救われた”者が後にその祝福の位置から離れ去って、キリストが帰りに呪詛を受けることになっている者の実例が聖書に多くあります(ヘブ.3:12-14; 6:4-6; 10:20-29)。「一度救われたら、その救いが永遠に保たれる」と言う‘福音主義者たち’の教理はただ人の肉を喜ばしめる詭弁的な議論に過ぎないのです。

キリストに預かるバプテスマ 317

だから、バプテスマによって“救われる”のはどの程度まであるか考察して見てその意味を正しく認識する必要があります。バプテスマのその行動は、勿論バプテスマ受けないよりはよいですが、私たちに救いを永遠に与えるものではありません。バプテスマを受けてキリストの内にあることによって、私たちは救われる期待があるのです。バプテスマを受けた後いつも私たちがキリストの帰りに神の国に入れるか謙遜に確信を持っていなければならないのです。私たちが明日その信仰から離れ去るかも分からないから、その究極の救いが確実でないのです。私たちはこの世で私たち個人の霊的状态がどうなるか分からないのです。

バプテスマで私たちが神と共に持つようになった良い良心を維持するように最善を尽くすことです。バプテスマは“良い良心の誓い”です(ペテ前. 3:21)。バプテスマを受ける者は神に誓っているその良い良心を守ることを約束したのです。

バプテスマがキリストによって得られるその偉大なる救いが賦与される重要なことであるけれども、私たちはその一つの行動、あるいはそのバプテスマの業だけで救いを得られるような印象を与えないように注意しなければならないのです。私たちは既にいつもキリストの十字架つけの交わりを継続する生活が必要であると示しました。“誰でも、水と霊とから生まれなければ、神の国に入ることは出来ない”(ヨハ.3:5)。これをペテ前.1:23と比較して見れば、バプテスマの後起こる霊の生まれは、霊/言葉による私たちの漸次的再生を話しているのです。救いはただバプテスマのためではないのです。それは“恵”(エペ.2:8)と“信仰”(ロマ.1:5)と望み(ロマ.8:24)の結果であります。たびたび救いはただ信仰によるので、バプテスマのような“業”は必要でない論争が起ります。しかし、ヤコ.2:17-24にはそのような論争は信仰と業に対する誤った解釈から起こるのを明らかに説明しています。福音を信ずる真の信仰はバプテスマを受ける(業)によって確証されるのです。“人が義とされるのは、行ないによるのであって、信仰だけによるのでない”(ヤコ.2:24)。バプテスマを受けた多くの場合、信者が救いのために何を“すべき”ですかと問われたのです。その答はいつもバプテスマを受けよとバプテスマの業が含まれています(使.2:37; 9:6; 10:6; 16:30)。従ってバプテスマの‘業’は救いの福音を信ずるに必須的行動です。私たちに救う業は究極的には神とキリストによってなされても、私たちには“悔い改め”とこれを信仰する行動が必要です(使.26:20、マコ.16:15、16と比較)。



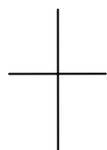
私たちは罪を洗い去ると言う言葉がキリストに連合するバプテスマによって、神が私たち罪を赦すのを話していると既に示しました。ある句節では私たちの悔い改めと信仰によって罪が洗われたと話しています(使.22:16; 啓.7:14; エレ.4:14; イザ.1:16)。また他の句節では神が私たちの罪を洗う者に見えます(エゼ.16:9; 詩.51:2,7; コリ前.6:11)。これは私たちがバプテスマを受けて私たちのすべき部分をすれば、神が彼のすべき部分、すなわち、私たちの罪を洗ってくださることを良く示しています。このようにバプテスマ‘業’あるいは行動は、神の言葉が与えている彼の恵の福音を保ち続ける重要な第一歩です。

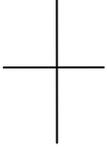
間違った解釈30:再バプテスマ

ある人たちは‘幼児洗礼’を受けたとか、あるいは浸礼を受けたとか、一度浸礼を受けたなら、再びバプテスマを受けるのは差し控えなければならないと思っています。しかし、聖書にはバプテスマ’を受ける前に真の福音を正しく信じそれに悔い改めが必要であると規定しています(使.2:38; マコ.16:15,16)。バプテスマは水に浸す前にその順序に根拠して施行する唯一なバプテスマでなければならないのです。マタ.28:19,20はバプテスマを受けるには始めにキリストの教えを聞くことが連合されていると説明しています。福音を知らない者また悔い改めがない者がバプテスマを受けるのは、ただ屋内のプールに入って一度水泳をしたのと同じことです。これはそのバプテスマを受けた者が福音を意識していなかったから、本当にバプテスマを受けたと言うことが出来ないのです。また‘違う福音’を信じてバプテスマを受けるのも、それと同じことです。

その福音で構成されるエケレーシャにはただ“一つの信仰”、すなわち、真の福音を構成している一連の教理があり、従って唯一のバプテスマがあるのです。その“一つの信仰”を信じた後に起こるバプテスマです。“体は一つ(真のエケレーシャ)、...

あなたがたが召されたのは、一つの望みを目指して召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つである”(エペ.4:4-6)。私たちの報償が天であるうと、あるいは地であろうと何でもかまわないと信じている者たちのように、信者に





キリストに預かるバプテスマ 319

幾つの望みもあるのではないのです。ただ“一人の神”だけがおられるので、イエスは神でないのです。私たちがバプテスマを受ける時、神の国とか、神とイエスの本性とか、その基本教理を分かっているなければ、そのバプテスマは何の効果もないのです。

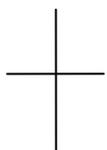
バプテスト、ヨハネは人たちに悔い改めよと叫びながら、イエスに関することを教えて、彼らにバプテスマを施行しました(マコ.1:4; ルカ.1:77)。しかし、これはバプテスマを受けるに十分な知識ではなかったのです。使.19:1-5には、ヨハネからバプテスマを受けた者たちがバプテスマを受ける時その教理を完全に把握していなかったから、再びバプテスマを受けた記録があります。ヨハネにバプテスマを受けていた者たちのように、私たちが真の悔い改めと新しい出発を決心しないでバプテスマを受けるのは止めなければ、ならないのです。彼らがバプテスマを受けたのは事実ですが、しかしそれはその“一つの信仰”の教理を把握した後に起こるべきその唯一のバプテスマではなかったため何の価値もなかったのです。

間違った解釈31:バプテスマに必須的知識

読者の多くがいわゆる‘福音教会’の伝道者たちと向かい会ったことがあるでしょう。彼らは救いに教理は重要なものでなく、ただ‘イエス、キリストを神の子であると信ずれば’救いを得るに充分であると言い、そのように口で告白させています。そのような会話が使徒行伝に記録されているばかりでなく、人たちに‘愛’と‘寛容’がこの時代精神として訴えている現代であるから、この言葉は皮相的にはもっともらしく思われます。この学習ではその点を正すために、重要な基本教理をもっと深く分析して見ましょう。

なぜ急ぎたてるのか

使徒行伝を早く読んで行けば、多くのバプテスマがわずかな福音の基本知識を得て、そしてただキリストを神の子であると簡単に告白するによって施行されたよ



うな印象を受けるのは疑いない事実です。救いを得る方法として‘私はキリストを信ずる’と幾つかの言葉を話すことは確かに何の意味もないのです。福音主義者の大多数がそんなふうには話している者たちの心になにか他の知識あるいは認識がいなければその言葉が意味がないと承認するでしょう。この点は確証するのが難しいのです。では、神の子としてキリストを信じているとの信仰告白が記録されたその句節の言葉が、救いに必要なすべてのことを告白していると立証することは難しいのです。何か他の感情と信仰を持っていながら、ただその簡単な句節で告白するの持って、救いの道に入ったと言われないのです。次のいろいろな論点は一見短時間に改宗されたようなことを良く説明しているのです。

使徒行伝は他の多くの聖書と同じく必要なことだけを抽出して簡潔に圧縮されている本です。使徒行伝に記録された演説を声高く読んで行くのは興味のある訓練ではありますが、それには多くの時間がかかります。それには記録されてない多くのことも含まれているから、実際はより多くのかかなり長い時間かかるのです。その幾つかの実例を調べて見ましょう。

エルサレムで話したパウロの弁解はそれを読むに4分くらいかかり(使.22章)。ペリクスの前の弁護は1分間、アグリッパ王の前の弁護は4分間、ペテロの五旬節の講演は4分間、コルネリオの家で話した教えは3分間、5000人を食わせた後の主の講演は6分間(ヨハ6章)。山上垂訓の説教は18分間、使.3:12-26のペテロの伝道は高い声で読むと2分間かかり、“祭司たち、宮守がしら、サドカイ人たちに” 伝道した内用を読むには多くの時間がかかります(使.4:1)。

バプテスマを受ける者により長い指示が言及されていないこの事実がなにも起こっていない事を立証するのではないのです。この沈黙から起こる論争はこの場合とても疑わしいです。

初期伝道者たちは“知識の賜物(奇蹟的)、霊(心)を区別する賜物によって、彼らの教えを聞いている者たちの心を読むことが出来るので、私たちが今実施しているバプテスマのインタビューが必要ではないのでした。

キリスト教の始めにエルサレムで起こったユダヤ人の大群集のバプテスマは一つの特別な場合でした。1世紀の後にはそのように多数の人がバプテスマを受けたことがないのです。もしその規模の改宗が継続的に起こったなら、わずか数年の間にエルサレムの全体がクリスチャンになったでしょう。この人たちは皆ユダヤ人であったので、彼らは旧約聖書と神の道に対してかなり多くの知識を持っていたのを

キリストに預かるバプテスマ 321

意味しています。パウロのヘブル書の深遠さとペテロのユダヤ人たちに書いた手紙は、彼らの読者たちが旧約聖書にある多くのほのめかしを理解する能力があったのを示しています。パウロはメルキゼデクに対して話したことはただ神の言葉の乳に過ぎないと描写しながら、彼らが霊的に未熟な状態であるためにメルキゼデクに対してもっと詳細に話すことが出来なかったとを嘆きよめているのです(ヘブ.5:11、12)。パウロが指摘した彼らの知識の水準は彼らの改宗の時と同じものであるから、その時から少しも成長していないのを非難しています。その手紙は主にエルサレムのエケレーシャに書いているもので、彼らの大部分が使徒行伝の始めに書かれている初期にバプテスマを受けていました。

私たちは、使徒行伝に書かれているようにキリストの名を伝播とその名の告白はその教理の本体(FORM)を詳細に理解していたのと同じことであると示したいのです

パウロは伝道チームを造って、教理を教える者とバプテスマを施行する者を分かちて効果的に運用したようです(コリ前.1:17)。それによって、彼は比較的に短い間一カ所に留まり、他の所に移動することが出来たでしょう。

イエスの名

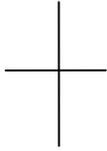
神の名には彼に対する多くの教えと彼の道が含まれています。神の名と彼の称呼には彼の性格と目的が現れています。イエス・キリストの名もまた彼の名称だけでなく、教理に関する深い意味が現れています。

イエスの名を信じるのはバプテスマを受けるのに匹敵するのです(ヨハ.3:5、18、23)。ガラ.3:26、27には、“あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなた方は、皆キリストを着たのである”このように信仰とバプテスマの連結が次の句節らで見つかります、使.19:4; 10:42、48と比較; 2:37、38; ルカ.24:47。ヨハネのバプテスマを知っていたアポロは(使.18:25)、バプテスマがただ一つの行為でなく、福音の教えが含まれているのを示しています、

“ピリポはサマリヤの町で、人々にキリストを宣べ始めた”(使.8:5)。この節はちょうど彼が‘イエスを信じなさい’と叫んだように思われます。しかし彼は“キリスト”に関して定義しています(使.8:12)。“ところが、ピリポが神の国とイエス・キ

リストの名について宣べ伝えるに及んで、彼らはバプテスマを受けました”。ここに“キリストの事について”のその“事”は単数でなく、複数になっているのでそれには多くのこと、教理全体を話すのであって、バプテスマを受けることも含まれているのです。ヨハ.6:40には“子を見て信じ、永遠の命を得ることが”神の意志であると私たちに告げています。その後イエスは“神のみ心を行う者は、神の教理を分かる”と話しています(ヨハ.7:17)。このようにその教理を分かるのは子を見るのと同じと話しました。キリストの言葉は、“私の言葉を守り、私の名を否まなかったからである”(啓.3:8)と、またキリストの言葉がキリストの名に匹敵するのを示しています。キリストは靈感の下で、“異邦人は彼の名に望みを置くであろう”(マタ.12:21)と言われた言葉を、“海沿いの島はその(キリスト)律法を待ち望む”とイザ.42:4を引用して、彼の名は彼の福音と等しいことを示しました。ヨハネの第二、第三の手紙には巡回伝道師に対して話しています。“彼らを神の御心に適うように送り出してくれたら、それらは願わしいことである。彼らは、み名のために旅立った者である”(ヨハ.3.6,7)。これは全世界に出て行って、福音を宣べ伝えよと言われたマコ.16:15,16の任務をほのめかしているようです。このようにキリストの名と彼の名が等しいことになっています。従って聖書的に‘キリストを信じる’と言うことはバプテスマを受けることが含まれています。“あなたがたはみな、キリスト、イエスにある信仰によって、神の子なのである。なぜなら、キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである”(ガラ.3:26,27)。パウロはキリストを信じる彼らの信仰が自動的に彼らのバプテスマで表現したことに含まれているように話しています。このようにキリストを信じることは、‘私はキリストを信じる’とただ短く口で告白するのではなく、その後に従う服従がある一つの過程であるのです。これはヨハ.6:35に良く現れています。“私に来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渴くことがない”と、これはキリストを信じることと彼に来るのが等しいのを示し、信仰が一つの過程であることを現わしています。

それゆえに、“キリスト”の伝播には一連の教理が含まれています。ルカ.9:11に神の国の福音をキリストが伝播した描写していますが(マタ.4:24と比較)、マコ.6:34には彼の福音伝播に対して、彼らに“いろいろと教え始めた”と書かれています。福音はキリストに対する数分の簡単な話だけでなく、“いろいろなこと”ことが含まれているのです。“その町で福音を伝えて、多くのことを教えた”(使.14:21)と言われたこのような句節は福音を伝えることと教えることが等しいのを示しています。もしその福音がただ簡単な話であったなら、そのように多く教える必用はなかった

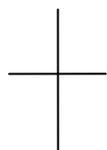


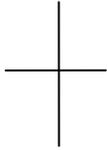
キリストに預かるバプテスマ 323

でしょう。ベレヤでパウロが福音を伝えた結果、人たちがパウロが教えているのが正しいのか毎日聖書(旧約聖書)を調べて見るようになりました(使.17:11)。従ってパウロが教えた福音は旧約聖書全般にわたっている教理に根拠するものであり、人たちはそれを彼に聞いた後一連の聖書学習の過程を経て信じるになりました。“そういうわけで、彼らのうちの多くが信者になった”(使.17:12)のでした。私たちが聖書の知識を持っていない者に福音を伝え、そしてその伝えたことを毎日学習しない者には、1世紀のその人たちよりもっと多くの時間がかかるのです。“すべてイエスのキリストであることを信じる者は、神から生まれた者である”(ヨハ1.5:1)と言うことは確かにこのような句節、“真理の言葉によって御旨のままに、生み出し下さったのである”(ヤコ.1:18)、“あなたがたが新たに生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生ける御言葉によったのである。...あなたがたに宣べ伝えられた御言葉である”(ペテ前.1:23、25)に相当するのです。このキリストが神の子であることを信じると言うことは、神の言葉に含まれているその福音を認識している事実の要約を示しているのです。

神の国の王

‘キリストを信じる’と言うことは、‘キリスト’の呼称がある句節ではキリストの国と同義語として読むことが出来ることをいったん理解してしまえばもっと意義深くなります。主はパリサイ人たちにすでにメシヤが来て彼らの中に立っているから彼を探しめぐる必用がないと彼らに告げました。彼がこれをこのように、“その国”はその国の王と等しいのを知らせながら、“神の国は実にあなたがたの真ん中にあるのだ”(ルカ.17:21)と話しました。従ってバプテスト、ヨハネの伝道にも、“神の国が近づいた”と言うのはキリストの現れを話すのでした。ネブカデネザルが夢に見たその像を打ち砕いたその石は神の国を現わしているのです(ダニ.2:44)。“これらのもろもろの国を打ち破る”のはその石/国であり、その国であるその石がその像を打ち砕くと同時に滅亡させるのです。これと同じ脈絡でエゼキエルの香栢の比喻には“柔らかい芽を摘みとり...山に植えた”その木が大きくなって、“その下にもろもろの種類が住み、その枝の陰に各種の鳥が巣を作る”(エゼ.17:22、23)と描写されました。“その柔らかい芽”(イザ.53:2)はキリストに関して話しているのです。なおそれは確かにからの種のイエスの比喻と連結されています。その内に





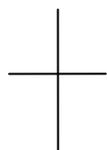
は、神の国は一粒のからの種が畑に播かれて大きな木に成長したようなもので、空のすべての鳥が来てその枝に宿ると話しています。その国の言葉とイエス自身が連結しているのは彼自身をその国の生きている言葉として示しているからです。これで‘キリストを信じる’と神の国の福音を信じると言うのが一致するのを理解出来るのです。

福音とは何か

私たちが今は1世紀の信者たちの中にあつた基本教理は何であつたかもっと詳細に討議して見るようになりました。新約聖書の時代には私たちの“信仰告白書”のような教理の本体があつたのを認定しなければならないのです。またもう一つ留意しなければならないことは予言の賜物、靈感の下で神から直接受けた啓示を受けていた兄弟たちが生きていたことです。その時はこの教理の本体に靈感によって話したことが加われたと信すべき根拠があります。

教理の本体

パウロはローマのエケレーシャに“あなたがたは、(少なくとも彼らがバプテスマを受ける前に)伝えられた教理の本体に心から服従した”(ロマ.6:17)と話しました。この“本体”と翻訳されたはギリシャ語は“手本”または“原形”とも翻訳されています。これはその教理の本体を複写した副本に対して話しているのです。これに関するパウロの話はバプテスマの前に認識すべきその教理の本体の重要性と、そしてまたそれは現在多くの教会で行っているようなバプテスマの前に述べるべき簡単な告白ではなかったのを指摘しています。そのエケレーシャの内のある者たちは“信心深い様子をしながらその実を捨てる者”(テモ后.3:5)がありました。多分彼らは信仰の基本教理を持ち続けていても、彼らの日常生活にその真理の力を認定しないでいたでしょう。パウロは“十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの前に描き出されたのも”(ガラ.3:1)読むことが出来ないかと話したガラテヤのエケレーシャにその教理を思い出させました。“描き出された”と翻訳されたギリ



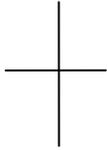
キリストに預かるバプテスマ 325

シャ語は実際に‘書かれた言葉’を意味するから、それは最初にガラテヤ人たちに教えた教理の教本を指摘しているのです

パウロが復活の教理を定義する時、私が“あなたがたに伝えたのは、私自身も受けたことであった。すなわち、キリストが私たちのために死んだこと”(コリ前.15:3)であると、彼がこのことに対して神から啓示を受け、そしてそれを彼らが受けるべき基本教理として伝えたと話しています。ペテ后.2:21、22はそれと類似することです。“義の道を心得ていないから、自分に授けられた聖なる戒めに背くよりは、豚は洗われても(バプテスマで)、また、どろの中にころがって行く(戻る)”。ここで彼らに“授けられた”“道”と“聖なる戒め”はバプテスマの洗いと連結されるのであって、彼らがバプテスマを受ける前に認識していた教理でした。私たちはバプテスマの前に理解すべき命令はただ一つでないのを示しました。従って単数の言葉のその“命令”はバプテスマの前に必ず認識すべき確かなその教理の本体であることを提示しているのです。教理と“福音”に対して教えを受けたと話した数節があります。ガラ.1:9、12;ピリ.4:9;コロ.2:6;テサ前.1:6;2:13;4:1。これらは使徒たちが始め‘受けて’彼らが伝えた“福音”がその教理の本体を構成していることを確証しています。

信仰

使徒ユダもまた“聖徒たちによって一度伝えられた信仰”(ユダ.3)と話していません。“その信仰”はバプテスマの前に彼らに伝えた“教理の本体”に匹敵するので、そしてそれが教理の本体を話している1世紀の古い(語彙)の中にある他の句節にもあるのです。パウロの勧告の言葉、“信仰の告白をしっかりと持ち続け”(へブ.10:23)といったことは、彼らがバプテスマを受ける前に信条を告白した“その信仰をほのめかしているのです。“信頼すべき言葉”を保つこと(テト.1:9)は彼らが主から始めに教えられたこの‘信仰の声明’を維持することを話しているのです。“同じうする信仰”(テト.1:4)はすべての信者が預かっている教理の本体を示しているのです。“一つの信仰”がありました(エペ.4:5)。“その信仰”とキリストの名が使.3:16に連結されています。私たちはキリストの名が“その信仰”と連結されている同じ教えの他の名であることを分かりました。キリスト教の実践的事項(テモ前.6:10)と教理(テモ前.4:1)に対して、パウロはある者たちが“信仰から離れ去るであろう”と



警告しました。教理から離脱する始めの段階は“その信仰”は定義することが出来ないと言うことです。

実践事項

実践事項もやはりその教理の本体の一部です。“キリストにある信仰”には“義、節制、未来の裁き”が(使.24:24, 25)含まれています。パウロは復活に関する教えを伝え、パンをさく記念礼拝に対することを指示しながら話しています。“私は、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである”(コリ前.11:23)。これはこのような実践すべき一つのグループがいたのを現わし、そしてそれには後ほどパウロがエケレーシャにある姉妹たちの位置に対する教えも含めています。“あなたがたに伝えた通りに言い伝えを守っているので、...

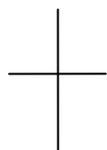
しかし、あなたがたに知ってもらいたい。...女の頭は男であり、...”(コリ前.11:2, 3)。これはバプテスマの前にこのことを必ず説明しておくことと、それが1世紀に要求していた教理の本体の一部であることを指摘しているのです。テサ后.3:6と2:15には“私たちから受けた言伝えに従わないすべての兄弟たちから、遠ざかりなさい。...堅く立って、私たちの言葉や手紙で教えられた言い伝えを、しっかりと守りなさい”。“教えにかなった信頼すべき言葉(教理と同じ文書に対する他の描写)を守る人でなければならない。それは、彼が健全な教えによって人をさとし、また、反対者の誤りをを指摘することが出来るためである”(テト.1:9)と勧告しています。

初期のエケレーシャに、自分がその教理の本体に加えなければならない教理を神から啓示で受けたと主張する“偽りの予言者たち”がいたのが分かります。パウロは靈感によって受けた教理の“信頼すべき言葉”(テト.1:9;

3:8;テモ后.2:11;テモ前.4:9)を強調し、それらは“そのまま受けるに足る”(テモ前.1:15;

4:9)、すなわち、“その信仰”を構成する教理の本体であると話しました。これが、“すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、試しなさい”(ヨハ.4:1)とヨハネが警告した理由です。

特別な事項



キリストに預かるバプテスマ 327

次のことはバプテスマを受ける前に必ず認識しなければならなかった福音の基本的の一部として教えていた単純な‘キリストにある信仰’の教理に関する明白な実例であります。

“私の福音によれば、神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事がらを裁かれる”（パウロが伝播したことの一つ、ロマ.2:16）。従って裁きの座とその責任に関する教理は‘基礎の原則’と重要視されています、使.24:25；ヘブ.6:1,2。

救いを得るには割礼を受けなければならないと言う考えは“違った福音”（ガラ.1:6）とパウロは描写しています。このようにモーセの律法、例えば、安息日などを守ってはならないことを知っているのが正しく福音を認識しているのです。

“その国の福音は”キリストに対してばかりでなく、また来るべき彼の国と話されています。イザ.52:7には（ロマ.10:15と比較）“シオンに向かってあなたの神は王（その国）となられた”と福音を伝える者と描写されています。

キリストの本性の‘良い点’を正しく認識していなければ交わりに問題が起こります（ヨハ2:7-10）。なぜならば福音にはキリストに関する事らが含まれているからです（使.8:12）。ただキリストを信ずるというのはキリスト教信者であることを充分表現するのではないのです。

その国に対する約束はその福音の重要な部分です。福音のその約束を通してアブラハム（ガラ.3:8）とイスラエル（ヘブ.4:2）に伝えられました。パウロはダビデに約束したことを伝える彼の福音は“救いの言葉”であると話しています（使.13:23,26）。従ってそれらは救いのメッセージの重要な部分です。彼は“私たちは神が先祖たちに対してなされた約束をここに述べ伝えている”（使.13:32）と話しています。それと同様に、ロマ.1:1-4では、“この福音は、...ダビデの子孫から生まれたイエス・キリスト、彼の御子に関するものである”と話しています。

その約束を理解するにはイスラエルの歴史に関する知識が必要です。使徒行伝13章、アンテオケでパウロが伝えた彼の教えには、その約束を特別に強調し、それらがイエスにおいて成就されたのを力説するためにイスラエルの歴史を要約して示しました。彼の伝えはそうようにイスラエルの歴史に基礎したものであり、福音の‘解説’と呼ばれることであり、彼の伝えたその言葉に応じない者が受けるべき裁きの結果に対して警告しているのが結論でした（使.13:40,41）。

結論

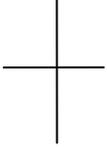
この重要性はいくら強調しても度を過ぎることはないでしょう。“自分のことと教のことに気をつけ、それらを常に努めなさい。そうすれば、あなたは、自分自身とあなたの教を聞く者たちとを、救うことになる”(テモ前.4:13-16)。付録1にある重要な教理の表を参考しなさい。それらは靈感によるのではないけれども、聖書から抽出したものであって、“信仰に関する”福音の教えのすべてであります。この学習は読者が受け入れに怠けなく、それに忠誠になることを願っている教理の本体の決定的必要性を示しているのです。この教理の本体の内容はバプテスマを受ける者たちに指示すべきことで構成されているから、彼らが完全に認識しているか必ず彼らと充分討議すべきことであります。信者が困難の時“その信仰に”くっついていくように、たびたび勧告しています。“神のゆるがない土台はすえられている”。その基礎教理に精通になり、神の完全な目的の不思議な方法を堅く保つのは、それ自体が私たちに勧告するのです。ただこのことを規則的に伝えることと復習することによってその恩典と意味をより深く自分のものに確信し、パウロが暗黒や孤独な時に話したように私たちも話すことが出来るのです。“私は走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。... 私は自分の信じたかたを知っており、... かの日に至るまで守って下さることが出来ると、確信しているからである”(テモ后.4:7; 1:12)。

脚注:主イエスを告白すること

“自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人中からイエスを蘇らせたと思ふなら、あなたは救われる”(ロマ.10:9)。

次の事を確実にしなければならないのです。

主イエスは、バプテスマを受けるに含まれている、“神の国とイエス・キリストの名”(使.8:5、12節と比較)で構成されているその教理の本体の同義語であると示しました。パウロが話したその‘信仰告白’はバプテスマの時にいたのでしょうか。彼は



キリストに預かるバプテスマ 329

この場合マコ.16:16のことばを引用したでしょう。“信じて(口で信仰告白をする者)バプテスマを受ける(死者から起き上がったキリスト)者は救われる”。

キリストの復活には地獄、あるいは墓と、人間性に対する教訓の知識が含まれているのでとても重要なことです。必ず体得していなければならない事です。

ロマ.10:8,9はその13節に匹敵しているようです。“主の御名を呼び求める者は、すべて救われる”。パウロはバプテスマを受けるのがそのように主の名を呼び求めているのを描写しています(使.22:16)。バプテスマを受けるのは私たちが主の御名を信仰すること、すなわち、主の内に入るのを意味しているのです(マタ.28:19)。

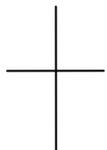
バプテスマの重要性を節まえのロマ6章で力説したので、パウロは10章ではそれが救いに必要であると話していないのです。

ロマ.10:9はその6-8節でこのように前提しています。“あなたの心にうちで、誰が天に上るであろうと言うな。...だれが底知れぬ所に下るであろうと言うな。...では、なんとやっているか。言葉はあなたの近くにある。あなたの口にあり、心にある。この言葉とは、私たちが述べ伝えている信仰の言葉である”。従って“信仰の言葉”は彼らが告白したことであり、9節の“主イエス”に匹敵することでした。私たちは福音を構成している教理の本体を描写した信仰がなんであるか分かるようになりました。パウロは“私が、今日、あなたに命じるこの戒めは、...

天にあるものでなく、... また海の中にあるものでなく、...

この言葉はあなたに、はなはだ近くあって、あなたの口にあるものである”と申.30:11-14を引用しました。彼はその“命じた言葉が”キリストに関して話していると解説しています。それと同じく、もしイスラエルがその言葉に従ったら、彼らは祝福されるのであったように(申.30:16)、新しいイスラエルがキリストにかんする言葉を信じるなら、彼らは救われるのです。従って口でキリストを告白するのはキリストに対するこの教訓に値するのです。“もしあなたが主の声に聞きしたがったら”(申.30:10)はロマ.10:9の“自分の口で、イエスは主であると告白する”と言われた言葉に匹敵するのです。この匹敵しているものはまた“主イエス”とは神の言葉の基本知識を要約しているのを示しています。

間違った解釈32:十字架につかれた犯罪者



その犯人は「言った。「イエスよ、あなたの御国の違憲を持っておいでになる時には、私を思い出してください」。イエスは言われた、「よく言うておくれ、あなたは今日、私と一緒にパラダイスにいるであろう」(ルカ.23:42,43)。この句節を持って、私たちが死の後すぐ天にゆくので、バプテスマが救いの必須条件でないのの意味すると取り扱っている者がいます。それと反対であることとは別に、この句節を綿密に読んで見たらその意味は次のようです。

- 1.キリストの死と復活に預かるバプテスマを受けよと言われた命令はキリストの復活の後に与えられました(マコ.16:15,16)。その犯罪者はキリストが彼に言われた時まだモーセの律法の下に住んでいました。
- 2.バプテスマはイエスの死と復活に連合するのです。イエスはその犯罪者に言われた時はまだそれらのことが起こっていない点を考えて見ると、バプテスマでキリストの死と復活に連合することは不可能でした。
- 3.バプテスマは私たちがキリストと共に死ぬことを象徴しているのです(ロマ.6:3-5)。その犯罪者はキリストと共に死んだ唯一な人でした。
- 4.その犯罪者はバプテスト.ヨハネが施したバプテスマを受けた人たちの一人である可能性があります。彼による改宗者の多くは以前はいかがわしい人物でありました(マタ.21:32)。その犯罪者がバプテスマを受けていたと論ずることは出来ないのです。それでバプテスマを受けよとされた命令から逃れる弁明は出来ないのです。それとその句節は‘靈魂’と‘天’に対しても話してないのです。
- 5.その犯罪者は「あなたが御国においでになる時、私を思い出してください」とイエスに要請しました。従ってその犯罪者はイエスが教えた神の国に関する福音に無知でなかったのです(マタ.4:23)。彼はその国が設立される時に裁きがあることと、イエスが死者から起き上りその裁きの審判者となることを知っていたので、その時自分を思い出して下さいとイエスに要請してのでした。その犯罪者は確かに福音に無知でなかったのです。彼は復活と裁きの日キリストの口から宣言される救いがあることを認定していました。
- 6.イエスはその犯罪者が自分と一緒に“パラダイス”にいるであろうと彼に答えました。このギリシャ語の‘パラダイス’はこの地上にある理想郷を話すのです。それは将来この地に設立される神の国で見られる回復されたエデンの園に関して使用されています(啓.2:7)。神の国が設立された時、この地に対した呪いが廃止さ

キリストに預かるバプテスマ 331

れるので(啓.22:3)、この世はエデンの園のような状態にもどるでしょう(イザ.51:3; エゼ.36:35)。ギリシャ語の旧約聖書(70人訳本)にはその言葉‘パラダイス’をこの地の理想郷として使用されています、伝.2:5; ネヘ.2:8; 雅.4:13; 創.13:10。Miltonの作り話、‘失樂園’だけその‘パラダイス’が天にあるように使用されています。イエスがその犯罪者に約束したその‘パラダイス’は彼に答えた通りキリストの国でした。私たちはその国がこの地に設立されことを学習5で示しました。だからその‘パラダイス’はその国であるのです。

- 7.その43節の翻訳はあたかもキリストとその犯罪者がその当日‘パラダイス’に行ったようになっていました。しかしその国は当時この地に設立されていなかったのです。だから彼らはその日その国に行かなかったのです。イエスは墓に行きました(使.2:32)。彼が予言したように、彼が十字架で死んだ後、“三日三晩、地の中に”いました(マタ.12:40、16:21と比較)。彼が復活した後も、彼は、“私にさわってはいけない。私は、まだ父のみもとに上がっていない”(ヨハ.20:17)と話しました。それでイエスは彼が死んだその日天に行かなかったのです。

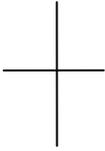
なおイエスはその犯罪者に“「あなたは今日私と一緒にパラダイスにいるである」”と約束してように思われます。この矛盾的イエスの答は本来のヘブル語とギリシャ語の原本の文章で正しい回答を得ることが出来るのです。その文章には句読点とか大文字がないのです。だから、その翻訳は、“イエスは言われた、「良く言うておくが、あなたは今日、私と一緒にパラダイスにいるであろう」”(ルカ.23:43)でなく、「今日あなたに、言うておく」と、今日の言葉のあとに句読点をつけるのが正しいのです。多くの聖書訳本がありますが、Rotherham訳本とか Companion

Bibleはその句節を最も正しく解釈しています。その句節を意識すれば、イエスがその裁きの日自分を思い出して下さいと言ったその犯罪者の要請に‘私が今あなたに告げる、あなたはその裁きの日に宣言する判定を待つ必要がない。あなたは私と一緒にその国にいるである’と彼に確証して下さったのです。

- 8.上記の注解の要点をまとめるなら、その犯罪者が認識していた教理を次のように表を作ることになります。

神の国

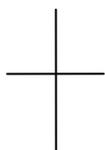
キリストの再臨

**復活と裁き****裁きに対する責任****キリストを信ずる信仰による救い****キリストの復活****キリストの品性 “この方は何にも悪いことをしたことがない”****キリストを従うべきこと****キリストは罪がない人**

それゆえに、誰でもキリスト教にわずかな関心を持っていても、その人は救われることが出来ると考え、この十字架の犯罪者に事寄せるのは適切でないのです。彼が持っていたその基本的教理を持っていなければ救いを得ることが出来ないのです。これがない者は、その信仰と言う名の起き上がりを得ることが出来ないでしょう。キリストは、“あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、また私たちも救って見よ”と言ったこの態度の他の犯罪者には救いを与えることが出来ないのです。その人が言ったのは、‘このイエスに何の望みがあるか。彼から得るものはなにもない’。それは、彼がキリストに対して関心を持っていたけれども、彼にはその第二の犯罪者の如く、世の末の日、本当に救われることが出来るその教理の認識が欠乏していたためでした。

間違った解釈33:模範的バプテスマ

読者に適切なバプテスマ儀式を施行させるために、次の実例を提示します。それは1990年11月の土曜日に英国のHartlepoolで施行されたChristadelphianのバプテスマ儀式であります。バプテスマ儀式にいつも注意しなければならぬのは、バプテスマを受ける者は福音の知識の完全な認識と信仰で、悔い改めた後であり、その儀式は全身を水に浸すことでもあります。その儀式は機会の重要性を与えるために例外の方法を選択することも出来ます。その施行順序は次のようでした。



開式の祈り

ローマ書6章奉読

バプテスマに関する短い挨拶

祈り

屋内プールで浸礼を施した

祈り

バプテスマの辞

今日は山村一郎さんには生涯最も意義ある一日であると思います。彼は数分の後、水の中に入って出て来ることによって、アブラハムに福音となったその約束を持っている、彼の子孫である、“キリスト”の中にある者になるのです。

この極めて単純な行動がそのような驚くべき結果を持って来るとは信じ難いと思いますけれども、この水に浸すことによって、ロマ.6:3-5節までの通り、私たちは山村さんがイエスの死と復活に連合する者と完全に信じています。

“それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスに預かるバプテスマを受けた私たちは、彼の死に預かるバプテスマを受けたのである。すなわち、私たちは、その死に預かるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、私たちもまた、新しい命に生きるためである。もし私たちが、彼に結びついてその死の様に等しくなるなら、さらに、彼の復活の様に等しくなるであろう” (ロマ.6:3-5)。

私たちは山村さんが水から上がる時彼が死からよみがえるイエスと連合されるのを考えました。では、数分のあいだイエスの復活の光景を瞑想して見ましょう。

私たちは夜の空気の新鮮さと静けさ、そしてイエスの内にある栄光な新しい命を感じることが出来ます。彼は遠くでちらちらするエルサレムのライトを見ることが出来たでしょう。そこにいたすべての人が彼らの近くで起こっている素晴らしいこと、一人の人が死者から新しい命で起き上がっていることに全然気づかなかったでした。

そのように山村さんが水から起き上がったこと、栄光なことが起こっているのを私たちの周囲の世は感知していないのであります。彼らが見て考えているのは、一つの少ないグループの男女が屋内プールで一人の男を水に入れてから、引きあげたのでしょ。しかしイエスの復活で多くの天使たちが喜んだように、今私たちには見えないですが、その天使たちが悔い改めた一人の罪人に対して喜んでい

。私たちはローマ書6章で“新しい命で生きる”と言われたことばを読みました。今山村さんが持っている喜びは、その新しい命のために生きるからであると思いません。私たちが読んでいるように、彼はもう既に罪の奴隷ではなく、神の僕であって、聖書に啓示されているように神の意志によって行うのであります。私たちは自身のために自由になりたいと誘惑に落ちるかも知れないでしょう。しかし自身に奉仕するのは自由になるのではなく、むしろ罪の奴隷になるのです。山村さんは今主人を代えて、神に奉仕するのです。私たち課されたその新しい命で生きるのは一見制約があるように思われて、それから逃れようとすることもあるでしょう。しかし、もしも私たちがそうすれば、それは自由になるのではなく、再び罪に奉仕するのであります。

パウロはコリ前書10:1,2で、私たちがバプテスマの水を通過するのは、イスラエルが紅海を通過したのと同じと説明しました。この比喩の言葉で私たちは多くの教訓を学ぶことが出来ます。イスラエル人たちはエジプトで奴隷として、何の目的もなく生き、難しい仕事をし、エジプトの偶像に奉仕していました。彼らはその難しい生活から逃れようと、彼らにどんな応答があろうか知らなかったけれども、遂には神に訴えるようになりました。

彼らに応答して、神は彼らをエジプトから引き出し、紅海を渡って、荒野を通して、約束の地に入るように、モーセを遣わしました。エジプトにいたイスラエルは皆山村さんのように、そこから出て来てバプテスマを受けました。彼らが紅海の岸から導かれたように、今から山村さんも導かれて行くのであります。彼が一度水を通過



キリストに預かるバプテスマ 335

して、すぐにその約束の地、神の国に入るのではなく、彼はここにある私たちと一緒に
なって荒野を通して行くのであります。神は一人の天使を遣わして昼も夜もイスラ
エルと一緒にいながら彼らを導いて荒野を通過して行きました。そのように、私た
ちも各自が一人の天使に連れられて、その命の救いに向かって導かれています(詩34:
7; ヘブ.1:14)。

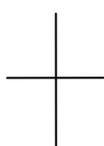
神は荒れ野で毎日イスラエルにマナを与えて養いましたが、そのマナはヨハ6章
で神の言葉であるイエスだと解説しています。彼らはそれを食べなかったらその荒
れ野ですぐ死んでしまったでしょう。そこには他の食べ物はなにもなかったのです
。だから、私たちは山村さんが“聖書読み方手引き表”によって毎日聖書を読むこ
とを命令するのです。そのためには毎日の過程で一定の時間を決めて、毎日その時
間にいくページを読み、それを瞑想して見るのが重要なことでもあります。

イスラエルがその荒野を通して進行する時食物として与えたそのマナは、一日
に沢山集めて貯えるのではなく、ただ一日分だけ集めて毎日貯えるようになってい
ました。私たちがその言葉によって養われるのもそれと同じく毎日聖書を読むので
あります。私たちが食物を忘れなく食べるように、神の言葉で毎日養われるように
努力しなければならないのです。神の言葉を“必要な食物よりもっと重んじた”と
話したヨブのように神の言葉を尊重しなければならないのであります。

またイスラエルが岩から流れ出る水を飲んだ、その岩は、コリ前.10章で、“キリ
スト”を現わすと説明しています。

そのように、私たちはイエスの模範を食べ飲むべきであります。それは私たちが
毎週行う記念礼拝によって出来るのです。その集いとは、その望みに預かっている
他の人たちと会いたくなる私たちの自然的欲求であるのです。実際荒れ野を旅してい
る旅人が他の旅人に会った時、彼らは口では到底表現出来ない感激で迎え彼らの前
に置かれている問題についてお互いに話し合い、お互いの経験を分かち合うのです
。そのように私たちは、この悪の世の生活の荒れ野でお互いに紐帯を堅くするよう
に努力せねばならないのです。時たま私たちは肉身のためにこの集いを持つことが
出来なくなるでしょう。しかし手紙とか、あるいは会誌などによって接触を保たな
ければならないのです。

私たちは新しい生活をすべき責任があります。しかし私たちが毎日聖書を読む
ことなど、ある一定したことをするので神が私たちに何か補償するものではありません
。それは神の意志であり、彼を喜ばしめるのであります。神が私たちに与えるの



は彼の賜物であり、私たちの業による報償ではないのです(ロマ.6:23)。バプテスマを受けたから神の国に入れるのが充分であると考えるのは大間違いです。私たちには神の真理と愛、キリストの勝利をもっとそなえなければならないのです。神は本当にやまむらさんと私たち皆がその国に入ることを欲しておられます。私たちは神の愛に対していかに応答すべきか考えて、それが実際になるようにいつも思い出すこの事実は栄光なことでもあります。

イスラエルが紅海から出て来た時はとても大きい喜びがありました。それをモーセが唄でうたいすべての人が喜びました。詩.105:35-41には、彼らの旅に必要なすべての物を与えた神に感謝する、彼らの感謝が良く現われています。

“主が言われると、いまごが来たり、無数の若いいなごが来て、彼らの国(エジプト)のすべての青物を食いつくし、その地の実を食いつくした。主は彼らの国のすべてのういごを撃ち、彼らの国の力の始めを撃たれた。そして金銀を携えてイスラエルを出て行かせられた。その部族のうち、一人の倒れる者もなかった。エジプトは彼らの去るのを喜んだ。彼らに対する恐れが彼らに臨んだからである。主は雲をひろげておおいとし、夜は火をもって照らされた。また彼らの求めによって、うずらを飛び来らせ、天から、かてを豊かに彼らに与えられた。主が岩を開かれると、水がほとぼしり出て、かわいた地に川のように流れた”。

ここに喜んでいる、あなたのバプテスマの立会人になっている、あなたの将来の兄弟と姉妹の喜びがあります。これはまた今私たちを熱心に見守っている神とイエス、そして天使たちの喜びであります。私たちみながこの望みと喜びを“最後までしっかりと持ち続けて”、その国で一緒に歩けるように祈ります。

学習10: 問題と解答

1.バプテスマを受けなくとも救いを得ることが出来ますか？

2.バプテスマと言う言葉はどんな意味です？

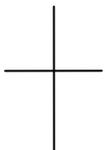
- a) 信頼する
- b) 水を振りまく
- c) 信ずる
- d) 水に浸ける

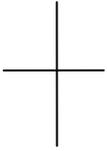
3.ローマ書6:3-5バプテスマをなんと説明していますか？

4.何時バプテスマを受けなければならないですか？

- a) 福音を学んだ後悔い改めて
- b) 幼い子供の時
- c) 聖書に関心を持った後
- d) 教会にのメンバーになる時

5.私たちはなにによってバプテスマを受けるのですか？





338

キリストに預かるバプテスマ

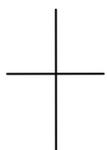
- a) 教会
- b) 神の言葉
- c) キリスト
- d) 聖霊

6.バプテスマを受けたら私たちは次の何が起こるのですか？

- a) アブラハムの子孫になる
- b) 再び罪を犯さない
- c) 完全に救われる
- d) 私たちの罪が赦される

7.バプテスマを受けるだけで救いを得られますか？

8.バプテスマを受けた後私たちは聖霊の賜を受けますか？



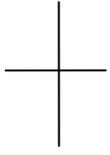
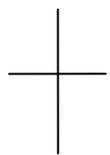
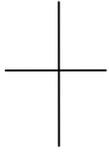


写真 11

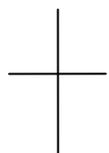




学習11

キリストに合う

生活



11.1 序論

バプテスマは永遠の命を得ることが出来る確実な望みを私たちに与えるのです。私たちがこの望みを認識し確信するに従って、私たちに課したその責任はもっと確かになるのです。この責任が神の本性を受けべき望みを持っている者に(ペテ后.1:4)相応する生活を営む者と、どの点から見ても完全になるのを通して神の名に実際預かるべき者(啓.3:12)の考えに思い巡るのです。

その学習10.3で説明したように、バプテスマの後私たちはいつも肉性の悪欲を十字架につけて生活するようになっていきます(ロマ.6:6)。もし私たちがこのようにしなければ、バプテスマは意味がないのです。バプテスマを受ける者はバプテスマに従う新しい生活、イエス・キリストに合う生活を営む責任を持っているのです。

バプテスマで私たちはその古い肉の命の生活が死に、そして比喩的に私たちはキリストと共に復活したのです。“このように、あなたがたはキリストと共に蘇らされたのだから(バプテスマによって)、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない。あなたがたはすでに死んだものであって、あなたかたの命は、キリストと共に神のうちに隠されているのである。私たちの命なるキリストが現れる時には、あなたかたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう。だから、地上の肢体、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪欲、また貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像崇拜です”(コロ.3:1-5)。バプテスマの後私たちはこの世に対する熱望を取り替えて私たちの肉性を克服して神の国に入れるようにし、神の見地で物事を見る生活、すなわち、霊的生活をするようになっているのです。

人間の肉性は発作的に神に服従する熱情を示す傾向があります。神は度々この傾向に警告しています。神の命令に関して、彼は“その子どもたちは私に背き、私の定めに従わず、人がこれを行うことによって、生きることの出来る私の掟を守り行わず”(エゼ.20:21)と話しています。もし私たちが神の命令に気づけるなら、私たちは生涯彼の命令に服従するになっているのです。その掟を守るのは、まずバプテスマを受けることであり、その命令に服従を始めるのであります。

11.2 聖潔

“聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ” (イザ. 6:3)。この節にある三重の強調は神の聖なるのを力説している多くの句節の中の一つであります。その‘聖’と言う言葉は不潔なことからの‘靈的のこと’に‘分離’、あるいは‘別れている’のを意味しています。私たちは“神に習う者になれ”(エペ.5:1)と頼まれています。従って“私たちを召し下さって聖なる方に習って、あらゆる行ないにおいて聖なる者にならなければならないのです。なぜなら、聖書に、私が聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきであると書いてあるからです”(ペテ前.1:15,26; レビ.11:44)。

肉のイスラエルはエジプトから召し出されて紅海でバプテスマを受けるによって一つの“聖なる民”となりました(出.19:6)。私たちがバプテスマを受けて靈的イスラエルになることによって“聖なる招きをもって召し下されて”いるのです(テモ后.1:9)。バプテスマの後私たちは“義の僕となって、...清きに至る実を結ぶになっているのです”(ロマ.6:19,22)。

聖なることは神の性格の要素の一つであるので、それは“神を習う者”彼の子らにはすべて根本的に関係があるのです。もし私たちがそれを果したら、私たちは将来神の本性が与えられる時に“彼の清さに預かることが”出来るのです(ヘブ.12:10; ペテ后.1:4)。従って私たちにその清さがなくては、“誰も神を見ることが出来ないのです”(ヘブ.12:14)。すなわち、この世でその清さを保つ努力がなければ、神の国で実際神との関係を持つことが出来ないようになるのです。

私たちにこのような偉大なる望みが与えられたことには、この望みを持っていないこの世とは分離されて、神の本性に預かる永遠な者になっているのを意味しているのです。従ってその‘分離’は私たちが強めるのではなく、自発的にするのです。私たちはこの高尚な召命と望みに分離されているから、その肉性の原則によって支配されるこの世のことから分離するのは当然なことであります。

私たちクリスチャンはこの世の社会制度、文化、宗教からすでに分離されていることに関してはいつも深く考察しなければならないのです。その実際的事項等に関しては学習11.3で研究して見ましょう。

11.2.1 暴力使用

私たちは罪が支配している世に住んでいます。学習6.1で調べて見たように、人間の政権は、それらが肉の欲、すなわち、聖書の‘悪魔’で構成されているから、‘悪魔’であると呼ばれているのです。

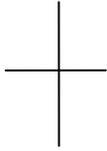
聖書に繰り返しているメッセージは、簡単に話せば、罪と蛇の子孫が勝利しているように現われるのに対して、女の子孫はいろいろな受難の後に、究極には義とされるのです。こゆえに信者には絶えず“悪人に手向かうな”(マタ.5:39; ロマ.12:17; テサ前.5:15; ペテ前.3:9)と命令しているにののです。

私たちは悪が究極的には神が許してこの世にもたらしたことを認めています(イザ.45:7; アモ.3:6; 学習6.1と比較)。従って積極的に悪に対抗するのは神に対して戦うのです。これゆえにイエスは私たちに悪の勢力に暴力で対抗するなど命令しています。“しかし、私はあなたがたに言う。悪人に手向かうな。もし彼があなたの右の頬を打つなら、ほかの頬も向けてやりなさい。あなたを訴えて、下着を取ろうとする者には、上着も与えなさい”(マタ.5:39,40)。キリストはこれに模範を示しています。“私を打つ者に、私の背をまかせた”(イザ.50:6)。

キリストの言葉は信者に対立するこの世の法に訴えることと関係があります。それを行うことは悪に対抗するのであって、“復讐は私のすることである。私自身が報復すると主が言われた”(ロマ.12:9)神の約束を堅く信じている者たちはなすべきことではないのでしょうか。“私が悪に報いると言ってはならない、主を待ち望め、主はあなたを助けられる”(箴.20:22,申.32:35と比較)。これゆえにパウロは同僚の信者をこの世の法に訴えているコリントの信者を非難しました(コリ前.6:1-7)。

私たちの望みの偉大さを考えて、私たちはこの世の不義に関心を持つべきではないのです。“あなたがたの中の一人が、仲間の者と何か争いを起こした場合、...正しくない者に訴え出る様なことをするのか。...聖徒は世を裁く者である事をあなたがたは知らないのか”(コリ前.6:1,2)。土地の所有権とか離婚の問題とか、いかなる問題でも、世の法に訴えることは信者のすべきことではないのです。

悪の力制圧すると共に、悪人の暴力を防衛するために、人間の政権の軍隊、警察の力が使用されています。これらは悪に暴力で対抗している制度的団体であるから



、信者はこの団体に加担してはならないのです。“剣をとる者はみな、剣で滅びる” (マタ.26:52)。これは初期の神の原則でも繰り返し命令しているのです。“人の血を流す者は(故意に)、人に血を流される。神が自分の形に人をつくられたゆえに” (創.9:6)。だから、誰でも故意に人に対抗するのは、神の裁可ない限り、神に対抗することになります。

クリスチャンの時代になっては、“敵を愛し、憎む者に親切にせよ。呪う者を祝福し、辱める者のために祈れ” (マタ.5:44;

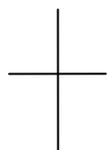
ルカ.6:27)とされています。兵力とか警察力は神の原則に直接違背するから、信者はそれらに加担してはならないのです。たとえ直接に暴力に加担しないでも、それらの団体に働き、あるいは雇用されるのは確かに信者のすべきことではないのです。これらの職業を持つ時はそれらの当局に忠誠を誓って始めるから、それは神の命令に従う信者の良心に呵責を与えるのです。従って、信者はいかなる暴力にも良心的に考えて、それが国家に有益であっても神に対する良い良心を守らなければならないのです。

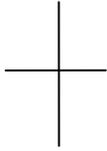
11. 2. 2政治

私たちが神の国が来ることを確かに認識し、それを堅く信じていると、人間の政権がこの世に完全な社会をもたらすことが出来ないのを認定するでしょう。それゆえに、いかなる方法でも人間の政権に加担するのは神の国の望みと相いれないのです。イエスは“末の日”、彼が帰り来る直前は世のすべてがますます悪くなると予言しています(ルカ.21:9-11,25-

27)。彼の言葉を信ずると同時に人間の政治でこの世を改良しようとする事は出来ないのです。‘良きサマリヤの人’の比喩で、クリスチャンが“機会があるごとに善を行うように” (ガラ.6:10)、この世を助けることを指示しました。

初期の信者たちを書いて送った手紙には、彼らがキリストの帰りを期待して霊的生活を営む事、主に人たちに伝道を通してこの世に関心を現わす事を示しています。彼らに話した事には、社会や経済の改良、あるいは政治的問題を論じたことが全然ないのです。





キリストに合う生活 345

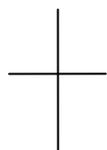
“歩む人が、その歩みを自分で決めることの出来ないことを” (エレ. 10:23) 知らなければならないと話しています。人間の肉性が根本的に悪性であることを認識するなら、人間の指導者が神の民を、導くことが出来ないのを充分認定するでしょう。それゆえに選挙なんかもこの原則に反することです。“いと高き者が人間の国を治めて、自分の意のままに、これを人に与える事を知るであろう” (ダニ.4:32)。人間の政権も結局神が与えたのです(ロマ.13:1)。いわゆる民主主義の方法の選挙で人間の政権を代えようするのも神が権力を与える原則に違背するのです。このように神がある国をバビロンの王、ネブカデネザルの支配に置いたと記録されています(エレ.27:5,6)。

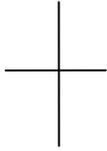
神が人間の国を彼らの統治者に与えたのを認定するので、私たちは模範的に私たちが住んでいる国家の法律に従わなければならないのです。そんなにしないと私たちはキリストの法律に背くのです。“すべての人は、上に立つ權威に従うべきである。なぜなら、神によらない權威はなく、おおよそ存在している權威は、すべて神によって立てられたものだからである。...あなたがたが貢ぎを納めるのも、また同じ理由からである。...あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果しなさい。貢ぎを納むべき者には貢ぎを納め、税を納むべき者には是を納め、...敬うべき者は敬いなさい” (ロマ.13:1-7)。

それゆえに、いわゆるクリスチャンの政治団体とか、税金のボイコットなどに加担するのは、私たちが習んだこの聖書基本原則を軽視するのです。しかし、ペテロはキリストを伝えることが政府から禁止されても、それを継続しました。それは、信者はキリストの法と矛盾しない世の法律のみ服従することを示しているのです。“神に聞き従うよりも、あなたがたに聞きしたがう方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい” (使.4:17-20 ; 5:28,29)。

11. 2. 3 世俗的歓楽

神と関係を持っていない、また将来に対するその望みも実際ないから、この世は歓楽を求めているいろいろな遊びが考案されています。靈的心に発展しようとする者たちは肉の歓楽を求める者たちと人づきあいを避けなければならないのです。“肉の





欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反する”(ガラ.5:17)。この根本的反対のゆえに、私たちは肉の歓楽を求めながらまた霊に従うと主張するのは論理的に正しくないのです。この世は“肉の欲、目の欲、持ち物の誇り”(ヨハ1.2:16)で構造されているのです。“この世を友とするのは、神への敵対である事を、知らないか”(ヤコ.4:4)。この世の友たち、歓乐的映画を見ることなどは、みな“この世の友”となるのです。この世の欲と、またこの世の友たちはまもなく過ぎ去ります(ヨハ1.2:15-

17)。“悪しき者の支配にある”(ヨハ1.5:19)、“不敬虔なこの世は”主の帰りににおいて滅ぼされるでしょう(ペテ后.2:5)。私たちがその滅びから逃れようとするれば、“この世の者”(ヨハ.17:16,啓.18:4と比較)にならないようにしなければならないのです。

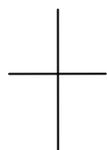
私たちの肉を満足させる世の歓楽を求めると体の健康に代価を払わなければならないのです。喫煙、過飲、薬品中毒などがその実例です。私たちの健康、財産、すべてが実に神のものであります。従ってこれらを私たちの気ままに使用することが出来ないのです。私たちは神からそれらを与えられた家令として良く行動しなければならないのです。私たちは裁きの座でその管理に対して問われることになっています(ルカ.19:12-

26)。喫煙や過飲の悪い習慣は私たちの財産をなくし、健康を害うのです。“あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。もし、人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。...あなたがたの体は、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮である。...あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分の体を持って、神の栄光をあらわしなさい”(コリ前.3:16,17;

6:19,20)。従ってそのような悪い習慣で健康を害うと言うのは深刻な問題です。

しかし、それらの悪い習慣が改宗の前に造られたのなら、一瞬間にそれらを切ることが出来ないでしょう。では、その習慣が悪いことと認定して、それらを止めようと努力するのです。人生のストレスは、何か人間の方法で休ませるのでなく、神の言葉と祈りに頼んで対処すべきであります。

11.3 信者の実践的生活



11.3.1 聖書学習

バプテスマを受けた後、私たちは、肉でなく霊に導かれる生活で“きよきに至る実を”結ばなければならないのです(ロマ.6:22; 8:1; ガラ.5:16,25)。それは私たちが霊の実を結ぶ私たちの内にある神の言葉を通して出来るのです(ヨハ.15:7,8)。私たちは神の霊である神の言葉があるので、その霊に導かれているのです。私たちは規則的に聖書を読み学習することによって生涯を通してその言葉と緊密にならなければならないのです。

その言葉を思慮深く学習する者はバプテスマが重要な事を認識して、それを受けようになります。神の言葉が影響を与え、私たちの生活を指示するこの過程は私たちの生涯継続するのです。しかし、バプテスマは生涯神の言葉に従うと決心する第一歩です。私たちが聖書と福音の基本教理に精通していても、その言葉が私たちに何の影響も与えることが出来ないから、信者のあたりまえの位置に導くことが出来ないとても危険な時があります。私たちが聖書を読んでもそれが私たちになんの実践的効果も与えていないのです(付録2を見なさい)。これゆえに、私たちは聖書を読む前に簡単な祈りを上げるのが賢明であります。“あなたの僕を豊かにあしただって、生きながらえさせ、み言葉を守らせてください。私の目を開いて、あなたのおきてのうちのくすしき事を見せて下さい”(詩.119:18)。

神の言葉は私たちが食べるべき日ごとの食物にならなければならないのです。実に、それに頼り、自動的にそれを願って、実際の食物に対する本能の食欲よりもっとそれを願うようにならなければならないのです。“私は彼の唇の命令にそむかず、その口の言葉を私の食物よりも重んじた”(ヨブ.23:12)。エレミヤはそれと同じく話しています。“私はみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は、私に喜びとなり、心の楽しみになりました”(エレ.15:16)。それゆえに、毎日規則的に聖書を読む時間を決めておくのがとても重要です。毎朝は早く中断されない30分間の聖書学習は毎日霊的ギアをかけて出発するのです。このように信仰生活は、将来裁きの日に金の価値を発揮するでしょう。

私たちはただ読みやすい部分のみ読む自然的傾向を避けるために、Christadelphianたちは“聖書読み表”(この表は著者に注文すればいつでも送っています)が考案

されて、その表に従って読んでいます。それによって毎日読めば、一年に新約聖書全体を二回、旧約聖書全体を一回読むことが出来ます。私たちは日ごとに読みながら、世界の数千、数万の信者の兄弟姉妹が同じ章を読んでいることを思い出して勇気を得られるのです。従って、彼らと何処で合うことになっても、直ちにきずなになり、自分が最近読んだ章を会話の根拠にして楽しく話し合うことが出来るのです。

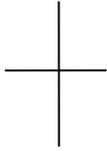
11.3.2 祈り

私たちを霊的に発展させるもう一つの実践すべき重要なことは祈りです。私たちがいつも記憶すべきことは、“神と人との間の仲保者もただ一人であって、それはキリスト・イエスであり、彼は、すべての人のあがないとしてご自分を捧げられた”と言われたことです。パウロはキリストの使役を認識する結果、この実践を聖徒に強いています。“男は、怒ったり争ったりしないで、どんな場所でも、清い手を上げて祈って欲しい”(テモ前.2:5,8)。“この大祭司は、私たちの弱さを思いやることの出来ないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、私たちと同じように試練に会われたのである。だから、私たちは、哀れみをうけい受け、また、恵に預かって時期を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵の御座に近づこうではないか”(ヘブ.4:15,16)。

キリストが私たち各自の祈りを神に上げる大祭司であることを実際認識すると私たちは信仰を持って規則的に祈るように靈感を与えるのです。しかし、祈りはただ神に差し出す‘要求の表’ではないのです。食事の前に感謝を上げ、旅の安全を保ように頼むことなど、私たちの祈りに含まれる重要な部分です。

祈りでただ私たちの問題を主の前に差し出すことによって、それ自体が私たちに大なる平安を与えることが出来るのです。“何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝を持って祈りと願いとをささげ、あなたの求める処を神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るであろう”(ペリ.4:6,7)。

もし私たちの祈りが神の意志に従うならば、それは確かに応答されるのです(ヨハ1:5,14)。私たちは彼の霊/心を私たちに現わした彼の言葉を学習するによって神の意志を知ることが出来るのです。それゆえに、私たちの聖書学習はいかに、またなんのために祈るかを教えて、私たちの祈りを強くするのです。従って“私の言葉が



キリストに合う生活 349

あなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう” (ヨハ.15:7)。

聖書には規則的祈りを行った多くの実例があります(詩.119:164; ダニ.6:10)。朝と夕方、少なくともその日の間に起こった事に対して感謝する短い祈りを持たねばならないのです。

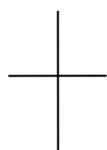
11.3.3 伝道

神を本当に認識してから起こる大きな誘惑の一つは私たちが霊的利己主義者になるのです。私たちは自分自身と神の関係だけに満足し、自分自身の聖書学習と霊的なことのみで夢中になって、この関係を他の人たちと、すなわち、同僚の信者たちとこの世の人たちに分けることをおろそかにするのです。神の言葉と福音は闇に照らすあかり、あるいはランプであります(詩.119:105; 箴.4:18)。イエスは誰でもそのような明かりを持っている者がその明かりを柵の下におかないで、人々のまえに輝かすと指摘しています(マタ.5:15)。私たちはキリストに連合するバプテスマを受けたので、“世の光”となっているのです(マタ.5:14; ヨハ.8:12)。“あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることが出来ない”(マタ.5:14)とキリストは話しています。

私たちが本当に私たちが認識している福音に従って生きるならば、私たちの‘清さは’ 私たちと共にいる者たちに明らかに現れるでしょう。私たちはその国の望みに分離されており、またこの世の生活法から‘分離されて’ いるから、その事実を隠すことが出来ないでしょう。

私たちは日ごとと接触している人たちと私たちの真理の知識を分けるのが適切な伝道方法です。霊的なことに関して会話を導き、他の教会の信者たちと聖書教理の討議、伝道のパンフレットの散布、地方の新聞に広告を載せる等、すべての手段を動員して私たちの明かりを照らすべきです。福音の証人の自分の役割を他の信者に任せるとはいけません。私たち各自が責任があります。Christadelphianは比較的小さな団体であるけれども、他の宗教団体に比べて大きなスケールで伝播しているのです。

もっとも効果がある伝道は家族や親戚そして日ごとと接触している親し人たちに自分が信じていることを説明するのです。また信仰に入っていない配偶者には自



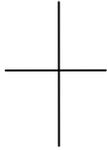
分の信仰を確かに説明するのは勿論、一度説明して受け入れないから止めるのでなく、くり返し教えなければならないのです。圧力によって改宗させるのは神が願うのではないのです。反応する者の多寡にかかわらず、私たちの義務はただ真理を立証することです。私たちはこの立証に対してとても大きい責任があるのです(エゼ.3:17-

21)。もしキリストが私たち生涯に帰り来るならば、“二人の男が畑におれば、一人は取り去られ、他の一人は残される”(ルカ.17:36)ようなことが起こるでしょう。もしこのようなことが起こったとすれば、自分の家族や職場の同僚に主の再臨に対して伝えなかった心情がどうであろうか想像してみなさい。

11.3.4 エケレーシャ生活

今までの学習では私たち各個人の霊的責任に関して話しました。しかし、私たちはその望みを持っている他の信者たちと互いに集会を持つ義務があるのです。これは自動的に集まることでなければなりません。私たちはバプテスマを受けた後神の国に向かって荒れ野の旅に入ったのです。私たちが他の同僚旅人と合いたくなるのはあたりまえのことです。私たちはキリストが帰り来る直前の時代に生きているのです。この時代私達を攻めたてている多くの複雑な試練を克服しなければならぬから、同じ立場にある者たちと交わりを持つ必要があります。“集会は止めることはしないで互いに励まし、かの日(キリストの再臨の時)が近づいているのを見て、ますます、そうしようではないか”(ヘブ.10:25, マラ.3:16と比較せよ)。従って信者たちはお互い手紙を出して連絡し、聖書学習、記念礼拝、伝道に預かるのために旅することに努力しなければならないのです。

私たち各自は神の国の偉大なる望みにこの世から‘召し出されたのです。聖徒と言う言葉は‘召し出された人’を意味し、過去のいく人か著名な信者たちに対して話すのでなく、真の信者皆に対して話す言葉です。また‘教会’と翻訳されているギリシャ語‘エケレーシャ’は召し出された者たち、すなわち、信者たちを意味しています。従って、教会は集い場所、ビルディングを話すのでなく、信者の団体を意味するのです。この過ちを避けるために、Christadelphianは教会の代りにエケレーシャと呼んでいます。



キリストに合う生活 351

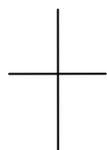
ある都市や町にいく人かの信者があれば、彼らは規則的に集まることが出来る集いの場所を求めるのが当然であります。これは信者の家とか一つのホールを貸してもいいのです。Christadelphianのエケレーシャ・ホールは大抵町の会館とかホテルの会議室を貸し、あるいは彼ら自体の建物もあります。エケレーシャの目的は共同の聖書学習によって会員の霊的向上を計り、また伝道によって彼らの明りをこの世に照らす共同的証人となることとあります。キリストアデルフィアン・エケレーシャの代表的スケジュールは大体次のようになっているのが普通です。

日曜日	11. a.m.	記念 礼拝
	6. p.m.	公衆 伝道
水曜日	8. p.m.	聖書 学習

エケレーシャは神の家族の一部です。各自がお互い密接な結合であるこの共同体は、各自が他の者たちの立場を考慮し、彼らに従順であるべきです。キリスト自身がこれに対して最高の模範を示しています。イエスは霊的に勝っていたけれども、“皆に仕える者”として行い、誰が頭であるかと争っていた弟子たちの足を洗って下さいました。イエスはこのように彼の模範に従えよと告げました(ヨハ.13:14、15; マタ.20:25-28)。

当時弟子たちに与えられたいた奇蹟的聖霊の賜物は今撤収して、初期のエケレーシャにいた‘長老たち’の地位はなくなってしまいました。“あなたがたの先生は、ただ一人、キリストであって、あなたがたはみな兄弟なのだ”(マタ.23:8)。従ってChristadelphianのエケレーシャでは、この世の身分にかかわらず、お互いに‘兄弟’あるいは‘姉妹’と呼んでいるのです。勿論、永い間信仰生活をして来た信仰の先輩とか、あるいは一切を神の言葉に任せて短時間に霊的成長を持つ兄弟を尊敬しています。このような兄弟の忠告は神の言葉に従うと求めている者たちにとっても価値があるのです。しかし、彼らはただ他の兄弟たちが神の言葉を正しく反映するように忠告するだけです。

エケレーシャに与えている教えは確かに神の言葉に根拠していることだけです。従ってエケレーシャで公衆的に話している者たちは、神の代りに、彼の意志を反映するのです。神が男性になっているので、エケレーシャでは兄弟だけが公衆的に神



の言葉を教えることになっています。コリ前.14:34には“婦人たちは教会では黙っていなければならない。彼らは語る事が許されていない”と明らかに書かれています。テモ前.2:11-15ではエデンの園で起こった事件までその理由を追求しています。そこでは、エバがアダムに罪を犯す事を教えているから、女は男を教えるはならないと規定しています。神がエバの前にアダムを造った事実が“女の頭は男である”徴であり(コリ前.11:3)、従って男が霊的に女を導かなければならないのです。

このことのために、“女は静かにして、万事につけ従順に教を学ぶがよい。女が教えたり、男の上に立ったり擦ることを、私は許さない。むしろ、静かにしているべきである。アダムが先に造られ、それからエバが造られたからである。またアダムは惑わされなかったが、女は惑わされて、過ちを犯した。しかし、女が慎み深く、信仰と愛と清さを持ち続けるなら、子を産むことによって救われるであろう”(テモ前.2:11-15)と話しています。

これは、聖書が確かにエケレーシャで働く男と女の信者の役割が違うのを定義しているのです。女たちの役割は“結婚して、子を産み、家をおさめる”(テモ前.5:14)ようなこと、すなわち、女が働く領域は家庭のことに限定されているのが分かります。従ってエケレーシャの公衆の仕事は男たちに任しているのです。これは現代の社会制度、職業、家庭、服装、すべてが平等であると主張している男女平等論とはあまりにも対照的であります。しかし、男は子供を産むことが不可能であるからその制度から例外になっているのです。信者たちはこの悪の制度から離れて、いつも男女の調和を保つのが必要です。

夫が妻の主人になるのではなく、キリストが私たちが愛しているように妻を愛すべきであります(エペ.5:25)。

“夫なる者よ。あなたがも同じように、女は自分よりも弱い器である事を認めて、知識に従って妻と共に住み、命の恵を共どもに受け継ぐ者として、尊びなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためである”(ペテ前.3:7)。

霊的条件であるキリストに合うバプテスマを受けるによって男女信者は平等になっているのです(ガラ.3:27、28、コリ前.11:11と比較)。しかし、これは確かに実践的霊のことに對する“男が女の頭ある”原則を代える(コリ前.11:3)のではなく、両者共に神の家族であるエケレーシャの一員になるのです。

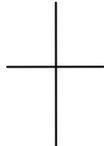
この原則の認識を確認するために、男の信者がエケレーシャで教える間は女性の信者たちはいつも頭の覆いをかぶる事になっています。これはすべてのエケレーシャの集いで女性信者がスカーフや帽子で頭を覆っているのを意味しているのです。男女の役割が違うのを彼女らの頭を覆うによって強調しているのです(コリ前.11:14、25)。“祈りをしたり予言をしたりする時、頭に覆いをかけない女は、その頭を辱める者である。それは、髪をそったのと全く同じだからである。もし女が覆いをかけないなら、髪を切ってしまうが良い。髪を切ったりそったりするのが、女にとって恥ずべきことであるなら、覆いをかけるべきである。... それだから、女は、夫の権威の下にあるしるしとして覆いをかぶるべきである”(コリ前.11:5、6、10)。

女が頭に“覆いをかけない”のは、“髪を切ってしまった”のと同じく、頭に髪がないのをしめしているのです。従って、“覆いをかぶって”いる頭は頭に髪がないのではなく、意識的に頭を覆っているのを意味するのです。女が頭の覆いをかぶらないで彼女の髪に依頼することは出来ないのです。このようにするのは神の前に髪がないままに近づくのです。男は頭に覆いをかぶるべきでないのです(コリ前.11:7)。これは髪があるのを意味しないで、特別な頭覆いをもっていることを示すのです。

新約聖書の時代ユダヤの国の周囲の文化は、女が頭の髪を切ってしまった場合は、彼女が売春婦、あるいは姦淫女、夫を亡くして哀悼している寡婦を示しているのです。これゆえに頭の髪を切っている女の信者は彼女の夫、すなわち、キリストを亡くしてのを示していました。

女はエケレーシャを現わし、それに対して男はキリストを現わすのです。私たちは自分の罪がキリストによって覆われたのを意識的に決心すべきです。だから女が彼女の頭の覆いを意識的にかぶらなければならないのです。彼女の髪を信頼するのは、私たちの救いにキリストの業を信頼する代わりに自分の義を信頼するのと同じです。

女の長い髪が“彼女の栄光になる”のは、彼女の髪が頭の覆いになるのであるから(コリ前.11:15)、女は男と違うことを現わす方法として髪を育てるのです。この髪スタイルで男女を区別するのは彼女の違う役割を強調するのに使用しなければならないのです。



女が長い髪を持ち、覆いをかぶることは、ただしるしとして使うのでないことに注意しなければならないのです。キリストにある姉妹が実に霊的になって夫に従順する品行を持っているなら(ペテ前.3:5と比較)、彼女は信者である兄弟にキリストに従順するように従順し、頭に覆いをかぶることだけでなく、すべてにおいて喜ばしく従順するのを示すでしょう。もしこの命令を、神のすべての命令と等しく認識すれば、それらを遂行しているのに反対することはないでしょう。

エケレーシャの内には姉妹たちがすべきことが多くあります、一日曜学校で子供たちを教えるこ、案内者や会計のことなど。また霊的に成長している婦人たちは若い姉妹たちを教え導くことが出来るのです(テト.2:3、4、ミリアムはイスラエルの婦人達を導きました、出.15:20)。

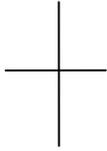
11.3.5 記念のパンと杯

祈りと聖書奉読と一緒に、キリストの命令に規則的服従してパンを取り杯を取って彼の犠牲を記念する礼拝に預かるのが重要です。“私を記念するために、このよ
うに行ないなさい”(ルカ.22:19)とイエスが命令しました。イエスは、彼が帰り来て再び彼らと共にパンと杯を預かれる時まで、彼に従う者たちが規則的に行うことを欲していました(コリ前.11:26; ルカ.22:16-18)。

そのパンは十字架で捧げたキリストの体を現わし、その杯は彼の血を現わしています(コリ前.11:23-27)。初期の信者たちはこの礼拝を度々行いました(使.2:42、46)。多分一週に一度くらいであったと思います(使.20:7)。もし私たちが本当にキリストを愛するなら、彼の命令に服従するでしょう(ヨハ.

15:11-14)。もし私たちが彼と本当に緊密な関係を持つなら、彼が要請している通り、彼の犠牲についていつも記憶し、彼が果したその偉大なる救いを記念することによって勇気を得るでしょう。静かに十字架で受けた彼の苦痛を回想して見ることによって私たちが受けている試練は彼のものと比較するとなんでもないことであるのを感じずようになるでしょう。

パンを裂けるそれは根本的には記念礼拝であって、それによって何か魔術的
ことが起こるのではないのです。それはモーセの律法の過ぎ越し節に値するのです(ル
カ.22:15;
コリ前.5:7、8)。これは紅海で神がモーセを通して働いてイスラエルをエジプトから



キリストに合う生活 355

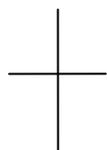
救ったのを記憶している意味でした。このパンに預かる礼拝はキリストを通して罪から救われたことに私たちを連れもどすのです。その救いは十字架の上でなされ、私たちはバプテスマを受けることによってそれに繋がれるのです。この命令を行うことはとても重要なことです。

実際そのパンと杯をとることは私たちに対するキリストの愛と、そして私たちの救いに関するすべてのことを実に認定して、もう一度実在にするのです。従って一週に一度パンを取ることは自分が健康な霊的状态であるのをしているのです。もし同僚の信者たちとこの記念礼拝を持つことが出来ないなら、自分一人でもせねばならないのです。この命令の行いを止める弁明はないのです。私たちはいかなる立場においてもこの儀式を行うに必要なものを準備しなければならないのです。イエスは“葡萄の実で造ったもの”(ルカ.22:18)を飲みました。従って私たちもそのようなものを飲むのです。

キリストの受難と犠牲の記念の象徴に預かることは信者が持つことが出来る最高の栄誉であります。その儀式に不作法な態度で参加するのは神を冒瀆するのです。“あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それにとって、主が来られるまで、主の死を告げ知らせるのである。だから、ふさわしくないままでパンを食し主の杯を飲む者は、主の体と血を犯すのである”(コリ前.11:26、27)。このパンに預かる儀式は集いに集まった信者たちの気を散らし、妨害がないような場所と時間に行わねばならないのです。これは朝早く、又は夜深い時に静かなところが適当です。“誰でも先ず自分を吟味し、それからパンを食べ杯を飲むべきである”(コリ前.11:28)。従って私たちはパンと杯を取る前に、心をキリストの犠牲にじっと注ぎ、彼の十字架に関する福音の記録を通して彼を見つめなければならないのです。このようにするためには、私たちが各自が自分自身をキリストと一致させているか吟味しなければならないのです。

パンと杯の記念礼拝式に適当な順序は次のようです。

1. 祈り、この集いに神の祝福を願う。神の言葉が理解出来るように霊的目が開けること。信者たちの必要なものを記憶してそれを求め、神の愛を誉めたたえ、特別にキリストにおいて示した愛と、また特別な問題に対して神の助けを願う。
2. 聖書Companionに従って聖書を奉読する。

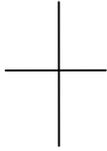


3. その言葉から習ったことを瞑想し、あるいは、‘勧告の言葉を’読み、礼拝の目的に導くその言葉を学習し、キリストを回想して見る。
4. コリ前.11:23-29を奉読する。
5. しばらくの間各自が自分自身を吟味する黙想。
6. パンに対する祈り。
7. 小さく割けたパンのかけら食べる。
8. 杯に対する祈り。
9. 杯をすすする。
10. 終了の祈り。

このふうな礼拝式を終えるにはおよそ一時間ぐらいかかります。真心をこめてあげるべきです。

11.4 結婚

この学習はバプテスマを受ける時独身者である者たちが考慮すべき結婚の問題に対して話しているのです。学習5.3で既に話したように信者は必ずバプテスマを受けた者と結婚すべきであります。イエスやパウロ、その外の信者たちが結婚に連結して、独身者たちは主のことに心をくばって働くことが出来るから、なるべく一人で居るのが良いと勧告しています(コリ前.7:7-9, 32-38、テモ后.2:4; マタ.19:11, 12, 29; 伝.9:9)。しかし、“また、乙女が結婚しても、罪を犯すのではない”(コリ前.7:28)。使徒たちはたいてい結婚していました(コリ前.9:5)。結婚は神の摂理であるので、多くの靈的恩典があるのです。“すべての人は、結婚を重んずべきである。また寝床を汚してはならない。神は、不品行な者や姦淫をする者をさばかれる”(ヘブ.13:4)。信者が靈的に高いレベルになっていない限り、“人が一人でいるのは良くない”(創.2:18-24)のです。従って、“妻を得る者は、良き物を得る、かつ主から恵みを与えられる。... 賢い妻は主から賜るものである”(箴.18:22; 19:14)と話しているのです。



キリストに合う生活 357

コリ前7:1,2は“男子は婦人にふれないがよい。しかし、不品行に陥ることのないために、男子はそれぞれ自分の妻を持ち、婦人もそれぞれ自分の夫を持つがよい”(その9節と比較)と男女調和の必用を話しました。

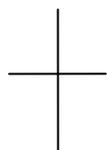
この句節らが示唆しているのは結婚した相手以外の者との性行為は姦淫であると規定しています。新約聖書の全体にわたって、また聖書のすべての書信に姦淫、不品行、そしてすべての不道徳に対して警告しています。次の句節はその中の一部です。使.15:20; ロマ.1:29; コリ前.6:9-18; 10:8; コリ后. 12:21; ガラ.5:19; エペ.5:3; テサ前.4:3; ユダ.7; ペテ前.4:3; 啓.2:21。

このように繰り返して強調している事は、確かに神の意志であって、実に深刻な問題です。これらは肉の弱さによる瞬間的に犯す罪であって、もしこれを規則的に継続して行うなら、神ののろいをもたらす結果になりますが、しかしい私たちが悔い改めたら、神は赦して下します(実例はダビデがバテシバと姦淫した時)。パウロは度々これについて書いています。“汚れ、好色、...今も前持って言うておく。このようなことを行う者は、神の国を継ぐことが出来ない”(ガラ.5:19,21)。従って“不品行を避けなさい(テモ后.2:22と比較)。“人の犯すすべての罪は、体の外にある。しかし不品行をする者は、自分の体に対して罪を犯すのである”(コリ前.6:18)。

今は若いカップルが結婚式前に性関係を楽しみながら同居することが出来るのが世の制度として受け入れるようになりました。‘一般の結婚法’がこのようになっているのは完全な過ちです。信者の結婚は神の法に従わなければならないのです。私たちは肉の享樂のために制定された人間の制度を神の者と代えることが出来ないのです。結局結婚制度は人間でなく神が制定したのに従うべきです。聖書的に結婚するには少なくとも次の三つの要素で構成しなければならないのです。

1.

しかし結婚式のある形はとても簡単です。ルツ記3章9節から4章の13節までに記録されたボアズとルツの結婚は、知らずの間に起こったことでなく、特別な契機によって結ばれた完全な結合であることを示しています。キリストも信者たちである彼の新婦との結合がそれと同じく、彼の帰りに“結婚する”でしょう。この結婚を祝う“小羊の婚宴”(啓.19:7-9)があるでしょう。夫と妻の関係はキリストと信者たちの関係を予表しているのです(エペ.5:25-30)。私たちの結婚には決定的時点がありますが、それはキリストが帰り来て裁きがあり、その後彼と結婚式を持ち、婚姻生活が始まるのです。



2.

イスラエルと神の結婚によって各自がお互いの霊的契約に忠実に従うことになっていましたが(エゼ.16:8)、これはまた信者たちの結婚にある特徴でなければならぬのです。

3. 性的行為は結婚の完成に必須なことです(申.21:13; 創.24:67; 29:21:

王上.11:2)。これゆえに、コリ前.6:15、16では婚外の性行為が罪悪であることを説明しています。性行為は神が男女二人を一体に結合するようにした、実際の状態であって、またそのしるしであるのです(創.2:24)。従って一時の関係で“一体”になるのは神が与えて下さった体を乱用するのです。神は結婚によって実際一体の状態に完成するように計画したのです。

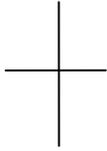
このために、カップルが結婚前に実際同居するのは罪を犯しているのです。彼らは適切に結婚式を上げるか、あるいは分離するのが当然です。そうしなければバプテスマを受けることが出来ないのです。

結婚式とか正常的結婚の概念を持っていない文化圏に住んでいる人たちは結婚に対してとても複雑な事件が起こりやすいです。一つのカップルが永い間結婚式を上げずに、結婚したのと同じく同居しながら住んでいます。著者はこのような者がバプテスマを受ける時は、結婚しているのを確証出来る証書を当局からもらった後にバプテスマを受けるが正しい順序です。

バプテスマを受けた者たちの配偶者が不信者である場合、彼らと離れないで共に生き(コリ前.7:13-15)、もっと彼らを受愛し、ただ彼らの宗教を変えるのではなく、神に対する純正な信信仰の生活の態度を示すのです。ペテ前.3:1-6はこれを実行するそれ自体が不信の配偶者を手段であるところの立場にある者たちを勧告しています。

結婚生活を管理する原則はそれに関する神の声明に要約されています。“それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである”(創.2:24)。夫と妻がすべの方法を動員して結合のために骨折るこの努力は、根本的罪と肉の利己主義の克服を通して、キリストとの結合のために骨折っている私たちの継続的努力に類似しています。この努力ははキリストとか、配偶者に対してするのではなく、自分自信に対してしているのです。私たちがこれに対して成功すればするほど、夫婦の関係はもっと幸福になるのです。

しかし、私たちは聖書と、そして神とキリストの愛が模範として私たちの前にもうけている至高の水準の聖潔に至るのは不可能な、罪と失敗の世に生きています。



キリストに合う生活 359

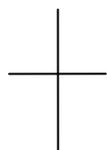
す。創.2:24にもうけている理想的水準は一人の男と一人の女が完全な結合で全生涯を共に生きるのです。

信者たちはたびたびこの水準には誰も到達出来きないことを受け入れなければなりません。夫婦けんかが起り、彼らが結んだ心の一致が害うでしょう。実際婚姻の完成は不可能です。一夫他多妻の文化の社会に住んでいる者はバプテスマを受ける前に数人の妻を持っていることもあるでしょう。この場合彼は妻たちと一緒に住むことが出来ますが、それ以上の妻を娶ってはいけないのです。従って、人間の包容に熟達し神の原則に誠実であった使徒パウロは相容れない極端な場合は離婚が出来ると忠告しています。“妻は夫から別れてはいけない。しかし、万一別れているなら、結婚しないでいる” (コリ前.7:10-11)。

この声明は理想的水準ではありますが、神の基本的原則に外れない限り、それより低い水準を受け入れても可なるのが聖書の一般的特徴です。コリ前.7:10-11のパウロの忠告はコリ前.7:27、28に類似しています。“もし妻に結ばれているなら、妻を迎えようとするな。しかし、たとえ結婚しても、罪を犯すのではない”。しかし、故意的離婚は男女が結び合い一つの体となるのであると神が認定している原則に対する制度化した愚弄であって、実際その実行においても、彼らが実行し難いことであるのを見つけるのです。これに対するキリストの言葉はとても明瞭です。

“しかし、天地創造の始めから、「神は人を男と女とに造られた。それゆえに、人はその父母を離れ、二人の者は一体となるべきである」。(イエスが強調して)、彼らはもはや、二人ではなく、一体である。だから、神が合せられたものを、人は離しては(離婚)ならない。...
誰でも、自分の妻を出して他の女をめとる者は、その妻に対して姦淫を行うのである。また妻が、その夫と別れた他の男にとつぐならば、姦淫を行うのである” (マコ.10:6-12)。

この性的関係の全般にわたって、人間は肉情をほしいままに使用することを正当化するもっともらしい口実を良く作る名手です。特別に自分自身が誘惑を受ける立場におちいる者たちはこの学習で引用している句節をくり返し瞑想することによって必要な力と霊的スタミナを求めようになさい。ある者たちはホモセックスとレスビアンが自然的欲情であるから合法としなければならぬと主張していますが、しかし、そのような行為はみな神が憎悪することです。



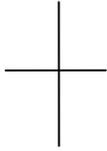
創.2:24の基本的原則はホモセックスの罪を暴露しています。一人の男と女が結婚してお互い結び合うのは神の計画です。神はアダムのは助け手として他の男でなく、女を造りました。聖書にはホモセックス行為が有罪であると繰り返して話しています。これはソドムの都市が滅亡された一つの罪でした(創18、19章)。使徒パウロはこの罪を犯す者は神の怒りを受けて滅ぼされ、神の国から除外されるとはなしています(ロマ.1:18-32; コリ前.6:9、10)。

私たちが一度そんなことに陥た事実をもって、もはや私は神の慈しみの向こう側におると考えてはならないのです。神は限りない慈しみがあるのです。“しかしあなたには、赦しがあるので、人に恐れかしまれるでしょう”(詩.130:4)。コリントのエケレーシャは悔い改めたその遊び人をかなり良く取り扱っています。“あなたがたの中には、以前そんな人もいた。しかし、あなたがたは主イエス、キリストの名によって、また私たちの神の霊によって、洗われ(バプテスマで)、清められ、義とされたのである”(コリ前.6:9-11)。

異性に対して魅力を感じられないと不平を訴える者たちが、ホモセックスを禁止している神が不公平であると実際彼に訴えています。しかし私たちはそれらの誘惑に打ち勝つように造られているのです。神は私たちが耐えられないような試練に合わせることはないばかりでなく、またそれらに耐えられるように、逃れる路もそなえて下さるのです(コリ前.10:13)。肉の情欲の耽溺によって人たちが、アルコールの中毒、薬物中毒になり、毎日それらの一定量を服用しなければ生きることが出来ないようになりますが、しかし彼らの思考方式を変え、治療によって正常な生活に戻ることが出来るのです。

ホモセックスも同じ過程を踏むのです。神はこれに対する人たちのすべての企てを確証するでしょう。もし彼らが全く彼らの肉の情欲に耽るなら、神は彼らを昔イスラエルにしたように取り扱うでしょう。

“それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲に任せられた。すなわち、彼らの中の女は、その自然の関係を不自然なものに代え、男もまた同じように女との自然の関係を捨てて、互いにその情欲の炎を燃やし、男は男に対して恥ずべきことをなし、そしてその乱行の当然の報いを、身に受けたのである”(ロマ.1:26、27)。



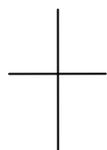
キリストに合う生活 361

ただ故意に目を閉じた者だけがこれに対して説明しているAIDSの予言が分からなくなり、腐敗したこの世が今収穫している、その奇怪な性行為から産出する悪疫の大豊作を自覚出来ないのです。

11.5 交わり

‘交わり’と翻訳されたギリシャ語‘COMMUNION’は、“あることを共にしている”状態を現わし、それから‘COMMUNICATE’、すなわち意見の交換を意味するのです。神の道を分かり実践するによって、私たちはキリストとそしてまた“キリストにある”ので同じことをなしているすべての者たちと交わりを持つことが出来るのです。私たちは他の人たちと交わりを持つべき責任を怠りやすいのです。“善を行うことと交わりをすることとを、忘れてはいけない”(ヘブ.13:16)。ピリ1:5には私たちが‘福音にまじわって’いると話しています。従って私たちの交わりの根拠は福音を構成している教理にあるのです。このゆえに、信者たちが持っている交わりは他の団体や教会が持っているものよりもっと高貴なものです。この交わりのために私たちはお互いに遠い所まで行き、人里離れた信者たちを訪問し、また手紙とか電話、すべての手段を全部動員して接触するのです。パウロは“御霊の交わり”、すなわち、神の霊、言葉に現れたのであって、私たちが共に従っている神の霊/心に根拠している交わりです(ピリ.2:1)。

私たちの交わりを現わしている最も大きな表現はそのパンに預かる記念礼拝に参加するのです。初期の信者たちは“使徒たちの教えを守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈りをしていた。...そして日々心一つにして、家ではパンをさき、喜びと、真心をもって、食事を共にした”(使.2:42,46)と彼らの交わりに関して話しています。“私たちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血に預かることではないか。私たちがさくパン、それはキリストの体に預かることではないか。パンが一つであるから、私たちは多くいても、一つの体なのである。皆の者が一つのパン(すなわち、キリスト)を共にいただくからである”(コリ前.10:16,17)。従って、キリストの使役から恩典を受けている者たち皆が彼の犠牲を現わしている象徴に預かる義務があるのです。彼らはみな“一つのパンを共にいただいている”者たちです。ただ真理を認識して、キリストに連合したバプテスマを受けた者たちだけがその位置に



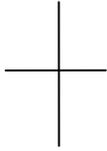
ある者たちであって、もしこれと関係がない者が彼らに預かるのはその象徴をあざけるのです。

ヨハネは彼が他の人たちと永遠の命の福音に預かった記憶を思い出して話しています。“それは、あなたがたも、私たちの交わりに預かるようになるためである。私たちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである”(ヨハ1.1:2,3)。これはその交わりが福音を共に認識している根拠からなっているのを示し、それはまた他の信者たちと、また個人的に神とイエスとに交わりをもたらすのを示しています。私たちの生活に福音を適用すればするほど、もっとたやすく私たちの罪の傾向を克服し、神の言葉の認識がもっと深く進歩するほど、神とキリストとの私たちの交わりがもっと深くなるでしょう。

神とキリストまた他の信者たちとの私たちの交わりはその“一つの信仰”を構成する教理に同意するだけによるのではないのです。私たちの生活方法はその教理の原則に従うのでなければならぬのです。“神は光であって、神には少しの暗いところもない。神と交わりをしていると言いながら、もし、闇の中を歩いているなら、私たちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。しかし、神が光の中にいますように、私たちも光の中に歩くならば、私たちは互いに交わりを持ち、そして、御子イエス・キリストの血が、すべての罪から私たちを清める”(ヨハ1.1:5-7)。

‘闇の中を歩く’と言うことは神の言葉の光と一致しない生活を継続的にまた公にしていることを話しているのです(詩.119:105; 箴.4:18)。それは私たちが弱いために時たま犯す罪を話すのではないのです。その理由を次のように話しています。“もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理(すなわち、神の言葉、ヨハ.3:21; 17:17; エペ.5:13)は私たちのうちにはない”(ヨハ1.1:8)。

これで信者が偽りの教理を受け入れ、あるいは公に聖書の教えに反する生活をすると、その交わりは停止することが確かです。“実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい”(エペ.5:11)。なくなった羊を探し求める良い羊飼いに習って彼らを回復するために努力しなければならないのです(ルカ.15:1-7)。もし兄弟あるいは姉妹が偽りの教えに陥り、あるいは甚だしく悪い行為を継続的になしたら、正式に交わりの停止を告げることが必用です(マタ.18:15-17)。これは、エケレーシャの責任あるメンバーたちと面談を持ち、またエケレーシャの教誌に



キリストに合う生活 363

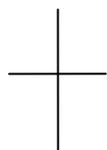
この事実を公示することを通して実行するのです。しかし、この手続を取るにはただ偽りの教理を保っていること、あるいは非霊的な生活方法をしつこく主張することが明確な場合であることに限定しているのです。私たちは皆どうせ聖書の根本的教えから少しは外れることになっているから、公式の記念礼拝には必ず参加しなければならないのです。

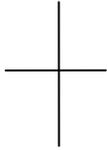
その交わりに関して話した最も確かな句節がコリ后.6:14-18に良く書かれています。“不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係りがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。...
だから、彼らの間から出て行き、かれらと分離せよ、と主は言われる。...
私はあなたがたを受け入れよう。そして私は、あなたがたの父となり、あなたがたは私のむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、言われる”。

私たちは神の言葉が明りであると示しました。これらの句節は私たちが偽りの教理を教えている教会とは交わりを持つことが出来なく、真理を知らない者とは結婚が出来なく、またこの世の生活方法から避けなければならない理由を説明しています。私たちはこの世から分離されるによって、世界の多くの兄弟と姉妹によって構成されている神の家族の一員になって、全能者の親儿女になる驚嘆すべき栄誉を得るになりました。キリスト教には、ただ“一つの体”、すなわち、“一つの望み”、“一つの神”、“一つのバプテスマと一つの信仰”(エペ.4:4-6)、すなわち、その一つの信仰を構成するその一つの教理に根拠している一つの真の教会だけがあるのです(エペ.1:23)。この真の信仰を持っていない他の宗教団体はこの“一つの体”の一員になり、その体と交わりが出来ないのです。光が闇と交わり出来ないから、もし私たちが闇にある者と交わりを持つならば、私たち自身が闇にいるのを声明するのです。

私たちが本当に聖書に啓示している教理を体形的に認識しているなら、キリスト教の名をもって神でなく、無神論者たちと交わりを持っている偽りの教理を信じている者たちを分かるでしょう。

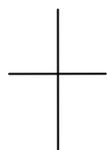
もしあなたがこれらの学習を注意して学んでいるなら、今では神と私たちの関係には中間の位置がないのをはっきり分かっているでしょう。私たちがキリストに連合したバプテスマを受けて彼の内にいるかまたは、彼の外にいるかどちらになっているのです。私たちは真理の教理をつかみそれに服従するによって光になっている





かまたは、闇になっているかどちらであるのです。キリスト教信仰には両者択一だけあるのです。

これらの教理の認識は私たちがある程度神に対する責任を負っているのです。私たちは今この世の普通の人たちのように町を歩き、あるいは私たちの日常生活を営んではいけないのです。神は激しく私たちの反応を見守っているのです。神と主イエス、そしてすべての信者があなたの正しい決心を願っているのです。神は彼の唯一の御子さえ惜しまないで私たちのために死なせました。神と同じく、キリストと私たち自身はすべてを尽くしてあなたを助けようとしています。究極的に、あなたの救いは、あなたに提供しているその偉大なる望みをしっかりつかむことを決心するによるのです。



学習 11:問題と回答

1.信者がバプテスマを受けた後どんな変化が起りますか？

2.清潔(Holiness)とは何を意味しますか？

- a) 不信者と全然接触しないこと
- b) 罪から神のことに分離すること
- c) 教会に行くこと
- d) 他の人たち良くすること

3.クリスチャンに適當でない職業はどんなもの出酢か？

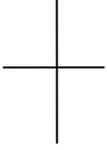
4.聖徒と‘エケレーシャ’はどんな意味ですか？

5.記念のパンと杯の儀式に次のどちらが正しいですか？

- a) 一週に一度行う
- b) 一年に一度過ぎ越しの節に行く
- c) パンと杯が実際イエスの体と血に変わる
- d) パンと杯はイエスの体と血を現わす

6.次のどの陳述が結婚に対して正しいですか？

- a) 必ず信者と結婚しなければならない



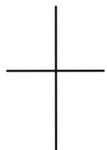
366

キリストに合う生活

- b) 信者も離婚出来る
- c) 結婚した夫婦の一人が不信者であったら離婚する
- d) 結婚で、男はキリスト、女は信者を現わす

7. 婦人がエケレーシャの中で信者たちを教えてもいいですか？

8. 真理を認識してバプテスマを受けた後も真理を教えていない教会員と交わりしてもいいですか？



付録1:聖書の基本教理要約

1. 神

- 1.1神と呼ばれる一人の人格者である
- 1.2彼は天の特定の所に居られる
- 1.3彼は実際形体を持つ存在である
- 1.4彼の姿を人間は持っている
- 1.5天使たちは彼のメッセンジャーである
- 1.6彼らは罪を犯すことが出来ない
- 1.7彼らは神の本性を持っている
- 1.8神と天使たちは形体を持つ存在である
- 1.9.信者の望みはキリストが帰りに来た時神の本性を受けるのである

2. 神の霊

- 2.1神の霊は彼の力、彼の呼吸と心を指示するのである
- 2.2その霊によって神はすべてのことをなしとげる
- 2.3宇宙のどこでも居られる
- 2.4聖霊とは特定の目的に使用されるこの力を示す
- 2.5過去いろいろな時代にこの霊の賜物を人たちに与えた
- 2.6現在はその霊が撤回して誰も持っていない
- 2.7今はその霊の力が神の言葉を通して現れる
- 2.8聖霊は人たちの意志に逆らって彼らを霊的になるように強いらぬ
- 2.9聖書は完全に神の靈感によって書かれている
- 2.10聖書は人間を神と結合させるに唯一な権威がある

3. 神の約束

- 3.1 福音は神がユダヤ人の先祖たちにした約束の形式で伝えられた
- 3.2 その女の子孫は(創3:15)、キリストと彼を信じて従う者たちである
- 3.3 神の約束が果されるに、地球が破滅されるのではない
- 3.4 アブラハムとダビデの子孫はキリストであった
- 3.5 私たちはキリストを信じバプテスマを受けて彼の内にいることが出来る
- 3.6 従ってその約束は信者たちと関係がある

4. 人間と死

- 4.1 人は本来Mortalであり、罪を犯す性向がある
- 4.2 人は皆アダムが罪を犯した結果のろいを受けている
- 4.3 キリストはこの人間の本性を持っていた
- 4.4 聖書の靈魂は人間の体、考え、人間自体を示している
- 4.5 霊は生命力/呼吸、性質を示している
- 4.6 誰も体がなく霊だけでは存在することが出来ない
- 4.7 死は無意識の状態である
- 4.8 キリストが帰り来る時福音を信じた者だけが復活する
- 4.9 神の言葉の認識と信仰が裁きの根拠である
- 4.10 永生は裁きの後受ける
- 4.11 責任ある悪人の刑罰は永遠の死である
- 4.12 ‘地獄’は墓を示している
- 4.13 ‘ゲヘナ’はエルサレム城の外にあるくずと死体を焼いた所である

5. 神の国

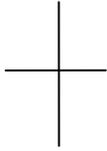
- 5.1 過去イスラエルは神の国であった
- 5.2 これは今なくなっているが、キリストの帰りに再建される
- 5.3 その国は世界的国となり、キリストが治める
- 5.4 この国の始めの千年はキリストと共にすべての信者が治める
- 5.5 従ってその国は今存在していない
- 5.6 私たちは私たちの業でなく、信仰によって救われる

6. 神と罪悪

- 6.1 その‘悪魔’と言う言葉は‘偽りの訴訟者’、‘中傷者’を意味する
- 6.2 ‘サタン’と言う言葉は対敵を意味する
- 6.3 その両者には悪人と善人がある
- 6.4 比喩的に、悪魔とサタンは罪と肉情を示す
- 6.5 エデンの園にいたその蛇は実際の動物であった
- 6.6 人間の創造と墮落に関する創世記は象徴的でなく、実際である
- 6.7 罪深い霊物と言われる‘悪霊’あるいは‘汚れた霊’は存在しない
- 6.8 キリストが悪霊を追い出したと言うのはある疾病を癒したのを意味する
- 6.9 ルシフェルは墮落した罪深い天使を示しているのではない
- 6.10 神は全能である、彼に対抗する他の力を持つ神はいない
- 6.11 信者に起こる試練や不運は皆悪魔のためでなく、神から来るのである

7. イエス・キリスト

- 7.1 いわゆるキリスト教界の‘三位一体説’は聖書にはない教理である
- 7.2 キリストは処女マリヤから生まれた



370

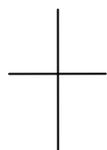
付録1

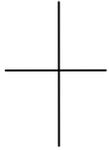
- 7.3彼女は人間性を持っている普通の女であった
- 7.4イエスは人間性、肉情を持っていた
- 7.5しかし彼は摘みを犯したことがない完全な品性であった
- 7.6イエスは罪がなかった、彼は自ら罪のために完全な供え物になった
- 7.7イエスは十字架につかれて死んだ後復活された
- 7.8イエスはこの世に生まれる前に存在しなかった
- 7.9イエスは始めに神の心/計画にいたのである
- 7.10イエスは私たちの罪のために死なれた
- 7.11私たちと彼自身のために死なれた
- 7.12イエスは私たちの代表者として死なれた
- 7.13キリスト教界が信じているように私たちの代りに死んだのではない
- 7.14モーセの律法はキリストの死によって廃止された
- 7.15従って安息日ら、その含まれている律法を守る必用がなくなった

8. バプテスマ

- 8.1バプテスマを受けなくては救われる望みがない
- 8.2信仰とバプテスマによってアブラハムの約束に預かることが出来る
- 8.3バプテスマを受けることによって罪が赦される
- 8.4バプテスマの形式は水の中に体全体を浸けるのである
- 8.5福音の知識を持つ成人がバプテスマを受ける
- 8.6福音の知識がない者のバプテスマは効果がない
- 8.7バプテスマを受けるには福音の完全な認識が必須である

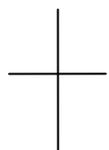
9. キリストに合う生活





付録1 371

- 9.1バプテスマの後信者はこの世から分離された信仰生活をすべきである
- 9.2信者はキリストのような品性に成長しなければならない
- 9.3クリスチャンは神の命令に逆らう職業、道楽を避けるべきである
- 9.4信者は他の信者と交わりを持つ義務がある
- 9.5信者は規則的にパンと杯に預かるキリストを記念する礼拝に参加する
- 9.6信者には毎日聖書の学習と祈りが必用である
- 9.7信者は必ず聖書の福音真理を持っている者たちと交わりを保つ
- 9.8従って継続的に真理を保ち実践しない者たちとは交わりを停止する



付録2: 聖書学習態度

この聖書基本知識の教理を全部学んでいても、そのメッセージを実際自分自身の事実に感知せない者が居るかも知れないのです。この教理全般に渡る原理を把握せない者が他の人を教えるためにこのような便覧を使用する者たちがおる事実はとても残念なことです。

1世紀には福音の教えに心から反応する人が多かったでした。人たちが福音を“喜んで受け入れ”バプテスマを受けました(使.2:41)。そのメッセージに対する心からの反応がなくてはバプテスマを受けることが出来ないのです。単に彼らの配偶者あるいは父母の強要によってそれを受け入れた者たちは最後までがんばる見込みがないのです。多くの人々がただバプテスマを受けるより、一人でも救いを受けるに関心を持っているなら、改宗者が正しい態度でバプテスマを受けるまで念を入れて多くの時間福音を教えなければならないのです。

ベレヤの人たちはパウロの教えを“心から受け入れ、果してそのとおりにかどうかを知ろうとして、日々聖書を調べました”(使.17:11)。この便覧は聖書の教えが学教者の心に正確に反映するように企てた著者の文章です。本当に福音に反応する者は、神の言葉に対してデリケートな心持ちで、自分自身が聖書を調べなければならないのです。この便覧は福音伝道者がいつも持って歩く必用はないのです。ただ関係のある聖書の句節に注意を引かせることが出来るようにしたのです。ローマの信者たちは、彼らがバプテスマを受ける前に、“彼らに伝えた教理の本体に心から服従した”(ロマ.6:17)のでした。

肉の考えでがん強に固執する者たちは福音のメッセージを把握することが出来ないのです。彼らは“信心深い様子をしながらしながらその実を捨てる者となるので、...常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することが出来ないのです”(テモ后.3:1-7)。私たちは自分が欲しないのは理解することが出来なくなってしまう。もし私たちが実に義を愛し、私たちの生活を神の管理の下に置かなければ、いくら聖書を学習しても決してその真理の知識を得ることが出来ないでしょう。それは学習はただ学究的働きに過ぎないのです。

聖書学習に幾つかの実例があります。しかしそれらはある意味では学習と言えないのです。これは私たちがかかりやすい病弊です。キリストの時ユダヤ人たちが

神の言葉に対して熱心でした。彼らは旧約聖書が神の靈感によって書かれたと信頼していました(ヨハ.5:45; 使.6:11)。彼らは聖書を学習するによって永遠の命を得る望みがあると知っていたので(ヨハ.5:39)、毎週公に学習していました(使.15:21)。これに加えて、彼らの多くが毎週綿密に聖書句節を調べていました。しかし、彼らはキリストを差し示している聖書の意義を把握することが出来なかったでした。イエスは彼らに明らかに告げました。“あなたがたは、聖書にの中に永遠の命があると思って調べている、...もしあなたがたがモーセを信じたならば、私も信じたであろう。モーセは私について書いたのである。しかし、彼が書いたものを信じないなら、モーセと予言者と共に耳を傾けないなら、どうして私の言葉を信じるになるろうか”(ヨハ.5:39、46、47; ルカ.16:29-31)。

私たちはユダヤ人たちの憤りが想像出来るのです。‘私たちは毎日聖書を読んでいる’、私たちはそれを信じているのである’。しかし、彼らは心が堅く閉じた態度であったので、理解することが出来ないのでした。彼らは目を持っていましたが、見る事が出来ないでした。彼らのように盲人にならないようにし、すべての霊的発展の段階にこのようなことがないように心を開いて読んで下さい。

付録3: キリストの再臨切迫

キリストは弟子たちに彼の帰り来る日と時を誰も決して知らないと明白にしておりました(マタ.24:36)。“時期や場合は、父が御自分の權威によって定めておられるのであって、あなたの知る限りではない”(使.1:7)。しかし、イエスは弟子たちが“あなたがまたおいでになる時や、世の終わりには、どんなしるしがありますか”(マタ.24:3)と尋ねた時、彼は‘私はそれをあなたがたに伝えることが出来ない’と言わないで、彼の帰り来る前にこの世に起こるべきいろいろなしるしを教えてくださいました。イエスが与えたそのしるしは、彼の帰り来る直前に住む者たちが充分認定するようになっているものであって、今私たちがその終わりの時に住んでいるのです。私たちは丁度その“終わりに日に”住んでいることを分かり、そして信ずべき根拠があるのです。

キリスト再臨のしるし

イエスは彼が帰り来る時に関して話しました(マタ.24章とルカ.21章)。

- 1)自分がキリストであると主張するにせよ預言者たちが起こる
- 2)戦争と暴力が世に広まる
- 3)“あちこちに、飢饉、悪疫、地震がおこるであろう”
- 4)世の宗教が神の真理から離脱する
- 5)環境の回復の見込みがなくなり、人の心が恐怖で気絶する(ルカ.21:26)。

現在世界は絶えず増加するこの種の社会問題に攻められているのが事実です。イエスは確かにこの事実に関して気付いておられました。従って彼はこれらの問題

がこの地球の破滅を脅威するほどに大きくなった時に対して話していると推測するのが当然です。良識のある人すべてが、疑いなく現在の世界状態は実にその時であると認識するでしょう。しかしほとんどの人がこの迫った社会の現象にもかかわらず、彼らが直面している現実的状态に対して、はなはだしく楽天的に考えているこの実在を認識する事が出来なくしています。

下掲の統計表はキリストの言葉がいま成就されているのを確証している証拠の断片に過ぎないのです。

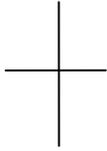
1).ほとんどすべての大陸に政治的詐欺師やカリスマ的人物が起こって大衆を導く傾向が続いています。

2).次の統計は史上類例のない抑制のもかかわらず、戦争は劇的に増加しているのを確証しています。

世紀	戦死者 (単位百万)	戦争回数
17世紀	3.3	?
18世紀	5.0	?
19世紀	5.5	?
1900-1945年	40.5	19
1945-1975年	50.7	119

(資料: ロンドン大学校 国際間の紛争研究書 発行)

3).大量の飢饉と悪疫はすべての人に良く知られている社会問題になっています。AIDSの疾病は今世界に広く伝染している最も恐ろしい流行病になっています。それは永い間世界の人口の激減をもたらすと脅迫しています。マタ24章とルカ.21章のキリストの言葉は別に、また彼が帰り来る前に多くの地震が起こることが話されています、イザ.2:19-22; エゼ.38:20; ヨエ.3:16; ハガ. 2:7; ゼカ.14:3,4。最近予期していない地域で起こる多くの地震のために多くの人が犠牲する特徴は、その地震に対するしるしの通りに果されているのを私たちが見ている



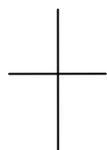
です。地震に関する次の統計は米国政府の内務局で発表したもので、とても意義があるのです。

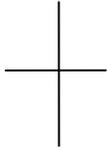
年代	地震回数
1948年	620
1949年	1152
1950年	2023
1964年	5154
1965年	6686
1976年	7180

4).聖書の教理の獲得に必用は学習の重要性を無視したために多くの人を聖書から離脱させる結果になりました。そして社会に広がっている人間性に一貫した哲学に、人々が達しようと命をかけて働くようになりました。

5).すべての現代社会で見られる急に広がった現実逃避主義が将来に対する人間の恐怖を現わしている充分な証拠です。科学者、経済学者、生態学者皆が世界が今この状態では継続出来ないと主張しています。自然資源の枯渇と腐敗、大気と海洋の汚染、オゾン層の破壊、伝染病と核武器の拡散の脅威、このすべてが現世界の迫った滅亡を示しています。しかし、神は地球の滅亡は絶対起こらないと宣言しています(間違った解釈9を見なさい)。この約束を守るために、神は間もなくイエスをこの世に遣わしてこの地球を保存するために、神の国を建てるでしょう。

イスラエルの回復





付録3 377

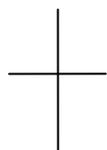
イエスは彼が大胆に声明したしるしのリストを締めくくるに、“その時、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう” (ルカ.21:27)と話しました。その次の句節は、バプテスマを受け、神に向かって良い良心で生きているものたちに勧告を与えています。“これらの事が起り始めたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救いが近づいているのだから” (ルカ.21:28)。

イエスは彼の再臨に関する予言に、いちじくの木に関する比喻の話であと書きを加えました。“いちじくの木を、またすべての木を見なさい。はや芽を出せば、あなたがたは外れを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。このようにあなたがたも、これらの事が起こるのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい。よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起こるまでは、この時代は滅びることではない。天地は滅びるであろう。しかし私の言葉は決して滅びることがない。...その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから、これらの起ころうとしているすべての事から逃れて、人の子の前に立つことが出来るように、絶えず目をさまして祈っていなさい” (ルカ.21:29-

36)。木の葉や芽が出すのを見て、私たちは春が来たのを直感し、間もなく夏が来るのを知るのです。それと同じく、私たちはいちじくの木がはや芽を出した時、私たちの時代に彼の再臨を見る事が出来ると気付くのです。いちじくの木はイスラエルを現わす聖書の象徴です(ヨエ.1:7;ホセ.9:10;エレ.24:2;エゼ.36:8と比較)。従ってキリストの再臨に関するこのしるしはイスラエルの国の回復を示すのです。1948年、イスラエルの国が再建して以来、多くの劇的事件がイスラエルに起こりましたが、それらは皆彼の再臨と関係があるのです。

将来起こるイスラエルの侵略

多くの聖書予言がキリストの再臨の時に起こるイスラエルの侵略を描写しています。詩篇83篇はイスラエルの周囲の国が連合して“さあ、彼らを断ち滅ぼして国を立てさせず、イスラエルの名を再び思い出させないようにしよう。...彼らは言いました。‘私たちは神の牧場を獲て、私たちの所有にしよう’” (詩.83:4,5,12)宣言しています。この終わりの日のイスラエル侵略はイスラエルが完全な国になった時に起こることに注目しなさい。従って現在一つの国としての彼らの回復はこの最終の侵略を告げる序曲であるのです。世界的に有名な聖書学者John



Thomasは19世紀の前半、聖書の予言によってイスラエルが回復する事を予言しました(彼の著書‘Elpis

Israel’、848年発行を読んで見なさい)。詩篇83篇にあるイスラエル侵略に関する様子は今日イスラエルの隣国、アラブ族らの様子と一致しています。彼らは継続的にイスラエルに対して執念深い憎悪を宣言し、エルサレムをイスラム教の聖なる都市として要求しているのです。続いてその詩篇は彼らの侵略は神の国が設立して、神の劇的介入によって終わることを描写しています(詩.83:13-18)。

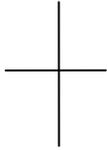
ほかの多くの予言も同じくその事件が続いて起こることを描写しています。アラブ族と、北の国の他の敵によるイスラエルの侵略は、神の国の設立のために降り来るキリストを通した神の介入をもたらすのです(エゼ.38章-40章; ダニ.11:40-45)。パプテスマを受けた後このような予言を学習するのが霊的成長にとっても重要です。ゼカ.14:2-

4はそれに対するもっと明らかな予言です。“私は万国の民を集めて、エルサレムを攻め撃たせる。町は取られ(ルカ.

21:24と比較)、家はかすめられ、女は犯され、...その時、主は出て来て、いくさの日にみずから戦われる時のように、それらのくにびとと戦われる。その日には彼の足が東の方エルサレムの前にあるオリブ山の上に立つ”。

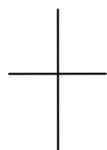
その地域の継続的戦争と政治的趨勢によれば、このイスラエルの大侵略はいつでも起こるようになっていきます。人たちが福音に反応するその大侵略まで待つことは良い考えではありません。パウロの話は、“人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、...突如として滅びが彼らを襲って来る”(テサ前.

5:1-3)と言うのです。私たちはキリストが降り来る時を正確に指摘することは出来なんでしょう。ただそれは北からのイスラエル侵攻とつながれているのを知っており、その侵攻は間もなく起こるでしょう。私たちが考えて見たその予言の侵略の前に他のイスラエル侵略があるかも知りません。しかし聖書研究者たちはイスラエルの立場を継続的に注意して見るでしょう。結局はオリブの山にキリストが立つのを通して神が介入する事を知っています。キリストはこの山から天に上がりましたが、またこの山に降りるのです。“あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上がって行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう”(使.1:9-12)と、弟子たちがその山で主の上がりを見つめていた時、天使たちが彼らに告げました。



付録3 379

私たちはキリストの帰りが間近くなっているのをはっきり認識せねばならないのです。彼の帰りの時起こるべき世の事件らに関する予言は既にバプテスマを通してキリストに自分自身を任せている者たちの信仰に確認を与えるのです。しかし、私たちは差し迫った主の帰りを恐れて神に服従するのではなく、“主の出現を心から待ち望んでいる” (テモ后.4:8)者たちとなって、その栄光の報酬を受けなければならないのです。



付録4: 神の公義

この聖書学習の過程を全部完成した者たちにも神や彼の救い計画に対して多少疑問が残るのが普通です。そのすべての疑問はおおむねが神の公義に対することです。

すべての人が福音を認識するように神に呼ばれていないのは不公平なことである。

なぜ神はアダムとエバが罪を犯して、彼らの子孫たち、すべての人類が生きるに苦痛と困難を受けるようにしているか。

なぜ神がすべての人に機会を与えないで、旧約聖書にはイスラエルだけを選んで彼の民としたか。

私たちが神との関係がどの段階であっても、私たちにはこのような問題は起こるでしょう。この事が理解出来ないとして、神の呼び出しに対する私たちの応答を遅らす理由にはならないのです。キリストの帰るまで、私たちはそれらに関する知識を絶対持つ事が出来ないようになっているのです。二千年前、ある人は、キリストに“叫んで言いました、信じます。不信仰な私を、お助け下さい”(マコ.9:24)。私たちは皆この二重人格を持っているのです。一部は信じていても他の部分は信ずる事が出来ないから、主の助けが必用でしょう。バプテスマを受ける前数日間あるいは数週間、この感情が起るのが普通です。そのある程度は生涯心に浮かぶでしょう。

私たちの不信は上記の通り、神に対する疑問のタイプで考えるになるのです。私たちが知覚すべき根本的なことは神が不公平であるとかあるいは不義であると非難すべきではない事です。もし私たちがそんなふうに考えるなら、それは私たちの知覚力で全能の神を裁いているのです。もし私が神であったなら、私はそんなにはしないと云うことです。人間は極めて罪深い存在である事と、神は絶対に正しいのを認識しないのが人間の最大の失敗です。もし神が絶対に義でなかったら、宇宙には道德の基礎がなくなり、従って善と悪の区別がなくなるのです。それゆえに神を信ずる宗教も意味がないのです。子供たちがただ限定された彼ら自身の知覚力と論理のパラダイムによって、成人に論じることが出来るように、神の子らもそのように彼らの父に論じるのです。犬が人間に対して考えているように、人間は神に対して



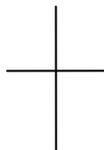
付録4 381

考えていることは越えることが出来ない限界があるのです。エレミヤは神の道に対して疑問を持っていたが、深く考えて神は極めて正しい方であるのを受け入れた後には、“主よ、私があなたと論じ争う時、あなたは常に正しい” (エレ.12:1、詩.89:19、34、39、52と比較)と悟りました。

神が正しくないかもしれないと示唆するのは私たちが正しく、神は罪を犯しているという意味なのです。神が私たちの創造者であり、私たちを継続的に扶養している事実は私たちになんの権利もないのを意味するのです。私たちが罪を犯す時ばかりでなく、いつも彼の慈悲によって生きるのです。‘人間の権利’は人間の考えにより、人間自身が正当化した創作ものです。私たちはこの世になにも持って来たのではなく、また死ぬ時なにも持って行く事が出来ないのです。私たちの存在、持っている物全部がしばらくの間私たちが使う事が出来る神の賜物です。もし神が私たちを彼と緊密な関係を持つために呼び出したら、私たちは喜んで神に応ずるべきです。他の人は招待しないで、私だけ招待していると拒むなら、それは最も神の心を痛ましめることでしょう。

私たち、人間は本来獣に過ぎないのです(伝.3:18-20)。「なぜ動物でなく、人間だけが神と関係を持つように選ばれたのであるか」と私たちは話すでしょう。それを私たちに話しても、私たちはその理由を確かに理解する事が出来ないのです。これと同じく創造に関する創世記も理解するのができないのです。無限なこの宇宙が創造され不思議に組織されていることは人間の科学が認識出来るかなたにあるのです。従って神は彼の創造の行為を子供たちが受け入れやすい言葉で表現しているのです。この付録の始めにならべているその道德のジレンマも同じ事実です。この本はこれらの問題に関する聖書の基本教えを要約しています。私たちは本来神の言葉に対して謙遜でないのです。私たちは聖書が話しているあることをは受け入れるのが難しいでしょう。しかし私たちはこの問題が神によるのではなく、私たち自身によるのであることを認識しなければならないのです。私たちの大部分は自分の考えが基本的に欠陥と過失があると受け入れる自分自身に関する知識に欠いているのです。私たちは神に比べて心がはなはだしく損なっている事実を認定しなければならないのです。私たちの考え方は神の考え方に少し劣っているのではなく、彼の考え方とは全く違うのです。これゆえにパウロは私たちはキリストの心を持ち、神の言葉から彼の考え方を認識し、それを私たち自身のものにするように要求しています。

人間には確かに良い多くの神の創造の要素があると私たちは認めています。人間には創造者から出て来たいくらかの義の概念があるのは明らかであり、それは彼



の被造物に現れています。問題は、確かに罪悪と否定的なものである他のものが人間の内にあります。それが私たちに神の公義に対して混同を起させています。嘆かわしくも、それが多くの人に神の公義を疑わせ、さらに神の存在さえ否定させているのです。その上に、私たちが神は根本的に良くそして正しいと信じているのが良くないのです。彼の言葉が主張している通り、私たちが彼の創造には悪がないと認識しているのが問題なのです。

“隠れた事は私たちの神、主に属するものである。しかし表されたことは長く私たちと私たちの子孫に属するものである” (申.29:29)。福音に“神について知りうる事からは、彼らに明らかである” (ロマ.1:19)と言われたのには、神の関して知られていないことが多くあると暗示しているのです。私たちが神の言葉で確かに知る事が出来る確実な真の原則がありますが、神の性格には他の多くの様相があるのです。従って神の道は私たちの生涯近づく事が出来ない程数多くの“隠れた事”があるのです。パウロは私たちが知っているように(テモ后.1:12; コリ后.5:16; ガラ.4:9; ヘブ.10:30;

ヨハ.1.2:13)、特別に個人的に神の愛を経験して(ヨハ.1.4:7,8)、キリストと神を幾らか知っていましたが、他の意味では、彼がただ“部分的に知って”いるが(コリ前.13:8、12)、“(復活の時)私がキリストとその復活の力とを知る事が出来る” (ピリ.3:10)ので、キリストの帰りを切望していると話しました。私たちは神の言葉を学ぶによって彼の義をますます確かに分かるようになりましたが、彼の国が来るのに対してますます切望しているのです。それはその時彼の義の特徴らが全く明らかになり、彼の民すべてが喜んでそれを理解して愛する事が実際現れるからです。その時に今神の子らが苦心でいる精神的、道徳的、肉体的創傷が完全に癒えるからです。“私たちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合せて、見るであろう。私たちの知るところは、今は一部分に過ぎない。しかしその時には、私たちが完全に知られているように、完全に知るであろう” (コリ前.13:12)

。

聖句インデックス

創世記	17:17..... 241	34:9..... 72
1:..... 11	18:4..... 13	34:12-16..... 153
1:1..... 23	18:17..... 89	34:16..... 153
1:2, 3..... 27, 29	19:1..... 13	34:27..... 282
1:20-21..... 114	19:5..... 13	34:28..... 282
1:24-25..... 214	19:8..... 13	35:2-3..... 281
1:26..... 4, 11, 20, 114	19:10..... 13	40:32..... 292
2:7..... 27, 112, 114, 117	19:12-13..... 13	
2:17-11..... 111	20:7..... 88	レビ記
2:18-24..... 335	22:14..... 242	1:3..... 269
2:24..... 336	22:17-18..... 93, 94, 103	1:10..... 269
3:1..... 200, 202	24:3-4..... 153	5:1-4..... 116
3:4, 5..... 111, 193	24:67..... 338	6:4..... 142
3:5..... 16, 108	25:8..... 124	8:6..... 294
3:6..... 202	26:3-5..... 166	8:23..... 273
3:7..... 121, 268	28:1..... 153	11:44..... 325
3:12..... 200	29:21..... 338	17:14..... 268
3:13..... 201	29:33..... 8	23:30..... 115
3:14..... 200, 202	32:24..... 13	
3:15..... 80, 81, 82, 108, 163	37:9..... 205	民数記
3:17-19..... 111, 158	37:35..... 132	5:22, 23..... 32
3:19..... 112, 123	41:8..... 63	11:14-17..... 38
3:20..... 8, 267	48:13-16..... 240	12:8..... 5
3:22-24..... 112		14:21..... 87, 161

4:3-5..... 167, 268	出エジプト記	15:22-23..... 32
5:5..... 205	3:13-15..... 9	15:32-36..... 281
6:5-8..... 85	3:14..... 9, 242	15:17..... 32
6:6..... 6	3:15..... 9	15:27-31..... 115
6:12..... 107	4:10..... 32	15:32-36..... 281
7:15..... 117	4:11..... 196	18:21..... 278
7:21..... 86, 104	12:3-6..... 220	19:13..... 298
7:21-23..... 118	12:5..... 220, 269	21:4..... 116
7:22..... 27	15:20..... 334	21:8..... 201
8:21..... 175	16:23..... 281	22:6..... 197
9:6..... 325	19:5-6..... 152	22:24..... 32
9:9-12..... 87	19:6..... 323	23:19..... 252
9:13-17..... 87	20:5..... 186	24:1-13..... 32
10:5..... 47	20:10-11..... 202, 280	27:16..... 27
12:1..... 89	22:18..... 198	32:5..... 72
12:2, 3..... 92	23:20-21..... 5, 20	申命記
13:3..... 90	28:3..... 38	1:39..... 37, 128
13:10..... 312	30:10..... 273	4:13..... 281
13:14-18..... 90	32:7..... 205	4:24..... 184
13:17..... 121	32:9..... 205	4:35..... 183
15:5..... 18, 92	33:11..... 5, 20	4:39-40..... 1
15:18..... 90, 227	33:12..... 72	5:2..... 282
17:5..... 8, 28	33:20..... 20, 252	5:11..... 19
17:8..... 7, 8, 10, 32, 90	34:5-7..... 9	7:3..... 152

聖句インデックス 385

8:5..... 7	ルツ記	29:14..... 278
11:4..... 133	3:9..... 338	29:23
13:1-3..... 195	4:13..... 338	30:27..... 206
18:9-14..... 199		33:11..... 201, 205, 207
18:10-11..... 198	サムエル記上	36:6..... 201
18:18..... 222	2:6..... 132	
21:13..... 338	5:23..... 199	歴代誌上
23:5..... 32	8:5, 6..... 151	17:27..... 103
23:11..... 193	8:7..... 151	21:1..... 176
23:18..... 192	11:14..... 13, 146	22:1..... 227
25:4..... 36	13:14..... 6	28:5..... 151
27:9-10..... 175	15:..... 99	29:23..... 151
28:..... 97	16:14..... 187	29:24..... 279
28:13..... 158	17:..... 99	
28:22-25..... 185	18:10..... 187	歴代誌下
28:31..... 142	28:19..... 124	6:12, 13..... 283
28:49..... 47	30:12..... 207	9:8..... 107, 151
28:56-61..... 185		15:1, 2..... 39
29:29..... 358	サムエル記下	24:20..... 39
30:11-14..... 311	1:23..... 124	28:20, 21..... 206
31:28..... 104	3:34..... 201	30:27..... 206
31:30..... 104	5:14..... 222	33:11..... 201, 205
32:1..... 104	7:4-13..... 100	36:6..... 201
32:15-24..... 186	7:12-16..... 100, 250	
32:16-19..... 199	7:13..... 101, 102	エズラ記
32:16-24..... 196	7:14..... 100, 210, 222	6:22..... 206
32:17..... 185	7:21..... 34, 222	9:12..... 153

32:35..... 324	12:15-24..... 130	10:29-30..... 153
32:39..... 196, 212	14:14..... 111	
33:39..... 214	22:29..... 231	ネヘミヤ記
34:9..... 38, 218	23:5..... 102	2:8..... 302, 312
34:10..... 5	24:1..... 178	9:30..... 154
		10:29, 30..... 153
ヨシュア記	列王記上	13:26..... 103
10:30-39..... 115	8:30..... 5, 206	
11:11..... 115	8:38..... 18	エステル記
15:8..... 136	10:1-4..... 103, 152	2:7..... 244
22:5..... 175	10:5-15..... 152	
23:12-13..... 152	11:2..... 103, 153, 337	ヨブ記
24:2..... 124	11:1-11..... 152	1:21..... 173, 183
	11:14..... 177	2:10..... 173, 183
士師記	11:23-25..... 177	3:11..... 119
3:10..... 38	19:8..... 209	3:13..... 119
6:34..... 38		3:17..... 119
8:23..... 151	列王記下	4:19..... 112
9:23..... 187	1:2..... 191	5:18..... 196
11:29..... 38	5:9-14..... 293	7:9-10..... 138
14:5, 6..... 38	20:12..... 152	7:12..... 189
14:19..... 38	22:17..... 135	7:15..... 115
15:14..... 38	25:7..... 201	8:4..... 173
16:21..... 201	25:9..... 135	14:4..... 225

聖句インデックス 389

イザヤ書	44:8..... 183	31:18..... 65
1:2..... 104	45:1-5..... 6, 183	31:31-32..... 99
1:10..... 104	45:5-7..... 172, 196	31:33..... 34
1:16..... 300	45:7..... 182, 324	33:5-6..... 103
2:2-4..... 135, 156, 157, 162	45:18..... 86, 165	33:7-13..... 156
2:4..... 158	45:22..... 172	33:15..... 103
2:19-22..... 352	49:5-6..... 224	48:17..... 8
2:22..... 117	50:6..... 324	51:39..... 128
6:1..... 5	51:3..... 312	51:53..... 205, 212
6:3..... 323	52:7..... 309	
7:14..... 222	52:14..... 260	哀歌
8:19-20..... 138	53:2..... 305	2:1..... 205, 212
9:6..... 22	53:4-5..... 82	2:19..... 283
9:6, 7..... 102, 103	53:7..... 221, 309	4:11..... 135
11:3..... 7	53:9..... 132, 221	5:16..... 154
11:6-8..... 159	53:10..... 82, 115	
11:9..... 86	53:11..... 115	エゼギエル書
13:10..... 205	53:12..... 115	3:14..... 32
13:13-14..... 105	55:8-9..... 5	3:17-20..... 330
14:4..... 204	57:19..... 70	16:8..... 338
14:9-10..... 205	59:21..... 21	16:9..... 300
14:12-14..... 203, 212	60:5..... 157	16:62..... 99
14:13..... 206	63:11..... 18	17:22-23..... 305
14:16..... 205	63:16..... 249	18:4..... 115
14:24..... 26	64:4..... 21	18:21-22..... 140
14:32..... 205	64:8..... 112, 249	18:23..... 134
16:5..... 155	65:17..... 105	18:32..... 134

22:22.....	103	65:18-25.....	105	20:5, 6.....	283
24:20.....	164	65:20.....	159	20:12.....	280
26:13-14.....	129	65:21-23.....	159	20:15.....	283
26:19.....	121, 129	65:23.....	159, 161	20:21.....	280, 322
28:11.....	47	65:25.....	159	21:25-27.....	107, 154
30:1.....	70	66:1.....	5, 101	22:27.....	115
32:1.....	156			32:7.....	205
34:5-6.....	105	エレミヤ書		32:26-30.....	134
34:9-15.....	135	1:5.....	228	33:11.....	134
35:1-7.....	159	2:34.....	115	34:12-16.....	152
35:5-6.....	43, 159	4:23-33.....	104	36:7.....	283
37:30.....	152	10:23.....	114, 325	36:8.....	353
38:17-19.....	119	12:1.....	357	36:13, 14.....	189
40:13.....	37	14:21.....	154	36:27.....	34
40:28.....	12	15:16.....	328	36:35.....	312
40:31.....	12	17:9.....	12, 34, 59, 176	37:21-22.....	107
41:8.....	89	17:27.....	135	37:26.....	99
41:27.....	150	20:7-9.....	32	38:20.....	352
42:1.....	257	23:5.....	222	40:2.....	209
43:9-13.....	2	23:23.....	12	47:14.....	283
43:15.....	150	25:7.....	231		
43:17.....	129	27:5-6.....	326	ダニエル書	
44:3.....	70	30:20.....	155	1:4.....	47
44:6.....	150	31:4.....	65	2:.....	147, 156

聖句インデックス 391

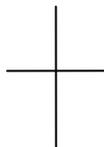
2:25..... 127	ヨナ書	1:21..... 8, 81
2:34-35..... 147	1:2-3..... 32	1:23..... 222
2:35..... 157, 162	2:1-2..... 134	1:25..... 225
2:38..... 147	4:11..... 87	2:5..... 33
2:42..... 147		3:2, 3..... 150
2:44... 147, 157, 162, 214, 305	ミカ書	3:7..... 83
4:8-16..... 205	1:12..... 173, 182, 196	3:13-16..... 292
4:17..... 146, 209	4:1-4..... 147	3:16..... 208
4:25..... 209	4:4..... 159	3:17..... 254
4:19..... 189	4:8..... 107	4:1..... 208
4:32..... 209, 326		4:1-11..... 206
5:21..... 209	ナホム書	4:2, 3..... 207
6:10..... 329	3:5..... 205	4:6..... 255
7:9-14..... 122	4:18..... 205	4:8..... 207, 255
7:27..... 127		4:10..... 283
8:10..... 205	ハバクク書	4:11..... 208
8:12-14..... 154	1:13..... 16, 104, 214	4:23..... 148, 312
8:24..... 205	2:14..... 159	4:24..... 146, 188
9:27..... 98	2:4..... 275	5:5..... 126, 214
11:40-45..... 354	3:2..... 87	5:6..... 160
12:2..... 7, 123, 129	3:10..... 187	5:8..... 3
12:8-10..... 23		5:14..... 330
12:13..... 119	ゼパニヤ書	5:15..... 330
	2:13-15..... 205	5:16..... 18
ホセア書		5:27, 28..... 283
1:4..... 155	ハガイ書	5:34, 35..... 283
4:14..... 128	2:7..... 104	5:39-40..... 324

聖句インデックス 393

12:25..... 83	27:46..... 220, 257	3:23..... 210
12:27..... 191	27:57-60..... 221	4:1..... 29
12:34..... 26, 30, 84	28:18..... 209	4:1-14..... 206
12:40..... 134, 250, 313	28:19..... 10, 122, 311	4:3..... 210
12:42..... 36	28:19-20..... 300	4:5..... 210
12:46-47..... 225		4:18-19..... 39
12:47-49..... 221	マルコ福音書	5:32..... 191
13:11..... 146	1:4..... 301	6:10..... 15
13:19..... 230	1:13..... 207	6:27..... 325
13:35..... 231	2:12..... 46	7:24..... 14
13:39..... 125	3:21..... 84	8:1..... 149
13:41-43..... 140	4:11..... 146	8:11..... 2
13:47-49..... 122	4:30..... 189	8:35..... 188
14:22..... 189	5:15..... 188	8:53..... 220
15:34..... 148	6:34..... 304	9:11..... 304
16:6..... 15	7:8, 9..... 35	9:52..... 14
16:21-22..... 250, 313	7:11..... 176	10:7..... 26
16:22, 23..... 177	7:15-23..... 175, 257, 279	10:21..... 63
17:5..... 254	7:20-21..... 12	11:13..... 18, 71
17:18..... 188	7:21-23..... 12, 211	12:2-3..... 140
18:6..... 15	8:35..... 116	12:47, 48..... 128
18:10..... 15	9:24..... 356	14:14..... 120, 140
18:15-17..... 343	9:43, 44..... 136	14:15..... 149
19:5-6..... 202	10:6-12..... 340	14:27..... 294
19:11-12..... 337	10:14..... 35	15:1-7..... 343
19:29..... 337	10:17-18..... 12, 253	16:23..... 260
20:25-28..... 332	11:9-10..... 150	16:30-31..... 73, 221



3:19.....	128	8:55, 56.....	241	2:3-4.....	65
3:21.....	343	9:29.....	210	2:4-12.....	47
3:23.....	231, 291, 303	9:41.....	128	2:5.....	69
3:33.....	231	10:17.....	209, 254	2:6.....	44
3:34.....	42, 249	10:20.....	186	2:16-20.....	69
3:36.....	245	10:28.....	113	2:17.....	18, 29, 69
4:1.....	308	10:32.....	230	2:21.....	69, 155
4:6.....	253	10:34-36.....	21	2:22-36.....	126, 155
4:22.....	95, 193	10:38.....	230	2:32.....	240, 313
4:24.....	17, 28, 117, 252	11:23-24.....	121	2:37-38.....	296, 299, 303
4:35-36.....	125	11:24.....	140	2:38.....	70, 85, 94, 300
5:4.....	193	11:35.....	253	2:38-39.....	70
5:13.....	45	11:47.....	44	2:42-46.....	335, 342
5:19.....	258	12:13.....	151	2:47.....	298
5:24.....	230	12:27.....	253	3:1.....	44
5:25-29.....	123	12:48.....	127, 232	3:2.....	43
5:29.....	139	13:14.....	260, 332	3:6.....	188
5:30.....	253, 258	13:32.....	256	3:7-11.....	43
5:37.....	3	14:2-3.....	124	3:12-26.....	302
5:39.....	79	14:10.....	3, 230	3:13.....	256, 257
5:43.....	22	14:12-16.....	58	3:15.....	113, 256
5:45.....	35	14:15.....	77	3:16.....	307
5:46-47.....	74, 221	14:19.....	295	3:22-23.....	222
6:29.....	97	14:24.....	230	3:25-26.....	71, 87, 94



8:26-40.....	290	17:31.....	266	4:17.....	227
8:37-39.....	289, 290, 292	18:9.....	32	4:25.....	266, 267
8:39.....	142, 292	18:19.....	61	5:8.....	274
9:6.....	299	18:25.....	303	5:9.....	268
9:17.....	41	19:1-5.....	301	5:10.....	295
9:18.....	289, 290	19:4.....	303	5:11.....	64, 71
9:34.....	188	19:6.....	94, 96, 288	5:12.....	12, 68, 201
10:6.....	299	19:8.....	146	5:13.....	128, 133
10:14-15.....	279	19:10.....	230	5:14-19.....	265
10:17.....	33	20:7.....	280, 335	5:17.....	12
10:38.....	29	20:25.....	96	6:3-5.....	83, 121, 267, 290
10:42.....	303	20:28.....	19	///////.....	312, 315
10:46.....	57	20:30.....	284	6:6... 81, 180, 181, 294, 322	
10:47.....	289	22:16.....	292, 296, 311	6:9.....	255
10:48.....	94, 303	23:8.....	77	6:14.....	296
11:27-29.....	43	24:15.....	139	6:15-17.....	67
12:14-15.....	15	24:24-25.....	308	6:16.....	64
13:9.....	42	24:25.....	62, 77, 122, 308	6:17.....	68, 181, 306
13:12-13.....	45	26:6-8.....	77, 78	6:18.....	296
13:13.....	4	26:19.....	291	6:19-22.....	323, 327
13:23.....	100, 309	26:20.....	299	6:23... 12, 13, 15, 68, 70, 81	
13:23-36.....	309	26:22-23.....	80	/113, 132, 174, 180, 200, 264	
13:26.....	68, 309	26:22-23.....	80, 221	7:1-7.....	282
13:27.....	232	28:3-7.....	73	7:3.....	282

聖句インデックス 399

7:15-21.....	176	3:15.....	297	14:18-22.....	49
7:18-23.....	252	3:16-17.....	327	14:21.....	47
8:3.....	12, 81, 179, 225, 252	3:23.....	256	14:23.....	50
////////.....	269, 276	5:5.....	173	14:27, 28.....	50, 51
8:11.....	327	5:6.....	183	14:32-33.....	51
8:17.....	94	5:7.....	137, 220, 335	14:34.....	52, 332
8:18.....	163	5:21.....	274	14:37.....	37, 47, 52
8:24.....	297, 299	6:1-7.....	324	15:1-2.....	297
8:26-27.....	257	6:9-10.....	148, 340	15:3.....	36, 265, 274
8:27.....	220	6:9-18.....	337	15:11.....	2
8:28.....	174	6:11.....	296, 300	15:12.....	140
8:29.....	8	6:14.....	266	15:13.....	140
8:31-32.....	85, 163	6:18.....	338	15:19.....	26
9:7.....	94	6:19-20.....	327	15:20.....	266
9:14.....	12	7:1-2.....	337	15:21.....	140
9:20.....	129	7:10-11.....	339	15:22.....	12, 240, 265, 274
9:23.....	228	7:12-14.....	153	15:24.....	163
9:26.....	99	7:27-28.....	337, 339	15:25-28.....	82, 163
10:8.....	2, 310	7:28.....	337	15:35.....	120, 140
10:9.....	310, 311	7:39.....	153	15:42.....	112, 140
10:13.....	310	8:4.....	184	15:50.....	139
10:15.....	309	8:4-6.....	194	15:51.....	61, 139, 140
10:17.....	2, 290	8:8.....	279	15:52.....	140, 141
11:1-2.....	107	9:9.....	87	15:53.....	113, 139
11:17-21.....	279	9:27.....	297	15:55.....	132
11:25.....	60	10:1, 2.....	9, 298, 316	15:56.....	213
11:29.....	72	10:1-12.....	298	16:2.....	280

聖句インデックス 401

ガラテヤ人への書			
1:4.....	275	2:20.....	
1:9.....	307	3:3.....	
1:11-12.....	36, 307	3:15.....	
2:2.....	2	4:4.....	
2:20.....	254, 265, 295	4:4-6.....	
3:1.....	301	4:6.....	
3:4.....	71	4:7.....	
3:7.....	97	4:8, 12.....	
3:8.....	87, 146, 148, 288, 309	4:8-14.....	
3:8-11.....	71	4:11.....	
3:10.....	275, 276, 281	4:12.....	
3:11.....	277	4:13-14.....	
3:14.....	71	4:18.....	
3:15.....	80	4:23-24.....	
3:16.....	80, 93	4:25.....	
3:17.....	98	4:28.....	
3:19-21.....	98	4:32.....	
3:22-29.....	10, 148, 288	5:2.....	
3:24.....	98, 269	5:3.....	
3:25.....	71	5:5.....	
3:27-29.....	80, 82, 91, 94, 96	5:11-13.....	
//////.....	97, 106, 288	5:23-32.....	
3:27.....	333	5:25.....	
4:4.....	81, 225	5:25-30.....	
4:9-11.....	280	5:27.....	
4:14:16.....	84	6:1-2.....	
		6:19.....	
		1:24.....	
		1:26-27.....	
		1:28.....	
		2:6.....	
		2:12.....	
		2:14-17.....	
		3:1-5.....	
		3:5.....	
		3:9.....	
		4:3.....	
		テサロニケ人への前書	
		1:5.....	
		1:6.....	
		1:8.....	
		2:12.....	
		2:13.....	
		4:1.....	
		4:3.....	
		4:16.....	
		4:17.....	
		5:1-3.....	
		5:8.....	
		5:15.....	
		テサロニケ人への後書	
		2:3.....	

4:19..... 259		2:3-4..... 204
4:29..... 84		2:10-17..... 199
5:4..... 68		2:15..... 308
5:16..... 327		3:6..... 308
5:17..... 36, 326		
5:19..... 176, 198, 337		テモテへの前書
5:21..... 148, 198, 337		1:4..... 244
5:25..... 327		1:13..... 128
6:8..... 120, 138		1:15..... 308
6:10..... 325		1:20..... 173
6:14..... 296		2:5..... 249, 329
		2:8..... 329
		2:11-15..... 332, 333
		2:13-14..... 202
		3:11..... 178
		3:15..... 19
		3:15-17..... 30
		4:6-14..... 2, 32
		4:13-16..... 310
		4:16, 17..... 141
		5:14..... 332
		5:18..... 36
		5:24-25..... 140
		6:10..... 113
	エペソ人への書	
1:4, 5..... 228		
1:9..... 61		
1:17..... 257		
1:23..... 344		
2:2..... 19		
2:5..... 294		
2:8, 9..... 70, 267, 299		
2:10..... 240		
2:12..... 78		
2:14-17..... 69		
2:18..... 70		
	ピリピ人への書	
1:8..... 258		
1:19..... 71		
1:23..... 141		
1:27..... 258		
2:2, 5..... 259		
2:9..... 22		
3:7, 8..... 290		
3:9..... 267, 297		
3:10..... 358		
3:10, 11..... 259, 296		
3:11-13..... 297		
3:13, 14..... 290		
3:20..... 7, 21, 120, 121		
4:6, 7..... 329		
4:7..... 295		
4:9..... 307		
	コロサイ人への書	
1:10..... 70		
1:15-18..... 239, 240		
1:18..... 66, 240, 266		
1:22..... 267		

聖句インデックス 403

6:16..... 12, 243, 250	4:2..... 2, 31, 88	11:35..... 140
	4:4-9..... 165	11:39-40..... 91, 137, 140
テモテへの後書	4:12..... 116	12:5-8..... 183
1:9..... 228, 298, 323	4:15..... 179, 207	12:6-11..... 173
1:10..... 67, 81, 82, 112	4:16..... 72, 271, 329	12:9..... 27, 136
1:12..... 310	5:1-3..... 270	12:10..... 323
2:4..... 337	5:2..... 270	12:14..... 3, 323
2:11..... 308	5:3..... 272	12:23..... 19
2:10-12..... 84, 156	5:3-5..... 271	12:29..... 17, 136
2:21..... 137	5:5-6..... 243, 244	13:2..... 13
2:22..... 337	5:7..... 256, 257, 283	13:4..... 283, 337
3:5..... 35, 259	5:9..... 67, 113, 254	13:11-12..... 269
3:15-17..... 30, 54	5:10-14..... 243	13:15..... 270
4:1..... 91, 147	6:2..... 122, 288	13:16..... 342
4:1-8..... 123	6:4-6..... 298	13:20..... 272
4:7..... 310	6:5..... 159	
4:8..... 137, 355	6:10..... 118	ヤコブの書
4:16..... 120	7:2, 7..... 244	1:12..... 77
	7:12..... 275	1:13..... 12, 248, 250
テトスへの書	7:14..... 244	1:13-15..... 12, 151
1:2..... 297	7:15..... 243	1:14... 15, 17, 175, 180, 207
1:2, 3..... 34, 77, 231, 297	7:16-19..... 275	1:15..... 15, 133
1:4..... 307	7:22..... 98	1:18..... 9, 305
1:9..... 307, 308	7:23..... 270	2:5..... 77, 148
1:12..... 192	7:25..... 264, 279, 295	2:10..... 281
2:3..... 178	7:26..... 206, 269	2:17, 21..... 77, 268, 299
2:3, 4..... 334	7:27..... 270, 272	2:24..... 299

3:5..... 292, 296, 298	7:28..... 269	2:25..... 14
3:7..... 297	8:5-9..... 269	2:26..... 117
3:8..... 308	8:13..... 98	3:9..... 4
	9:4..... 282	4:4..... 327
ヘブル人への書	9:7..... 272	4:5..... 36
1:1-2..... 226, 230	9:14..... 137	4:6..... 72
1:2..... 36, 226	9:15..... 269	4:12..... 133
1:3..... 12, 240	9:22..... 268	4:14..... 111
1:4, 5..... 228, 229	9:23..... 273	4:18..... 128
1:4-7..... 226	9:24..... 18	5:12..... 283
1:13-14..... 14, 297, 316	9:26..... 105, 179, 268	
1:14..... 14	10:4..... 269	ペテロの前書
2:4..... 41	10:5-14..... 275	1:3..... 257
2:7..... 226	10:9..... 98	1:4-5..... 12, 124
2:8..... 228	10:12..... 279	1:8-9..... 233, 281
2:9..... 179, 273	10:20-29..... 298	1:10-12..... 32
2:12..... 222	10:21..... 270	1:13..... 123
2:14..... 41, 172, 179, 252, 274	10:22..... 292	1:15-16..... 323
2:14-18..... 12, 179, 180, 225	10:23..... 307	1:19..... 31, 220
2:16..... 33, 251	10:25..... 270, 331	1:20..... 226, 229
2:17..... 252	11:6..... 1	1:21..... 31, 267
3:7..... 33	11:8..... 89	1:23..... 33, 288, 299, 305
3:12-14..... 298	11:8-12..... 125	2:2-5
4:1-2..... 298	11:13..... 91	2:4-8..... 147

聖句インデックス 405

2:5..... 270	3:17..... 70	11:9..... 47
2:9..... 278	3:21..... 71	11:15..... 146, 209
3:1-6..... 338	3:24..... 71	11:18..... 125
3:5..... 334	4:1..... 37	12:1..... 213
3:7..... 333	4:7, 8..... 358	12:7-9..... 211, 216
3:9..... 324	4:8..... 17, 130	12:11..... 268
3:15..... 334	4:9..... 70	12:12-16..... 213, 216
3:21..... 18, 289, 295, 299	4:13..... 71	13:7..... 47
4:3..... 337	4:17..... 122	13:8..... 229
4:6..... 88	5:1..... 305	14:13..... 140
4:16..... 19	5:7..... 343	16:3..... 115
5:4..... 91, 123	5:10..... 231	17:5..... 61
	5:11..... 113	17:7..... 61
ペテロの後書	5:14..... 329	17:9-10..... 216
1:4..... 7, 10, 12, 35, 32	5:19..... 327	17:15..... 47
1:10..... 297	5:21..... 283	18:4..... 328
1:19-21..... 32, 36, 42		19:7..... 66
2:1-3..... 284	ヨハネの2書	19:7-9..... 339
2:4..... 193	7-10..... 309	19:8..... 267
2:5..... 327		20:2-3..... 159
2:9..... 122	ヨハネの3書	20:2-7..... 165
2:16..... 200	6-7..... 304	20:5-6..... 140
2:21..... 307		20:4..... 153
2:22..... 292, 307	ユダの書	20:5-6..... 140
3:6-7..... 104	5..... 123, 298	20:6..... 140
3:6-12..... 86, 103	6..... 122	20:8-9..... 167
3:7..... 122	7..... 134, 337	20:11-15..... 167

